ら、裸でその腕に抱かれて別段恥づかしいともお思ひにならなかつたその人にですよ。あの方に助けて頂いて、着物を持つて來て、梯子を掛けさせた上、其處から降りていらつしやればいゝでせう。毎ものやうに、今日も亦その人のために貴方の名譽を危險に曝して悔いないあの方の胸の裡にこそ、貴方は自分の名譽に對する思ひ遣りを求めて然るべきではありませんかね。何故あの方を呼び寄せて、助けて貰はないのです？　あの方に優る適任者が何處にあるでせう？　貴方はあの男のものぢやありませんか。貴方を護らず、貴方を助けないとしたら、あの男は一體何を護り誰を助けたらいゝのです？　愚な女よ、早くあの男を喚んで、貴方があの男に對して抱いてゐられる愛と、あの男と貴方との智慧が果して愚な私の手から貴方を救ひ出せるものかどうかを試して見るがいゝ。何でもあの晩貴方はあの男と戯れながら、私の馬鹿さ加減とあの男に對する御自分の愛と、どつちが大きいとお思ひかなぞと、あの男にお尋ねになつたさうですからね。最早私の方で欲しがらないし、又欲しいと思へば最早貴方の拒み得なくなつたものを、今になつて氣前よく與れようなぞと云ふのは廢して下さい。もし生きて其處から出て來られたら、貴方の夜は無人のために大切に藏つてお置きなさい、それは貴方とあの人のものにして置くが好う御座んすよ。私は一夜でうんざりしました。一度侮辱せられたら、もうそれで澤山です。貴方はまだ昔のまゝの手管を弄していらつしやる。私を褒めて、私の寛量を買はうとしたり、私を尊敬すべき貴族だなぞといつて、心の中では、私が寛大な心になつて、貴方の奸黠を罰することを中止するやうに望んだりしていらつしやる。ですが、もう貴方の甘口は、嘗て誠意のない貴方の約束がしたやうに、私の理智を眩ますことは出來ませんよ。私は自分といふものが分りました。私は巴里に長い間遊學してゐましたが、貴方が貴方の虚僞によつて、たゞの一夜で教へて下さいました程自分といふものに就いて學ぶことは出來ませんでした。よしや私が寛大な人間だとしましても、貴方はその寛量の餘澤を受けて然るべき底の人ではありませんからね。

「貴方のやうな極惡な禽獸のためにする贖罪にしろ、又さうした禽獸に對する復讐にしろ、いづれもその終局は死に外ならないので、貴方の云はれるやうなことはたゞ人間にのみ適用するのですよ。だから、私が鷲でないと共に、貴方も鳩だとは思ひません。それ處か、有毒な蛇だと思つてゐます、吾々の祖先累代の敵として、あらゆる憎惡とあらゆる暴力とで迫害しなければならぬ蛇だと思つてゐます。尤も、私が今貴方にしてゐることなどは、復讐ではない、寧ろ懲戒たるに過ぎないのですがね。と云ふのは、復讐と云へば、どうしても受けた侮辱以上のものであらなければならない、然るにこの懲戒はまだそれだけにもなつてゐないからですよ。と云ふのは、本當に復讐をする氣で、貴方のために私の靈魂の陷れられた狀態を想ひ遣れば、貴方の生命なぞ、縱しんばそれを奪つた處で、私にはまだ飽き足らない。いや、貴方のやうな生命を百集めた處で、矢つ張りさうですよ。と云ふのは、結局下劣な、罪の深い女を殺したことになるだけですからな。一體貴方なぞ、數年のうちに皺くちやになつてしまふその御面相を除けば、憐れむべき賣女以外の何者であるんですかい！　して又、貴方が今私をさうだと云はれたやうな、所謂名譽ある紳士を死に至らしめなかつたのも、決して貴方の一存に由るのではありませんよ。さういふ人物の生命は、たゞの一日で、貴方が千萬人寄つて簇つて、世のあらん限り働く以上のものを社會に貢獻することが出來るのだからね。そこで私としては、貴方をかうした懲しめに逢はせて、洞察ある人物を侮辱することが何んなものであり、又學者を嘲ることがどんな結果を齎すものであるかを貴方に教へた上、萬一生きてこゝから逃げ出すことが出來たら、今後は二度とさうした愚なことをしないやうにして貰ひたいのですわい。ところで、そんなに降りたければ、何故そこから飛び降りないのです？　さうすりや、有難いことには首が折れて、忽ち今の苦しみから免れた上、私をして心往くばかり快哉を叫ばしめることが出來るのですよ。さあもう、これ以上何にも申しません。貴方をそこへ上げるやうに仕組んだのは私だから、降りて來る方法は貴方が考へ出したらいゝでせう、以前私を侮辱する方法を考へ出されたやうにな。」

學者がこれだけ話してゐる間、不幸な未亡人は絶えず泣き續けてゐました。そのうちに時間が經つて、太陽はいよいよ高く昇つて參りましたが、相手の話しが途絶えたのを見て、彼女は申しました。「ねえ、貴方、あの晩のことがそんなに貴方の骨身に徹へて、私の若い美しさも、苦しい涙も、切ないお願ひも貴方のお心を和げることが出來ない程私の罪が大きかつたとしましても、少なくとも私がこの度貴方を信頼して凡ての祕密を打明けた上、それに依つて私に自分の過失を悟らせようといふ貴方の御希望に好機會を與へたんだといふことを思ひ遣つて、どうぞ幾分なりともその嚴しいお心を和げて下さいませ。もし私がこの信頼を寄せなかつたら、貴方もそんなに迄熟望していらしつた、私に復讐するの手段をかう易々と見附けるわけには行かなかつたでせうからね。ですから、どうぞお腹立ちのところは幾重にも勘辨してやつて下さいませ。勘辨して、此處から降ろしてさへ頂けたら、私もあんな不實な青年のことはふつゝり思ひ切つて、貴方をたゞ一人の愛人とも主人とも

思ひますわ。尤も、貴方は私の美しさを嘲つて、移ろひ易い値打のないものだと仰しやいましたけれどもねえ。ですが、これは私に限らず、凡ての御婦人について云ふので御座いますがねえ、私はかう思つてゐますのよ、美しいといふことは、よし他の理由から決して貴ぶべきものでないとしましても、それが若い殿方の望みであり、喜びであり、樂しみであるといふ點で、確に敬意に値ひするものであると。そして、貴方は決して老人では御座いません。さうです、私はどんなに殘酷に貴方から取扱はれましても、一度は私を可愛しいものに思つて下さいました貴方の眼の前で、私が絶望のあまりこの塔から身を投げるといふやうな、そんな情ない死に方をするのを、まさか貴方が望んでいらつしやるとは信じられませんわ。後生ですから、私を可哀さうだと思召し下さいませ。陽はだん〳〵激しく照りつけて參りました。夜寒に苦しめられたやうに、今はその暑さがとても堪りませんわ。」

學者は何とか云つて相手を釣つて置かうといふ了簡からそれに答へました。「奥さん、貴方は信頼して私の手に身を委ねたと仰しやるが、それは私に對する愛から出たのではない、失つたものを再び手に入れるために外ならなかつたではありませんか。從つて更に大きな罰に相當する譯ですよ。貴方は又、その信頼があつたればこそ、始めて私がかねゝ〳〵望んでゐた復讐を遂げることが出來たと考へていらつしやるやうですが、それも馬鹿な間違ひで、復讐の手段は他に幾許でもありますよ。私は貴方を愛するやうに見せかけて、無數の罠を貴方の手足に懸けて置きました。だから貴方はよしこの手段でかうしたことにならなかつたとしても、遠からずその罠の一つに陥らなくてはならなかつたのです。そして、どの罠に陥つた處で、結局はこれ以上の罰や恥辱を受けねばならなかつたことでせうよ。處で、私が先づこの方法を選んだのも、決して貴方を劬つて上げるためではない、たゞ一刻も早く復讐をして見たかつたからでさ。さうだ、萬一他のあらゆる手段が失敗に終つたとしても私にはまだ筆といふものがある。それで以て貴方の事を書き立てれば、貴方は恐らく自分の生れて來たことを日に千度百度となく呪はないではゐられなかつたでせうよ。「一體筆の力といふものは、それを經驗したことのない者が想像するよりは、遙かに強大なものです。私は神に誓つて申しますがね、——おゝ神よ、最初私を喜ばせたまうたやうに、最後に到る迄この女に對する復讐を悅ぶことを許し給へ——乾度貴方のことを書き立てて、貴方をして他人の前ばかりでなく、自分自身に對しても顔を赧らめさせ、この上自分の姿を見るに堪へないで、自分の目を抉り出させるやうにしたことでせうよ。だから、小川が大海に向つて、自分

のために泡の水嵩が増したなどと云ふのはお腐めなさい。「貴方の愛とか、貴方が私のものになるとかいふことは、今も申した通り、私は少しも問題にしません。何時までも一旦その人のものになつたお方のものでゐられるがいゝでせう——さういふことが出來たらと云ふのですがね。私は嘗てその人を憎んでゐましたが、今は好意を感じてゐます。それは貴方に對するその男の態度のせゐですね。貴方方婦人は戀といへば總じて青年の愛を求めます。それは恐らく彼等が比較的元氣のいゝ顔色をして、黑い髯を生やして、得意になつて街を歩き廻つたり舞踏をしたり、或ひは競技をしたりするからでせう。しかし年を取つた者だつて、一度はさういふ元氣もあつたものですよ。いや、彼等は青年達がこれから學んでかゝらうとするものを既に知つてゐるのです。だが、貴方方は青年をより好き騎士と見做して、老人よりも足が達者だと思つてゐられるやうですね。

「成程、青年の方が毛皮を振ふのには力があるでせう。だが、老人はその經驗からして、何處に小蟲が潜んでゐるかをよく知つてゐますよ。趣味のあるものは少數でも、無趣味なものの多數より勝ること萬々です。性急な駈足は乘手がどんなに若くても苦しくて辛いでせう。並足は遲いかも知れませんが、氣持よく目的地に達します。批評眼のない貴方方は、外貌の美といふものの背後に、どんなに多くの惡が隱れてゐるかに氣附かないのです。青年は一人の美女で滿足しないで、目にとまる一切の美人を欲しがります。そして又澤山の女に値ひするものと信じてゐるのです。從つて彼等の愛は當てになりません。今では貴方もその實證を示すことが出來るでせう。更に彼等はその戀人から緣敬せられ愛撫せられることを欲して、それに値ひするものと思つてゐます。そして、彼等は嘗て關係した女の數を自慢することを無上の名譽と心得てゐます。この害毒を恐れて、多數の婦人は坊主に走りました。坊主は少なくともそんな事を口外する氣遣ひがありませんからね。貴方は、貴方の戀を知つてゐるものは女中と私との外にはないと云はれるでせうが、それは一を知つて二を知らないもので、又さうだと信じてゐられるのでしたら、それは大變な間違ひですよ。町内や近隣ではその話しで持ち切つてゐても、大概の場合さうしたことを最後に聞く者は正にその本人なのですからね。それに若い遊冶郎は女から取り立てる一方ですが、そこへ行くと年寄は氣前の好いものですよ。

「だが、既に選擇を誤つた貴方は、何時までも一旦身を任せた相手のものになつてゐるがいゝです。貴方に侮辱せられた私は他の女に任せて置いて下さい。といふのは、私にも戀人が出來ました。貴方などより遙かに立派な女で、貴方に比べて遙かに私をよく理解してゐてくれますよ。處で、

私はいくら貴方の無残な死にざまを見ても平氣だ！　と云つただけではまだ眞實にされないかも知れんが、その的確な證據を握つてあの世へ旅立たうと思召したら、早速そこから飛び降りて見ることですね。思ふに、貴方の靈は既に黑魔の爪に捕はれてゐることでせうから、貴方が逆さに落ちるのを見て、果して私の眼が涙に眩むかどうかはよくお分りになることでせうよ。だが、さうした喜びを私に與へて下さらうとはどうも思はれませんね。だからお勸めしますがね、太陽が照りつけて來たら、嘗て私に辛抱おさせになつたあの寒さを想像して御覽になるが好う御座んすよ。その寒さとこの暑さを綯ひ交ぜにすれば、太陽も幾分凌ぎ易くなることは請合ひですからね。」

學者の言葉は結局殘忍な目的を狙つてゐることに氣が附きましたので、可哀さうな未亡人は再びおい〳〵泣き始めました。そして、「私のことは何と申上げても一向同情して頂けないやうですから」と申しました、「せめて、私よりもお悧巧で、貴方を愛していらつしやるとか伺ひましたその御婦人に對する愛のために、お心を和げて頂きたう御座います。その方の愛に免じて、どうぞ私をお宥し下さいました上、着物をお渡し下さいませ、そして、こゝを降ろして頂きたう御座います。」

それを聞いて、學者はから〳〵と笑ひました。それに、正午にも間近くなつてゐましたので、かう申しました。「眞個さう云つたやうな婦人を盾に頼まれて見ると、私も無下にお斷りしかねますわい。では、着物の在所を仰しやつて下さいな。一足行つて來ますから。そして、降りられるやうにして上げませう。」

未亡人はこの言葉を信じて、幾分氣も輕くなりました。で、着物の隱してある場所を敎へました。

しかも學者は塔を出ますと、下男に向つて、今の居場所を離れないで、この邊りに居殘つて、再び自分が歸つて來る迄、何人も塔へ這入つて行かないやうに、極力見張つてゐるやうに命じました。かう云ひ殘してから、彼は友人の家に參りまして、ゆつくり食事を攝つた上、恰度時刻だと思はれる頃畫寢の床に就きました。

一方、塔に殘された未亡人は、空しい希望に幾分元氣づきましたものゝ、なほ云ひやうもない悲しい思ひをしながら、身を起し、多少陰のある壁の方へ寄りまして、痛ましい考へに纏はられながら、首を長くして待ち受けました、或時はじつと考へ込むかと思ふと、又或時は學者の來るのを絶望して見たりして、千々に心を碎きながらも、昨夜一睡もしなかつたこととて、とう〳〵深い眠りに陷つてしまひました。

そのうちに盛夏の灼熱に燃え立つた太陽は天空の眞中に

昇つて來まして、恐ろしい勢ひで未亡人の柔い肌や帽子のない頭を殆ど垂直に照りつけましたので、光線の當る限りの皮膚は燒けるばかりでなく、びち〳〵膿が入り始めました。その痛苦の烈しさは、深い眠りに陷つてゐた夫人も目を覺さずにはゐられない程で御座いました。あんまり爛れるやうな氣がしますので、ほんの少し許り身體を動して見ましたが、何うやら燒けた皮膚が口を開いて、恰度焦げた羊皮を引張つて見た時のやうに、ずた〳〵に裂けて行くやうに思はれました。その上頭痛が烈しくて、今にも破れるのではないかと思はれました。それは別段不思議でもありませんでしたがね。で、同時に床がひどく熱して、坐ても起つてもゐられなくなりましたので、寸時も休まず泣き泣きあつちこつちと歩き廻りました。

その上、風が全くありませんでしたので、何處からともなく無數に蚊や虻が飛んで來まして、彼女の傷ついた體にとまつては、烈しくそれを刺しました。その度に寂然槍で刺されるやうに痛みましたので、彼女は自分自身や自分の存在、さては戀人や學者を呪ひながらも、絶えず手を動かさずにはゐられませんでした。

極度の暑さや皮膚の日燒け、蚊や虻、それから饑ゑと更に甚しい渴き、加ふるに無數の苦しい思ひに苛まれ、苦しめられ、刺し透されて、彼女は飛び上り跳ね上りました。そしてもし近くに人の姿が見えるとか、或ひは物音が聞えでもしたら、よし何んなことにならうとも、兎も角も聲を懸けて助けを求めようと、壁に這ひ上るやうにして四邊を見渡しました。が、運命は敵意でも有つてゐるやうに、これさへ拒んで與へませんでした。百姓どももこの暑さには畑に姿を見せなかつたのですね。一つは家で麥打ちなどに多忙で御座いましたので、この日この邊へ仕事に出掛けるものはなかつたので御座います。で、聞えるものはばつたの羽音、見えるものはアルノ河の流れに過ぎませんでした。流れは水を湛へて、彼女の欲望を刺戟しながら、その渴きを醫してくれる處か、徒らにそれを增すばかりで御座いました。なほ所々に叢林、木蔭、人家などが見えましたが、これとても凡て饑渴に苦しむ者にとつては、同樣に惱みの種となるに過ぎませんでした。

不幸な女に就いては、これ以上何を申上げる必要が御座いませう？　天上の太陽、床上の灼熱、四方より襲ひ來る蚊や虻の群、かうした凡てのものに責め苛まれて、昨夜までは夜目にも著き白い肌をしてゐた彼女も、今では地獄の釜茹にでも逢つたやうに眞赤になつて、全身血ににじむでは、恐らく何人の眼にも正視するに堪へなかつたことでせう。かうして彼女は希望も策も盡き果てて、たゞもう死を待つ外御座いませんでした。

そのうちに午後もやゝ長けた頃、學者は目を覺ますと、未亡人のことを想ひ出しまして、樣子如何にと、再び塔へ遣つて參りました。そして、まだ空腹のまゝでゐた下男を食事に遣はしました。

この樣子に氣が附きますと、可哀さうな女は、苦痛に氣も絶え〳〵になりながら、昇降口の所へ參りまして、そこに身を横へて、涙ながらに申しました。「リュエリ樣、貴方はもう十分過ぎる位復讐をなさいました。私が貴方を夜分庭で寒さに凍えさせましたにしろ、貴方は日中私を塔で燒け爛らせた上、饑渴のために殆ど半殺しにしていらつしやいますからね。で、神かけてお願ひ致しますが、どうかここへ上つて來て、一思ひに私を手に懸けて下さいませ。私には自殺するだけの勇氣がありませんから、お願ひするのですがね。今はもう何よりも死にたう御座います、それ程私は苦しんでゐます。もしそれだけの好意を示すのもお厭でしたら、せめて一杯の水で口を潤はして下さいませ。この暑さでかう干上つてしまつては、泣きたい涙にも事を缺きさうで御座いますわ。」

學者は相手の聲でその衰弱の程を察しましたし、又日に燒け傷んだその肌にも目を留めました。この樣子と彼女の哀願とは彼の心にも幾分同情の念を喚び起しましたが、それにも拘らず、彼はかう申しました。「そこな賣女奴、私の手にかゝつて死なうなぞとは、よく吐いた。死にたければ、自分の手で勝手に死ぬがいゝ。暑さを凌ぐ水は、この前寒さを和げる火を頂戴しただけ差上げることにしよう。だが、こゝに一つ不平がありますよ。私はあの寒さのために罹つた病氣を癒すのに臭氣のひどい糞土を用ゐなければならなかつた。然るにあなたの今の暑さから來る病氣は香の好い薔薇水で十分なほるでせうからね。それに又私は今少しで神經、さうだ、命まで失ふ所であつたのに、あなたは燒けつくやうな暑さが濟めば、恰度皮を脱ぐ蛇のやうに再び元の姿になれるでせうよ。」

「まあ何と仰しゃる？」と、夫人は申しました。「こんな目に逢つて、元の姿になれるとは、何といふ呪はしいことでせう！　それにしても、貴方は猛獸よりも殘忍な方ですわね。こんな風に私を苦しめるなんていふことが、何うして貴方にはお出來になるのでせう？　貴方の御一族を殘忍極まる方法で責め殺したとしましても、これ以上の何んな目に逢はされるでせうか。全市の人々を殺したやうな反逆者に對しても、今太陽に燒け爛らせ、斑猫に喰はせながら、私を苦しめていらつしやるこの苛責以上の何んな苛責を加へることが出來るでせう？　私には想像も出來ません。而も一杯　水さへ拒んでいらつしやるのです。判決を下された殺人犯にだつて、いよ〳〵死刑を行はうといふ場合には、

欲しいと云へば、お酒でも飲ませるさうぢや御座いませんか。では、好う御座んす。貴方がその殘忍な決心を固く執つて動かず、少しも私の苦しみに同情して下さらないことは、私にもよう分りました。この上は私も辛抱して死を待つて、來世で神樣の御同情を獲るやうに致しませう。私は神樣に訴へて、貴方のこの所業を正しい目で見て戴きます。」

かう云つた後は、最早生きてこの炎熱を免れることは出來ないと覺悟しまして、彼女はやつとの思ひで床の中央まで引返しました。それから又幾千度となく、渴きと苦しさのために氣の狂ひさうな思ひをして、息も絶え〳〵に、絶えず泣きつゞけながら、身の不運を嘆きました。

そのうちに夕方になつて參りました。すると、學者も最早これで十分だと思ひましたので下男に命じて夫人の着物を取寄せ、それを下男の外套に包ませて、それから夫人の別莊へ出掛けて見ました。女中は遣瀨のなささうな顏をして、相談相手もないので困り切つて戸口に腰掛けてゐました。で、彼は女中に申しました「おい、御主人は何うしてゐられるかね。」

「旦那樣」と、女中は答へました、「それが分らないので御座いますよ。昨晩慥にお床へお這入りになりましたので、今朝もそこにいらつしやることとばかり思つてゐましたのに、何處にもお姿が見えないので御座いますものね。何うなすつたのやら、さつぱり見當が着きませんので、御心配申上げてゐる處で御座いますの。それにしても、旦那樣は何かお心當りでも御座いますか。」

それを聞いて、學者は申しました。「御主人と一緒にお前も遣つて來るとよかつたな。さうすれば御主人同樣、お前をも懲罰を加へてやる處だつたに、惜しいことをしたよ。だが、お前だつてこの儘免しては置かないぞ。この後は男を騙さうとする時には、屹度俺のことを想ひ出すやう、お前の所業に對しても、いづれ思ひ知らせてくれるから、さう思つてゐるがいゝ。」それから下男に向つてかう申しました。「此奴に着物を渡して、行きたかつたら、勝手に主人の許へ行くやうに云つて遣れ。」

下男は云はれた通りに致しました。女中が着物を手に取つて見ると、それには確に見覺えがありました。で、二人の言葉を聞いた時には、何うかすると夫人が殺されたのではないかと思ひまして、もう少しで大聲を上げる處で御座いました。學者が行つてしまふと、彼女はおい〳〵泣きながら着物を持つて塔へ駈け着けました。

偶々その日未亡人の作男も二匹の羊を見失ひまして、あちこちと探し廻つてゐましたが、學者が去つてから間もなく例の小さな塔の近くへ遣つて參りました。そして、そこに羊がゐないかと、なほも四邊を見廻してゐますと、可

哀さうな未亡人の泣聲が耳に入りました。で、塔を攀ぢ登りまして、精一杯大きな聲で叫びました。「泣いてゐるのは誰だ？」

未亡人は自分の作男の聲を聞くと、その名を呼んで、かう申しました。「急いで女中の許へ行つておくれ。そして、あれが此處へ上つて來られるやうにして頂戴。」

作男も亦女主人の聲を聞いて、かう申しました。「まあ奥樣、誰がこんな所へ連れて參りました？　女中は朝から奥樣を探してゐたんですよ。でも、こんな所にいらつしやらうとは、何人も氣が附きませんからな。」それから作男は、梯子になつてゐた二本の柱を持つて來まして、うまくそれを立て懸けた上、横木を柳の皮で結び着けました。

そのうちに女中が遣つて參りましたが、一歩塔の中へ這入るや、もう默つてゐられないで、兩手を絞りながら、大きな聲を擧げました。「まあ、奥樣、飛んだことになりましたね。一體何處にいらつしやいますの？」

未亡人は女中の聲を聞きつけると、精一杯大きな聲で喚びました。「まあ、よく來てくれたね。私は上にゐますよ。泣かないで、早く着物を頂戴。」

主人の聲が聞えましたので、女中は半ば安心して、作男がどうかかうか造り上げた梯子を大急ぎで上つて行きました。そして、作男に手を貸して貰つて、やつと頂上に達しました。が、主人は人間の體といふよりは寧ろ焦けた材木のやうになつて、息も絶え〳〵に、眞偽ぶざまな樣子で裸のまゝ床の上に倒れてゐました。それを見ると、女中はもう主人が死にでもしたやうに、手放しでおい〳〵泣き出しました。

が、夫人は女中に泣くのは止めて、衣裳を着けるのを手傳ふやうに申しました。で、さうしてゐるうちに、女中の口から、彼女に着物を屆けた二人と、今こゝにゐる作男の外には、夫人が今迄何處にゐたか知つてゐるものはないと聞きまして、夫人も幾分心を安うしました。そして、この事は決して他言しないやうに、女中と作男とに只管頼み入りました。

で、いろ〳〵相談した揚句、作男は歩けなくなつた夫人を肩に背負つて、どうやらかうやら塔の外へ擔ぎ出しました。後に殘つた女中は、梯子を降りる時注意が足りなかつたと見え、足を辷らせて、腰の骨を挫きましたので、宛然獅子の吠えるやうに泣き喚きました。作男は夫人を芝生に下したまゝ、女中がどうしてゐるか見に參りましたが、腰の骨を挫いて立てないといふので、これも同じやうに背負つて出て、主人の側に下しました。夫人は自分の不幸の上に更に新しい不幸が加はつたのを見て、今更のやうに負傷した女中を見遣りましたが、誰よりもこの女中を力にしてゐましただけに、無性に悲しくなりまして、又してもおいしやくり上げました。かうなつては作男も慰める言葉がないので、たゞ貰ひ泣きする外ありませんでした。

その時分には太陽ももう西に沈みかゝりましたので、夫人の望みに任せ、こゝで夜にならないやうにといふので、作男は自分の家へ取つて返して、二人の兄弟と自分の女房とを呼び出して、その者どもを引連れ、擔架を持つて元の場所へ戻つて來ました。擔架には女中を乘せて別莊へ運んで行くことにしました。それから作男は未亡人に水を飲ませたり慰めたりして力を附けた上、肩に擔いで、その部屋まで連れて行きました。そこで作男の女房は燒麵麭に酢をつけて彼女に喰べさせた上、着物を脱がせて床へ就かせました。なほ作男はその夜のうちに二人の女をフローレンスへ送り屆けることにして、そのやうに取り計らひました。

こゝで奸智に富んだ夫人は、事實とは似てもつかぬ話を拵へ上げて、それに依つて自分や女中がかうした目に逢つたのも凡て魔術や惡魔のせゐだといふやうに、巧く兄弟姉妹や知人の前を胡麻化しました。幾多の醫者も招かれました。その結果、夫人は敷布の上で幾度となく全身の皮を脱いで、隨分不安や悲しい思ひをするにはしましたが、兎も角も烈しい熱病とその餘病から癒えることが出來ました。それから女中の挫骨傷も同じやうに癒りました。こんな事から未亡人も以前の戀人のことをすつかり忘れてその後は自分でも慎しんで嘲笑や淫愛に陷らぬやうに身を守りました。

學者は女中が骨を挫いたと聞いて、最早これで復讐も十分だと思ふところから、それに滿足して、その後は一切その問題に觸れないで、萬事を成行に任せました。

かゝして愚かな未亡人は、學者も普通人同樣興し易いやうに思つて、それが皆が皆までとは行かないまでも、大部分は相手の弱點を捕へることに巧みなものであることを知らなかつたために、お聞き及びのやうな、散々な目に逢ひました。ですから、皆樣、どうぞ人を、別けても學者を騙すことだけは奥れ〳〵もお慎しみなさいませ。

第八話（略）

二人の友人は互に往來をしてゐたが、そのうち一方の男は相手の妻と親しくなる。夫はそれに氣がついて妻と謀つて、友を大箱の中に閉ぢ込め、中にゐるまゝに、その上にて友の妻と戯れる話。

第九話

醫師シモンはブルノ及びブファルマコの好意によつて歴遊者の仲間に加盟することとなつたが、二人に欺

かれて夜間或場所に赴き、ブファアルマコのために溝に突き落される話。

二人のシエナ人がお互の間に設けた細君共通の制度に就いて、一同は暫く議論をしてゐましたが、それが濟みますと、淑女の話手として最後に殘つた女王が次のやうに語り始めました。――

皆様、スピネロチオの仕打は、勿論、ッエバが彼に報いたやうな惡戯に値ひするもので御座いました。ですから、私は自らさうした惡戯を招くとか、又は何かの理由でそれに値ひするやうな人々に向つては、それは惡戯を仕懸ける人必ずしも非難せられるべしとは思ひません。――パムピネア様は何うやらさうしたお考へのやうで御座いましたがね。――スピネロチオは實際それに値ひしてゐました。ここにもう一人、いはゞさうした惡戯を、自ら求めて たやうな男のことをお話し申上げたいと存じますが、私としてはその男にさうした惡戯を仕懸けた人達は非難すべきではなく、寧ろ稱讃すべきものだといふ意見で御座います。處で、この惡戯を遭られた人は醫者で御座いまして、立派な栗鼠の毛皮の外套を着てはゐましたが、實は羊のやうな馬鹿者となつてボロニヤからフローレンスへ歸つて來たので御座います。

日々見受けますやうに、私どもの市のゝのは、或者は裁判官となり、或者は醫者となり、又或者は公證人となつて長い、襞の多い上衣を着て、その上深紅の織物とか、又は毛皮の襟飾とか、總して堂々たる裝飾を身に着けてボロニヤから歸つて參ります。そして、それがどんな結果を收めるかは、これ又私どもの毎日見聞する處で御座います。さて餘り古いことでもありませんが、かうした仲間の一人でシモン・ダ・ヴイラと稱ばれる男がフローレンスへ歸つて參りました。シモンは學問よりも資産に富んだ男で、堂々たる緋の上衣を被て、その上に大きな肩衣を着けてゐました。その云ふ處では醫學博士とやらで、現在のヴイア・デル・ココメロ通りに居を構へてゐました。

只今も申上げましたやうに、このシモン博士はつい近頃故郷の市へ歸つて來たばかりで御座いますが、この人にはいろ〳〵珍らしい癖がありまして、その中でも、自分の身邊に居る人に向つて、街を通る人を見ては、あれは誰か、これは誰かと絶えず訊いて見るのが特に目立ちました。そして、恰もさういふ人達の動作から自分の病人に與へる藥劑の調合を編み出しでもするやうに、一切のことに注意して、それをよ 覺えてゐたもので御座います。處で、彼が特に注意して目を着けた人達のうちに、既にこれ迄二回ばかり引合に出された二人の實家、絶えず互に往來してゐる

隣人同志のブルノとブファアルマコとがゐました。彼にはどうもこの二人が誰よりも苦勞がなささうで、その日〳〵を愉快に送つてゐるやうに思はれたので御座いますね。(實際又二人はさうでもあつたのです。)で、彼はいろ〳〵な人に二人の境涯を訊ねて見ました。處が、二人とも貧乏な畫家だといふことを耳にしました。けれども、本當に貧乏ではあゝまで愉快に暮せる譯はないと云ふのが、彼の固い信念で御座いましたので、どうしてもこれは世間の知らない方面から莫大な收入を獲てゐる狡い人達に相違ないと思ひ込みました。

このやうな譯からして、シモンは出來ることなら二人と、いや、少なくともどつちか一人と親しくなりたいものだといふ望みを起しまして、實際又うまくブルノと近しい交りを結ぶやうになりました。處が、ブルノの方では、だんだん會つてゐるうちに、相手の馬鹿なことが分りましたので、毎も新しい想ひつきでシモンを愚弄しはじめました。醫者は又醫者で、同じやうにブルノとの交際を面白いものに思つてゐました。で、數回ブルノを食事に招いた揚句、これならもう打割つた話をしてもよからうと思ひまして、彼はブルノとブファアルマコの二人がその貧乏にも拘らず愉快な日を送つてゐるのを密かに驚嘆してゐる旨を打明けた上、何うしてそんな生計を立ててゐるのか聞かして貰ひたいものだと頼みました。

ブルノは醫者の云ふことを聞いて、これも亦例の愚問の一つだと思ひましたので、にや〳〵笑ひながら、相手の馬鹿さ加減に相當な返辭をしてやらうと腹を極めました。で、かう申しました。「先生、私達が何うしてこんな暮しをしてゐるかといふことに就いちや、あんまり話したくありませんね。だが、先生は私の友人でもあるし、又何人にもお漏しになることはあるまいと信じますから、安心して申上げますがね。眞實の處、私の仲間と私とは先生のお察しの通り、或ひはそれ以上に愉快な暮しをしてゐますよ。處で、私達の畫が賣れたり、又は私達に地所でもあつてその收入が上つて來るにしましても、そんなものは毎日の飲料水の代價にも足りませんよ。かう申したからとて、私達が泥祟をしてゐるなぞと思はれては困りますがね。實はたゞ遊歷に出掛けるに過ぎないのですよ。而も私達の娯樂や生活に入用な一切のものはそれから獲てゐるのです。それでゐて、第三者には何の損害も懸けないのですからね。御承知のやうな私達の愉快な生活の源も、實はたゞその一點に存してゐるのですよ。」

醫者はこの話を聞きますと、何の事だか分りもしない癖に、頭から信じてかゝりまして、すつかり驚嘆してしまひました。同時に、その遊歷なるものが何んなことなのか聞

きたくて耐らなくなつたので御座いますね。で、何んな事があつても他人には漏さないからと誓言して、どうかそれを聞かしてくれと、ブルノに強請みました。

「どうも困りましたね」と、ブルノは申しました。「先生がお訊ねになることは個個一大秘密でげして、もしそれが第三者の耳にでも入らうものなら、私は忽ち不幸な身の上にされるばかりか、この世から大魔王ルシファーの口の中へ眞逆様に追ひ落されてしまひますよ。しかし先生の見上げた好人物性に對する私の愛と、平生先生に對して抱いてゐる私の信頼とは又格別で、それを思へば、さう迄仰しやる先生のお言葉を無下にもお斷りし兼ねるやうな次第です。就いては、只今云はれたやうに、決して他言しないといふことをモントソネの十字架にかけて誓つて下さるなら、思ひ切つてお話しすることに致しませう。」

聞者は他人に話す樣な事は斷じてしないと誓ひました。

「では先生」と、ブルノは口を切りました、「つい近年のことですが、この市に魔術や口寄せの大家で、ミカエル・スコット――もと〳〵スコットランド人でしたからね――といふ人がゐまして、多くの貴紳富豪から大層崇敬されてゐました。尤も、その連中の中で今生きてゐる人はほんの數へる程しかありませんがね。處で、その魔術師がこゝを立つて行く際に、二人の弟子を後に殘して、自分を亦眞にしてくれた貴族連の御用を辨じるやうにして置きました。で、二人は先に申しました貴族富豪連の戀の取持ちをしたり、又は一寸々々した事件に骨折つたりしてゐましたが、この市や市民の風習が氣に入つたと見えまして、二人とも永く此處に留まることに致しました。そんな譯で、又或種の市の人達とも大層親密にするやうになりました。尤も、相手が何者であるか、貴族か貴族でないか、又金持か貧乏人かといつたやうなことはてんで問題としないで、たゞ自分達の日常の風習に適したものといふことを目安に置いて交際したので御座います

「處で、かうした友人どもに對する好意からして、二人は略二十五人位の會を設けまして、會員は少なくとも月二回は二人の指定する場所へ集ることにしてゐるのですよ。でその場所へ集つた時、銘々自分の望みを二人に話すのですね。すると、二人は直ぐさまその夜のうちにこちらの望みを叶へてくれます。私もブファルマコもこの二人と特別に親しくしてゐますので、その會に入れて貰ひまして、今でも會員になつてゐるのですがね。まあ、お聞きなさい、集まる毎に、私達の食事をする部屋の飾りといひ、贅を盡した食卓といひ、會員の興を添へるために出される美しい給仕の群といひ、勿論男も女もゐますがね、それから見事な皿や酒壺や盃といひ、その他呑んだり喰つたりする金銀の諸道具といひ、個個この世のものとは思はれないものばかりですよ。その上いろんな食物が各人の望みに任せて幾許でも出ましてな、どの皿も皆喰ひたいと思ふ時分に運ばれて來るのですよ。

「それから、こゝで聞かれる無數の樂器の妙なる音色や華やかな歌聲がどんなに千差萬別で、どんなに快いものであるかは、到底口でお話しするわけには行きませんよ。なほその食事の際に立てられる蠟燭の數、一同の喰べる菓子の量、飲む酒の甘さなども、矢つ張り口ぢや云はれませんね。處で、南瓜先生、私達がさうした會へ、今御覽になつてゐるやうな、こんな服裝をして出掛けるものとお思ひになつてはいけませんぜ。誰も彼も皇帝にも劣らないやうな立派な服裝をして行くんです。それ程見事な衣裳や裝飾を身に着けてゐるんですね。だが、その會で享樂する凡ての喜びの壓卷とも云ふべきは、何と云つても各人の望みに任せて立ち處に全世界から連れて來られる美人との娯しみですね。霍拂ひ國の女王、バスキアの女王、大サルタン王の王妃、ウスベキアの女王、嫦娥國のお饒舌夫人、それから多辯大公妃に鼻毛辻君夫人などが遣つて來るんですよ。いや、一々名を擧げるまでもない、要するに世界のあらゆる王妃連が遣つて來るので、長老ヨハネの奥さんでお尻の眞中に角の生えたシンキムラまで見られますよ。

「さうしてですな、お酒を飲んで、ビスケット類で腹を拵へた上、一つ二つ舞踏を踊ると、今云つた王妃達は、一人一人、自分を望んでゐる相手と一緒に別室へ消えるのですぜ。その部屋といふのが又宛然園を見るやうなんですね。それ程見事で、同時にいぶき芹でも擂る時の貴方の調劑室のやうに藥草の香がしてその中にヴェニスの總督のそれよりも一段と立派な寢臺が置いてありましてな、そこへ例の二人組がそれ〳〵懶になるのですよ。相手の織女どもが布を厚く織るために、どんなに足を細かく動かして、どんなに布片を引寄せてくれるか、そこの處はよろしく御想像に任せませう。處で、この點で一番うまいことをしてゐるのは、私の見る處ぢや、まづブファルマコと私の二人ですよ。と申しますのはね、ブファルマコは大概佛國の女王を、私はまた英國の女王を始終呼んで貰つてゐますが、この二人は恐らく世界一の美人でせうからね。それと云ふのも、最初の私達の態度が好かつたので、兩女王も他の者には目も呉れなくなつたのですな。

「さういふ次第ですから、私達が世間の人達よりも一段と愉快に日上機嫌に日を送れるし、又送らないでゐられないのは、欲しいとさへ云へば、千でも二千でも立ち處に用立てて貰はれることを論外に措きましても、あゝした女王の愛を贏ち獲てゐるといふ事實をお考へ下されば、自然お分

りのことと思ひますよ。で、これが私達の云ふところの遊歴なんでさ。私達の遣り口が恰度諸國の財寶を掠めて廻る海賊と同じやうなものだからですね。たゞ海賊は決してさうはしませんが、私達はその財寶を使つてしまへば又返すといふことが違つてゐるだけですよ。

「これで、先生、私達の遊歴といふ意味を一通りお耳に入れた次第です。しかしかうしたことがどれ位祕密にしなけりやならぬかといふことは、恐らく先生も御推量が着いたことと思ひますがね。ですから、もうその點に就いては何事も申しませんし、又更めてお願ひすることも致しませんよ。」

自分のした學問といへば、精々子供の芥辭を直す位に過ぎなかつたこの醫者は、ブルノの言葉を宛然明白な眞理でもあるやうにすつかり信用致しまして、何とかしてその會員にして貰ひたいものだと、身の内がぞく〳〵する程思ひ込みました。そこでブルノには、お二人ともあゝして愉快に上機嫌で暮してゐられるのは、尤もだとだけ答へて置いて、會員にして貰ひたいといふ依頼は、相手に對してこれ以上更に敬意を示した上、こちらの申出でを一層的確に持込み得るまで延期しようと、やう〳〵のことで思ひ直しました。で、一方では逸る心を抑へながら、相變らず熱心にブルノゝ交際を續けまして、相手を朝夕御馳走に招くなど、兎に角法外な敬愛の情を示しました。

間もなくこの親しみは愈々深く且持續的になりまして、醫者はもうブルノなしには起つても坐つてもゐられないといつたやうになりました。これで好い思ひをしたブルノは、恩知らずと思はれてもならぬといふので、醫者の優遇に報いるために、その食堂には四個齋の因縁を、その居間の入口の上部には神の仔羊を、又玄關の戸口の上部には便器を描いて、それに依つて、醫者に診て貰ひたいと思ふ程の人は、誰よりも先づこの先生に目を着けるやうにして遣りました。なほその廣間には鼠と猫との戯を描いて遣りましたが、それを又醫者先生は大層面白い畫のやうに思つて喜んでゐました。その上にもブルノは、前の晩醫者から食事に招かれなかつたやうな時には、時々こんな話をして相手に聞かせました。「昨夜も例の會に出掛けましたがね、この頃は英吉利の女王にも少々飽きが來たものですから、今度はタリシの大王妃グメドウラ夫人を呼んで貰ひましたよ」

「グメドウラとは何のことですかい」と、醫者は訊ねました。「どうもさういふ名前は私にはよく解りませんね。」

「それは御尤もな話です」と、ブルノは答へました。「ビッペングラスやアハヴイーシエーンのやうな學者もそんな事については何にも申してゐないとか聞いてゐますからな。」

「いや、貴方の仰しやるのは」と、醫者は申しました、「ビ

ポクラースとアヴイッエッナのことでせう。」

「どうもその邊のことはよく分りませんな」と、ブルノは答へました。「貴方が私達の云ふ名前を御存じないと同樣に、私も貴方の仰しやることはよく腑に落ちませんよ。しかしグメドウラといふのは、印度大王の言葉では、私達の云ふ皇后の意味ですな。處で、この女をどんな美人だとお思ひですかい！　一目御覽になれば、屹度處方箋や腎藥のことなど忘れておしまひになるでせうよ。」

かうした話でブルノは彌が上にも相手の好奇心をそゝつてゐましたが、或晩醫者は、ブルノが猫と鼠の合戰を描いてゐるのに灯を持つ役をしながら夜遲くまで起きてゐました時、もうこれ迄の御馳走その他の優遇で十分相手の好意を贏ち獲たことと信じましたので、かねての望みを思ひ切つて打明けて見ようと決心しました。そこにゐるのは二人切りでした。で、彼は次のやうに口を切りました。——

「ブルノさん、申すまでもないことですが、私が貴方にすると同じやうに、何でもして上げたいと思つてゐる人間は、他には一人もありませんよ。貴方が行けと仰しやれば、私は唐天竺まで出掛けるかも知れませんね。さういふ次第ですから、如何に馴れ〳〵しいやうなお願ひ事をしましても、別段驚いては下さらないと信じますがね。御承知の通り、近頃貴方はあの愉快な夜會のお話をして下さいました。それを承はつてから、私は是非ともその會員にして頂きたくて仕方がないのですよ。誰が何を欲しがるにしても、これ程烈しくはあるまいと思はれる位でさ。處で、それには又それだけの理由があるんで、私がその會員になれさへすれば、直ぐお分りになることですよ。と云ふのは、さうなれば、私も貴方がこれ迄御覽になつたうちの一番美しい娘をその會へ呼んで貰はずには置きませんからね。實はつい先年カッケンウインケルで見掛けたのですがね、それ以來もうすつかり參つてゐるんですよ。

「個個の話ですがね、その當時、もしこちらの云ふことを聞いてくれるなら、十グロッシエンだけ遣らうと申しました。けれども、相手は頭振りを振つたんですよ。そこでお願ひですが、どうすればその會員になれるか聞かせて下すつた上、うまく採用されるやうに盡力して頂けないものですかね。そりやもう立派な、忠實な、尊敬するに足る會員になつてお目に懸けますよ。御覽の通り、私も美男子の一人で、脚の附き具合も好く出來てゐます。顔は又薔薇のやうで、それに醫學博士の稱號もあることですから、まあ、かういつた會員は今の處一人もあるまいと思ひますがね。面白い話や美しい小唄も澤山に心得てゐますよ。一つ見本にお耳に入れませう。」——かう云つて、彼は早速唄ひはじめました。

ブルノは可笑しくて堪らないので、今にも噴き出しさうになりましたが、やつと我慢して怺へてました。唄ひ終つた時、醫者は申しました。「さ、どんなものでせうな？」

「いや、饅頭」と、ブルノは申しました、「チロルの藥樂器だつて貴方には敵ひませんよ。實に見事なものです。」

「さうでせうとも」と、醫者は申しました、「お聞きにならなければ、まさかこれ程だとはお思ひにならなかつたでせう。」

「いや、確に仰しやる通りです」と、ブルノは答へました。

「まだ〳〵他にも知つてゐますよ」と、醫者は申しました。「だが、それは止めて置きませう。私を御覽になればお分りになりませうが、私の父は田舍にこそ居つたれ、矢つ張り貴族でしてな、母方から申しますと、私はこれで名門ヴアレキオの一族なんです。貴方も御承知になつてゐる通り、私は立派な書物でも衣裳でも、苟もフローレンスの醫者が持つてゐる位のものには事を缺かない積りです。確に私は總計して略百リラ位のものは持つてゐますよ。而もそれが十年來のことなんですからね。まあ、かうした理由からして、切にお願ひする次第ですが、どうか一つあの會員になれるやうに骨折つて頂きたいものですね。それがして頂けるやうでしたら、今後幾度病氣になられようが、鐚一文だつて治療代を頂かうとは申しませんよ。」

ブルノは、かういふ言葉を聞きますと、既に以前から氣附いてゐたことではありますが、いよ〳〵この醫者は馬鹿に相違ないと思ひましたので、大きな聲で申しました。「先生、こつちの方へ灯を向けて下さい。鼠の尻尾を描いてしまふまで、その話はまあ待つて下さい。御返辭はそれからのことにしませう。」

さて尻尾を描いてしまふと、ブルノはこの申込みに大層當惑したやうな振りをして、かう申しました。「先生、毎も大層御親切にして頂いて、私も有難いことには思つてゐますがね、それにも拘らず、先生の申出では、よし先生の頭腦の偉大さに較べては取るに足らぬことであるにしましても、私にとつては容易ならぬ事柄でしてな、先生のお頼みでなければ何んな人のためにも遣つて見ようとは思ひませんよ。それも一つには、私が先生を敬愛してゐるからであり、又一つには、聽くものが三嘆しないではゐられぬやうな氣の利いた先生の言說の故に外ならないのです。かうしてお附き合をしてゐますと、先生の才智はいよ〳〵立派なものに見えて來ますよ。そればかりではありません、他に何等の理由がないとしても、只今お話しになつたやうな美しい方を愛していらつしやるといふことだけで、私は先生を愛しないではゐられないのです。處で、誠に面目次第もありませんが、私はこの件に就きましては先生の想つてゐ

られるやうな、さう云ふ權能を與へられてゐないのですよ。從つて先生のために必要なだけのお力添へも出來ない次第です。しかし先生は誠意にかけて祕密を嚴守して下さるといふお約束も御座いますから、最初にお執りにならなくてはならない方法だけはお耳に入れませう。さうなると、只今仰しやつたやうな立派な御本や、その他の品々を御所持のことでも御座いますから、屹度成功するだらうと思はれますよ。」

「では、腹藏なく云つて頂きませう」と、醫者は申しました。「想ふに、貴方は私をまだよく御存じがないので、どんなに私が祕密を守ることを心得てゐるかがお分りにならないのでせうね。さうです、あのガスパルオロ・ダ・サリツエト氏がフオルリムポプリの市長であつた時には、大概のことは私に話してくれました。私が祕密を守る男だといふことを見拔いてゐたものですからね。これが僞りでないことをお目に懸けませうなら、ガスパルオロ氏がベルガミナさんとの結婚に際して、それを打明けてくれた第一の人は私だつたのです。どうです、お分りになりましたか。」

「見上げたものですなあ」と、ブルノは申しました。「さういふ方の信用を博してゐられたとなりますと、私も亦安心して御信用申すことが出來るわけですね。處で、貴方のお執りになるべき方法といふのは、かうなんですよ。私達の會には會長一人と相談役二人とがありまして、いづれも六箇月毎に交替します。來月一日には、ブフアルマコが會長に、私が相談役になるんですがね、これは既定のことなのです。處で、會長になりますと、大した權能がありまして、誰でも自分が好きな人を會員にすることが出來ます。そこで出來るだけブフアルマコの信頼を獲ることに力をお盡しになつて、あの男によろしく敬意を表して置かれるのが何よりだと思はれますね。あの男は、先生を才智のある方だと見込んだら、直ぐ先生に參つてしまふ性ですよ。そこで先生の才とお持ちになつていらつしやる立派な品物とであの男の好意を獲て置いて、一つお頼みになつて見るのですな。屹度斷るやうなことはなからうと思ひます。先生のことは既にあの男にも話して置きました。あの男も先生には相當の好意を持つてゐます。で、只今申したやうにお遣りになれば、その後の處は一切私にお任せ下すつて宜しう御座いますよ。」

それを聞いて、醫者は申しました。「お言葉を承はつて大層滿足に思ひます。あの方が才智のあるものとの交際を好んでいらつしやるのなら、ほんの少しでも私と會談して下されば、その後は引續いて私を訪問せずにはゐられないやうにして見せますよ。才にかけては、それを全市民に頒けてやつても、まだ剩つてゐようといふ位持合せてゐる積り

ですからね。」

かういふやうな話を極めて置いてブルノはブファアルマコに一切を順序立てゝ話しました。ブファアルマコはこの馬鹿先生に相手のそれ程望んでゐるものを與れてやる瞬間が待ち遠しくてなりませんでした。一方、醫者は遊歴なるものを一緒に遣つて見たい一心からブファアルマコの友人になるまでは決してその手を弛めませんでした。勿論、それは容易に成功しました。そこで、又しても彼のために見事な晩餐やら午餐やらを催してブルノも一緒に招待しました。二人は例のお饒舌でいよ〳〵醫者の頭を混亂させてしまひました。そして、上等の酒や脂の乘つた去勢雞などを鯨腹呑んだり喰つたりした上、絶えず醫者を追つ懸け廻して、招かれもしないのにお客になつて坐り込むなど、始終勝手な眞似ばかりしながら、「これをするのも先生なればこそ、誰が他の者のためにして遣るものですかい」なぞと、繰り返し〳〵云つたもので御座います。

それでも醫者にはいよ〳〵その時機が來たやうに思はれましたので、ブルノに云はれた通り、彼はとう〳〵望みの程をブファアルマコに申出でました。ブファアルマコはそれを聞くと非常に驚いたやうな振りをして、大聲でブルノを叱りつけました。「バシニヤーノの神に誓つても云ふが、鼻柱が聽に滅入り込む程貴樣を殴打しつけてやりたいよ。この裏切者の阿呆奴がー　こんな事を先生に云つたのは、貴樣に相違ないからな。」

醫者は頻りにお詫びを云ひながら、これは他の方面から聞き込んだものだと斷言した上、彼一流の悧巧振つた口吻で兎も角も相手を宥めました。

すると、ブファアルマコは醫者の方へ向き直つて、かう申しました。「先生、貴方がボロニヤの大學にいらして、祕密を守ることを修得して歸られたことは、私にもよく分つてゐますよ。いや、それ以上先生は世間の馬鹿者どもとは違つて、いろはを學ぶのに胡瓜に就かないで、瓢箪を鑑にせられたとも聞いてゐます。その方が長いからといふ譯でせうな。なほ私の思ひ違ひでなければ、先生は日曜日に洗禮を受けられたさうですね。ブルノの申す處では、先生は醫學を修められたさうだが、私の見る處では、寧ろ人心を收攬する術を學んで來られたと云ひたい處ですな。眞個、先生がその才と奇想とを縱横に驅使される處は、私のこれ迄知つてゐる何人にも優して鮮やかなものですな。」

醫者はこゝで相手の言葉を遮つて、ブルノの方へ向いて、かう申しました。「理解のある方と話しをするのは、こんなものですね。誰がこの方のやうに私の心のあらゆる特質をこんなに早く認めてくれますかい。失禮だが、貴方だつて、いや、この方のやうに速くは私の價値を認めて下さらなかつた。最初貴方がブファアルマコさんは才の優れたものと御交際がお好きだと仰しやつた時、私が何と申しましたか、一つ貴方からこの方に仰しやつて頂きたいものですね。どうです、見事にあの言葉を實現したぢやありませんか。」

「いや、仰しやる通りです」と、ブルノは申しました。

それから醫者はブファアルマコに向つて申しました。「私がボロニヤにゐた時のことを御存じでしたら、貴方のお言葉も到底今仰しやつたどころの騒ぎぢやないでせうよ。大人でも子供でも、教授でも學生でも、皆命懸けになつて私に好意を持つて呉れたものですからね。それ程私の才と辯舌とは世人をよろこばせたものです。いや、それ處ぢやありませんわい。その當時私の云ふ一語々々が人を笑はせたものでした。それ程衆皆に面白がられたものですな。いよいよ出立する時には、一同泣きの涙で、どうか何時までもボロニヤに留まつて呉れと頼まれるやうな次第でしてね、而も私を引き留めるために、ボロニヤに來てゐる全學生を私の手に委ねて、一人で醫學の講義をさせようとした位でした。だが、私はそれに應じませんでしたね。先祖代々傳はつて、現に私の所有してゐるこの廣大な屋敷へ戻つて來た方が得策だと思ひましたからな。そして又、實際その通りにした次第ですよ。」

「さあ、君は今どう思ふかね」と、ブルノはブファアルマコに申しました。「前に話した時は君は、あんまり信用しないやうだつたがね。しかし猿大明神に誓つてでも云ふが、この位驢馬の小便をうまく使ひこなす醫者はフローレンス中にも又と一人ありやしないぜ。いや、こゝから巴里へ行くまでの間にだつて、先生のやうな方は決してあるまい。さあ、出來るものなら、先生に楯を突いて、先生のお望みを拒んで見るがいゝ。」

すると、醫者はかう申しました。「ブルノさんの仰しやることは眞實です。だが、私はこの市では一向認められてゐませんっ實際この土地の者はどつちかと云へば物の分らない連中ばかりですよ。どうか私が醫者仲間でどんな地位を占めてゐるか見て頂きたいものですね。」

「眞個」と、ブファアルマコは申しました、「先生は、私の想像した以上に、事物に精通していらつしやいますわい。そこで先生のやうな才物とお話しする場合に應はしいやうな口吻で申上げますがね、先生が間違ひなく例の會員になられますやうに、一切の努力を惜まないことを畏れみかしこみ斷言致しますよ。」

この約束の成立した後は、それ迄醫者の二人に拂つて來た敬意が更に倍加されました。二人はいよ〳〵調子に乘つて、馬鹿氣切つた與太を飛ばせ、是非黄金水伯爵夫人を取持つつもりだが、これは人類の後架國に於ける第一の美人

だなどと云つたもので御座います。

醫者はその伯爵夫人とはどんな人物かと訊ねました。

「筍先生」と、ブファアルマコは申しました。「その方は大した上流婦人でして、その勢力の及ばない家は殆どないと申して宜しい。他の事は論外に措いても、かの小同胞團の坊さん達ですら彼女には敬意を表して、勇ましい太鼓を鳴らしながらお供物を供へますからね。それから夫人は一旦戸外へ出たとなると、どんなに隱れてゐましても、屹度世人の認める所とならずにはゐませんわい。二三日前も、夫人はアルノ河に足を浸して、新鮮な空氣を吸はうといふので、夜半に私の家の前を通つたことが御座います。だが、夫人のお住ひは大概後架です。それで國中を屢々夫人の巡視役が廻つてゐますが、いづれも夫人の顯榮を示すために小枝の箒と測鉛とを持つてゐますよ。夫人の家來は到る處に居りますがね。例へば門前番兵氏、糞塊君、腸詰男爵、それから下痢子夫人などで、既に先生もさうとは御存じないまでも、實は親しくしていらつしやる方々ばかりでさ。で、もしあのカッケンウインケルの戀人をばお忘れになつて、それに私どもの計畫がうまく行きさへしますれば、屹度この勢力ある夫人の胸へ先生をお連れ申しますよ。」

醫者はボロニヤの市で育てられ、其處で成人したものですから、かういふ言葉がよく分りませんでしたので、さういふ夫人なら至極結構だと申しました。

こんな話があつてから間もなく畫家達は、醫者先生の入會が許されたと、眞しやかに告げました、處で、その夜會員一同が集まることになつてゐた晝間のことで御座います、醫者は二人を晝餐に招いて、食後、その會に臨席するには何うしたものだらうと訊ねました。

「先生」と、ブファアルマコは申しました。「先づ第一に勇氣をお出しになることですな。勇敢に遣つて頂かなかつたら事は失敗に終りますよ。そればかりか、私達までお藪で大した損害を蒙ることになりますわい。で、特に大勇を出して頂かなければならない點を只今申上げることにしますがね。最初世間が寢鎭まつた頃、新聖マリア寺院の門外に最近建つた墓石のどれか一つの上に坐つて頂くのですよ。但し最上の晴衣を着てですね。これは一同の前に堂々たる容姿を見せて頂くためと、もう一つは一同に報告せられた處に據りますと、先生は貴族でいらつしやいますが、一同はまだ目のあたり貴族としての先生をお見受けしたことがないからのことですね。勿論、そのためには、伯爵夫人が犧牲を厭はず先生を洗禮勳爵士になさらうといふのですよ。で、その墓の上では、私達からの使者が參りますまでお待ちになつて頂きたいのです。

「何も彼も申上げることに致しますが、間もなく餘り大きくない、角を生やした黑い獸が現れて、先生の前で恐ろしい鼻息をしながら飛び廻りますよ。先生を怖がらせようといふ積りですね。しかし先生が怖がらないことが分ると、徐々に先生のお側へ寄つて參ります。その獸が先生の側へ參りましたら、平氣で墓の上から降りて、神や聖者の助けを求めないで、泰然としてその背にお乘り下さい。お乘りになつたら、腕を組んで、手を胸に當てたまゝ、決して獸に觸れないやうにして頂くのですね。そのうちに獸はだんだん動き出して、先生を私達の所へお連れ申します。だが、前以て申して置きますがね、もし神や聖者の助けをお求めになつたり、心に怖れを感じたりすれば、獸は先生を振り落すか、さもなければ體の臭くなるやうな所へ突き落すかも知れませんぜ。ですから、飽く迄勇敢に遣つて退ける自信がおありにならなければ、初手から入らつしやらない方が好う御座います。先生御自身が禍ひを蒙られるだけでなく、私達まで飛んだ目に逢ひますからな。」

醫者はそれに答へました。「いや、そんな事を仰しやるのは、私といふものがまだよくお分りにならないのですね。私が手袋を穿めたり、長い上衣を着たりしてゐるので、それで不安に思はれるのでせう。だが、ボロニヤで友人と一緒に女を張りに出た夜、私のしたことを申上げたら、定めて吃驚なさることでせうよ。或晩のことでしたがね、一人の女がどうしても一緒に來ようと云はないものですから、ほんの小娘でしたけれども、うんと擲りつけてから、首筋を摑んで二三十間引張つて行きましたよ。ですから先方もとう〳〵否應なしに隨いて來ましたね。

「それから又或時のこと、今でもよく覺えてゐますがね、下男一人を連れて、夜間アヴェ・マリアの祈禱が濟んで少し經つた頃に、小同胞團の墓地を通りました。恰度その日に若い女の葬式があつたのですが、私は少しも怖れませんでしたよ。まあ、御心配下さいますな、勇氣と自信なら大概の人には負けない積りですからね。それから儀容をとゝのへる上には、私が博士號を授與された際に着た緋の上衣を着けて出掛けることにしませう。會員達が私を見てどんなに喜ぶか、そのうちには又私が會長に擧げられないものかどうか、一つ見てゐて下さい。要するに、私が苟も會に出席さへすれば、どんなに事件が展開するか、おきお目に懸けますよ。私を見もしないうちから私を勳爵士にしようといふ程、或伯爵夫人が私に參つてゐるのですからな。處で、ことによつたら勳爵士は私に不似合かも知れませんし、又勳爵士の地位を私は守り兼ねるかも知れませんね。だが又その反對であるかも知れませんわい。兎に角、まあお任せして頂きませう。」

「一々御尤もです」と、ブファアルマコは申しました。「しか

しその場になつてお出でがないとか、又は使を遣つたのに、指定の場所にいらつしやらないとかいふやうなことで、この計畫を臺なしにしないやうにして氣を附けて頂きませう。まだ陽氣が冷たいし、醫者など申す方は兎角寒さを厭ふものですから、敢て一言申上げて置く次第ですがね。」

「飛んでもないことで」と、醫者は申しました。「これでも私は身體は頑丈な方で、寒さなど平氣ですよ。夜分など、誰しもあるやうに便所へ立つやうな場合、胴着の上に毛皮の外套を重ねてまだ不足だといふやうなことは滅多にありませんからね。まあ、御安心下さい。屹度參りますよ。」

そこで訪問者は歸つて行きました。いよ〳〵夜分になりますと、醫者は細君の前にいろ〳〵口實を設けて、窃かに緋の上着を取出しまして、時刻を見計らつた上、それを着て、例の墓石に上つて、寒いものですから、體を丸くしてうづくまりながら、獸の出て來るのを待つてゐました。

生れつき强大な體軀をしてゐたブファルマコは、只今ではあまり流行しない或種の野外劇などに使はれた假面を一つ手に入れまして、それから外側に黑い毛の生えた毛皮を羽織つて宛然熊のやうな姿になりました。但しその假面は角のある惡魔の顏で御座いました。かうした身なりをして、樣子如何にと、彼は新マリア寺院の新しい墓地へ遣つて參りました。ブルノも或距離を置いて隨いて來ました。で、先方に氣づかれないやうに、醫者先生が來てゐるのを見屆けますと、ブファルマコは四つ這ひになつて歩み寄りつゝ跳躍したり、騷いだり、嘘をしたり、咆えたり、鼻を鳴らしたり、宛然惡魔に憑かれたやうな眞似をして見せました。

これを見、これを聞いた時には、醫者は身の毛が慄立つて、がた〳〵顫へ出しました。元々女よりも臆病で弱蟲でしたからね。そして、こんな時刻にこんな場所へ來るのぢやなかつたと、早くも後悔しはじめました。が、一旦出掛けて來たことでもあるので、更に心を取直して、强ひて勇氣を奮ひ立てました。それ程話しに聞かされた不思議の世界が見たくて〳〵堪らなかつたので御座いますね。

ブファルマコはなほ少時さう云つたやうな騷ぎを演じた後幾分落着いたやうな振りをしながら、醫者の坐つてゐる墓石に近づいて、その傍に身を寄せました。醫者は恐ろしさにぶる〳〵顫へながら、どうしたものか、獸の背に乘つたものか止したものか、更に心が定まりませんでした。が、乘らなければ、獸が又何か害を加へやしないかといふ心配も御座いましたので、やつと第二の恐れで最初の恐れを抑へて、小さな聲で「神よ、護り給へ」と云ひながら、墓石から離れて、獸に跨がりまして、よくその上に腰を据ゑました。それからもがた〳〵身を顫はせながら、云はれた通りに手を胸に組み合せました。

すると、ブファルマコは靜かに聖マリア・デラ・スカラ寺院の方へ向つて、なほ四つ這ひになつたまゝ、リボーレの尼さんと云はれてゐるあたりまで醫者を運んで參りました。當時その邊には、田畑を肥すために、百姓達が例の「黃金水伯爵夫人」を流し込んで置いた穴が澤山御座いました。そこへ遣つて參りますと、ブファルマコはその穴の傍に歩み寄つて、時を見計らひつゝ、醫者の片足を攫むが早いか、背から振り落しざま、眞逆さまに穴の中へ投げ込みました。同時に鼻を鳴らしながら跳ね廻つて、そこでも一騷ぎした後、聖マリア・デラ・スカラ寺院の前を脫けて、オニサンティの牧場の方へ駈け出しました。其處には、最前からあまりの可笑しさに辛抱がし切れないで逃げ出して來たブルノが待つてゐました。二人はうまく行つた惡戲をよろこびながら、肥糞まみれになつた醫者がどうするだらうかと、遠くから樣子を窺つてゐました。

落ち込んだのがどんなに汚らしい場所かといふことに氣が附くと、醫者は身を起して、一生懸命に這ひ出さうとしましたが、あつちへ倒れこつちへ轉がりして、頭から足の先まで肥糞まみれになりつゝ、いくらか汚物さへ飲んだ揚句、あまりの情なさと憤慨とで胸一杯になりながら、やつと這ひ出すことが出來ました。が、その際折角の肩衣をなくしてしまひました。それから兩手で出來るだけ肥糞をこすり落して、他に仕樣もありませんでしたので、わが家を指して歸つて參りました。そして、長い間叩いた揚句、やつと戸を明けて貰ひました。

あたりに臭氣を漲はせながら、醫者が家の中へ這入つた時には、ブファルマコとブルノの二人も、細君がどんな顏をするだらうか見て遣らうといふので、直ぐ後から跟けて來てをりました。二人が聞き耳を立ててゐますと、どんな極惡の無賴漢に向つても眞逆これ程酷いことは云はれなかつたらうと思はれるやうな、凄い文句を夫に向つて浴せかけてゐる細君の聲が聞えてまゐりました。

「まあ、いゝ氣味だわ。屹度何處かの女の許へ行つてゐたんでせう。緋の上衣なんか着込んで、容子の好い所を見せてやる了簡だつたに違ひない。私一人ではまだ足りないのですか。ねえ貴方！　わたしは貴方位は何でもないこと、この市中の男だつて堪能させてやることの出來る身なんですよ。本當にそんな所へ抛り込まれるのも、當然の報いだわ。いつそのこと窒息して死んでしまへばよかつたのにねえ。まあこの立派なお醫者樣を見て遣つて下さい。自宅に妻を持つてゐながら、夜になると戸外の女を追懸け廻すのですからね。」

醫者が丹念にお湯を使つてゐる間、彼女はかう云つた調子で夜半まで夫を惱ましつゞけました。

翌朝ブファアルマコとブルノの二人は、打擲された場合によく出來るやうな寄痣を繪具で全身に描き立てて、醫者を訪ねました。醫者は既に起きてゐました。家に這入つて見ると、何だかまだ臭氣が殘つてゐるやうで御座いました。それがすつかりなくなる程、まだ綺麗に洗ひ淨めることが出來なかつたので御座いますね。

二人の遣つて來た物音を聞くと、醫者は立つてそれを迎へながら、一日の幸福を祈る朝の挨拶を致しました。處が、ブルノとブファアルマコとは、かねて謀し合せて置いたことと、怒氣を含んでから申しました。「その御挨拶を返す譯には參りませんよ。それ處か、誠意のない唾棄すべき裏切者の先生には禍ひの日の多くして、終に悲慘な最後に到らんことを衷心より希望しないではゐられないのです。先生に喜びと名譽とを齎さうとして、危く犬のやうに打ち殺される處でした。先生の不信のために、昨夜私どもは恐ろしく打たれました。羅馬まで驢馬を驅つて行くにしても、あんなに打たないでも好かりさうなものだと思はれる位打たれましたよ。そればかりか、先生の入會を取り持たうと思つたあの會から、危く脫會させられる處でした。嘘とお思ひなら、まあ、この肌を御覽下さい。」二人は薄明りの裡に襟をはだけて、繪具を塗つた胸部を出して見せましたが、直ぐに又前を掻き合せてしまひました。

醫者は謝罪した上、どんな風にして、どんな所へ投げ込まれたか、昨夜の不運を話して聞かせました。

すると、ブファアルマコは申しました。「いつそのこと、橋の上からアルノ河へ投げ込まれたらよかつたらうと思ひますよ。何故先生は神の助けをお求めになつたのです？　豫めあんなに迄御注意申上げたぢやありませんか。」

「いや、確に」と、醫者は答へました、「そんな事はしませんでしたよ。」

「何ですつて？」と、ブファアルマコは申しました。「そんな事はしなかつた！　ふうむ、先生は自分で自分をお忘れになつたのだな。使の者の云ふ處では、先生は木の葉のやうにふる〳〵顫へて、宛然正體がなかつたといふ話ですがね。それも尤もな話ぢやありますがね。しかし私どもも二度とこんな馬鹿な目に逢ひたくは御座いませんよ。いづれそれ相當のお禮を致したいとは考へてゐますがね。」

すると、醫者は頻りに詫び言を述べて、どうかさう恥を曝け出さないでくれと賴んだ上、出來る限りの辯を盡して相手を宥めにかゝりました。それでも二人がこの汚辱を世間へ持ち出しはしないかと、それが氣に懸つてたまりませんので、その後も更にしげ〳〵と二人を食事に招いたり、又は變つた方法で敬意を表したりすることを懼りませんでした。

お話はこれでお仕舞ひですが、ボロニヤに遊學してもあんまり悧巧になれなかつたやうな人達を教育するには、どうもこの方法に限るやうで御座いますね。

第十話

シシリーの一女或商人を騙して、彼がパレルモへ持參した一切の商品を見事に奪ひ取つた。すると、この商人は更に多額の商品を携へて再びパレルモへ遣つて來たやうに裝ひ、それを空抵當にて女から金を奪ひ、實は水と麻屑の外何物をも殘さなかつた話。

女王の話が所々で淑女達をどんなに笑はせたかは、今更問ふを要しません。あんまり笑つたので、少なくとも十回以上涙を浮べなかつたものは一人もありませんでした。さて女王の話が終りますと、デイオネオは自分の順番が來たことを知つて、次のやうに語りはじめました。——

皆さん、狡猾とか奸計とかいふものは、それによつて見事に騙される相手かずるい奴であればある程、いよ〳〵面白くなつて來ることは申すまでもありますまい。處で、皆さんはそれに就いていろ〳〵面白い話をして下さいましたが、私も驥尾に附して申上げたい話が一つあるので御座います。これは騙された女が、皆さんのお話の中へ出て來た騙される人達よりもずつと詐欺に長けた奴であるだけに、へ迄のお話よりも一入皆さんのお氣に召すことと信じます。

港市へ商人が商品を携へて到着しますと、その商品を陸揚げすると同時に、ドガーナと申しまして、自治團體や國主が管理してゐる倉庫に入れるのが習慣で御座いましたが、今でも恐らくさうだらうと思はれます。さて、その場合商人は倉庫の管理人に全部の商品とその價格の明細書とを渡します。すると、管理人は商人にその商品を納めて錠を卸して置く倉庫を指定してくれるんですね。次いで稅關吏とか收稅官とかが商人の差出した明細書に基いて全部の商品を稅金簿に記入して、商人がその品を倉庫から引出す場合に、そのストック全體、又はその一部に對して料金を徵收することになつてゐます。仲買人はこの稅金簿からして、保管されてゐる品物の性質や價格、並びにそれを賣らうとしてゐる商人の名前を知つて、その商人に對して交換とか賣却とかの交渉を始めるのですね。

この習慣は、他の市々に於けると同じやうに、シシリイのパレルモにも行はれてゐました。處で、この市は昔も今も容貌の美はしい道義の念に乏しい女に富んでゐました。知らない人はこの女達をちやんとした立派な婦人のやうに

思ふでせうが、彼等は實は男の羽を毟り取るだけでなく、その皮を剝ぎ、髮を剃るだけでなく、肉までこそげ取ることばかり考へてゐるのですから、他國から來た商人と見ると、早速その男がどれだけの品物を持つて來てゐるか、どれだけの資力があるかといふやうなことを稅金簿で調べにかゝります。それから愛嬌を振り蒔くとか甘い言葉を弄するとかして、その商人を誘き寄せ、罠に懸けようとするので御座います。

彼等はこれ迄にも相當澤山の商人を罠に懸けて、その商品の大部分を、いや、大概はその全部を奪ひ取りました。そればかりでなく、中には積荷も船も、肉も骨も一切女に捲き上げられたのさへ少なくはありませんでした。それ程この女床屋どもは剃刀の使ひ方が上手で御座いました。

處で、少し以前のことですが、若いフローレンス人で、その名をニコロ・ダ・チニヤーノと云ひ、一般にはサラバエットと稱ばれてゐたものが、主人の命令でサレルノの市で賣れ殘つた五百グルデン許りの毛織を持つてバレルモへ遣つて參りました。サラバエットは稅關吏に商品の明細書を渡して、商品を倉庫に納めてから、別に賣り急ぐやうな風も見せないで、市の散歩に出掛けました。

彼は色が白い上に金髮で、眉目は殊の外秀れ、軀つきも華車な方で御座いました、すると、例の床屋さんの一人で通稱ジヤンコフイオレ孃といふ女が、かねて彼の用件を幾分探知してゐましたので、早速彼に目を着けました。彼もそれに氣が附きました。處が、相手の女を上流婦人だと思ひ込んでゐた上に、自分だけの美貌があれば屹度相手に好かれるだらうといふやうな自惚れもありましたので、まあ用心してこの戀を追懸けてやらうと考へました。で、誰にも内密でぶら〳〵彼女の家の前を通りかゝりました。女の方ではそれを見懸けますと、最初二三日の間はまづ目で男の心を煽り立てて置いて、それから男を想ふ切ない情に燃え立つてゐるやうな振りをしまして、最後に極めて取持ちの巧い女を男の許へ差立てました。

使者の女は、二つ三つ餘所事をしやべつた後、目に涙を泛べながら、自分の主人が相手の美貌に心を奪はれて、日も夜も落着かないでゐる。で、もしどこかの溫泉宿で二人切りで逢つて貰はれたら、主人もどんなに喜ぶか分らないなどと口說き立てました。それから一個の指輪を取り出して、主人の吩咐けだといつてそれを男に渡しました。サラバエットはこれを聞いて、自分程果報な人間はないやうに思ひました。で、その指輪を受取つて、それを目に押當てたり、接吻したりしてゐましたが、最後にやつと指にさして、さて更まつて、もしジヤンコフイオレ孃がそれ程自分を愛してゐてくれるのなら、決してそれを仇には思はない、

實を云へば、自分の方でも命以上に彼女に戀ひ焦れてゐるのだから、彼女の望みとあれば、何んな所へでも直ぐさま出掛けるつもりだと、使者の女に申しました。

使者の女がこの返辭をもつて主人の許へ歸つてから、間もなくサラバエットの許へ、明日の晩拜後某溫泉宿で彼女を待ち受けてくれといふ通知が參りました。彼は誰にも云はないで指定の時刻に出掛けて行きましたが、溫泉の部屋は女の手でちやんと取つて置いて御座いました。待つ程もなく重い荷物を持つた二人の女奴隷が遣つて參りました。一人は木綿の敷蒲團を頭に擔いで、もう一人はいろんな品で一杯になつた大きな籠を提げてゐました。二人は部屋の一隅にある寢臺に敷蒲團を延べて、その上に絹で緣飾をした一對の敷布を懸け、それから立派なサイプラス產の麻布の眞白な腰蒲團を敷いて、小さな美しい飾りの附いた枕を二つそこへ並べました。それから二人の奴隷は着衣を脫いで、槽の中へ這入るなり丁寧にそれを洗ひ淨めました。

間もなく使の女が別の女奴隷を二人まで連れて同じやうにその溫泉宿へ遣つて參りました。先づサラバエットに情を含んだ挨拶をして、それから幾たびも溜息を吐いた上、絕えず抱擁したり接吻したりしながら申しました。「これが貴方でなければ、何んな方が仰しやらうと私はこんな所へ來ようとは思はないのですよ。でも、仕方がないわ、貴方が私の心に火をお點けになつたんだもの、本當に憎らしいわねえ。」

こんな事を云つた後で、二人は待ち兼ねたやうに裸になつて湯に入りましたが、奴隷も一緒に隨いて來ました。が、女は誰にもサラバエットに觸らせないで、手づから麝香や丁子入りの石鹼で念入りに、しかも氣持ちよく洗つて遣りました。それから自分は二人の奴隷に洗はせたり擦らせたりしました。それが濟むと、奴隷は二枚の淸らかな白いタオルを持つて來ましたが、そのタオルからは盛んに薔薇の香が發散して、丸で部屋中のものが薔薇になつたやうに思はれました。そこでサラバエットが奴隷の手で一枚のタオルにくるまれると、今一枚には女が他の奴隷の手でくるまれました。それから二人は女奴隷の肩に擔がれて、先の寢床へ寢かされました。こゝで汗が納まると、奴隷がタオルを取つて、二人を床の上で裸體にしてしまひました。さうして置いて、籠から精巧な銀の小壺を二三取出しましたが、第一のものには薔薇水、第二のものにはオレンジの香水、第三のものにはくちなしの香水、第四のものには他の香水が入つてゐました。これ等のさま〳〵な香水を二人は全身に振り撒かれました。すると、そこへビスケットと上等の酒との入つた小函が運ばれましたので、二人はそれを摘んで盃を擧げながら、やゝ元氣を恢復しました。

サラバエットはもうすつかり天國にでも入つたやうな思ひをしました。そして、幾度となく相手の女を見遣りましたが、實際いくら見ても見飽きないやうな美人で御座いました。彼はもう一刻も早く奴隷達が立ち去つて、思ふさま女を抱くことが出來るその瞬間が待ち遠しくてたまりませんでした。で、奴隷達が女の命令で灯を部屋へ持つて來て、それから部屋を出て行きますと、女はサラバエットを、彼は又女を抱いて、二人とも青春の大きな嫣しみに長時間を過ごしました。その間女は男に對する愛に身も世も忘れてゐるやうに彼には思はれました。

最早床を出る時分だと思ひましたので、女は奴隷達を呼び入れました。そして、二人はその手を藉りて衣裳を身に着けた上、更に酒とビスケットとで元氣を附けました。それから又例の香水で手や顏を洗ひ淨めた後、女はサラバエットに申しました。「ねえ貴方、今晩は私の許でお食事をして、一晩御ゆつくりして下さらない？　さうして下されば本當にうれしいんですがねえ。」

相手の美貌と一分の隙もない愛想とにすつかり魅せられた上、女が自分に心底參つてゐるもののやうに思ひ込んでゐたサラバエットは、かう返答しました。「貴方のお望みとあれば何んな事だつて喜んで致しますよ。今晩に限らず、何時だつてお望みのことや仰しやることは疎かには致さない積りですよ。」

女は家に歸ると、部屋を飾り立て、見事な晩餐の用意をして、サラバエットを待ち受けました。サラバエットは暗くなりかゝる頃出掛けて行きましたが、大層鄭重に迎へられ、氣持ちよく愉快に食事を致しました。食後寢室へ這入つて見ると、伽羅やサイプラス産の小鳥の不思議な香が鼻を打ちました。立派な床もあつて、長押には見事な新調の衣裳がかゝつてゐました。かうして凡てのもの、いや、その一つ〳〵が既にこの家の主人の富裕な貴婦人であることを想はせました。だから、それと反對な女の日常に就いて二三の噂を耳にしてはゐましたが、彼にはどうしてもそれを信ずる氣にはなれませんでした。縱しや又女がこれ迄に一二の人を騙したことがあるにしても、それが自分の身に降りかゝつて來ようとは、どうしても信じられませんでした。そこで彼はその夜も有頂天になつて女の傍に眠つて、いよ〳〵情炎を燃え立たせました。

朝になると、女は財布のついた見事な銀の帶を男の腰に締めさせて、かう申しました。「サラバエット樣、どうか何時までも私を可愛がつて下さいましな。私はもう身も心も捧げて貴方のお氣に入りたいと思つてゐますから、此處にある一切のものや、私の身で出來る一切のことは貴方の御自由にお任せしますわ。」サラバエットは、うれしさうに女を抱いて、その唇に接吻しました。それからその家を出て、毎も商人連の集まる場所へ出掛けて行きました。

かうして自分の方では一文も費やさずに、女の寵愛を享けながら、いよ〳〵その美容に魅せられてゐるうちに、サラバエットは商品を金に換へて莫大な利益を獲ました。例の美人はそれを當人からでなく、他の方面から聞き込んだのですね。で、或晩サラバエットが女を訪れますと、女は愛に戯れ、痴話に狂ひながら、相手を抱いたり接吻したりして、男の腕に抱かれたまゝ今にも絶え入るかと思はれる程、男に對する愛慾に燃え立つてゐるやうな容子をして見せました。

それから女は自分の持つてゐる見事な銀の盃を二つ彼に贈らうとしましたが、サラバエットはそれを受けようとしませんでした。その折々のことを勘定して見ますと、彼はそれ迄に三十グルデン許りのものを女から貰つて、しかもたゞの一文だつて女に受取らせることが出來なかつたからですね。かうして愛と氣前との實證で男の愛情をそゝつて置いた後で、奴隷の一人が現れて、かねて謀し合せたやうに、女を室外に喚び出しました。で、女は部屋を出て行きましたが、間もなく泣きながら歸つて來まして、いきなり頭を寢床に伏せたまゝ、さも痛ましげにしく〳〵泣き聲を上げました。

サラバエットは吃驚して女を抱き上げました。そして、自分も一緒になつておろ〳〵しながら、かう申しました。「困りましたねえ。急に泣き出して、どうしたと云ふのです？　一體どんな譯があるんですかい。さあ譯を云つて下さい。」

長い間男に氣を揉ませて置いてから、女はやつとかう申しました。「まあ、何うしていゝやら、何と申していゝやら、眞個途方に暮れてしまひましたのよ。只今メシナから手紙が參りまして、兄がかう云つて寄越したのです。私の持物を全部賣るか質に入れるかして、一週間内に千グルデンだけ是非送つてくれ、萬一それが出來なければ、兄の命はないものと思つてくれだと。それだけのお金を即座に拵へろつたつて、本當に困つてしまひますわ。いえ、これがせめて二週間の時日がありさへすれば、或所からそれを取寄せることも出來ます、それ以上のお金が手に入ることになつてゐますから。それが達へば、持つてゐる地面を賣ることも出來ますわ。けれども、どつちも今の間には合ひませんものね。こんな悲しい知らせを聞くよりは、いつそ死んだ方が優しで御座んすわねえ。」かう云つてからも、彼女は悲しくて耐らないやうに、おい〳〵泣きつゞけました。

戀に眼の眩んでゐたサラバエットは、その涙を眞實と思ひ、その言葉を一層眞實なものと思ひましたので、「千グ

ルデンとは行きませんが、五百グルデンだけなら御用立してもよう御座いますよ」と云ひ出しました。「もし二週間内に返して頂くことが出來さへしますればね。が、これも貴方には勿怪の幸ひといふもので、やつと昨日倉庫の織物が賣れたから持つてゐるやうなものゝ、さうでなかつたら、一文だつてお間に合せることは出來なかつたんですよ。」

「まあ」と、女は申しました、「それでは貴方もお金に困つていらしつたんですね？　何故さうならさうと仰しやつて下さらなかつたのです？　千と纏つたものは御座いませんが、百や二百なら何時でもお立替へすることが出來たんですのにねえ。これぢや、只今仰しやつて下さいました御助力も甘んじてお受けすることは出來ませんわ。」

この言葉にいよ〳〵籠絡されてしまつたサラバエットは更に申しました。「それだからと云つて、私の好意を無下に斥けるにも及びますまい。今の貴方のやうに困つたら、私だつて御無心を申出なかつたとは限りませんからね。」

「まあ、サラバエット樣」と、女は申しました。「今こそ本當に貴方のお心が分りました。貴方は眞實心から私を愛してゐて下さるんですわねえ。お願ひもしないうちに、こんなに莫大なお金を出して、この急場を救つて下さらうといふのですもの。本當にさうでなくつてさへ、私は貴方のものでした。これからは尙のこと貴方のものになりますわ。

そして、兄の命の恩人だといふことは決して忘れはしません。でも、貴方が商人でいらつしやる、商人といふものは商賣のためにお金の要るものだといふことを考へますと平氣でそのお金を受取るわけには行きませんわ。たゞ差迫つた場合ですし、早速お返しする宛もあることですから、少時お借りして置くことに致しまして、萬一早速お返しが出來ませんやうな場合には、その御立替へに對して持物を全部抵當にしてお預けすることに致しませう。」かう云つて、彼女は泣き〳〵サラバエットの首の周りに伏し沈みました。

サラバエットはいろ〳〵と女を慰めました。そして、一夜を彼女の許で明した後、自分が氣前のいゝ忠僕であることを飽く迄見せて置かうといふ腹で、更めて女から要求されるのを待たないで、五百グルデンの金貨を相手に渡しました。女は心の中に嘲笑ひながら、目には涙を見せてそれを受取りました。サラバエットはそれに對してたゞの口約で滿足したのですね。

金を受取つてしまふと、サラバエットと女との交渉は急に新しい暦に移りました。それ迄は女の家への出入りも彼の意のまゝに許されてゐましたが、今はさま〴〵な故障が入つて、やつと七度に一度の面會を許されるのが關の山になりました。しかももう以前のやうな歡迎も、情愛も、歡

喜も再び見られませんでした。

そのうちに金を返して貰ふべき期日が遣つて來たばかりでなく、疾うに一箇月も二箇月も過ぎ去りました。が、催促しても、お世辭を並べるだけで、金は一文も返してくれないのですね。そこでさすがのサラバエットも狡猾な女の奸策に氣が附いて、今更のやうに自分の愚を認めずにはゐられませんでした。同時に、この事に關しては、女の方にその意志がなければ、こちらに手の出しやうのないことも分りました。證書も取つてなければ立會つた證人とてもないからですね。さればと云つて、他人に愚痴を零すことも恥づかしくて出來ませんでした。と云ふのは、前以て警告されてゐたことでもあるし、從つて自分の愚に相當した嘲笑を買ふに過ぎなかつたからですね。ですから、彼はもう一人で身の不明を嘆き悲しむ外ありませんでした。そのうちに出屋敷からは代金を爲替にして送るやうに矢の催促で御座います。と云つて、送る金はなし、かうなれば自分の失錯が世間に曝れないやうにするためには、急いで出發する外ないと決心しました。で、小船に乘つて、行くべき筈のピザには向はないで、ナポリを指して出帆しました。

その頃ナポリにはフローレンス人のピエトロ・デロ・カニジアノがコンスタンチノブルの女帝の會計官となつて滯在してゐました。智慧もあれば鋭い洞察力にも富んだ人でサラバエットやその一族の友人でありました。サラバエットは二三日經つてからこの賴母しい人に自分の所業や、身に降りかゝつた不幸を打明けました、二度と再びフローレンスへは歸らない積りだが、この市で生計の道を立てるには何うしたものだらうか、一つ相談に乘つて貰ひたいと賴みました。

カニジアノはこの話に面を曇らせて、かう申しました。

「どうも拙かつたね、確に君の失策だ、勤めを粗略にした責めは免れないね。遊興のためとしては、あんまり一度に金を使ひ過ぎたよ。處で、何うしたものだらうね？　出來たことは今更仕方がないとして、これは一つ變つた策を考へ出すことだね。」

根が智謀に長けた人だけに、彼は直ぐさま然るべき方法を案じて、それをサラバエットに授けました。サラバエットは成程と思ひまして、早速運を試す準備に取りかゝりました。まだ手許に幾分の金を剩してゐましたが、なほカニジアノからも若干を借り入れました。そこで澤山の梱を拵へ上げて、十分に綱や紐を懸け、他に二十個許りの油樽を買つて、それには何かを一杯詰めました。かうして一切を船に積み込んだ後、荷物と一緒に再びバレルモへ遣つて參りました。こゝで梱の明細書と樽の價格表を稅關吏に交附して、一切を自分の信用狀として登記して貰つた上、荷物

を倉庫に納めました。それから商人どもに向つては、後から來る筈の商品が到着するまでは、この品には手を附けないつもりだと云ひ觸らしました。

例のジャンコフイオレもこの噂を耳にしました。それに、現在持つて來た商品だけでも既に二千グルデン以上の價格であることを聞き込んで、(後から來る筈の荷物、それが三千グルデル以上のものであることは論外に措いても、)彼女には、何うやら自分がやつと一本の貧乏籤を引き當てたに過ぎないやうに思はれました。そこで先に借りた五百グルデンを返却して、その代りに五千グルデンを奪つてやらうと決心したのですね。で、早速彼の許へ使者を立てました。

サラバエットも今ではすつかり悧巧になつてゐましたが、直ぐに遣つて參りました。女は、彼が持つて來た商品のことなどは少しも知らない振りをして、滿面に笑みを浮べながら、かう申しました。「期日にお金をお返ししませんで、さぞ御立腹になつたことで御座いませうね？」

すると、サラバエットは笑ひながらそれに答へました。

「いや、眞個少しは腹立ちましたよ。これがお氣に召すとさへ思へば、心臓でも抉り出して差上げたい位に思つてゐた處ですからね。處で、どんなに怒つたかは只今申上げますがね、私は貴方が戀しさに故郷へ歸つて持地の大部分を賣り拂つてしまひました。そして、二千グルデン以上の商品を仕入れて持つて來ましたよ。その上西の方から今に三千グルデン以上の品物が來る筈です。そこでこの市に倉庫を立てまして、永久に貴方の側で暮す覺悟を定めました。だつて、貴方にさへ愛して頂ければ、私はこの世のどんな戀人よりも遙に幸福を感じ得るのですからね。」

それを聞いて、女は申しました。「まあ、サラバエット樣、貴方のお氣に入ることなら、何でもうれしう御座いますわ。本當に私は自分の命よりも貴方を愛してゐるのですからね。殊に貴方が此處で住むつもりでお歸りになつたと承はつて、こんな嬉しいことはありませんわ。これからは何時でも御一緒に樂しい目を見ることが出來るんですものね。處で、この前お立ちになる前に二三度お訪ね下さいました時、無駄足をおさせ申したり、さうでない場合にも、毎ものやうに愉快にお遇ひしなかつたり、別してお約束の期日にお金をお返ししなかつたりしたことに就きましては、更めてお詫び申上げますわ。でも、これだけは承知して置いて頂きたいのですがねえ、あの當時私は本當に可厭な悲しい思ひに閉されてゐましたので、能しもさうした氣分でをりますと、戀しい方に對してさへ、よし心ではどんなに愛してゐるにしましても、さう〳〵毎も機嫌のいゝ顏ばかりはしてゐられませんし、先樣のお氣に入るやうに、萬事に氣を配ることも出來ないもので御座いますのよ。それから

又女の身で千グルデンのお金を拵へるといふことは並大抵ぢや御座いませんわ。世間樣ぢや每も私達に嘘ばかり吐いて、約束したことは一向守つて下さらないのですものね。ですから、私達の方でも已むを得ず人樣に嘘を申上げるやうになりますわ。お金をお返ししなかつたのもかうした譯があつたからで、決して他に了簡があつたのでは御座いませんの。それでもお立ちになつてから間もなくお金の調達が出來ましたので、お送りする所が分つてさへをれば、すぐにもお屆けするのでしたが、生憎それも分りませんでしたので、只今までお預りして置いたやうな次第ですわ。」

かう云つてから、女は借りただけの金の入つた財布を持つて來させで、それを男の手に渡しながら、「五百グルデンあるか、どうぞお調べ下さいませ」と申しました。

サラバエットは嬉しくて耐りませんでした。が、色にも見せないで、その金を勘定して見ると、確に五百グルデンありました。で、それをポケットに入れて、かう申しました。

「仰しやる通り五百グルデンあります。いろ〳〵とお手數でしたね。そこで申上げますが、このお禮として、一つには又私が貴方に對して抱いてゐる愛情のために、今後何かの理由で御入用のあつた場合には、私の手で出來るだけの金額でしたら、何時でも御用立てることに致しますわい。これが口先だけでないことは御自身でお試しになれば宜しう御座いますよ。」

かうして言葉の上では以前の愛が復活しましたので、サラバエットは更めてその女と親しく交はるやうになりました。女の方でも亦以前の通りに彼を喜ばせ、彼に好意を表して、あらむ限りの情愛を見せました。

が、サラバエットには女の詐欺を詐欺で復讐しようといふ腹がありましたので、或日使者が來て、一緒に食事をした上、一晩ゆつくりしてくれと傳へました時、時こそよけれと、今にも絶え入るかと思はれる程陰慘な、悲しさうな顏つきをして女の前に現れました。

ジャンコフイオレは、男の首に兩腕を捲いて接吻しながら、何うしてそんな容子をしてゐるのかと訊ねました。

長い間、相手にだけ物を云はせて置いてから、彼はやうやう口を切りました。「私はもう駄目です。待つてゐた商品を積んだ船がモナコの海賊に捕まつたのですよ。それを返して貰ふには一萬二千グルデンの金が要つて、そのうち私は千グルデンだけ出せばいゝのですがね、私は今一文の錢も持つてゐないのです。返して頂いた五百グルデンは、早速ナポリへ送つて、こつちへ積荷して貰ふ筈のリンネルの仕入れに充てましたからね。それで、今こゝに持つてゐる品を手放すにしましても、恰度時機が悪いので、あの二種の商品に對して殆ど一文も手に入らないのですよ。と云つ

て、この急場を救つてくれるやうな人を見附けるには、まだそれ程交際が廣くないでせう。そんな譯で、全く途方に暮れてしまひました。が、早く金を送らなければ、商品はモナコへ持つて行かれて、取返しの附かないことになつてしまひますしね。」

女はこの話を聞いて落膽してしまひました。相手の損は同時に自分の損に外ならないと思つたからですね。で、兎に角商品をモナコへ持つて行かれないやうにするのが肝腎だと思ひまして、かう申しました。「まあ、飛んだことになりましたわねえ。ですが、こゝで泣言を云つてゐても始まりませんわ。わたしにお金が御座いましたら、勿論すぐにでも御用立てる處なんですがねえ、生憎只今は一文も持合せが御座いませんの。でも、何時ぞや困つた時に五百グルデン許り用立てて貰つた方があるんですがねえ、たゞ利子が無暗に高う御座いまして、百グルデンに對して少なくとも三十グルデンくれと云ふのですのよ。それに、いよ〳〵借りようといふ場合には、擔保も入れなければなりませんの。勿論、貴方のためとあれば、私の持物一切と私の身柄とを擔保にすることは少しも厭ひませんがねえ。それだけでは足りないでせうから、他に何か擔保にするやうなものが貴方の方に御座いませんの？」

サラバエットは女がこんなに親切にしてくれる譯を容易に看破しました。從つて又その金が彼女自身の財布から出るものだといふ事もちやんと悟りました。これこそ彼の思ふ壺で御座いました。で、先づ相手にその好意を感謝してから、目下の窮厄に際しては不當の利子も敢て厭ふ處ではないと斷言した上、更にかう添け加へました。現在倉庫に預けてある商品を擔保として、その金を出してくれる人の名義に書き換へさせよう。併し倉庫の鍵は自分が握つてゐたい。といふのは、必要な場合に、誰にでも商品を見せることが出來るためと、もう一つは商品が搔き廻されたり摺り換へられたりするのを防ぐためだといふので御座いました。

女は、それで結構だ、擔保もそれなら十分だらうと申しました。そして、翌日になりますと、かねて信用してゐる仲買人に來て貰つて、右の一件をよく談合した上、千グルデンの金を託しました。仲買人はその金を早速サラバエットに渡して、稅關で同人所有の商品を悉く自分の名義に書き換へさせました。なほ二人は相互の諒解の下に譲渡證書と返り證書とを交換して、それ〴〵志す方へ立ち別れました。

サラバエットは船のあり次第千五百グルデンの金を持つて大急ぎでナポリのピエトロ・デロ・カニジアノの許に歸つて參りました。そして、そこからフローレンスの問屋筋に對して立派に清算致しました。次にピエトロその他金を立替へて貰つた人々にそれ〴〵返濟した上、シシリイ女を騙して持つて來た金でピエトロと散々面白い日を送りました。彼は最早商人でゐる氣はなくなりましたので、ナポリからフェララの方へ行きました。

サラバエットがパレルモにゐなくなりますと、ジャンコフイオレはどうも可異しいなと思つて、だん〴〵疑念を抱くやうになりました。二箇月程待つて見ましたが、一向男が歸つて參りませんので、仲買人にさう云つて倉庫の戸を破つて中の品を檢べさせました、處が、油が入つてゐると思つた樽には、海水が一杯詰つてゐて、どの樽も上部の口の所にほんの少量の油が浮いてゐるだけで御座いました。それから櫃を開けて見ると、二つだけは織物が入つてゐましたが、殘りは全部麻屑が詰めてありました。要するに、悉皆で二百グルデン以上には出ない代物でした。

かうなつては、ジャンコフイオレも一杯喰はされたと思ふ外ありませんので、長い間返してしまつた五百グルデンを惜しがりました。が、貸して遣つた千グルデンは尙更惜しくて耐らないので、人の顏さへ見れば「フローレンス人を相手にするなら、兩方の眼でよく見てゐるのが肝心だよ」と云ひ〳〵しました。かうして彼女は損害と嘲笑とを同時に招きましたが、世の中にさう馬鹿ばかりはゐないといふことに始めて氣が附いたので御座います。

さてデイオネオの話も濟みましたので、ラウレッタは、最早自分の支配すべき期限の切れたことを知りました。で、ピエトロ・カニジアノの優れた計略や、その計略を實行する上に同じく巧みであつたサラバエットの狡智を褒めてから、月桂冠を取つて、それをエミリアの額に加へました。そして、しとやかにかう申しました。「貴方がどんな女王におなりなさるか、それは分り兼ねますけれども、美しい女王でいらつしやることだけは確實で御座います。どうか萬事貴方の美に應はしいやうに遊ばして頂きませう。」かう云つて、彼女は再び席に着きました。

エミリアは、女王に擧げられたといふことよりも、何よりも女の欲しがつてゐるものを衆人の前で褒められたといふので少し照れて、恰度朝日を受けた薔薇のやうに顏の色を染めました。で、暫く眼を伏せたまゝその紅が消えるのを待つてゐましたが、一同のために執るべき處置について先づ執事と相談をした上、次のやうに申しました。——

「皆樣、御承知のやうに、牡牛は一日の間軛に繋がれて働くと、夕方に軛から放たれて、思ふさま自由に草を追うて原の中を歩き廻ることを許されてゐるので御座います。私達は又取り〳〵の立木で色取られた庭園を樅ばかりの丘と同じやうに、いや、それより以上に美しいとも思ふもので御座います。かうした理由からしまして、既に幾日間も規

定に縛られて話題を選んで來たことを考へますと、同じやうに自由な漫歩きを渇望してやまない人間としまして、再び軛に堪へる力を自由の裡に集積して置くためにも、かうした自由は必要であるばかりでなく、又至極望ましいことでもあるやうに思はれます。そこで私は、明日して頂く皆樣の面白いお話を一定の題目の下に制限しないで、いつそ御銘々のお氣に召したことを話して頂きたいと思ふので御座います。と申しますのは、お話しになる對象の種々多樣であることは、同一の題目に據るお話に劣らず面白いものであると固く信じてゐるからで御座いますね。それに、さう致しますと、私の後に支配者となられます方が、何誰にいたしましても、新しく元氣づいて私達を一層確實に在來の規則に縛ることがお出來になるかとも存じますわ。」

次いで女王は一同に夕食迄の休暇を與へました。一同は賢明で分別に富んだ女王の見識に感心しました。そして、席を立つと、思ひ〳〵に好きな娯樂に耽りました。淑女達は花輪を編むとか、その他いろ〳〵な消閑に、又男達は將棋を指すとか、歌を唄ふとかして、食事迄の時間を費しました。

その時になりますと一同は美しい噴水の傍で愉快に食事を摂りました、食事後は例によつて、それ〴〵心行く迄唄と舞踊とに耽りました。が、暫くすると、女王は前任者の例を踏襲しまして、まだ唄ひ足りない樣な顏をしてる連中に構はず、パムフイロに向つて、一人で歌を唄ふやうに命じました。パムフイロは直ぐ樣次のやうに唄ひ始めました。——

戀神よ、汝の與ふる幸福と、
苦勞甲斐ある樂しさのいと大なれば、この我も
戀の焔に燃えてうれしも。

わが内に溢れ漲る喜びと、
汝より享くる大歡喜、
共に水嵩のいや增して、
隈すよすがも今はなく、
顏に照り映ふその曙光、
わが歡喜をば告り知らす。
戀の惱みにわが胸の
傷つくことの憂たてければ、
燃ゆるがまゝに燃えてあらなむ。

戀神よ、胸の内なるわが歡喜
歌にて告ぐる術もなく、
指もて示す道もなし、
さるにても、云ふに云はれぬわが祕密、
世の人それを知らむには
歡喜も遂に戲れぞ。
胸に溢るゝわが歡喜、

言葉も筆に及ばねば、
よし燃ゆるとも、人に云はじな。

嘗て抱きしかのものを
再び抱く日あらんと
誰か想はん、神ならぬ身の！
腕に抱きしかのものに
わが唇よ、溫まれ、
そこに溢るゝ大歡喜、
傷も痛みも癒えでやは、
そこに流るゝ無限の幸、
衣の下に隱してあれば、
われ燃ゆるとも、人は知らじな。

パムフイロの歌は終りました。一同はそれに相和して唄ひましたが、その中から歌詞に留意して、パムフイロが隱さなければならないと歌つたのは何のことだらうと、おせつかいにも、そんな詮索を始めました。そして、いろ〳〵な當推量をして見ましたが、結局何人もその眞相を摑むことは出來ませんでした。

で、パムフイロの歌が終りますと、男も女も遊び疲れたやうに見えましたので、女王は各自退いて寢に就くやうに命を下しました。

第九日

夜を追ひやる日光は早くも九日目の暗青色の空を明るい色に染め換へました。草原では、小さな花も既に首を擡げ初めました。女王エミリアはいそ〳〵と床を出て、仲間の男女を喚び起しました。

で、一同が揃ひますと、女王の案内で、邸から程遠からぬ小さな森を指して、緩やかに歩いて參りました。そこへ這入つて行きますと、小鹿だの鹿だの、その他さま〴〵な獸類が、恐ろしい疫病の流行する際とて、獵師に追はれる氣遣ひもありませんので、少しも怖がらないで、すつかり人に馴れたやうな樣子で一同を迎へました。一同はそれを捕へようとでもするやうに獸の側へ寄つて行つたり、こちらのそれに近づいたりして、それを走らせたり駈け出させたりして、しばらくの間樂しく遊んでゐました。

そのうちにだん〳〵陽脚も高くなつて、そろ〳〵歸邸の時刻になりました。歸りには、一人殘らず桝の葉を頭につけて、手には芳はしい藥草やら草花やらを一杯持つて歸りました。で、この樣子を見た者は、誰しもこの人達が死と戰つて敗れず、死に囚はれてなほその快活を失はざるものと思はずにはゐられなかつたことでせう。こんな風に、一同は呑氣に散歩しながら、歌ひながら、又喋舌つたり巫山戲たりしながら、館に歸り着きました。館では既に一切の準備が出來て、召使どもは愉快さうに彼等を迎へました。しばらく休息してから。若い男女は一つは一つとだん〳〵その面白さを增して行く歌を六つまで唄ひましたが、それから食卓に就きました。唄が濟むと、手洗ひ水が運ばれ、女王の命に從つて執事が一同の席を定めました、やがて食べ物が運ばれまして、一同は樂しさうに食事にかゝりました。

食卓を離れますと、一同は暫時の間再び合唱やら遊戲やらに耽りました。その後は、女王の命令によつて、休みたい者は勝手に休むことになりました。が、定刻になりますと、一人殘らず毎もの場所に集まつて、今日の物語に移りました。女王はフイロメーラに眼くばせをして、話の先陣を命じました。フイロメーラは次の樣に話しはじめました。——

第一話

フランツエスカ夫人はリヌッツイオとアレッサンドロとの二人に戀ひ慕はれたが、いづれをも愛しかねたので、一人を死人に代つて墓に行かせ、今一人にそれを墓より引き出すことを命じた上、二人とも命を果し得なかつたのを口實にして、うまく厄介拂ひをする話。

女王陛下、陛下の寛大なお心から私どもにお與へ下さいました宏大無邊の題材に基いて、陛下の命に從ひ、かうして話の先陣を承はると共に、第一人者として今日の道を拓くといふことは私にとりまして誠に少からぬ喜びで御座います。で、首尾よくこの任を果しませうなら、私の後に續く皆樣も、屹度私同樣に、いゝえ、私以上に見事なお話をなさいますことでせうと、私は信じて疑はないので御座います。

これ迄のお話にも、戀の力といふものがどんなに偉大で、どんな種類のものであるかと云ふことは、幾度となく語られました。けれども、私はそれに依つてこの問題がすつかり論じ盡されたものとは思ひません。それ處か、假に今度一年以上そればかり話されたとしましても、まだ〳〵そんな事で盡されようとは思はないので御座います。一體この戀の力といふものは、戀する者を往々にしてさま〴〵な危難に遭遇せしめるばかりでなく、時には死人となつて墓に下ることをも餘儀なくせしめるもので御座いますからして、それに就いて一つのお話を申上げて、戀の力ばかりでなく、それに絡んだ計略を、皆さんに知つて頂きたいと存じます。その計略と申しますのは、或尊敬すべき婦人がいやだと云ふのになほ追ひかけて來る二人の戀人の厄介拂ひをするために、已むを得ず用ひたものなので御座います。

昔ピストイヤの町に素敵な美人の未亡人が住んで居りました。すると、フローレンスから追放せられてその市に住んでゐましたフローレンス人で、一人は名をリヌッツイオ・パラレルミニ、又一人はアレッサンドロ・キアンノンテシといふ二人の男が、烈しくこの婦人を戀するやうになりました。二人とも未亡人の魅力にすつかり致されまして、互ひに戀敵のあるとも知らず、只管未亡人の愛を得ようとして、懸命の努力を續けたもので御座います。そんな譯で、名をデ・ラッツアリと申しましたこの未亡人は、絶えず二人からの言傳てや申込みに惱まされてゐました。殊に不注意にも、時たま一寸彼等の言葉に耳を藉したことがありましたので、身を引かうと思ひつゝ、どうしても巧く行かないで困つてをりました。處が、不圖、いゝ厄介拂ひの工夫が思ひ浮んだのですね。工夫といふのは外でもありません、出來ないことではないにしても、相手の厭がりさうな仕事をそれ〴〵二人に命じて、もしそれを實行しなかつた曉には、それを理由に正々堂々と彼等の申込みを拒絶しようといふので御座います。

處で、その具體案は次のやうなものでした。恰度未亡人がこの計畫を想ひ着いた日に、ピストイヤの町で或男が死にましたが、その男の先祖はもと〳〵貴族でしたが、當の

本人は實にピストイヤの町ばかりか、世界中で最も下劣な人間として通つてゐました。その上不具で、顔つきも醜惡を極めてをりましたので、初めてこの男を見た人は誰しも吃驚して逃げ出す位でした。處で、その亡骸は小同胞團の教會の前にある墓に葬られましたが、未亡人にはそれが自分の計畫にとつて誠に好都合のやうに思はれたので御座いますね。そこで召使の一人を喚んで、かう申しました。——

「お前も知つての通り、私は毎日あのリヌッツイオとアレッサンドロといふ二人のフローレンス人の求婚にはほとほと弱り切つてゐるんだよ。まさかあんな人達を愛する氣にもなれないからね。そこでその厄介拂ひをしたいのでね、あの人達がいくら一生懸命になつてゐても、迚も遣る氣にはなれないやうな事柄をこちらから云ひ出して、日頃の口幅つたい言分を試して遣らうと思ふのさ、これでまあ、私もやつと肩の荷が卸りようといふものだわ。處で、その遣り方なんだがね、お前も知つてゐるでせうが、この町の隨分氣の強い人達でも怖がつてゐたあのスカンナデイオ（先に申しました下劣漢はかういふ名前で御座いました）が小同胞團の墓地に葬られましたね。そこで先づそつとアレッサンドロの許へ行つて、かう云つておくれな、『フランチエスカ奥樣のお使ひで參りましたが、實は貴方樣が永い間望んでいらしつた奥樣の愛を手に入れる時がとう〳〵遣つて參りましたのですよ。で、もしお宜しかつたら、かういふやうにして奥樣とお逢ひになることが出來ますわ。後になればお分りになることですがね、或事情に依つて、今朝程埋葬されたあのスカンナデイオの死骸を奥樣の御親類の方が今夜奥樣のお宅へ持つて入らつしやることになつてゐるんですよ。處が、奥樣は怖いので、そんな死骸など持ち込まれては困ると仰しやるので御座います。就きましては、貴方も御迷惑でせうが、今晩宵のうちにスカンナデイオのお墓へお這入りになつて、あの男の着物を着て、死骸になつた積りで、誰かが貴方を連れ出しに來るまで靜に待つてゐて下さいまして、それから一語も口を利いたり聲を立てたりなさらないで、大人しく奥樣のお宅まで運ばれて來て頂きたいので御座います。さうすれば、奥樣も歡んで貴方をお迎へなさいませうし、貴方はまた奥樣の許で勝手にお遊びになつた上、お氣に召した時にお歸りになれば宜しいのですわ。尤も、その後は一切奥樣にお委せになつても、そこは宜しく遣つて下さいますよ』と。そして、先方でそれを引請けようと云ふんなら、それでいゝのだがね、若しもそんな事は出來ないといふ返辭だつたら、私からの言傳てだと云つて、今後私の許へは一切姿を見せないやうにして貰ひたい、命が惜しければ、もう使者を寄越したり、言ひ寄つたりすることは一切止めて貰ひたいと、かうきつぱりと云つて來てお呉れな。

「それからお前はもう一度リヌッツイオ・パレルミニさんの許へ行つてくれるんだよ。そして、かう云つてお呉れな、『フランチエスカ奥樣のお言葉で御座いますが、御迷惑でも一つこの面倒を見て頂けるやうでしたら、奥樣もかねてのお望みを叶へて差上げる覺悟をしていらつしやいます。御面倒と申しますのは、今晩の眞夜半に、今朝程スカンナデイオを葬つた墓地へ入らして、どんな事があつても默つて一語も口を利かないやうにして、あの亡骸を墓から曳き出して奥樣のお宅まで持つて來て頂きたいので御座います。奥樣の許へ入らして頂けば、何故こんな事をお願ひしたかも解りますし、又貴方のお望みも叶へて差上げるさうで御座います。でも、これがお可厭といふことでしたら、今後は使者や戀文など寄越すことは一切お廢めにして頂きたい』と。」

召使ひの女は二人の許へ參りまして、云はれた通りに傳へました。すると、二人はいづれも、夫人の思召しに適ふことでさへあれば、墓は愚か地獄の底へ行くことも敢て厭ふ處ではないなどと申しました。この返答を持つて歸りますと、女主人は、果してこんな事までする程、二人が心から馬鹿かどうか見てゐてやらうと云ふので、待ち構へてゐました。

で、夜に入つて、人の寢鎭まつた頃になりますと、アレッサンドロ・キアンノンテシはスカンナデイオの身代りになつて墓の中に寢てゐようといふので、下着一枚になつて家を出掛けました。處が、途中でだん〳〵怖くなつて參りましたので、かう心に思案し始めました。「あゝ、俺は何といふ馬鹿だらう！　一體何處へ行かうといふのだ？　あの女の親戚の者といふのは、屹度俺があの女に思ひを懸けてゐることに氣が附いて、同時に何か思ひ違ひをして、俺を墓の中で殺さうといふので、こんな事をあの女に云はせるやうに仕組んだのかも知れない。そんな事にでもなれば、馬鹿を見るのは俺だけで、一言だつて世間に訴へることは出來ないのだから、相手は澄ましてゐられるわけだ。それとも、誰か俺の敵がこんな事をたくらんで、あの女がその男に參つてゐる處から、これで御奉公をしようと云ふのではないかな。」それから更にかう申しました。「縱しや又そんな事は全然ないとして、本當にあの女の親類が俺をあの女の家に持つて行くとした處で、親類の者がそんなスカンナデイオの死骸なぞを抱きたがつてゐるとか、あの女に抱かせたがつてゐるとかいふのは、どうも可異しな話ぢやないか。實際あの死骸を欲しがつてゐるとすれば、そんな事よりも、恐らく生前彼等に對して何か不都合を働いたといふので、その死骸に侮辱でも加へようといふのぢやないか

な。どうもさうらしいぞ。あの女の云ふ處では、何んな事があつても聲を立ててはならないといふのだが、若し相手が俺の兩眼を刳り拔くとか、齒を引つこ拔くとか、腕を切るとか、とにかくそんな事を仕懸けて來たとしたら、一體俺は何うすりやいゝんだ？　そこで口でも利かうものなら、すぐに俺だといふことが分つて、飛んだ痛い目に逢ふに相違ない。よし何もしないとした處で、俺は一文の德にもなりはしないのだ。だつて、親類の者は俺をその儘あの女の許へ行かせてはくれないだらうし、あの女自身は俺がその命令に反いたといふので、屹度俺の望みを叶へてはくれないだらうからな。」

こんな風に獨語を云ひながら、彼はずんでのことに家へ歸つてしまふ處でした。けれども、戀の力は又格別なもので、いろ〳〵と反對の理由を持ち出して、彼を前方へ驅り立てて、とう〳〵墓場まで連れて來てしまひました。アレッサンドロは墓の扉を開けて、その中へ這入りまして、スカンナデイオの衣を剝いで、自分でそれを着込んだ上、今度は内から扉を閉ざしました。かうしてスカンナデイオの身代りになつて寢ころびながらも、彼はこの佛が生前どんな男であつたかといふことを考へ始めました。すると、死人の墓ばかりでなく、その他到る所で起つた夜の怪事で、それまで話で聞いてゐたさま〳〵なことが想ひ出されまして、だん〳〵身の毛が竦立つばかりか、今にもスカンナデイオが立ち上つて、喉笛を咬み切りに來るやうな氣がして參りました。が、燃えさかる戀の一心は彼に勇氣を添へて、かうした恐ろしい一切の妄想に打ち勝たせて呉れたのですね。彼は宛然死人のやうに靜に寢ころんだまゝ、今に何うなるだらうと、そればかり心待ちに待つてゐました。

處で、夜半近くになりますと、リヌッツイオも亦夫人に頼まれたことを果さうといふので、家を出掛けました。が、歩いてゐるうちに、こんな事をして、何か恐ろしいことが身に降りかゝりはしなからうかと、絶えずいろんな想像が浮んで來ました。例へば、スカンナデイオの死骸を擔いだまゝ役人に捕まつて、魔法使として火焙りになりはしまいかとか、若しもこの事が世間に知れたら、スカンナデイオの親類どもから怨みを買ひはせぬかとかいつたやうな、いろいろな考へが起つて來まして、幾たびかそこへ立ち往生をしさうになつたのですね。が、急に又思ひ直して、かう獨語を申しました、「何だと！　あんなに迄愛し續けて來て、今も變らず愛してゐるあの夫人が要求する最初の事を俺が斷つていゝものかい。殊にそれさへすれば色よい返辭がして貰へようといふこの場に臨んでだよ。さうだ、假令そのために死ぬやうなことがあつても、一旦約束したことを果さずには措かれまい。」

で、彼はなほ前進をつゞけて、とう〳〵その墓に着きました。押して見ると、扉は容易に開きました。アレッサンドロは扉の開く音を聞くと、堪らない程恐ろしくなつて來ましたけれども、じつと我慢して默つてゐました。リヌッツイオは中へ這入るや、スカンナデイオの死骸だと思つて、いきなりアレッサンドロの兩脚を掴んで引き出しました。そして、肩に引擔ぐと、夫人の家を指して、大急ぎで駈け出しました。かうして歩くに夢中で、他は一切眼中にありませんでしたので、背に負つたアレッサンドロを街の兩側にあるベンチに絶えず打ちつけました。それと云ふのも、夜か眞暗で、何處を歩いてゐるのかその見當さへ着かない位であつたからで御座います。

かうしてリヌッツイオは兎も角も未亡人の戸口まで辿り着きました。夫人は先程から女中と一緒に窓際に立つて、リヌッツイオがアレッサンドロを擔いで來るかどうかと耳を澄ませながら、二人を追擲ふ手段を腹の中で準備してゐました。恰度その時市の巡察隊も追放者を捕へるために街上に屯して、靜かに待ち構へてゐましたが、そこへリヌッツイオの足音が聞えて來たので御座いますね。で、急いで灯を取り出しまして、どういふ處置を取つて、どの方角へ向つたらいゝかを見定めようとしました。そして、槍だの楯だのを響かせながら、「何者だ？」と叱鳴りつけました。

リヌッツイオは巡察隊の姿を見ると、前後の考へもなく、アレッサンドロをその場に投げ出したまゝ、脚に任せて逃げ出しました。一方、アレッサンドロも、素早く飛び立つて、長い經帷子を着けたまゝ、これ亦一目散に逃げ去りました。

未亡人は巡察隊の手にした燈火で、リヌッツイオがアレッサンドロを擔いでゐたのも見ましたし、同時にアレッサンドロがスカンナデイオの經帷子を着けてゐたことも分りましたので、戀する男の大膽さに驚からず驚嘆しました。驚嘆はしましたものゝ、それでもリヌッツイオがアレッサンドロを投げ出して、二人とも一目散に逃げ出したのを見ては、思はず聲を上げて笑はずにはゐられませんでした。が、夫人としてはこの結果が心から嬉しう御座いました。そこで天が厄介な男達の手から自分を解放して呉れたことを感謝しながら、部屋に引返しました。そして、女中に向つて、目のあたり見た通りに、こちらで頼んだことをその儘遣つて退けたのだから、二人ともよく〳〵自分を慕つてゐて呉れるのだらうと申しました。

リヌッツイオは殘念で堪らないので、身の不運を呪ひながらも、家には歸らないで、巡察隊の姿が見えなくなると、先程アレッサンドロを投げ出した所へ歸つて參りまして、飽く迄云はれたことを仕遂げようといふ了簡で、そこらを

手探りに探つて見ました。が、肝心の死骸はどうしても見附かりませんので、多分、巡察隊が持つて行つたものだらうと思ひながら、がつかりして自宅へ歸つて行きました。

アレッサンドロも他に仕様もありませんでしたし、それに自分を此處まで運んで來たものが誰だといふことも一向分りませんでしたので、これも同じく身の不運を嘆きながら、わが家を指して引き返しました。

明くる朝型の如くスカンナデイオの墓を開けて見ると、死骸は前の晩アレッサンドロが墓窖の中に投げ込みましたので、そこらに見當らなかつた處から、ピストイヤの市ではいろ〳〵な噂が立ちまして、馬鹿な人達は惡魔が死骸を持つて行つたのだなどと申しました。それにも拘らず、例の戀する男達は、いづれも人を介して、自分達のしたことやら、その間に起つた邪魔やらを未亡人に話して貰つた上、それを理由として、よし彼女の委託は完全に果されなかつたとしても、どうか約束通り色よい返辭をして貰ひたいと申込みました。が、未亡人は、そんな事は全然信ぜられないといつたやうな顏をして、こちらの願ひを果して呉れなかつたのだから、自分の方でも彼等に負ふ處はない筈だと、きつぱり申しまして、たうとう二人の厄介拂ひをいたしました。

第二話

或尼寺の院主、尼僧どもの密告によつて、戀人の寢室を共にせる尼僧を襲はんとしたが、院主も同じく戀人、而も司祭を自分の部屋に引き入れてゐたこととて、過つてヴェールの代りに司祭の股引を頂いて行く。密告された尼僧はそれに氣附いて、院主を詰つたために、その儘詐されて自由に戀人と樂しむことが出來た話。

フイロメーラは話しを終りました。厄介な戀人どもを追ひ拂つた未亡人の智略は一同の賞讃を博しましたが、二人の青年の勇敢さは、反對に、戀ではなうて、愚昧に外ならぬものと宣告されました。次いで女王がエリザに向つて、「どうぞお後をおつゞけ下さい」と申しました。エリザは直ぐさま次の如く語り始めました。——

愛する皆様、フランチエスカ夫人は、只今伺ひましたやうに、極めて賢明な方法で厄介拂ひをなさいました。處が、こゝに或若い尼僧はうまい機會を攝んで、戯談で身に迫る危險から巧みに免れることの出來たお話が御座います。御承知の通り、世の中には自分が馬鹿な癖に、平氣で他人を教へたり戒したりしようとする者が少なく御座いません。

勿論、これから申上げるお話でも分りますやうに運命はかうした人々を色々な方法で時々罰するものでは御座いますがね。このお話の中へ出て參ります若い尼僧を監督してゐた院主も、矢張りさうした目に逢つたので御座いますよ。

さて本題に入りますが、ロムバルディに敬虔と篤信とを以て聞えた、有名な修道院が御座いました。そこに澤山ゐました尼僧達のうちに貴族の出で、名をイザベッタと申しました、世にも美しい若い尼僧が御座いました。處が、或日のこと親戚の者が訪ねて參りましたので、自分で話し窓へ出ましたが、その時一緒に隨いて來てゐた一人の青年を見染めたので御座いますね。すると、男の方でも女の優れた美しさに氣を惹かれると共に、その眸の中に宿る戀心を讀み取つて、同じやうにこの尼僧に對して烈しい戀情を動かすに到りました。

雙方とも非常に苦しい思ひをしながら、お互ひに近づくことも出來ないで、二人は暫くの間この戀を忍んでゐました。けれども、二人とも逢ひたい見たいは山々で御座いましたので、青年はとう〳〵人知れず戀人の許に通ふ方法を發見しました。女もこれには心から滿足したのですね。で、青年は一度ならず女の許に通つて、互ひに逢瀬を樂しんでゐました。

これが暫く續いてゐましたが、或夜青年は女と別れて歸つて行くところを尼僧の一人に見られました。悪いことには、當人は少しもそれに氣が附かなかつたのですね。それを又その尼僧は他の尼僧達に漏らしました。最初一同は直ぐにも問題の女を院主のウシンバルダに訴へようと思ひました、元來この院主は尼僧達を始めとして、苟も彼女を知る程の人達から、極めて信心の深い賢婦人のやうに思はれてゐたのですからね。が、相談の結果、先づ問題の尼が青年と一緒にゐる現場を院主に見せて、それに依つて否應云はせないやうにしようといふことになりました。そこで一同はしばらく沈默を裝つて、内々時間割を定めて夜番に就いた上、二人の戀人を押へようと待ち構へてゐました。

そんな事とは一向知らないものですから、イザベッタはさして警戒しようともしないで、或晩又しても戀人を引き入れました。で、夜半過ぎになりました時、時分は好しと、一同は二手に分れて、半分はイザベッタの僧房を見守ると共に、他の半分は院主の寢臺に匐け着けて、その扉を叩きました。そして、院主の聲が中から聞えた時、一同はかう叫びました。「院主様、起きて下さいませ、早く來て下さいませ！　イザベッタが若い男を引き入れてゐるところを捕まへました！」

處が、恰度その夜院主も、從來屢々箱に入れて自分の許

へ連れて來させるやうにしてゐた司祭と一緒に樂しい時を過してゐました。で、室外の叫び聲を聞くと、尼僧達が熱心のあまりに、若しくは興奮し過ぎて入口を壞しやしないかと、それが心配になりましたので、急いで起き上つて、暗闇の中で手當り次第に法衣を着けはじめました。そして、尼僧の頭に頂くヴエールで、その仲間ではブサルテリウムと稱ばれてゐるものと間違へて、司祭の股引を掴みましたが、氣が急いてゐるものと間違へて、司祭の股引を掴みましたが、氣が急いてゐたので、その間違ひにも氣が附かずそれを冠つたまゝ、廊下に飛び出して、素早く入口の扉を締めながら、「一體、そんな神に呪はれた女は何處にゐるのです？」と叫びました。それから一同を連れて、問題の僧房に遣つて參りました。一同はイザベッタの現行犯を取押へようといふので、夢中になつてゐましたから、院主が何を冠つてゐようと全然氣が附かなかつたのですね。で、戸口に着くや、院主は一同と力を合せてその扉を叩き破つて、室内に闖入しました。見ると、二人の戀人は互に腕を組合せたまま、寢床の上に眠つてゐました。

二人はこの襲撃にすつかり狼狽して、何うしたものか見當も着かないので、その儘寢てゐました。が、イザベッタは忽ち尼僧達の手に捕へられて、院主の命令の下に集會所へ連れられて行きました。後に殘つた青年は、靜かに衣裳を着けてしまつて、若し尼僧達が何か戀人を手痛い目にでも逢はせようものなら、手當り次第に、あらゆる尼僧達に危害を加へた上、戀人を連れて立ち退かうと決心して、事の成行を待ち構へてゐました。

一方、院主は集會所の上段に席を占めた後、今なほ犯人だけに目を遣つてゐる尼僧達の面前で、嘗て女性に加へられた最もひどい惡罵を浴せながら、犯人はその猥らな破廉恥行爲に依つて、これがもし世間へ知れようものなら、この僧院の神聖、榮譽及び名聲の上に由々しい汚點を附ける處であつたと申しました上、更にこの罵倒に加へて嚴しい罰に附する旨を云ひ渡しました。イザベッタは罪を意識せる者のやうに、たゞもう恥ぢ入つて、おど〳〵しながら、返す言葉も知らぬげに默つてをりました。これには尼僧達も深く心を動かされました。

が、院主はなほも腹立たしさうに言葉をつゞけてゐました。その時イザベッタは偶と眼を上げましたが、院主の頭に頂いてゐるものに氣が附いて、首の右左に垂れ下つてゐる股引の紐に目を留めました。彼女にはそれが何であるかが分りましたので、至極物靜かにかう申しました。「院主樣、兎に角、先づその頭巾の紐をお締めになつてから、仰しやりたいことを仰しやつて頂きませう！」

院主はイザベッタの云つたことがよく分りませんでしたので、かう申しました。「何ですつて、この業曝し奴、頭巾の紐ですと！　お前はこの場に莅んでまだ戲談でも云ふ氣かえ、本當に惘れましたね！　あんな事を仕出來して置いて、よくそんな戲談が云はれたものだね？」

イザベッタはもう一度繰り返して申しました。「院主樣、私はたゞ頭巾の紐をお締め遊ばすやうにお願ひしただけで御座います。さう遊ばしてから、何なりと仰しやりたいことを仰しやつて頂きませう。」

こゝで始めて尼僧達の眼も院主の頭の上に向けられました。そして、院主が頭へ手を遣つた時には、何故イザベッタがあんな事を云つたのか、一同の者にも合點が行きました。

院主も自分の同じやうな罪過に氣が附きました上、一旦事が露顯したからには、今更隱し立てしても及ばないと悟りましたので、突然話頭を轉じて、今迄とは似てもつかないことに移りました。しかも肉の刺戟は防ぎ切れるものでないといふ言葉で話を結んだ上、誰に據らず、これ迄して來たやうに、何時でも内密でなら樂しい思ひをしても構はないゝと附け加へました。

かうしてイザベッタは赦されました。そして、院主は司祭の側に、イザベッタは戀人の側に歸つて行きました。若い尼僧はその後も屢々戀人を呼び寄せて、淡望に堪へない尼達の恨みを買ひました。が、それ迄戀人を持つてゐなかつた尼僧達も、さま〳〵な手段を講じて、密かに自らの幸福を求めるやうになりました。

第三話

醫師シモンは、ブルノ、ブフアルマッコ及びネロの依頼に應じて、カランドウリノに自ら姙娠せるものと思ひ込ませる。すると、カランドウリノはその治療のために、三人に鷄や金員を贈つて、終に分娩のことなく、再び健康を恢復する話。

エリザが話を終りますと、一同は若い尼僧が幸ひにも嫉妬深い尼達の迫害を免れたことを神に感謝しました。次いで女王はフイロストラートに向つて話しをつゞけるやうに命じました。フイロストラートは早速次のやうに語り始めました。——

皆さん、昨日は國境から遣つて來るだらしのない裁判官のお話をいたしましたために、最初考へてゐたカランドウリノのお話を申上げることが出來ませんでした。處で、この男のお話は何を申上げましてもいよ〳〵面白くなるばかりで御座いますから、もうこれ迄にも隨分この男やその仲間に就いていろ〳〵なお話が出ましたが、私はもう一つこ

のお話を聞いて頂きたいと存じます。

カランドウリノや、又これから申上げるお話の中へ出て來るその友人達が、どういふ人物であるかといふことは、既に皆さんが十分御承知のことで御座いますから、こゝではたゞこの男の叔母が亡くなりまして、遺産としてこの男に二百リラの銀貨を遺して行つたことだけをお知らせするに留めて置きます。そんな譯で、カランドウリノは、人の顏さへ見れば、地所を買ふつもりだがなどと申しまして、フローレンス中の仲買人といふ仲買人に話しを始めました。その意氣込みは宛然一萬グルデンの金貨を投げ出さうとでもしてゐるやうで御座いました。處が、その土地の値段の段になると、話は毎も壞れてしまひました。

この事を耳にしたブルノとブファルマコとの兩人は屢々カランドウリノに忠告しまして、粘土の丸でも拵へるのぢやないかと思はれるやうな小ぼけな地所なんか買ふよりもいつそ皆でそのお金を使つた方が遙かに優しだよと申しましたが、相手はなか〳〵それに應じさうな氣色もなく、皆に御馳走しようなぞとはてんで考へてもゐませんでした。そこで二人は互に憤慨の口吻を漏し合ひました。すると、そこへ又二人の仲間で、畫工のネロといふ男が遺つて參りましたので、三人一緒になつて、一つカランドウリノの費用で一杯飲んで遣らうぢやないか、それには何うしたら好からうといふ相談に取りかゝりました。

相談は忽ち纏まつて、各自の役割も定まりました。で、次の朝、三人はカランドウリノが自宅を出るのを待ち伏せしまして、相手が少し來た頃、ネロがそれに出逢つて、かう申しました。「カランドウリノ君、今日は！」

カランドウリノはそれに答へて、「今日に限らない、今年一杯も御機嫌よう」と申しました。すると、ネロは驚いたやうに少し後退りをしながら、相手の顏を長い間見詰めてゐました。

「何をそんなに見てゐるんだね？」と、カランドウリノは申しました。

ネロはそれに答へました。「君は昨夜どこか氣持が惡くなかつたのかね。何だかまるで別人のやうだよ。」

カランドウリノは急に心細くなつて、かう申しました。「困つたな、何うしたんだらう？　僕がどんな病氣に見えるかね。」

「さうさな」と、ネロは申しました。「別に病氣のやうでもないがね、たゞどうも今日は容子がすつかり違つてるよ。どうか僕の思ひ違ひであればいゝがね。」かう云つて、彼は相手を行かせました。

カランドウリノは別段氣持ちが惡い譯でもないが、すつかり氣を腐らしながら歩いて行きました。すると、今度は

ブファルマコが遺つて參りました。實は近所の隱所で、相手がネロと別れる處を見てゐたのですね。ブファルマコはカランドウリノに挨拶をすると、いきなり何處か加減でも惡いのかと訊ねました。

「どうもよく分らないんだがね」と、カランドウリノは答へました。「今もネロ君に逢つたら、まるで不斷と容子が違つてゐると云ふんだよ。本當に病氣なんだらうかね。」

「いや」と、ブファルマコは申しました、「病氣どころの騒ぎぢやないよ。殆ど半死半生の體ぢやないか。」

カランドウリノはてつきり熱病に罹つたのだと思ひ込んでしまひました。

そこへ突然ブルノが通りかゝつて、何よりも先にかう申しました、「カランドウリノ君、一體どうしたんだね？　まるで死人のやうぢやないか。氣分は何うなんだね？」

カランドウリノは三人が三人ともかう云ふのを聞いて、いよ〳〵病氣になつたものと信じて、すつかり動顛しながら、かう訊ねました。「諸君、僕はどうしたもんだらうね？」

「さうさな」と、ブルノは申しました。「まあ、かうでもするんだね。直ぐに自宅へ歸つて、床にもぐり込んで、よく蒲團を被けて寢るのが一番だらうよ。それからシモン先生の許へ尿を屆けるんだね。あの先生は、知つての通り、僕達の親切な友人だからね。さうすれば、手當てや養生に就いても何か指圖があるだらう。僕達も君の宅まで一緒に行くよ。で、何か用があればお手傳ひの一つもしようよ。」

ネロも傍からこれに賛成しました。そこで三人はカランドウリノと一緒にその家へ遺つて參りました。わが家に着くと、カランドウリノはすつかり疲れ切つて、寢室に這入るなり、かう細君に申しました。「俺はどうも氣分が惡いから、よく蒲團を被けて臭れ。」で、床へ這入つてから、女中に命じて、尿を持たせてシモン先生の許に遣りました。先生は恰度この頃舊市場の近くでメロン屋といふ小料理店を出して居りました。

一方ブルノは仲間の者にかう申しました。「君方はこゝにゐて臭れたまへ、僕はこれから行つて醫者が何と云ふか聞いて來るからね。そして、若し必要があつたら、直ぐに先生を連れて來ようよ。」

「さうだ、さうして臭れたまへ」と、カランドウリノはブルノに申しました、「早く行つて、どんな容子か聞いて來て臭れたまへ。どうも得體の知れないものが身體の中にあるやうな氣がするからね。」

そこでブルノは大急ぎでシモン先生の許へ出掛けました。そして、尿を持つて出た女中よりも一足先に着いて、事の次第をすつかり醫者に打明けました。ですから、女中

の持つて來た尿を見た時、醫者はかう申しました。「急いで歸つて、出來るだけ暖かにしてゐるやうに、御主人に云つて下さい。私は直ぐに後から伺ひます。その節病氣のことも、手當てや養生法も御病人に申上げませう。」

女中はすぐに引返してその旨を傳へました。間もなく醫者もブルノと連れ立つて遣つて參りました。醫者はカランドウリノの枕頭に坐つて、眞面目に脈を取りはじめました。暫くしてから、恰度その場に居合せたカランドウリノの細君を目の前に置いて、かう申しました。「ねえ、カランドウリノさん、友人として明らさまに申しますがね、別に何處といつて惡い所はない、たゞ姙娠したのですね。」

これを聞くと、カランドウリノは、さも恨めしさうに申しました。「やれ〳〵、テッサや、これはお前の所爲だぞ、……。だから、云はないこつちやないんだよ。」

細君は貞淑な女で御座いましたので、亭主がそんな口を利くのを聞いて、忽ち顏を眞赧にしながら、一語の口答へもし得ないで、目を俯せたまゝ、室外へ出て行つてしまひました。

けれども、カランドウリノはなほ怨みの聲を止めませんでした。「あゝ、何といふ情ないことだらう、一體俺は何うしたらいゝんだ？　何うして子供を產めばいゝんだ？　一體子供は何處から出ようといふんだらう？　あゝ、家內の助平いはれに、俺は命を捨てるのか。それにしても、もう一度助かりたいものだな、同時に家內の奴には神罰が當るといゝわい。本當に、俺がこんなでなかつたら、飛び起きて行つて、足腰も立たなくなる程打ちのめしてやるんだがな。尤も、あんなことを許して置いたんだから、こんな目に遭ふのも當然かも知れないがね。しかし、今度もし命が助かつたら、あんなことを要求して見ろ、叩き殺してくれるから。」

ブルノ、ブフアルマッコ及びネロの三人は、この繰言を聞くと、すんでの事に噴き出す處でしたが、やつとそれを押怺へました。けれども、シモン先生は思ひ切つて大口を開けて、から〳〵と笑ひました。傍の者には、宛然一本殘らず齒が脫けて飛び出しさうに思はれた位でした。が、カランドウリノは繰り返して醫者の治療を求めた上、この不幸に際してどうか自分を見捨てゝくれるなと拜むやうに頼みました。それに對して、醫者はかう申しました。「カランドウリノさん、まあ、そんなに心配しなさんな、好い鹽梅に早く分つたものだから、別段大事には及ぶまいからね。二三日中には苦もなく癒して進ぜるよ。尤も、いくらか金はかゝるだらうが、それは承知して置いて貰ひたいね。」

「それは仰しやるまでもありませんよ、先生」と、カランドウリノは答へました。「確かに承知しました、地所を買はうと思つて持つてゐる金が二百リーラ許り御座いますからね。お入用でしたら、それをすつかり持つて行つて下さい。どうかお產をしないでも濟むやうにして頂きたいものですな。眞個、どうしてお產をしたらいゝものやら、途方に暮れてゐるんですからね。女でもお產の時には大きな聲を立てて喚きますが、もと〳〵お產をするやうに出來てゐる女からして、さうなんでせう。私はあんな苦しみに耐へなくちやならないとなつたら、恐らくお產をする前に死んでしまふことでせうよ。」

「まあ〳〵心配せんでも好う御座んすよ」と、醫者は宥めるやうに申しました。「一つ水藥を拵へて上げませう、大層利目があつて、しかも飲みにくくないのをね。三日も飲めば、胎內のものが溶けてしまつて、あなたは水の中の魚よりも丈夫になれますよ。だが、今後は氣を附けて、二度と再びこんな馬鹿げた目に逢はないやうに用心することですね。處で、その水藥には先づ上等の肥つた去勢鷄が三番入るのですがね、なほその他にも必要なものを買つて貰ふやうに、お友達の誰かに銀貨で五リーラ許り渡して置いて下さい。そして、その品は全部私の店へ持つて來て貰ひませう。さうすれば、明日の朝は間違ひなく蒸溜した水藥をお屆けしますよ。それを大きい盃に一杯づゝ、一息に飲むんですね。」

カランドウリノはそれを聞いて、「では、先生、萬事宜しくお願ひします」と申しました。そして、ブルノに五リーラと、三番の去勢鷄の代金とを手渡しした上、どうか可哀さうだと思つて、宜しく取計つて貰ひたいと、吳れ〳〵も頼みました。

醫者はこの家を出てから、カランドウリノのために芳香入葡萄酒を造らせて、それを患者の家に屆けさせました。一方ブルノは鷄だの、その他酒宴に入用なものだのを買ひ調へまして、醫者を始め他の仲間と一緒に愉快に飲んだり喰つたりしてしまひました。

カランドウリノは三日の間續いて例の芳香入葡萄酒を飲んでゐました。すると、三日目に醫者と三人の仲間が遣つて參りました。醫者は脈を取つて見て、かう申しました。「カランドウリノさん、すつかり快くなつたよ。今日からは、もう仕事に出ても大丈夫だ。家に引籠つてゐるには及ばないですね。」

カランドウリノは喜んで起き上つて、仕事に出掛けました。そして、誰に向つても、談〻たびお產のことになりさへすれば、シモン先生がたゞの三日で跡形もなく姙娠を癒してくれた、見事な手際を褒めちぎりました。

一方、ブルノ、ブフアルマコ及びネロの三人は吝嗇坊の

カランドウリーノを嘲してやつたことを大層得意に思つてゐました。が、細君のテッサはこの眞相に氣が附いて、長い間夫に向つてぶつ〳〵不平を鳴らしました。

第四話

チェッコ・デイ・フォルタリゴはブオンコンヴェントで賭博のために自分の持物は勿論、チェッコ・デイ・アンジウリエリの金までも失ひ、襯衣一枚になつてアンジウリエリを追懸けながら、僞つて相手を泥棒呼ばはりする。すると、百姓どもがアンジウリエリを捕へたので、フォルタリゴはアンジウリエリの衣裳を着服したばかりでなく、その馬に跨つて、襯衣一枚の相手を見捨てたまゝ、その場を逃げ去る話。

カランドウリノが妻を非難した言葉には、一同思はず大きな聲を立てて笑ひました。が、フイロストラートの話が終りますと、女王の命に從つて、ネイフイレが次のやうに語りはじめました。——

敬愛する皆樣、もし人間にとつて、談話の中で自らの見識や德性を表はすことが、愚劣さや惡德を暴露することよりも難かしくないとしますれば、言葉を慎しむ多くの人達は全く無駄な努力をしてゐるものだと云はなければなりますまい。この事は、只今のカランドウリノが愚かにも眞實だと思ひ込んだ病氣から恢復したいばかりに、必要もない妻の祕密を明るみに曝け出した愚劣さを見ても、十分お分りになつた事と存じます。處で、このお話を伺ひまして、私はその內容が、全然それとは反對のお話を想ひ出しました。つまり一人の男の陰險さがもう一人の男の明智に打ち勝つて、相手に容易ならぬ損害と恥辱とを蒙らせたお話なので御座いますね。思ふに、今こそこのお話をするに一ばん適當な機會かと存じます。

あまり以前のことでは御座いません、シエナの市に相當の年配に達した二人の男が住んでゐました。二人ともチェッコといふ名で、一人は姓はデイ・アンジウリエリと云ひ、今一人はデイ・フォルタリゴと申しました。二人は多くの點でその習性を異にしてゐましたが、自分の父親が嫌ひだといふことだけは全然一致してをりましたので、そのために、友達になつて、しげ〳〵往來してゐました。處で、アンジウリエリは容姿端麗で起居振舞もしとやかであつただけに、父親から貰ふ收入だけでは、シエナの市では陸な暮しも出來ないと思つてゐたのですね。そこへ持つて來て、常常から贔屓にされた大僧正が法皇の使節となつて國境アンコーナに行かれたと聞きまして、今の境遇を少しは改善することも出來ようかといふ腹から、大僧正に逢ひに行くことに決心しました。そこでこの企てを父親に打明けた上、衣服を整へたり馬匹に手を入れたり、その他それ相當の支度をするために、六箇月分の手當てを一度に貰ふやうに話しを附けました。

で、もう一人身の周りの用を辨じて呉れるやうな男を連れて行きたいと思つて搜してゐましたが、例のフォルタリゴがそれを聞きつけて、早速アンジウリエリの許へ遣つて參りました。そして、從者であらうが、旅の道伴侶であらうが、そんな事は厭ふ所でない。たゞ食事さへ與へて貰はれたら他に一文の報酬も入らないから、是非自分を連れて行つて呉れと、命懸けになつて頼み込みました。

アンジウリエリはそれに答へて、君のことだから一切の用は立派に辨じて呉れるだらうが、何分賭博好きの上に、亂酒の癖があるから、どうも連れて行く譯には行かないと申しました。

すると、フォルタリゴは博奕も酒も屹度慎しむからと申しまして、幾度も誓言するやら、懇願を重ねるやらしますので、流石のアンジウリエリも根負けがして、とう〳〵連れて行くことに致しました。

で、或朝二人は旅に上りましたが、ブオンコンヴェントまで行つて、そこで食事をすることにしました。アンジウリエリは食後あまり暑氣がひどかつたので、寢臺の用意をさせて、フォルタリゴに手傳はせて着物を脫いだ上、九時が鳴つたら直ぐ起すやうに命じて搥いて横になりました。

フォルタリゴはアンジウリエリが寢入るや否や、こつそり居酒屋へ出掛けて、一杯飲んでから、そこに居合はせた連中と賭博を始めました。すると、相手は瞬くうちに、フォルタリゴが持つてゐた少し許りの金を捲き上げた上、更に着てゐた着物まで奪つてしまひました。何とかしてこの窮狀を切り拔けようと、フォルタリゴは襯衣一枚でアンジウリエリの寢てゐる宿に引返しましたが、主人が熟睡してゐるのを幸ひ財布から有金全部を持ち出して、賭場へ歸つて參りました。そして、その金も前の物同樣すつかり負けてしまひました。

そのうちにアンジウリエリも眼を覺まして、起き上つて着物を着けながら、フォルタリゴのことを訊いて見ました。そこらにゐないと分りましたので、屹度又毎ものでんで何處かで醉つ拂つて寢込んでゐるのだらうと思ひまして、そのまゝ見捨てて行くことに決心しました。そして、鞍や旅行鞄を馬に置かせ、コルシニヤーノにでも着いたら、他の男を雇ひ入れようと考へました。

處が、いよ〳〵立たうとして、宿の支拂ひをしようとすると、持つてゐた筥の金がないのですね。さあ、その結果

は大騒ぎになりました。アンジウリエリが、この家で盗まれたのだから、家中の者を捕へてシエナへ引立てようと云ひ出したので、宿屋は上を下への大混亂に陥つたので御座います。

すると、どうでせう、突然そこへ襯衣一枚になつたフォルタリゴが姿を見せました。お金と同じやうに、今度は着物を盗みに遣つて來たのですね。そして、アンジウリエリが馬に乘らうとしてゐるのを見ると、いきなりかう叫びました。「アンジウリエリさん、どうしたのです？　もうお立ちになるんですか？　まあ、一寸待つて下さい！　ほんの少しですよ。私の短衣を三十八ソルドの擔保に取つた男が、ぢき後から來る筈ですからね。今直ぐに拂つて遣れば、三十五ソルドには負けるだらうと思ひますよ。」

こんな事を云つてゐるうちに、一人の男が遣つて來て、フォルタリゴが賭博に負けた金額を話しましたので、アンジウリエリも金を盗んだのはフォルタリゴだといふことを始めて知つたのですね。そこで大層立腹しまして、フォルタリゴに烈しい罵倒の言葉を浴せました。もし神以上に人間を恐れる質でなかつたら、恐らく相手に痛い目を見せたことでしたらう。が、さうはしないで、急いで馬に跨りながら、今に絞首臺に上らせるか、それに反けば死刑といふ條件の下に、シエナから追放にして貰ふからさう思へと威嚇しました。

が、フォルタリゴは、アンジウリエリのさうした言葉も全然自分には關係のないもののやうに、更に喋舌りつゞけました。「あゝ、アンジウリエリさん、そんな事を云ふのは止めようぢやありませんか、そんな事を云つたつて一文にもなりませんからね。それよりも一つ私の云ふことを聽いて下さい、今すぐ買ひ戻せば、三十五ソルドの金であれが手に入らうといふのですよ。明日の朝までお延ばしになれば、私に貸して呉れた三十八ソルドから一文も負けては呉れないのですぜ。あの男が、そんな好意を示してくれるのも、私がその金を全然自分の思ひ通りに投資したからですよ。何だつて又この際三ソルドの節約をしようとしないのですかい。」

アンジウリエリはそれを聞くと、腹が煮え返るやうな思ひをしました。殊に周圍に立つてゐる人達が彼の方ばかりじろ〳〵見て、何たかフォルタリゴがアンジウリエリの金を賭博で摺つたのではなく、寧ろアンジウリエリが相手の金を差押へてゐるやうに思つてゐるらしかつたので、いよいよ堪らなくなつて、かう叫びました。「一體俺が貴樣の短衣などに何の關係があるのだ？　貴樣は首を絞められたいのか、俺の金を盗んだ上に、賭博で使ひ果して置きながら、なほ俺の旅立ちの邪魔をして俺を愚弄しようといふの

か。」

それでもフォルタリゴは閉口しないで、相手の言葉などまるで馬の耳に念佛と云つたやうに、更に喋舌りつゞけました、「何ですつて？　何故あなたは三ソルドの儉約をさせて呉れないのです？　私がそれをお返しすることが出來ないとでも思つていらつしやるのですか。私が可哀さうだと思つたら、どうかさうして下さい。一體こんなに急いで何うなさらうといふのです？　トレニエリなら今日の夕方までにはゆつくり行かれますよ。で、まあ、どうか一つ財布を出して下さい！　シエナの市中を探した處で、あんなによく私に似合ふ短衣はないんですぜ。四十ソルド以上の品物ですのに、どうして三十八ソルドばかりで手放すのです？　それぢや私に二重の損をさせるといふものですよ。」

アンジウリエリは最初この男に金を盗まれた上、今度は云ひがゝりまでされたので、すつかり業を煮やして、もう相手の言葉などには頓着しないで、その儘トレニエリに向つて馬を驅りました。

處が、フォルタリゴはふと惡企みが頭に浮んで來ましたので、襯衣一枚の姿でアンジウリエリの後から追懸けて行きました。で、彼は彼で何時までも短衣のことを五月蠅く云ふし、相手は又相手でこの耳の煩はしさから逃れようとして、懸命に馬を驅りながら、やがて二哩程も遣つて參りました頃、フォルタリゴはアンジウリエリの行手から程遠からぬ畑の中に數人の百姓が働いてゐるのを見懸けましたので、大聲に呼び懸けました。「其奴を捕まへて呉れ、其奴を！」すると、百姓どもは鋤だの草掻きだのを手にして道の眞中に躍り出しながら、アンジウリエリの前方に立ち塞がりました。そして、襯衣一枚になつて追ひ懸けて來る男を掠奪したのはこの男に相違ないと思ひましたので、いきなり彼を捉へてしまひました。

アンジウリエリは自分の素性だの、かうなつた事情だのを話しましたが、何人もそれに耳を藉しませんでした。といふのは、すぐ後からフォルタリゴが遣つて來て、滿面に朱を注ぎながら、「怪しからぬ奴だ！　俺の物を盗んで逃げるなんて！　ほんたうに敲き殺しても飽き足りないわい！」と叫鳴つたからで御座います。彼は更に百姓どもに向つて申しました。「皆さん、此奴は賭博で最後の一文まですつてしまふと、御覽の通り私を裸にして旅館に置き去りにしたのです。眞個、神樣と貴方方のお蔭で、持物だけはすつかり取り戻すことが出來ました。この御恩は一生忘れませんよ。」

アンジウリエリはいろ〳〵に申しましたが、一向聽き入れては貰はれませんでした。そればかりか、百姓達の助けを藉りて、フォルタリゴは彼を馬から引摺り下ろした上、その衣裳を剝ぎ取つて自分の身に着けました。それから馬

に跨つて、アンジウリエリを襯衣一枚の靴下さへない哀れな姿にして後に殘したまゝ、シエナに歸つて行きました。そして、賭事でアンジウリエリの馬と衣裳とを捲き上げたのだと、到る處で云ひ觸らしました。一方、アンジウリエリは國境まで行つて、大僧正に立派な服裝で見參しようと思つてゐた宛ても外れ、今や見すぼらしい襯衣一枚の姿となつてブオンコンヴエントまで引返して參りましたものの、今の所恥かしくてシエナに歸る氣にもなれませんでした。で、他人から借着をして、先にフオルタリゴが乘つてゐた駑馬に跨つて、やう〳〵コルシニヤーノにゐる親類の許まで辿り着きました。そして、もう一度父親から金が屆くまでそこに滯在してゐました。

かうしてフオルタリゴの惡むべき奸策は、アンジウリエリの賢明な計畫を水泡に歸せしめたので御座います。勿論、その奸策も時到れば相手の手で復讐せられたには相違ありませんがね。

第五話

カランドウリノが一人の乙女に戀をしたので、ブルノは彼のために不思議な護符を作つて遣つた。カランドウリノはその護符を女の身に觸れて、その心を動かすと共に、女を傍の納屋に連れ込んだが、現場を細君に襲はれて辛き目を見た話。

ネイフイレがあまり長くもない話を終りました時、一同は大して笑ひもしなければ、又それに對して意見を吐かうとするものもなく、その儘默殺しようとしました。で、女王はフイアメッタに向つて改めて話をつゞけるやうに命じました。フイアメッタは喜んで命に從ふ旨を答へて、早速次のやうに語りはじめました。——

皆さん、どんなに度々話された話で御座いませうとも、それを話す場所と機會とを適當に選擇することを話者が心得てさへゐますれば、いくらでも面白くお話しの出來るものだといふことは、先刻御承知のことと存じます。そこで、私達が何のためにかうして此處に集まつてゐるかといふその目的を振返つて見ますと、(全然それは面白可笑しく時を過さうといふのに外なりませんが、)凡そ歡樂と滿足とを齎らすものであれば、どんなものでも、この時と場所とに適當したもので、既に何遍となく話された事柄でありましても、もう一度それに就いて改めてお話しするといふことも亦面白いことであらうと信ずる次第で御座います。ですから、カランドウリノといふ人物はこれ迄幾度となく話題に上りましたやうなものゝ、どの話も大層面白う御座いました

たので、敢て私はもう一度この人物を捉へてお話ししたいと存じます。勿論他の人物のことにしてこの話を進めるのも容易ではありますが、事件の眞相を離れるといふことは、兎角そのお話の興味を少なくする傾きが御座いますから、矢張り事實に基づいて適當な形式の下にお話し申上げようと存じます。

私達の同郷人ニツコロ・コルナツキニは金持ちで、地面も澤山所持してゐましたが、その中でもカメラタの地所は特に見事で御座いましたので、そこに新に立派な住宅を建てました。そして、ブルノとブフアルマコとに相談して、新居を繪にして貰ふことに致しました。相當大きな仕事で御座いましたので、二人の畫家はネロとカランドウリノとを仲間に加へて、いよ〳〵仕事に取りかゝりました。

この家はまだやつと二三の部屋が出來上つて、寢臺その他の家具を備へ附けたばかりで、一人の老婢が留守番として住んでゐる切りで御座いました。そんな風でしたから、先に申しましたニツコロの息子のフイリツポは、まだ若い獨身のこととて、時々何處かの女を連れ込んで、一兩日引留めて置いては又歸してやり〳〵したもので御座います。

處が、或時のこと、彼は又若い女をその家に連れ込みました。(この女は世間ではニコロッサと呼ばれ、マンジョーネといふ下劣な男の圍者になつてゐまして、時々金で貸出されてゐたもので御座います。)この女は容姿美しく、衣裳も立派で、この種の女としては禮儀作法の心得もあり、話もなか〳〵上手でした。

處で、或日の晝頃、ニコロッサは部屋を出て、白い下着一枚で、髮も無造作に卷きつけたまゝ、顔や手を洗ひに中庭にある泉のほとりまで遣つて參りました。すると、その時偶然カランドウリノも水を汲みにそこへ遣つて來てゐまして、女を見て親しげに挨拶しました。女はそれに答禮して、つく〴〵相手を眺め遣りました。別に深い意味があつた譯ではないので、たゞ相手が變つた男のやうに見えたからのことでした。カランドウリノは再び女を見遣りましたが、どうも美しい女だなと思ひましたので、いろ〳〵その場の用事を拵へて、一向水を持つて仲間の許へ歸らうとしませんでした。が、女とは知合ひでなかつただけに、さすがに言葉を懸けるやうなことはしませんでした。

女は男の眼つきを見て取りましたので、調戯つてやる積りで、更に二三度相手を見遣つた上、あらうことか嘆息まで二つ三つ吐いて見せたもので御座います。こんな風でカランドウリノはすつかり女に魂を奪はれまして、相手がフイリツポに喚ばれて戻つて行くまで、何時までも中庭を立ち盡してゐました。そして、仕事場に歸つて參りましても、苦しさうに溜息を吐くばかりで御座いました。すると、平

生から相手の様子に氣を配つて、そのすることなすことに興がつてゐたブルノは、早速この様子に眼を留めて、かう申しました。「おい、何うしたと云ふんだね、カランドウリノ君？　先刻から嘆息ばかり吐いてるぢやないか。」

「ねえ君」と、カランドウリノはそれに答へました、「誰か力を貸して呉れるものがあると、僕は本當に助かるんだがな。」

「そりや又何うしてだね？」と、ブルノは訊ねました。

「まあね」と、カランドウリノは答へました。「人に云はないで呉れたまへよ。實はこの下に若い美人がゐてね、いやもう、その素晴らしいつたら眞個妖女以上なんだ。處が、それがね、君なんか到底本氣にしてくれさうもない位、僕に惚れ込んだのだよ。尤も、その女は今水汲みに行つた時始めて見懸けたんだがね。」

「いや、飛んでもないことだ」と、ブルノは申しました。「君用心したまへ、そりやフイリッポさんの細君かも知れないぞ。」

「さうぢやないかとも思つてるんだ」と、カランドウリノは申しました。「フイリッポさんが喚んだら、その女は歸つて行つたからね。でも、それが何うしたと云ふんだ？　この道にかけては、僕は主キリストだつて問題にしないよ、況してフイリッポさんなんか何だ！　だがね君　眞實のことを云ふと、僕はすつかりあの女には參つてしまつた、眞個口に云はれない位だよ。」

「ねえ君」と、ブルノは申しました、「一つ君のためにその女が何者だか調べて上げようぢやないか。若しフイリッポさんの細君だつたら、君の件は二言と云はせずうまく遣つて見せるよ。と云ふのは、僕はその細君ともと〳〵惡意だからね。それにしても、この事をブファアルマコ君に知らせないで、うまく遣るには何うしたものかな。何しろブファアルマコ君がゐないと、あの女との面談は一寸難しいんだからね。」

「なに、ブファアルマコ君は構はないよ」と、カランドウリノは申しました、「たゞネロ君にだけは内密にして置いて呉れ給へ。あの男は家内のテッサと親類だから、こんな事だと知らうものなら、頭から打ち壞しにかゝるだらうからね。」

「成程、それは尤もだ」と、ブルノは申しました。

ブルノはこの女の素性をよく知つてゐました。と云ふのは、女がこの家へ來る所を見懸けましたし、それにフイリッポから話しを聞いてゐたからですね。そこでカランドウリノが又もや女の委を垣間見に出掛けた際に、ブルノは早速ネロとブファアルマコとにすつかりこの一件を話してしまひました。そして、三人頭を集めて、これを種にどんな惡

戯をして遣らうかと、いろ〳〵相談しました。やがてカランドウリノが戻つて參りますと、ブルノは小聲でかう訊ねました。「女が見えたかね。」

「勿論さ！」と、カランドウリノは答へました、「僕はもう死ぬ程參つてしまつた。」

「ぢや、一つ出掛けて行つて」と、ブルノは申しました、「僕の思つてゐる女かどうか見定めて來よう。で、その女と極つたら、もう心配することはないよ。」

ブルノは階段を降りて行きました。見ると、好い鹽梅に、フイリッポと女が一緒にゐましたので、カランドウリノの爲人や彼の告白した一件を順序よく話して聞かせました上、それを種に面白い芝居をして遊ばうといふので、銘々の割役に就いてもいろ〳〵申し合せました。それからカランドウリノの許へ歸つて參りまして、かう申しました。「矢つ張りあの女だつたよ。だが、こりや餘程悧巧に立ち廻らなくちやいけないよ。といふのは、若しフイリッポさんが感附いたら、アルノ河の水をすつかり浴びたつて、僕等の罪は綺麗にやならないだらうからね。處で、あの女と口を利くやうな折があつたら、何んな事を君からだと云つて傳へればいゝかね。」

「おゝ、さうだ」と、カランドウリノは答へました。「まづ第一に、僕が彼女に對して滿腔の清い愛を抱いてゐるといふこと、第二に、僕は彼女の最も從順な召使であることを傳へて呉れたまへ。そして、何か御用はないかと訊いてくれるんだよ。解つたかね。」

「勿論だ」と、ブルノは申しました、「まあ、萬事は僕に委せて置きたまへ！」

間もなく食事の時間になりましたので、一同は仕事を措いて、中庭の方に降りて行きました。すると、其處にフイリッポとニコロッサとが立つてゐました。で、カランドウリノを揶揄するために、暫くそこに足を駐めました。それとも知らないカランドウリノは、ニコロッサを見て、それこそ盲目でも氣が附くやうな、世にも馬鹿らしい嬌態をはじめました。女の方でも亦カランドウリノの情熱を煽り立てるやうな、いろ〳〵な仕草をして見せたもので御座います。が、フイリッポもカランドウリノの行動を世にも珍しい觀物だと思ひましたので、ブルノの指圖通りに、ブファアルマコやその他の人と話しをして、さうしたことに一向氣の附かないやうな振りをしてゐました。で、暫くしてから一同右と左に別れましたが、カランドウリノにはこれが殘念でたまらなかつたのですね。

フローレンスに歸る道すがら、ブルノはカランドウリノにかう申しました。「成程、君の腕は凄いね、あの固い女が太陽に逢つた氷のやうに、とろ〳〵になつてゐたぢやない

か。僕は誓つて云ふがね、君がギターを持ち出して、それに合せて戀の歌でも唄はうものなら、あの女はそれこそ窓からでも飛び降りるだらうよ、君の側へ來たいばかりにさ。」

「本當にさうかね」と、カランドウリノは申しました。「ぢやもう、ギターを持ち出してもいゝ頃だと、君は云ふのだね？」

「勿論だよ」と、ブルノは答へました。

「どうだ」と、カランドウリノは申しました、「最初話しをした時には、君もそれを信じようとしなかつたね。實際、自分の思ひを果す上には、僕はこれでも人一倍心得があるのだ。一體、僕の外に、誰があんな貴婦人をかう手取り早く自分のものにすることが出來るんだい？　洪螺ばかり吹いてゐながら、一日中駈けずり廻つて、千年もかゝつてやつと手に三杯の胡桃さへものにし得ないやうな生若い連中にや眞似も出來ないことだよ。處で、僕のギターを彈くところを一つ見て貰ひたいものだね、屹度面白いことが起るだらうよ。いゝか、僕は君が思つてゐる程年は取つてゐないが、あの女にはそれがちやんと分つてゐるのだね。さうでないにしても、一度僕があの最初の一キッスをさへすれば、直ぐ合點の行くやうにして遣るよ。僕は誓つて云ふがね、ギターは屹度うまく彈いて見せるよ、牝牛の後を追懸ける仔牛のやうに、あの女がどうしても僕の後にくつゝいて來ずにやゐられないやうにして見せるね。」

「眞個！」と、ブルノは叫ぶやうに申しました、「それでこそ女も手に入らうと云ふものだ。僕には何だかもう君がその亂杭齒であの女の赤い脣や薔薇色の頰に喰ひ着いて、仕舞には……を食つてしまふのが目に見えるやうな氣がするよ。」

カランドウリノはこの言葉を聞きますと、もうその言葉を實行してでもゐるやうな氣持になつて、宛然手の舞ひ足の踏む處を知らずと云つたやうな調子で、唄つたり踊つたりしながら、あつちこつちと駈け廻りました。

さて翌日になりますと、彼は仕事場にギターを持ち込んで、それに合せて幾つもの歌を唄ひましたが、一同はきやつきやと云つて喜びました。で、手短に申しますと、時折その女の姿が見えるので、カランドウリノはもう仕事も手に附かないやうに、すつかり怠けてしまひまして、日に幾度となく窓の下や玄關口、さては中庭なぞへ出掛けて行つて、ぼんやり女の姿を眺めてゐました。女の方でも亦ブルノの入れ智惠の下に、狡猾い遣方で、さうしたさま〳〵な機會を相手に與へたもので御座います。一方ブルノは絶えずカランドウリノの言傳に對してその返事を貰つて來てやつたり、時には又女からの言傳を彼に傳へてやつたりしました。それから又、女が別莊に居ない時には、――多くの場合さうでしたが、――女に勸めて手紙を書かせました。その手紙の中では、今にも相手の望みが達せられさうな希望を抱かせると共に、今は兩親の許にゐるので、殘念ながら逢ふことは出來ないといふやうな言譯を添へたもので御座います。

かうして熱心に絲を操つてゐたブルノとブファルマコとは、蔭ではカランドウリノの行動を面白がつて笑ひ興じながら、同時にその女が欲しがつてゐるやうに云つて、象牙の櫛とか、財布とか、乃至は小刀とか云つたやうな、いろいろな小間物を男から捲き上げました。そして、その返しには一文の値打もないやうな贋造の指環を幾つも相手に與へたもので御座います。それでもカランドウリノは有頂天になつて喜んでゐました。そして、二人に珍らしい晩餐の御馳走をしたり、その他さま〳〵な敬意を表したりしまして、この度の件に就いてはなほ一層の援助と盡力とを懇願しました。

こんな風にして、二人はそれ以上事を運ばせもしないで、二箇月程相手を釣つて置きました。が、その間に仕事も終りに近づきましたので、カランドウリノも今この戀を遂げなければ、永久に思ひを遂げる折はないと考へましたので、今更のやうにブルノに迫つたり急き立てたり致しました。そこへ持つて來て、恰度その女が再びこの家へ遣つて參りましたので、ブルノは先づフイリッポとその女とに相談しまして、今後の手管を定めて置いて、それからカランドウリノに向つて、から申しました、「ねえ君、あの女は君の望みを叶へようと、あれ程何度も約束をして置きながら、その後一向それを實行しないのは、何うかすると君を騙してゐたのかも知れないね。それにしても、一旦約束したことを履行しないのだから、何うだね、君さへその氣なら、一つ吾々で否應なしにそれを實行させようぢやないか。」

「眞個だ、後生だから君」と、カランドウリノは申しました、「早速さういふことにして貰ひたいね。」

すると、ブルノは申しました。「ぢや、僕が一つ護符を拵へて上げるから、それを女の身體に押附けて見るだけの勇氣があるかね。」

「そんな事は、君、云ふまでもないさ」と　カランドウリノは答へました。

「さう云ふことなら、一つ君の方で上等の薄い羊皮紙と、生きた蝙蝠一匹と、反魂香三粒と、聖母に捧げた蠟燭一本とを用意して呉れたまへ。それから後は僕に委せて貰ひたいのだ。」

明くる夜カランドウリノは蝙蝠を捉まへようとして、網を片手に一晩中戸外に立つてゐましたが、やつと一匹生捕

つて、他の品物と一緒にそれをブルノの許に屆けました。ブルノは一室に引き籠りまして、羊皮に無意味な文句と二三の魔法の記號を書きつけました。それからカランドウリノを訪ねて、かう申しました。「いゝかね、カランドウリノ君、この護符で戀人に觸りさへすれば、女は直ぐに君に隨いて來て、君の云ふ通りになるんだよ。だから、フイリッポさんが今日何處かへ出て行かれたら、何とかして女に近づいて、いきなりこれで相手の身體を撫でるんだね。それからすぐ側にある藥納屋へ這入つて行きたまへ、彼處なら誰も遣つて來る心配はないからね。なに、女は屹度隨いて來るよ、で、女が納屋へ這入りさへしたら、その後どうするかは君の方で御存じだらうよ。」

カランドウリノはもうすつかり有頂天になつて、護符を受け取るとかう申しました。「まあ、僕の手一杯に遣らせて呉れたまへー」

處で、カランドウリノがあんなに怖がつてゐたネロも、他の人と同じやうに、この狂言を面白がつて、それを筋書通り運ばせるために手を藉すことを厭ひませんでした。そこで、ブルノに頼まれて、自分でフローレンスへ出掛けた上、カランドウリノの細君に會つて、かう申しました。「テッサさん、あんたも眞逆忘れやしないだらうが、何日かカランドウリノ君が、そら、あのムニョーネの谷から石を拾つて歸つた時だよ、理由もないのにあんたを打ち据ゑたことがあつたね。で、一つあんたもその仕返しをして貰ひたいのだがね。これを厭だといふやうなら、私はもうこの後親類だとも友達だとも思つて貰ひますまい。實はね、この頃カランドウリノ君は仕事先で或女に首つたけなんだよ。その女といふのが又厭な奴で、しよつちうカランドウリノ君と嬶曳をして、現に今も或所で逢はうといふ約束をしたのだ。だから、直ぐに私と一緒に行つて、カランドウリノ君に逢つて、見たかといふ程懲しめて遣らなくちやいけないよ。」

テッサはそれを聞いて、容易ならぬことだと思ひましたので、足を蹴立てて飛び上りながら叫びました、「まあ、何てえことだらう、あの追剥奴が！　私といふものがあるのに、よくそんな眞似が出來ますね？　何うしてそんな事をさせて置くものか。今に見ろ、思ひ知らせて遣るから！」

それからマントを引掛けて、女中一人を供に連れたまゝ、テッサはネロと一緒に飛ぶやうにしてその場に遣つて參りました。

ブルノはテッサの姿を遠くから見てフイリッポにかう申しました、「御覽なさい、彼處に吾々の味方が遣つて來ますよ。」で、フイリッポはすぐにカランドウリノ達の仕事場に降りて行つて、かう申しました、「皆さん、私は今からフローレンスへ行かなくちやなりませんが、どうかその間も出來るだけ仕事を遣つて置いて下さい。」それからその場を去つて、とある場所に身を隱しましたが、そこからはこちらの姿を見られないで、カランドウリノの行動一切を見ることが出來るやうになつてゐたのですね。

カランドウリノはフイリッポが大分行つたと思ふ頃、例の中庭に降りて見ましたが、そこにはニコロッサが一人で立つてゐました。で、早速女と話しを始めますと、女の方でも宜しく心得てゐるので、相手に近づきながら、これ迄よりはずつと馴れ〳〵しい態度を見せました。カランドウリノはこゝだと思つて、例の護符で女の身體に觸りました。そして、觸るや否や、默つて藥納屋の方へ歩き出しました。ニコロッサも直ぐ後から隨いて參りました。で、小屋に這入るや、女は入口の戸を締めて、いきなりカランドウリノの首に嚙り着いて、相手を床に敷いてあつた藁の上に投げ倒しました。そして、その上へ馬乘りになつて、自分の顔の方へ男のそれを近寄せぬやうに、兩腕を相手の肩へ突支棒にしながら、さも遣瀬のないやうに惚れ〳〵と相手を見遣つて、かう申しました、「あゝ、私の可愛いカランドウリノ、私の心臓、私の魂、私のいとしいお方、私の一生の望み、私はまあかうして貴方を手に入れて、思ふさま兩手に抱き締めたいと、どんなに長い間憧れてゐたことでせう！　貴方のいとしさには私の心の下紐も弛みました、貴方のギターには氣も魂も亂れ初めました。こんなにして貴方を抱いてゐるのは、これは夢ではないでせうね？」

カランドウリノは殆ど身動きも出來ないまゝに、かう申しました、「あゝ可愛い私の魂、どうかキッスをさせて下さい！」

「まあ、何うしてそんなにお急きになるの」と、ニコロッサはそれに答へました、「どうぞまあ貴方のお顔をよく見せて下さい。わたしの堪能するまで好く見せて下さいな！」

ブルノとブファルマコとは、この間にフイリッポの居る所へ遣つて參りまして、三人でこの樣子を見たり聞いたりしました。知らぬが佛のカランドウリノはもう少しでニコロッサに接吻しようとしました。そこへ恰度ネロがカランドウリノの細君を連れて遣つて來たのですね。で、そこへ着くや、ネロはいきなり喚ばはりました、「僕は神にかけても誓ひますがね、二人は屹度こゝに隱れてゐるんだよ。」

處で、二人がいよ〳〵納屋の戸口へ來ました時、テッサは怒りに狂ひながら手でその戸を叩き毀して、中に躍り込みました。そして、ニコロッサがカランドリノの上に馬乘りになつてゐるところをまざ〳〵と目にしたのですね。ニコロッサはテッサの姿を見ると、素早く飛び退いて、フイリッポの居る所へ逃げて行きました。

が、モンナ・テッサはまだ起き上らないでゐたカランドウリノに飛びかゝつて、顏中を爪で引つ掻き散らした上、今度は頭髮の毛を摑んで、彼方此方と引き摺り廻しながら、かう呶鳴り立てました。「この恥知らずの畜生奴！　よくもこんな事をしやがつたな。この老ぼれの色氣違ひ奴！　これ迄手前に盡して來たことを思ふと、殘念で堪らないわい。他所樣まで來て惚れた腫れたと云つてゐられる程、手前は手が明いてるとでも思つてるんかい。まあ、この色男を見てやつて下さい。手前は自分が分らないのか、この化物奴！　手前は自分を知らないのかよ、この下司奴！　手前なんかいくら絞つても一口のソースにする肉汁だつて出て來やしないんだよ。よく云つとくがね、今度手前に孕ませたのはこのテッサぢやないんだよ。誰だか知らないが、そんな女は氣違ひにでもなるがいゝ、こんな唐變木にでも色氣を出す位だから、どうせ陸な女ぢやないんだらう。」

カランドウリノは細君の姿が見えますと、もう生きた心地もなく、少しでも抵抗するやうな勇氣は御座いませんでした。それ處か、顏中引つ掻かれ、滅茶々々に髮を掻き亂されたまゝ、そつと外套を取つて起き上りながら、細君に向つて、まあ亭主を八裂きのやうな目に逢はせたくないと思つたら、さう大きな聲を出さないでくれ、今迄自分の傍にゐたのは、他ならぬこの家の奥さんなんだからと、しきりに嘆願いたしました。

「そんな事何うだつていゝやい」と、細君は叫びました。「あんな女なんぞくたばつたつて構ふもんか！」

ブルノとブファルマコとはフイリッポやニコロッサと一緒になつて、この有樣に腹を抱へて笑つてゐましたが、この時始めて騷ぎを聞きつけたやうな顏をして這入つて參りました。そして、いろ〳〵と細君を宥め賺した後、カランドウリノに向つて早く、フローレンスに歸つて、二度と此方へ足を向けないやうにするがよい、これがフイリッポの耳にでも入らうものなら、何んな目に逢はせられるか知れたものでないからと忠告しました。

かうして哀れなカランドウリノは、引つ掻かれ引き摺られて、すご〳〵とフローレンスに歸りましたが、再び戀を漁りに出る勇氣もなく、日夜細君の非難に苦しめられながら、仲間の者を始めとしてフイリッポやニコロッサに散々大笑ひの種を與へた揚句、やつと燃える思ひを斷ち切りました。

第六話

二人の青年或る夫婦の許に一泊し、一人はそこの娘の許に忍び入つたが　同時にその家の細君誤つて夫と

思ひ今一人の青年と床を共にする。次いで娘の許にゐた青年は誤つて娘の父親の床に這入り、相手が友人の積りで一切を打明けたので忽ち大騷ぎとなる、この時始めて細君は自らの失策に氣附いて、娘の床へ忍び込み、巧みに氣を利かせ、以て、一同をなだめすかす話。

カランドウリノの話はこれ迄も屢々一同の哄笑を買ひましたが、この度も亦それに劣らず喝采を博しました。で、この男の冒險に對する淑女達の議論の種も盡きた頃、女王はパムフイロに向つて次の話を命じました。彼は次のやうに語りはじめました。——

皆さん、カランドウリノの戀人がニコロッサといふ名であつたところから、私はニコロッサといふ今一人の女の話を想ひ出しましたので、これからそのお話を申上げたいと存じます。この話をお聞きになれば、世に女の沈着といふもの程えらいものはない、どんなに恐ろしい憤怒も一掃する力のあるものだといふことを合點して頂けるだらうと思ひますからね。

大して古いことでも御座いませんが、ムニーネの谷間に、或人の好い男が住んでゐまして、旅人に飲食を鬻いでゐました。元來貧しくもあり、家も極めて狹いものでしたが、必要の場合には、何人でもとは行かないまでも、知合の間なら宿も貸すといふやうにしてゐました。この男には一寸澁皮の剝げた女房があつて、その間に二人の子が御座いました。一人は年の頃十五六の、田舍にしては小綺麗な可愛らしい娘で、未だ男を知らない未通女でした。今一人は生れて未だ一年も經たない男の子で、母の乳房にすがつてゐました。處で、フローレンスの上流階級に生れた、男振りのいゝ一人の青年が、この界隈を往復してゐる間に、この乙女に眼を着けて、熱烈な戀を注ぐやうになりました。娘の方でも亦かうした青年に愛せられることを大層名譽だと思ひまして、同じやうに青年に戀ひ焦れ、毎も愛想よくもてなして男を戀の網から逃すまいと努めました。そんな譯で、若しピヌッチオが——これが青年の名前でしたがね——娘と自分の浮名を流すことを恐れさへしなかつたなら、疾うにこの戀が二人の喜びの下に樂しい花を咲かせる機會は幾度もあつたので御座います。

が、熱情は日に〳〵高まるばかりで、ピヌッチオは、もうその乙女と逢瀨を樂しみたいといふ欲望に堪へられなくなりました。そこで、その望みを遂げるために、一つ娘の父親の家に泊り込んでやれと想ひ着いたのですね。といふのは、戀人の家の樣子はよく心得てゐましたので、さっさへすれば、多分誰にも見附からないで、うまく戀人と逢瀨を樂しむことが出來ようと思つたからで御座います。で、

かう想ひ着くと、又とは云はせず、早速この計畫の實行にとりかゝりました。

彼は先づ仲の好いアドリアーノといふ友達にこの戀を打ち明けました、或晩のこと、二人は賃貸しの馬を屬つて、それに旅行袋を着け、フローレンスを後に大分廻り道をした上、ムニョーネの谷間に引返しました。そして、そこへ辿り着いた時は、もう夜もすつかり更け渡つた頃でした。で、馬の首を廻らして、たつた今ロマーニャから遣つて來たやうな顏をしながら、件の家に乘りつけて、善良な男の戸を叩きました。見ると、相手は衆々知合のこととて、主人は早速その戸を開けました。

「ねえ、君」と、ピヌッチオは申しました、「どうか今晩だけ是非泊めて貰ひたいものだがね。實は大丈夫フローレンスまで歸られるだらうと思つて遣つて來たんだが、御覽の通りのこんな時刻にやつと此處まで辿り着いたのさ。どうもそれ以上馬を早め兼ねたんでね。」

「ピヌッチオ樣」と、主人はそれに答へました、「御承知の通りの穢くるしい家で、且那方をお泊め申すやうな支度は何にもないんですよ。ですが、もうこんなに夜も更けたことですし、他の家をお探しになる時間も御座いますまいから、まあ出來るだけ都合して、今晩一晩のところはお泊め申しませう。」

二人の青年は早速馬から降りて、小さな家に這入りますと、先づ第一に馬の世話をしました。それから、夕食は幾分用意してゐましたので、主人と一緒に食事を濟ませました。

さてこの家には小さい寢室が一つある切りでして、而もそこへありつたけの寢臺を三つ主人が色々考へた揚句都合よくならべてありました。それでも、二つの寢臺が一方の壁に沿うて、今一つがこれと反對の側に置かれてゐましたので、寢臺と寢臺との間はやつと人が通れる位しか明いてゐませんでした。主人は三つの寢臺の内で一番いたんでゐないものを二人の旅人に提供しました。二人はその上に横になりました。やがて暫くたつて、二人が寢入つたやうな風をしながら實はまだ眠らないでゐますと、主人は娘に、二つの寢臺の一つに寢るやうに云ひつけてから、自分は細君と一緒に今一つの寢臺にねこみました。細君はその寢臺の側に、赤ん坊の寢てゐる搖籃を置きました。

かういふ具合に寢床の剛當が濟みますと、前後の樣子をすつかり見屆けましたピヌッチオは、一同が寢鎮つた樣子を見濟してから、そつと立ち上つて、戀人の寢てゐる寢臺に近づいて、その側に横になりました。そして、女から怖々ではあるが、いかにも嬉しさうに迎へられて、二人の何よりも憧れてゐた生の享樂に耽りながら、長い時を過しました。

かうしてピヌッチオが乙女と一緒に居るうちに、猫が何かをひつくり返しましたので、主婦はその物音に眼を覺ましました。そして、大事なものではなからうかと氣になりましたので、寢卷姿そのまゝで起き上りますと、暗闇を音のした方に行つて見ました。處で、一方アドリアーノはそんな事とは知らず、小用のために起き上りまして、帰りの方へ歩き出しましたが、主婦が置いてあつた搖籃に打突かりました。見ると、搖籃を動かさなくては、先へ出られませんでしたので、アドリアーノは搖籃を取り上げて、自分が寢てゐた寢床の傍へ置き代へました。それから目的通り用を足して歸つて來ますと、もう搖籃の事はすつかり忘れて、そのまゝ寢床に身を横たへました。

この間に細君は、先刻落ちたものを探しましたが、最初考へてゐたものではありませんでしたので、別に灯をともして確めようともしないで、只猫を叱りつけてから、部屋に戻つて參りまして、夫のゐる寢床を手探りで搜しました。處が、その寢床の側にあつた筈の搖籃がありませんでしたので、かう獨語を申しました。「おや〳〵、私としたことが！何といふことをする處だつたのだらう！　お客さんの寢床へ這入る處だつたよ。」さて今二三歩往つてみましたが、そこにはちやんと搖籃がありました。で、搖籃が傍にある寢床に上つて、アンドリアーノと一緒になりましたが、御當人は亭主の側にゐる積りでゐました。まだ眠つてゐなかつたアドリアーノは、それと氣が附くと、喜んで彼女を迎へまして、もう一語も口を利かないで、幾度となくその船を左舷に着けながら、女を有頂天にさせたので御座います。

この兩人がかうしてゐるうちに、ピヌッチオは、戀人の側で眠り込みはしないかと恐れましたし、又かねて憧れてゐた樂しみも十分味はひ盡しましたので、自分の寢床へ歸らうとして立ち上りました。すると、その途中で搖籃に突き當りましたので、主人の寢床だと思ひまして、それを行き過ぎて今度は本當に主人の寢床へ迷ひ込んだまゝ、横になりました。主人はピヌッチオが這入つて來たので眼を覺ましましたが、至極靜にして居りました。

すると、ピヌッチオはアドリアーノと一緒に寢てゐる積りだものですから、何心なくかう申しました。「おい、あのニコロッサ位可愛い女は、ほんたうに何處にも居やしないぞ！　神かけて云ふが、思ふに、男が女から貰ふ歡樂の中で、最大のものを僕は享けて來たよ。先刻此處を出て行つてから、六回以上樂しい目をした位なんだ。」

主人はこの話を聞きますと、大層苦々しく思ひまして、口の中でかう申しました。「畜生、何うしたといふのかな、こいつは。」次の瞬間には分別よりも怒りに驅られて、かう

申しました。「ビヌッチオ様、非道いことをして呉れましたね。どんな譯があれば、こんな恥を私にかゝせるのです？こりや、然しこのまゝぢや濟まされませんぞ。」

ビヌッチオは元來が除り分別のある人間ではありませんでしたから、何か口實を設けて、うまく襤褸を隱さうともしないで、かう云つてしまひました。「一體、何でこのまゝ濟まされないといふんだ？　僕をどうしようといふんだね？」

すると夫と、一緒にゐるものとばかり思つてゐる細君は、アドリアーノに向つてかう申しました。「おや〳〵、何だか知らないけれど、お客樣達が喧嘩をなさつてゐるやうぢやありませんか、貴方には聞えないんですか？」

「うつちやつてお置きよ」と、アドリアーノは笑ひながら申しました、「少しは神罰も當つた方がいゝよ、昨日は大分飲み過ぎたんだからね。」

處が、細君には、喧嘩をしてゐるのはどうやら夫らしく思はれて來ましたし、その上、アドリアーノの話し振りを聞きましたので、誰と一緒に寢てゐるのかがよくわかりました。そこで、元來分別のある女だけに、一言も返辭をしないで、早速立ち上りますと、部屋には一點　燈さへありませんでしたが、搖籃を取上げまして、盲加減で娘のゐる寢床の側へ持つて行きました、そして、自分はその寢床へもぐり込みました。そこで始めて、夫の大聲に眼が覺めたやうなふりを致しまして、どうしたの譯でビヌッチオと喧嘩をしてゐるのかなどと尋ねました。

「お前は聞かなかつたかね」と、夫は答へました。「旦那樣が今夜ニコロッサの處へ通つたと自分で云ひなさつたのを？」

「それは眞赤な嘘ですよ」と、妻は答へました。「ニコロッサの處へなんかいらつしやいませんわ。私は昨夜つからニコロッサと一緒に寢てゐますし、それに一寸も睡れなかつたのですもの。そんな事を本氣になさつては、あんまり馬鹿げてゐますわ。男の方なんて宵の內餘りお酒を飲み過ぎるので、夜中に夢を見て、無我夢中で彼方此方と歩き廻つて、えらいことでもおつぱじめたやうに思ふのですわ。本當に頸の骨を折らないでゐるのがお氣の毒な位ですわ。ですが、ビヌッチオ樣はそんな處で何をしていらつしやるの？何だつて御自分の寢床でお寢にならないんです？」

するとアドリアーノは、細君が自分と娘との恥辱を覆ひ隱さうとて、如何にも機轉を利かせてゐるのに感心致しまして、かう口を挾みました。「おいビヌッチオ、だから夜中に歩き廻るなと僕が何度云つたことか。夜中歩き廻つて、夢に見た事をほんたうのやうにしやべり散らかすお前の惡い癖は又しても禄なことはないだらうと思つたからだ。歸つて來い、本當に世話の燒ける奴だ。」

主人は、妻とアドリアーノとの言葉を聞きますと、これはてつきりビヌッチオがねぼけてゐるのだと思はれて來ました。そこでビヌッチオの肩を摑んで搖すぶりながら、かう申しました。「ビヌッチオ樣、さあ眼を覺まして、御自分の床へお歸りなさいよ！」

ビヌッチオは先程からの話に甘く辻褄の合ふやうに取繕つて、恰もねぼけた人のやうに、尙もいろ〳〵と馬鹿げた事を云ひました。すると、主人はさもをかしさうに笑ひました。ビヌッチオは、又しても搖すぶられましたので、その時やつと眼を覺ましたやうなふりをして、態とアドリアーノなどと叫んで、かう云ひました。「もう夜が明けたので起すのかい。」

「さうだ〳〵」とアドリアーノは申しました。「さあ、此方に來たまへ。」

ビヌッチオは愈々猫をかぶつて、主人の床を出て、アドリアーノの許へ歸つて來るまで、ねぼけの眞似をやつてをりました。

さて夜が明けて一同が起きましてから、主人は又してもビヌッチオの事を大笑ひして、寢呆けた時の事を云つて相手をからかひました。こんな風に話から話へと移りながら青年達は再び馬の用意をして、旅行袋を馬に着けてから、もう一度主人と酒を酌み交はしまして、馬に跨つてフローレンスに歸つて來ました。二人は事の成功同樣に、事の經過を大層面白く思ひました。

然しその後ビヌッチオは他の方法を案出しまして、屢々ニコロッサと逢引を重ねました。處が、娘は常に母親に向つて、あの時ビヌッチオは慥にねぼけてゐたのだと斷言してゐました。そこで母親はアドリアーノの抱擁を思ひ出す毎に、あの時眼ざめてゐたのは自分だけなのだと、窃かに北叟笑みました。

第七話

タラーノ・デイ・モレーゼは、妻が狼に咽喉や頰を喰ひ破られた夢を見たので、用心するやうに勸めたが、妻はこれを懈つたために、事實その通りになつた話。

パムフイロの話しが終りますと、一同は口を極めて細君の智略を嘆稱しましたが、やがて、女王はパムピネアに次の話をつゞけるやうに命じました。パムピネアは早速次のやうに語りはじめました。——

皆樣、私達は前にも世人が多く一笑に附して顧ないかの正夢といふものの信頼すべきことを話したことが御座いま

した。で、既にお話のあつたことでは御座いますが、私はもう一度それに就いて、近所の戒奥様が、旦那様の御覧になつた夢を信じなかつたばつかりに、飛んだ目にお逢ひになつたお話を、成るべく手短かに申上げて見たいと存じます。

さて、タラーノ・デイ・モレーゼと申します立派な紳士を皆様も御存じでいらつしやるかどうか、その邊は私にも分り兼ねますが、兎に角この方にはマルガリータと申します若い美人の奥様が御座いました。この方は大層我儘で、不愛想で、おまけに強情で御座いまして、何でも他人の喜ぶやうにしようと決してしない上に、他人が何をしてくれても嬉しさうな顔もしないといつたやうな性質で御座いました。そのために良人のタラーノも屢々悩へ兼ねるやうな目にも逢ひましたが、今更何うする譯にも參りませんので、たゞ辛抱に辛抱を重ねてゐました。

處で、タラーノがマルガリータと一緒に田舎の別莊に滞在してゐた時のことで御座いますが、或夜の夢に妻が別莊から程遠からぬ所に持つてゐた美しい小さな林を散歩してゐるのを見ました。何氣なく散歩してゐる妻の姿が現れてゐるうちに、林の一端から大きな見るも恐ろしい一匹の狼が出て來まして、妻の首筋に噛み着いたかと思ふと、地面の上に引き倒してしまひました。いくら救ひを求めて叫んでも追附かない、狼はぐん〳〵妻を引き摺つて行きました。そのうちにやつと狼の口から放たれはしたものゝ、その時はもう頸も顔も滅茶々々に噛み裂かれてゐました。

朝になつて床を出ました時、タラーノはマルガリータに申しました。「マルガリータ、お前の強情のお蔭で、わしはお前と一緒になつてから一日だつて樂しい思ひをしたことがないが、それでもお前が不幸に出逢ふとなれば、わしだつて不憫と思はずにはゐられないよ。で、まあ、今日一日はわしのいふことを聞いて、戸外へ出ないがいゝぜ。」そして、何故だと聞き返された時、更に自分の見た夢を有りのまゝに話して聞かせました。

すると、マルガリータは首を振つて、かう申しました、「誰でもその人に好意を持たないものは、その人の惡い夢を見るものですわ。貴方は私の身を心配して下さるやうなことを仰しやいますがね、貴方の御覧になつた夢なんぞ、ただ私がさうなればいゝと思つていらつしやることに過ぎないのですよ。お氣の毒さまですがね、私は貴方のお指圖は受けないでも、そんな不幸に陷つて、貴方に手を拍つて喜ばれるやうなことのないやうに氣を附けてゐるつもりですから御安心下さい。えゝ、今日ばかりぢや御座いません、何時だつてさうなんですよ。」

「屹度さう云ふだらうとは思つてゐたよ」と、タラーノは申しました、「だつて、疥癬つかきのの頭に櫛を入れてやつた時に受取る感謝が恰度それなんだからね。まあ、お前の好きなやうに解釋するがいゝ、わしは好意から云ふのだ。そして、もう一度忠告するが、今日は自宅にゐるがいゝぞ、少なくともあの林には行かない方がいゝね。」

「分りました」と、マルガリータは答へました。「それでは貴方の御希望どほりに致しませう。」が、次の瞬間、彼女は心の中でかう申しました。「何故あの人があんなに私を怖がらせて、あの林へ行かせないやうにするのか、今にその譯を探り出して上げるからいゝ。あの人は屹度あそこで卑しい女とでも媾曳をする約束をして、それで私にそれを見られないやうにしようと云ふのだわ。ふん、盲人を相手に櫻桃の喰べくらをするなら大きに樂でせうがね。あんな人の云ふことを一々眞に受けるやうだつたら、私も餘つ程お目出たいといふものだわ。だが、そんな事を、誰が巧く遣らせて置くものか。たとひ一日中戸外に立つてゐてもいゝから、あの人がどんな代物を取引してゐるのか、どうしても見て遣らなきや措かないよ。」

かう獨語を云つてゐるうちに、良人が一方の側から外出するのを見て、彼女は早速他の一方から脱け出しました。そして、出來るだけ人目を忍んで、かの小さな林へ遣つて參りましたが、その一番樹立の多い場所に身を潜めまして、耳を澄し眼を見張りながら、今に誰か來るかと待ち構へてゐました。こんな風で狼のことなどすつかり忘れて待伏せをしてゐるうちに、どうでせう、直ぐ側の藪の中から、突然大きな恐ろしい狼が飛び出して來まして、彼女が「主よ、助け給へー」と叫ぶ間もなく、その頸筋に飛びかゝつて、しつかり咬へ込んだまゝ、宛然小羊か何ぞのやうに彼女を引摺つて行きました。何しろ咽喉を噛まれてゐるので、彼女は聲を擧げることも出來ませんし、又どうにも手の出しやうがありませんでした。ですから、もし二三人の牧者に出逢はなかつたら、狼は疑ひもなく彼女の息の根を止めてしまふ處でしたらう。牧者達は大きな聲を擧げて狼を威嚇しながら、やつと彼女を口から放たせました。

見ると、牧者達もこの不幸な女をよく知つてゐましたので、その家へ擔いで行きました。女は永い間醫者の手を煩はして、やつと傷だけは癒えましたが、頸筋や顔の一部に大きな瘢痕が殘りまして、前には相當の美人であつたのが、今では見るも氣の毒のやうな不具になつてしまひました。そんな譯で、マルガリータは人目にかゝるのを厭ひまして、家に蟄居したまゝ、只管わが身の強情を嘆くと共に、何の損もないのに良人の正夢を信じなかつたことを屢々心から後悔いたしました。

第八話

ビオンデルロがチアッコを欺いて不味い食事を喰はせたので、チアッコは相手を烈しく擽らせて、巧みにその仇を報いる話。

一座のものは異口同音に、タラーノが睡眠中に見たものは、夢ではなくて寧ろ幻影であつた、それなればこそ、一點の相違もなく凡てが事實となつて現はれたのだと主張しました。やがて一同の聲が鎮まつた時、女王はラウレッタに命じて次の話に移らせました。ラウレッタは早速語り始めました。——

賢明なる皆樣、今日私の前にお話をなさいました方々は、大概、前に既に話された事柄に基づいてお話しをなすつたやうに思はれますので、私も昨日バムビネア樣がお話しになりました若い學者の殘忍な復讐から想ひつきまして、それに似た話をもう一つお耳に入れたいと存じます。尤も、この復讐は、復讐されたものにとつては相當辛いものであつたかも知れませんが、昨日のそれとは比較にならない程殘酷味の少ないもので御座います。

昔フローレンスに俗稱チアッコといふ、古今を通じての美食家があつたと思召せ。處が、この男は自分の美食癖を滿足させるやうな食事を用意するだけの財產がないと共に、一方では行儀作法の心得もあり、なか〳〵頓智や愛嬌にも富んでゐましたので、消化者といふよりは、寧ろ惡口屋になりまして、金持で美食を樂しむやうな人達の許へしげしげ出入りすることを本職のやうにしてゐました。で、屢々かうした人達の許に押し掛けて、招かれもしないのに、中食や晩餐の御馳走に預かつたもので御座います。

その同じ時代に、矢張りこれもフローレンスの市に、名をビオンデルロといふ男が住んでゐました。至つて小柄な質で、毎も小ざつぱりした服裝をして、緣のない帽子を冠り、髮を長く伸ばして、一本のほつれ毛もない程綺麗に櫛を入れてゐました。この男も亦チアッコと同じやうなことを稼業にしてゐました。

四旬節の時のことでした。ビオンデルロが魚市場に出掛けて、デ・ケルキーといふ且那の用で大きな八つ目鰻を二尾ばかり買はうとしてゐるところを、例のチアッコに見附かつてしまひました、チアッコは早速ビオンデルロの側へ遣つて來てから申しました、「おい、そりや何うしたんだね？」

すると、ビオンデルロはそれに答へました、「コルソー・ドナデイ樣の許へ昨夜これよりももつと上等な八つ目鰻が三尾と蝶鮫が一尾とゞいたんだよ。處が、今日二三人の貴族を招いて御馳走をしようとすると、どうもそれだけぢや足りないのでね、もう二尾ばかり買つて來いとの仰せさ。どうだい、君も遣つて來ないか。」

「云ふまでもないやね」と、チアッコは答へました、「是非出掛けるよ。」

そこでチアッコは時刻を見計らつて、コルソー氏の家に遣つて參りました。すると、コルソー氏は二三の知人と一緒に、未だ食卓には就かないでゐました。コルソー氏から何の用で來たかと訊かれた時、彼はかう答へました、「且那樣やお仲間の方々と御一緒に、御馳走に預りたいと思つて參じました。」

「よく遣つて來たね」と、コルソー氏は申しました、「では、もう食事の時間だから、どうです、皆さん、あちらへ參らうぢや御座いませんか！」

そこで一同が食卓に就きましたが、鮪の腹肉の鹽まぶしに蠶豆の附いた皿が第一に運ばれ、その後からもう一皿アルノ河の燒魚が出ただけで、他には何にも御座いませんでした。チアッコは始めてビオンデルロに一杯喰はされたことに氣が附いて、心中甚だ穏やかならず、今に見ろ、屹度この敵を打つてやるからと、固く決心いたしました。

その後日ならずして、彼は又ビオンデルロに出逢ひました。この男はこの間の惡戲の顚末を觸れて歩いて、大いに世間の人の腹の皮を捩らせてゐるのでした。今こゝでチアッコに行き逢ひましたので、輕く挨拶して、コルソーさんの許の八つ目鰻は何うだつたなぞと、にや〳〵笑ひながら、相手に訊ねました。

「その事なら」と、チアッコは申しました、「一週間と經たないうちにお知らせするよ、僕の知らないことまでもね。」

それから彼はビオンデルロに別れてその場を去つてから、早速二人の老獪な古道具屋を探し出しました。そして、先づ報酬について話しを纏めた上、大きな硝子の酒瓶を持たせて、カヴイッチウリの美術館の玄關の前まで連れて參りました。そして、館内にゐたフイリッポ・アルゼンティといふ、嚴疊で腕節の強い、お負けに人並勝れて熱し易く、怒りつぽい變物の騎士を指さして、かう申しました。「あの方の許へこの壜を持つて行つて、かう云ふのだ。『且那、私はビオンデルロさんのお使ひで上つたんですが、自家の且那が二三人の友達と一緒に一杯遣らうとしてゐますので、就きましては甚だ相濟みませんが、どうか紅い上等の葡萄酒でこの壜をルビーのやうに眞赤にして頂きたいもので』とな。それだけ云へばいゝんだが、たゞくれ〳〵もあの男に捕まらないやうに氣を附けるんだぞ。捕まつたら、それこそ酷い目に逢ふだらうが、お藏で俺の計畫まで滅茶苦茶になるからな。」

「他に云ふことは御座いませんか」と、古道具屋は訊ねました。

「いや、他にはない」と、チアッコは申しました、「これだけの事を云つてしまつたら、さつさと塲を持つて歸つて來て呉れ、さうすれば約束の金を支拂ふからな。」

古道具屋は早速仕事に取りかゝつて、先づフイリッポ氏の前で例の口上を述べました。たゞさへ憨りつぽいフイリッポは、これを聞くと、かねて知合のビオンデルロが自分を愚弄するためにこんな事を云はせるのだと思ひましたので、さつと顏色を變へて、「ルビー色に染めてくれだの友達だのと、一體そりや何のことだ？　畜生！　貴樣もビオンデルロも縛り首になりやあがれ！」と吸鳴りました。そして、立ち上りざま、猿臂を伸ばしてその古道具屋を捕まへようとしましたが、こちらはちやんとその用意をしてゐましたので、一足先に逃げ出してしまひました。そして、今度は他の道を通つて、先刻から樣子を眺めてゐたチアッコの側へ歸つて參りました。かうしてフイリッポの云つたことをそつと知らせました。

チアッコはそれに滿足して、約束の金を古道具屋に支拂ひました。それから時を移さず、ビオンデルロを尋ね出して、かう申しました、「君は最近にカヴイッチウリ館へ行つたことがあるかね。」

「いや」と、ビオンデルロは答へました、「だが、何だつてそんな事を聞くんだね？」

「他でもないがね」と、チアッコは言葉を返しました、「フイリッポさんが夢中になつて君を捜してゐるからさ。君にどんな用があるか、それは知らないがね。」

「よし」と、これを聞いたビオンデルロは申しました、「それぢやどうせあつちへ行くんだから、會つて聞いて見よう。」

ビオンデルロは相手と別れました。チアッコは事の成行を見ようといふので、ビオンデルロの後を跟けて行きました。

一方古道具屋を捕まへ損つたフイリッポは腹立ちながらも追跡を緩めました。そして、古道具屋の言葉を考へて見ると、どうしてもビオンデルロが誰かに唆かされて、彼を愚弄しようとしたとしか思はれませんでしたので、いよいよ業を煮やしました。すると、そこへビオンデルロが何にも知らずに姿を現はしたのですね。で、それを見るなり駈け出して行つて、いきなりその面上に見たかといふやうな平手打を一つ喰らはせました。

「あ痛つ！」と、ビオンデルロは叫びました。「旦那、こりや何うしたつて云ふんです？」

が、フイリッポ氏はそんなことには頓着しないで、相手の髪を掴んで、帽子を打つ飛ばし、外套を地面に叩きつけて、散々に相手を打擲しながら、かう叫びました。「裏切者奴、どういふ譯だか今に思ひ知らせてくれるよ。何だつて貴樣は俺の許に使者なんか寄越して、ルビー色に染めてくれだの、友達が來るだのと云はせるんだ？　貴樣に馬鹿にされる程俺は子供だとでも思つてゐるのか。」かう云ひながらも、彼は鐵のやうな拳で相手の顏を滅多打ちにうちのめして、髪の毛一本滿足なものは殘つてゐないまでに遣つつけました。それからなほ泥水の上に相手を突つ轉ばして散てゐた着物も一枚殘らず引つ裂いてしまひました。それが始めから終ひまで息を吐く間もない程素早く遣つて退けられたので、ビオンデルロは、最初の一語の外には何一つ云ふことが出來ないばかりか、何故こんな目に逢はせられるのか聞き返すことさへ出來ませんでした。尤も、その耳にもルビー染めだとか、友達だとか云ふ言葉は聞えましたが、さてそれが何ういふ譯だか、さつぱり解らなかつたのですね。

四邊に立つてゐた人々も、フイリッポ氏が氣の濟むまで叩きのめした後、始めてそれも非常な骨折りで、やつとビオンデルロをその手から引き離すことが出來ました。が、その時は、もう何處も彼處も傷だらけで、二目と見られない姿になつてゐました。一同は、ビオンデルロに向つて、フイリッポ氏のこんな手暴なことをしたわけを話して聞かせた上、その爲人や、從つて戯談なぞ滅多に仕掛けられる人物でないことを百も承知してゐながら、あゝした使者を寄越したことを非難しました。ビオンデルロは、おい〳〵泣きながら、決して自分はフイリッポ氏に、葡萄酒のことなどで使者を寄越した覺えはないと、繰り返し〳〵辯明しました。

それから少し許り身裝を取り繕つた上、ビオンデルロは悲しさうに愚痴を云ひ〳〵歸つて行きましたが、その時になつて、始めて一切がチアッコの指金であることに氣が附きました。その後大分日數が經つてから顏の青痣も消えましたので、彼は再び外出を始めました。すると、或日チアッコが途中で彼に出逢つて、笑ひながらかう訊ねました。

「ビオンデルロ君、フイリッポさんの許の葡萄酒は近頃どんな味だつたかね。」

「さうさ」と、ビオンデルロはそれに答へました、「コルソー旦那の許の八つ目鰻もあんな味だとよかつたんだがね。」

「この間のやうな」と、チャッコは言葉を返しました、「あんな立派な御馳走をもう一度振舞つてくれるかどうか、そこは君の勝手だがね、たゞそんな事をすれば、君も知つての通りのあゝいふ酒を拵へて、屹度また飲ませて上げるよ。」

ビオンデルロはチアッコに對して惡戯を計畫しても、そ

れを實行することの覺束ないことを悟つて、彼との親睦を神に念ずると共に、その後は二度と再び彼を愚弄しないやうに氣を附けました。

第九話

二人の青年ソロモンに助言を求めて、一人はどうしたら人に愛せられるか、今一人はどうして妻の片意地を匡正すべきかを訊ねる。ソロモンは、第一の者には汝愛すべしと、又第二の者には鷺鳥橋に行けと敎へる話。

いよ〳〵女王の外には話しの殘つてゐる人もなくなりました。そこで、淑女達が可哀さうなビオンデルロを散々笑つてしまつてから、女王は極めて快活に語りはじめました。——

皆樣、健全な心で物事の秩序を考へて見ますと、凡そ女性なるものは、自然、習慣、又は法律に依りまして、男性に隷屬すると共に、男性の考へ通りに身を處し、且それに順應して行くべきもので、從つて男性と共に平靜、和平、又は充足の狀態を享樂することを希ふ凡ての女性は、皆程へ目に、辛抱强く、且恭順であらなければならないことは極めて見易い道理で御座います。勿論、あらゆる賢明な女性の最高の寶玉ともいふべき婦人の貞節の大切なことは、今更申すまでも御座いませんがね。一般の幸福といふことを何よりも念頭に置いてゐる法律や、風俗、習慣などがよし私達女性をそのやうに指導しないとしましても、私達の肉體を優美に、脆弱に、私達の精神を含羞み勝ちに、臆病に造つて、私達に纖細な肉聲と優雅な動作とを與へてくれた自然そのものがそれを私達に敎へてゐるではありませんか。これ等のことは凡て私達がいかに他の指導を必要とするかを實證するものに外ならないので御座います。で、そのやうに助けられ、指導されることを必要とするやうなものに向つては、理性は、その援助者や指導者に對して從順であり、恭謙であり、服從的であることを絶對に要求するもので御座います。處で、私達の援助者や指導者として男性以外に何人が御座いませう？　かくの如くにして、男性を尊敬し、男性に服從することは、取りも直さず、私達女性の義務なので御座います。この義務を厭ふやうな女は、思ふに、嚴重な非難ばかりか　酷烈な懲罰にも値ひするもので御座いませう。

私は以前からかういふ考へを抱いてゐたので御座いますが、先刻バムビネア樣から、良人の與へることの出來なかつた刑罰を神樣が代つてお與へになつた、あの片意地なタ

ラーノの妻のお話を伺ひまして、今更のやうに思ひ返されたので御座います。で、私の考へに從ひますれば、今も申上げました通り、自然、習慣、それから法律などが要求してゐるやうに、常に愛想よく、好意を持つて、從順にすることを厭ふやうな女は皆酷烈な刑罰に値ひしてゐるので御座います。

それに就いて、私は嘗てソロモンが與へた敎への中で、只今申したやうな女達をさうした不德から癒やすに足る藥劑ともなり得るやうなお話を一つ申上げたいと存じます。尤もこの藥劑を必要としないやうな女は、殿方が駿馬も駑馬も共に拍車を要し、賢婦も愚婦も共に杖を要すといつたやうな諺を口にされても、それが自分に云はれたものだと何うしても信じないもので御座います。この諺をおどけたものだと主張する人がありましても、それが文字通り眞實であると、その人に敎へるのは、極めて容易なことで御座います。又、この諺を寓意的だと云ふ人がありましても、私はそれがそのまゝ認むべきものであることを主張したいと存じます。總じて女といふものは生れつき薄弱で、物に動かされ易いもので御座います。從つて規定された範圍を遠く彷ひ出るやうな女達の不德を罰するためには、杖を必要とするので御座います。又一面に於ては、誘惑に抵抗する女の婦德を支ふると共に、その誘惑の恐るべきことを敎へるためにも杖が必要で御座います。處で、もうこんなお談議は廢めにしまして、そろ〳〵本題に移ることに致しませう。

ソロモンの驚くべき明智の噂が、親しくその敎へを受けて噂の確實であることを知りたいと思ふやうな人々には、惜しげもなくその明智を藉し與へてゐるといふ事實と共に、世界の隅々までも聞えてゐた時代のことですが、無數の人々が諸國諸地方から焦眉の急に迫られて、彼の許へ敎へを受けに押寄せて參つたもので御座います。

かうしてソロモンの許へ敎へを受けに遠國から遣つて來た人々の中に、ラヤッツオの市のもので、そこに生れてそこに住んでゐた貴族で財産家の、名をメリススといふ青年が御座いました。イエルサレムに向ふ道すがら、アンティオキアで、矢張り同じ旅をしてゐるヨセフと申します一人の青年に出逢ひました。二人はしばらくの間後になり前になりして馬を進めてゐるうちに、旅人の習慣として何時しか言葉を交はすやうになりました。

メリススはその間にヨセフの門地だのその故郷のことだのを聞きましたので、改めて、一體何ういふ用向きで、何處へ行くのかと訊ねました。すると、相手は自分の妻が人並外れて强情で依怙地で、闊しても謙しても、ありとある手段を盡しても一向その强情を匡すことが出來ないので、

こんな女には何んな處置を取ればいゝか敎へて貰ひたいと思つて、ソロモン王を訪ねるところだと答へました。そして、今度はこの男の方で、メリススは何處から何處へ何の用で旅をしてゐるのかと訪ねました。

メリススはそれに答へました、「私はラヤッツォの者ですが、御同樣私にも一つの惱みがあるのです。私は若くもあり金もあるので、始終大盤振舞をしたり、同じ市の者に敎意を表したりして、無駄なお金を使つてゐるのですがね、誠に不思議と云はうか奇妙と云はうか、さう迄してゐるのに、私に好意を寄せて呉れるものが丸つ切りないのですよ。そこで、人から愛せられるには何うすればいゝか敎へて貰ひたいと思つて、實は貴方と同じ所へ參るのでさ。」

こんな話から二人は道中を共にして、とう〳〵イエルサレムに到着しました。それからソロモンの顯官の一人の手で御前に案内されましたが、こゝでメリススが手短かに自分の希望を述べますと、ソロモンはかう答へました、「人を愛すべし！」

この言葉が終ると共に、メリススは直ぐさま戸外へ連れ出されました。今度はヨセフが代り合つて來訪の理由を述べました。すると、ソロモンはたつた一語、次のやうに答へました、「駑鳥橋へ行くがいゝ！」

王の言葉が終ると共に、ヨセフも直ぐさま御前から連れ出されました。戸外にはメリススが待ち受けてゐましたので、自分に云はれた王の言葉を相手に話して聞かせた上、二人で王の言葉を懸命に考へて見ました。けれども、その中に何等の意味も、又自分達の求めてゐるやうな解決をも見出すことが出來ませんでしたので、二人は愚弄されたやうな氣持ちで、手を携へて家路に着きました。

さて數日の旅を重ねた後、二人は或河の畔に遣つて參りました。そこには見事な橋が懸つてゐましたが、恰度その時大きな隊商の群が重い荷を積んだ驢馬や駄馬を連れて橋を渡つてゐましたので、二人は隊商の渡り切るまで待つてゐなければなりませんでした。そのうちに隊商は殆ど全部橋を渡つてしまひましたが、まだ驢馬が一疋殘つてゐまして、よくあることですが、何か物怖ぢをしたと見えて、どうしても橋を渡らうとしないので御座います。そこで馬方は鞭を取り上げて、最初はまづ物柔かに一鞭くれて、それに依つて橋を渡らせようとしました。けれども、驢馬は右に左に跳ね廻るばかりで、時には後退りまでして、どうしても前へ進まうとはしないのですね。それを見ると、馬方は一方ならず腹を立てゝ、ぴしり〳〵と鞭で馬の頭や腹、背中などを打ちのめしましたが、一向效果はありませんでした。

この樣子を眺めてゐましたメリススとヨセフの二人は、

幾回となく馬方に叫びかけました、「この人でなし奴！ 何をするんだ？ 驢馬を撲り殺す氣かよ。何故もうちつと優しくして、大人しく前へ進ませようとしないのだ？ そんなに打つよりも、その方が早いぢやないか。」

が、馬方はそれに答へました、「へん、お前さん方も自分の馬なら知つてるだらうが、俺の驢馬は俺が一ばん好く知つてるよ。まあ、餘計な口を出さないで、俺の勝手にさせて置いて貰はう。」かう云つて、馬方は又しても驢馬を毆りはじめました。そして、幾回となくその橫腹を左右代りばんこに毆りつけましたので、最後に驢馬もやつと歩き出して、馬方はとう〳〵その試練に成功しました。

で、二人の青年もいよ〳〵橋を渡らうとしましたが、ヨセフは偶と橋の袂にゐた人に、こゝは何といふ所かと訊いて見ました。

すると、その男は申しました。「旦那、こゝいらではこの橋を駑鳥橋と云つてますよ。」

ヨセフはこれを聞くと、ソロモンの言葉を想ひ出して、メリススにかう申しました。「ねえ君、分りましたよ、ソロモン樣の御敎へのいかにも道理至極なことが。僕はこれ迄家内を毆ることを知らなかつたのですね。それが今はつきりと解りました。つまり先刻の馬方が僕の取るべき方法を敎へて呉れたやうなものですよ。」

それから二三日して、二人はアンテイオキアに到着しました。ヨセフはメリススを自分の家に泊めて、數日の間休息させることにしました。彼は細君から隨分冷淡に迎へられましたが、兎に角晩飯はメリススの註文通りにするやうに命じました。メリススも主人からさう云はれるので、言葉少なに自分の喰べたいものを註文しました。處が、細君は例の片意地から、メリススの註文したやうにする處か、全然それとは反對の料理を拵へました。

それを見ると、ヨセフはすつかり腹を立てて、かう申しました。「夕食にはこれ〳〵の物を拵へるやうに豫め云つて置いたぢやないか。」

が、細君は高慢らしく外方を向いて、かう申しました。「それが何うしたと云ふんですの？ お腹が空いていらつしやるんなら、何故召上らないんです？ 成程、かうしろとは仰しやいませんでした。けれども、氣の向いたやうにするのが私の勝手でしたからね。これでお氣に召せば、私も滿足ですわ。お氣に召さなかつたら、どうか召上らないで下さい。」

細君のこの返答にはお客のメリススも惘れ返つて、内々ひどい女だなと思ひました。一方ヨセフは、細君の云分を聞くと、かう申しました。「ふむ、お前はまだその强情を慶めないな。だが、そのうちには屹度お前の性根を入れ代へ

てやるから、さう思つてるがいゝ！」それからメリススの方へ向き直つて、かうつゞけました、「君、いよ〳〵ソロモン王の教へを實行してお目に懸ける時が來ましたよ。どうか私のすることを心苦しく思はないで、ほんの遊び事のつもりで見てゐて貰ひませう。それから、僕等が驢馬に同情した時、馬方の云つた言葉を想ひ返して、どうか私のすることを邪魔しないで下さい。」

「僕はこの家に厄介になつてるのだから」と、メリススは答へました、「君の氣持に反するやうなことをしようとは思ひませんよ。」

そこでヨセフは樹の若い幹で出來た圓い杖を持つて、細君が腹立ちまぎれに食卓を見捨てて、ぷつ〳〵云ひながら這入つて行つた部屋へ押懸けて行きました。そして、その頭髪の毛を掴んで引き倒しながら、その杖で烈しく毆りはじめました。最初の間は細君も泣いたり叫んだりしましたが、今度は良人を威嚇しにかゝりました。が、それでもヨセフが毆る手を止めないのを見ると、流石に强情な女もすつかり打ち拉がれて、どうか命だけは助けて吳れ、今後は二度と再び良人の意志に背いたり機嫌を損ねたりするやうな眞似はしないからと、固く誓ふやうになりました。けれども、ヨセフはなほもその手を緩めないばかりか、一打毎にいよ〳〵力を籠めて、或ひは横腹、或ひは腰、或ひは肩と、宛然細君の全身を青痣で埋めようとでもしてゐるやうに、打つて〳〵打ちのめしながら、自分の手が草臥れて動かなくなるまでは、どうしても止めようとはしませんでした。早く云へば、細君の背はもうどの隅、どの部分にも傷の附かない箇所はなくなつたので御座いますね。

かうして置いて、彼は再びメリススの前に戻つて參りました。そして、かう申しました。「明日になれば、あの『鷺鳥橋へ行け！』といふ箴言に、何れだけの利目があつたか分りますよ。」それから一寸休息した上、手を洗つて、メリススと一緒に食事を攝りました。で、それが濟んだ後、然るべき時刻に、二人は床に就きました。

一方、可哀さうな細君はやう〳〵の思ひで床から起き上りましたが、その儘倒れるやうに寢床に横たはりました。そして、一夜の休息を十分に取つた後、明くる朝は早くから起き上つて、ヨセフの許へ「お食事は何にいたしませうか」と聞かせに遣りました。

これを聞いて、ヨセフはメリススと共に大笑ひに笑ひましたが、乞はれるまゝに、その指圖をしてやりました。それから二人が食卓に就いて見ると、萬事が手際よく、しかも何から何まで吩咐け通りに出來てゐましたので、今更のやうに、最初は理解し兼ねたあの教へを心から讃美しました。

その後二三日して、メリススはヨセフの許を去つて故郷に歸りました。そして、かねて知り合ひの賢人に、ソロモンから授かつた教へを話して聞かせました。すると、その人はかう申しました。「いや、それ以上適切な教示は他にあるまいね。お前さんも氣が附いてゐるだらうが、一體お前さんといふ人は誰をも愛してゐないし、又お前さんのよくお遣りになる敬意の表示とやら奉仕とやらいふものも、決して他人に對する愛から出たものでなく、悉皆虚榮心から遣つてゐなさるのだ。だからまあソロモン王の云はれた通り、先づ人を愛しなさるがいゝ。さうすれば、お前さんも自然人から愛されるやうになりませうよ。」

こんな風にして、强情我慢な細君はその心を改めました し、又この青年も人を愛するやうになるや、忽ち人からも愛されるやうになりました。

第十話

ドン・ジアンニは茶飲み相手のピエトロの依囑に依つて、その妻を牝馬に變ずる呪文を唱へながら、將にその女に、尻尾を附けようとするところを、ピエトロが尻尾は不用だと叫んだために、魔術が臺なしになる話。

女王の話は淑女達の間にいくらか不平の種を蒔いたやうでしたが、若い男達は大笑ひに笑ひました。が、それ等の不平や笑ひの鎭まると共に、デイオネオが次のやうに語りはじめました。——

愛くるしい淑女方よ、多くの白鳩に交つた黑い鳥は、白鳥よりも一層鳩の美を發揮させるものであります。これと同じやうに、多くの賢い方々の中に交つてゐる一人の愚物はその賢い方々の見識に一段の光彩を添へるばかりでなく、又人の怡樂と興味とを增さしめるもので御座います。ですから、貴方方が何れも思慮分別の優れた方々である以上、私のやうな自己の裡に多少馬鹿げたところを保有してゐる者は、自分の缺點に依つて貴方方の完全無缺の德に一段の光彩を添へるものであるからして、貴方方にとつては、私の値打に依つてその完全無缺の德を暗くする場合よりも、遙かに快的なものでなければならない筈であります。それなればこそ、貴方方は、私があるがまゝの自己を發揮し得るために、十分な活動の範圍をお與へ下さらなければならないと共に、これから申上げようとしてゐるやうな馬鹿な話でも、一層の御辛抱を以てお聞き取り下さらなければならないかと存じます。處で、申上げたいお話といふのは、魔術の力で何事かを行はうとしてゐるものが指定したことは、すべて嚴密に守られなければならないこと、及び

少しでもそれに違反すれば、折角魔術師の仕遂げたことも一度で憂なしになるものだといふことを物語るもので御座います。

數年前のこと、バルレッタの市にジアンニ・デイ・バローロといふ牧師が住んでゐました。この牧師はたゞ一つの貧しい教區しか受け持つてゐなかつたもので、生計の補足にするために、自分の牝馬を連れてあちこち商品の運送をしたり、時にはアブリエン地方の市場のそこゝで品物を賣買するといつたやうなことを始めました。かうして諸方を歩いてゐるうちに、彼はピエトロ・ダ・トレザンティといふ、これも驢馬を連れて同じやうな商賣をして廻つてゐる男と大層親しくするやうになりました。そして、その親愛の情を表するために、アブリエン地方の習慣に從つて、彼はこの男を茶飲み相手のピエトロと呼んで居りました。

で、このピエトロがバルレッタの市に來るたびに、毎も牧師はこの男を牧師館に泊めて、出來るだけの歓待をするのを常としてゐました。一方茶飲み相手のピエトロも、もと〳〵至つて貧乏で、トレザンティの市にある住家とても、自分と若い美人の細君と、それから驢馬とがやつと這入れる位なものでしたが、それでもドン・ジアンニがその市へ來ると、屹度自分の家に泊めて、自分がバルレッタで受ける歓待の恩返しのつもりで、出來るだけの手厚い饗應をしました。處が、その家にはたつた一つの小さな寢臺がある切りで、それには自分が美しい細君のゼムマタと二人で寢ることにしてゐましたので、思ふやうにお客を優遇する譯にも參りませんでした。で、ドン・ジアンニは、自分の牝馬を主人の驢馬と一緒に小さな厩舎の中に追ひ込んでから、その牝馬の傍に少し許りの藁を敷いて、その上に寢るだけで滿足しなければなりませんでした。

ピエトロの妻は、牧師がバルレッタで毎も良人に示して呉れる歓待の段々を聞いてゐただけに、牧師が來ると、その都度自分はツイタ・カラズレーザ・デイ・ジウデイチエ・レオといふ近所の女の家へ泊りに行つて、牧師には良人と一緒に一つ寢床に寢て貰はうといふ氣になつて、折々この事を牧師に話しました。が、牧師は一向それを承知しないで、或時なぞこんな事を細君に申しました。「いや、茶飲み相手のゼムマタさん、どうぞわしのことは氣に懸けないで下さい。わしはあそこで結構だよ。と云ふのはね、氣が向くと、わしはあの牝馬を可愛らしい娘の子の姿に變へて、そいつと一緒に寢るのだからな。それから程のよい時に、又元の牝馬に返すのだ。さういふ譯であの馬とは、眞實のところ離れたくないのだよ。」

これを聞いて、若い細君は奇妙なことだとは思ひましたが、兎に角それを眞に受けて、後で良人にその話をして聞

かせた上、かう附け足しました。「それでね、お前さんの云ふやうに、ほんたうに牧師さんと仲よしだつたら、何故その呪文を教へて貰はないのだよ。そして、今の話とは逆に、私を牝馬にしてさ、驢馬と牝馬と二疋で豫藥をすればいゝぢやないか。さうなると、今迄の二倍の儲けがあらうと云ふものだからね。で、家に歸つて來たら、元の通りに、又私を女にすることも出來るぢやないの？」

いくらか鈍間に出來てゐたピエトロはすつかりこの話を信じてかゝつて、細君の言葉に大賛成の意を表しました。そして、一生懸命になつてドン・ジアンニにその遣り方を教へて呉れと懇望しました。

ドン・ジアンニは言葉を盡して、そんな馬鹿々々しい望みを思ひ止まらせようとしましたが、一向その甲斐がありませんでしたので、最後にかう申しました。「あんたが何うあつてもそれが望みだと云ふのなら、まゝいゝわ、それでは明日の朝、毎ものやうにわしも日の出前に起きませう。さうして、その時になつたら、何ういふやうにするものか、一つ教へて進ぜませうよ。だが、いづれ分ることだけれど、この魔術で一番むづかしいのは尻尾の附け方なんだよ。」

かうなると茶飲み相手のピエトロも妻のゼムマタも、その夜は一晩中まんじりともしませんでした。それ程明日の出來事が待ち遠しくて耐らなかつたのですね。で、二人は日の出前に起き上ると、早速ドン・ジアンニを呼び起しました。ジアンニは襯衣一枚で同じやうに起き上つて、茶飲み相手のピエトロ夫婦の部屋に這入つて來ました。そして、かう申しました「誰が頼んだつて、こんな事あ遣る氣になれないのだがね、他ならぬあんた方の強つてのお望みだから、わしも一つ遣つて見る氣になつたんだよ。だが、これをうまく行かせようといふには、わしの云ふことを嚴重に守つて貰はにやなりませんぞ。」

夫婦は勿論牧師の云ふことを守るつもりだと誓ひました。

そこでドン・ジアンニは燈火を取り上げて、茶飲み相手のピエトロに手渡ししながら、かう申しました。「さあ、わしの爲ることによく氣を附けて、わしの云ふことをよく覺えてゐるんだよ。それから、萬事仕損じのないやうにするには、どんなことを見たり聞いたりしても口を利かないやうにして、うまく尻尾が附くやうに神に祈つてゐるんだよ。」

茶飲み相手のピエトロは燈火を手に取つて、萬事云はれた通りにするつもりだと申しました。

そこでドン・ジアンニは（以下一行省略）同じやうにどんな事が起らうとも決して口を利いてはならぬぞと申し渡しました。さうして置いて、兩手で女の顔や頭を撫で廻しながら、「これが美しい牝馬の首になるやうに」と申しまし

た。それから同じやうに髪の毛に手を遣つて、「これが綺麗な鬢になるやうに。」次いで女の腕を撫りながら、「これが美しい前脚になるやうに。」處が、胸の方へ撫で下ろして、ふつくらと固い乳房に觸つた時には、（以下一行省略）が、ドン・ジアンニは澄したもので、「これが立派な牝馬の乳房になるやうに」と申しました。なほ進んで頸や腹や背中や腰や脚に觸つて見ては、同じやうに申しました。（以下五行省略）

茶飲み相手のピエトロはそれ迄一切の手つゞきを注意して見てをりましたが、最後のそれを見るに及んで、これはどうも有難くないことだと思ひましたので、思はず知らず、「ドン・ジアンニさん！　尻尾は要りませんよ！　尻尾は要りませんよ！」と叫びました。

（以下一行半省略）ドン・ジアンニは遠てゝ身を引きながら、かう叫びました、「まあ、ピエトロさん、何をするのです？　どんな事を見ようと、一切口を利いてはいけないと、あれ程云つて置いたぢやありませんか。もう一息で牝馬が出來上る處だのに、あんたが大きな聲を出すもんだから、すつかり豪なしになつてしまつた。と云つて、もう一度今日遣り直すことも出來ないんだからな。」

「いえもう澤山ですよ」と、茶飲み相手のピエトロは申しました、「あんな尻尾なら私は要らなかつたからね。貴方も何故これはお前がやれと云つて呉れなかつたのです？　それに、貴方の尻尾の附け方はあんまり深過ぎましたよ。」

ドン・ジアンニはそれに答へました、「だつて、あんたは始めてのことだし、わしのやうに巧くは附けられまいと思つたからさ。」

この爭ひを聞いてゐました若い細君は、立ち上つて、大眞面目で良人に喰つてかゝりました。「お前さんは馬鹿だねえ！　何だつてお互の得になることをかうして豪なしにしてしまつたんだよ？　尻尾のない牝馬が何處の國にあるんだい？　あゝあ、お前さんは今だつて貧乏だが、この上貧乏するがいゝやー　本當に困りものだよ。」

さてピエトロの云つた一語のために、細君を牝馬にする方法もなくなりましたので、細君はぶつくさ云ひながら、不機嫌さうに再び衣裳を着けました。その後茶飲み相手のピエトロは、從前通りに、驢馬をつれて例の稼業を續けながら、ドン・ジアンニと一緒にビトントの市場にも遣つて來ました。が、もう二度と牧師の魔術を見せて貰はうとはしませんでした。

この話を聞いて、一同の者がどんなに笑つたかは、これを讀んで笑ふ讀者の容易に想像し得るところで御座いませう。で、今や悉く話が終ると共に、太陽も鈍色に染つてまゐりました。すると、女王は自分の支配の終局になつたことを認めまして、立ち上ると共に王冠を頭から外して、それ迄一度もこの光榮に與からない唯一人であつたパムフイロの頭にそれを載せました。そして、微笑を含みながら申しました。「國王陛下、陛下は最後の支配者として、私の缺點は申す迄もなく、これ迄陛下と同じ地位に卽かれた凡ての人達の缺點をも償つて頂かなければならないだけに、陛下の責任は洵に重大なものがあるので御座います。では御座いますが、陛下を私達の王として戴く惠みを神が私達に與へ給うたと同じやうに、どうか陛下に措かせられても、神の御惠に依りまして、その重任を見事にお果し遊ばされることを神かけて祈ります。」

パムフイロはこの光榮を喜んで受諾すると共に、かう申しました、「皆さんの德性と他の臣下どもの忠誠とに由りまして、私も亦他の方々と同樣に稱讃を博し得るものと信じます。」それから前任者達の仕來りに從つて、執事と然るべく相談した上、待ち構へてゐた淑女達の方へ向き直つて、次のやうに申しました。——

「皆さん、今日は私達の女王でありましたエミリアさんの寛容に依りまして、貴方方は自分の力に幾分の休養を與へるために、各自隨意の話題を持ち出す自由を與へられてゐられました。處で、皆さんも今や十分に休養されたやうに思はれますので、再び從前通りの規約に立ち歸るのが妥當かと考へます。就きましては、明日は次のやうなお話を豫めお考へ置き下さることをお願ひ致したい。卽ち戀愛若しくはその他の事柄が動機になつて、寛量若しくは仁義の心を發揮するに到つた人達のお話であります。かういふ話をいたしますことは、本來善に傾いてゐられる皆さんの靈魂を高尙な行爲に燃え立たせて、いづれは死すべき脆い肉體に宿つてゐる束の間の生命を光輝ある榮譽に依つて永遠化するよすがともならうかと思はれるので御座います。處で、この生命を永遠化するといふことは、獸類と同じやうに、たゞ單に口腹にのみ奉仕することを敢てしないやうな人であれば、何人と雖もそれを欲求するばかりではなく、多大の熱心を以てそれを探し求め、全力を盡してそれを獲得しなければならない處のものを御座います。」

この話題は一同の者に歡迎せられました。で、一同は新しい王の許しを得てその席を立つと、各自好む處の娯樂に赴いて、それを晩餐の時刻まで續けました。そして、晩餐には一同楽しく寄り集ひまして、痒い所へ手の屆くやうな饗應を受けましたが、やがてその食事も濟むと、每ものやうに舞踏をはじめました。それから優れた歌曲と云ふよりも、寧ろ歌詞それ自身が面白いやうな小唄が二三唄はれた後、王はネイフイレに向つて獨唱を命じました。そこで彼女は朗らかな澄み切つた聲で次のやうに唄ひました。——

われまだ年の若ければ、
青春の秋ぞ樂しけれ、
讃めよたゝへよ戀と追憶。

緑の牧場われ行けば、
黄赤白の千々の花、
棘もつ薔薇や百合の枝。
思ひを懸けるかの君の
顏にたとへん園の花。
君の美德にほだされて、
君故生くるわが身かな。

かの面影を偲ぶべき、
花たにあれば摘み取りて、
口づけしつゝ、俯向きて、
胸の祕密をかくしかね、
打語らひぬわが心。
さてその花を輪に編みて、
黄金の髪に纏ふなり。

牧場の花の樂しさに、
われの心は、かの君を、
思ひそめたるかの君を、
目のあたり見る心地なり。
花の香に醉ふ夢心地、
輝る言葉もわれ知らず、
溜息にこそそれと知れ。

わが身に絶えぬ溜息は、
よし世の人は厭ふとも、
われなつかしきものにして、
いとしき君の頰を吹き、
かの君それと悟りなば、
たゆたふことなく駈けて來らん、
「見殺すなかれ」とわれの喚ぶ時。

王を始めとして淑女達は大層ネイフイレの歌を稱讃しました。が、夜も可なり更けましたので、王は一同の者に命じて明朝までの休息に就かせました。

第十日

王のパムフイロが床を出て、淑女達や紳士達を喚び起させた時には、東方の雲こそ將に昇らうとしてゐる太陽の光にその縁を黄金色に染めてゐましたが、西方ではまだやつと二三の雲片がちよい〳〵赤味がゝつてゐるばかりで御座いました。で、一同が集まりました時、王は樂しい散歩の場所に就いていろ〳〵相談しました上、フイロメーラとフイアメッタを先頭に立てて出發しました。他の人達も一人殘らずその後に續きました。そして、頗りに自分達のこの後の生活法について語り合ひながら、長い間ゆる〳〵と散歩して廻りました。が、さうしてあちこち歩いてゐる間に、太陽も強く照り初め、暑さも加はつて參りましたので、一同は再び館に引返しました。そして、清らかな泉を周つて寄り集ひながら、手に〳〵清冷な水を掬んで咽喉を潤はせた上、一同懷かしい木蔭に身を寄せて、食事の時間が來る迄、休息しました。

朝の食事が濟んで、毎もの通りしばらく休んでから、一同は王の指定した場所に集まりました。そこで王はネイフイレに向つて、最初の話しをするやうに命じました。ネイフイレは快活な調子で語り始めました。——

第一話

或る騎士、西班牙王に仕へてゐたが、日頃から報いられることの甚だ厚からざるやうに思つてゐた。そこで王は、それが自分の罪でなくて、寧ろ相手の不運の致す所であることを實證して、その後彼を豐かに報いた話。

皆樣、寛大な行爲の物語といふやうな、極めて重大な話題を課せられた日に際して、王樣が私に先頭の役目を御下命になりましたことは、私の並々ならぬ光榮と考ふるところで御座います。と申しますのは、かの太陽が宇宙の裝飾でもあり光輝でもあると同じやうに、この寛大の德といふものこそ他の凡百の美德の光りであり輝きであると思はれるからで御座います。そこで私は、先づ面白くもあれば、お聞きになつて必ずお利益にもなると思はれるやうな、一つの短いお話を申上げたいと存じます。

さて本題に移りまして、古來私達の故郷のフローレンスに住んでゐました多くの勇敢な騎士のうちに、恐らくは最も尊敬に値ひする人かと思はれますルギエリ・デ・フイジオ

ヴアンニといふ者がありました。この騎士は金もあり、志も大きかつただけに、つく〳〵世の中を見渡しまして、トスカーナ地方の巨習では、よしそこに永く住んでゐても、自分の勇氣を示すやうな機會は、滅多にといふよりも全くあるまいと考へまして、その當時勇名遙かに諸國の王侯を凌いでゐられました西班牙王アルフオンゾ陛下の許に隨身して、暫くそこに滯在しようと決心いたしました。そこで立派に武裝をして、馬に跨つて從者を引き連れ、威風堂々と王の膝下西班牙の地に遣つて參りました。そして、王からも隔意なく迎へられました。で、暫くその地に滯在しましたが、その間に華やかな生活振りや見事な武藝の技のために忽ち名譽の騎士として世間からも認められるやうになりました。

處で、ルギエリも既に相當の年月こゝに滯在して、注意深く王の所業を觀察してゐるに、どうもこの王は隨分好い加減に城だの、都市だの、采邑などをこの人間あの人間に與れてやるばかりか、時には全くさうした恩典に値ひしない人々にまで振り蒔いてゐるやうに思はれて來たのですね。而も自己の眞價を信ずることの篤いこの有爲な騎士には、何一つ與れようとしないのを見て、こんな事情では自分の名聲にも係ることだと思ひましたので、再び何處かへ行かうと決心しまして、改めて王にお暇を願ひ出ました。

王は彼に暇をくれた上、それ迄見たこともないやうな、いとも見事な騾馬を一頭賜はりました。この先長途の旅をしなければならないルギエリ氏の身にとつては、これは實際得難い賜物であつたのですね。で、その後から、王は別に恩顧ある家來を呼び寄せて、彼自身が見て適當だと思はれる方法で、然るべく準備をしてルギエリ氏と一緒に旅をするやうに、しかも王の廻し者であることは氣取られないやうにして、相手が王のことを何と云ふか、よく注意して聞いて置いて、後で報告するやうに、なほその次の日にはルギエリ氏に向つて再び王の許へ立ち歸ることを命ずるやうにと申し附けました。家來は委細畏承つて、ルギエリ氏がその市を立ち出づるや、自分も亦伊太利へ旅をするやうな振りをして、用心をしい〳〵旅の道伴侶になりました。

ルギエリ氏は王から賜はつた騾馬に乘つてゐました。で、四方山の話をしながら行くうちに、朝の九時頃になりましたので、彼は相手に向つて申しました。「どうでせう、一つ馬の脚を休ませた方がいゝやうに思ひますがね。」

で、二人とも厩舍に遣つて來ましたが、他の馬は皆厩舍に這入りましたけれども、ルギエリの騾馬だけはどうしても這入らうとしませんでした。それから又二人は旅をつゞけながらも、召使は絶えず騎士の一語々々に注意してゐました。そのうちに或河の畔に出て參りましたので、二人は

馬に水を飲ませようとしましたが、例の騾馬はどん〳〵川の中へ這入つて行つて、そこに横になつてしまひました。ルギエリ氏はこれを見て、思はずかう叫びました。「畜生！仕樣のない奴だな。貴樣は宛然貴樣を俺に與れた御主人のやうだよ。」

例の召使はこの言葉を聞き漏らしませんでした。それからも一日中ルギエリ氏と一緒に馬を進めながら、なほも注意深く相手の言葉を心に留めてゐましたが、その口にする言葉はたゞ王に對する最高の讃辭の外にありませんでした。

で、明くる朝馬に乘つて、再びトスカナに向つて旅をつづけようとした時、王の家來はルギエリ氏に王の命令を傳へました。それを聞いて、ルギエリ氏は即座に馬の首を立て直しました。

王は眞先にルギエリが騾馬に向つて云つた言葉の報告を受けましたので、直ぐさま彼を喚び出して、親しげに迎接しながら、何故王を騾馬に、或ひは騾馬を王に譬へたのかと訊ねました。

すると、ルギエリ氏は腹藏なくそれに答へました。「陛下、私が陛下を騾馬に譬へました理由はかやうで御座います。あの騾馬は、恰度陛下がそれだけの理由のない場合に物を賜はり、それだけの理由のある場合に物を賜はらないのと同じやうに、休むべき時に休まうとしないで、休むべからざる時に休まうとしたからで御座います。」

そこで王はかう仰せられました。「ルギエリよ、お前に比較して何一つ勝れたところのない多くの者に與れた程にも、お前に褒賞を取らせなかつたのは、わしがお前のいかなる褒賞にも値ひした立派な騎士であることを認めなかつたからでない、たゞお前を適當に褒賞することの出來るやうな、恰度いゝ機會がなかつたからなのだ。つまり責任はそこにあるので、わしの關知したことではないのだ。わしの言葉に間違ひのないことは、早速手に取るやうに證明して見せようよ。」

「陛下」と、ルギエリは答へました。「私は陛下から褒賞を頂戴しないと云ふので悲しんでゐるのでは御座いません、別に物を頂戴して富を作らうとは思つてゐませんからね。たゞ私としては、陛下が少しも私の功績を表彰して下さらないのが心外なので御座います。しかし陛下の釋明は誠に正々堂々たるものだと乍憚存じ上げます。從つて陛下のお言葉を信ずるのに別段證據を必要とする譯では御座いませんが、陛下のお氣に召すことなれば、何なりとも見せて頂くことに致しませう。」

そこで王は彼を大廣間に連れて行きましたが、そこには豫め命令して置いたやうに錠の下りた大きなトランクが二

つ置いてありました。王は多くの家來どもの面前で、かう相手に申しました。「ルギエリ、このトランクの一つには、わしの王冠、王笏、地球儀、それから黄金造りの見事な革帶、留め金、指環などを始めとして、凡そわしが持つてゐる限りの高價な寶石が入つてゐる。處が、もう一つのトランクには、たゞ泥が一杯詰つてゐるばかりだ。さあ、この中の一つを選ぶがいゝ。お前が選んだものは、お前のものとしよう。さうすればお前の功績に對して不公平であつたのはわしであるか、それともお前の運であるかがよく解るだらうからね。」

ルギエリは、王の命ぜられるまゝに、トランクの一つを選んで取りました。王は相手に命じてその蓋を開けて見させました。處がそれは泥の一杯詰まつた方で御座いました。

そこで王は機笑を含んで仰せられました。「さあどうだ、ルギエリ、お前の運に就いてわしの云つたことの眞實なのが今こそ解つたらうな。だが、お前の優れた點は、確にわしからしてお前の運命に不服を唱へて見るだけの値打があるよ。わしはお前が西班牙人になる氣のないことを知つてゐるから、今更城や市を與へてお前を引留めようとは思はない。たゞ運命がお前から奪つたそのトランクを贈物としよう。そのトランクはいはゞ運命への面當てにお前のものとするがよい。お前はそれを携へて祖國に歸つた上、わしの下賜品を證據として、お前の功績を十分にお前の同國人の前に吹聽するがよからう。」

ルギエリは有難くそれを頂戴しまして、かうした貴い贈物に應はしい感謝の言葉を述べた後、喜んでトランクを携へて故郷トスカナへ歸つて參りました。

第二話

ギーノ・デイ・タッコはクリニーの僧院主を捕へて、その胃病を治療してやつた上、これを放免する。僧院主は羅馬の法王廳に歸つて、ギーノと法王ボニファチウスと和解せしめ、且つギーノを慈惠團の騎士にする話。

フローレンスの騎士に對するアルフオンゾ王の寛量は、一同の稱讃を博しました。王も亦この話に大層興味を覺えましたが、やがてエリザに向つて、次の話に移るやうに命じました。彼女は直ぐ語りはじめました。——

皆様、王者が寛厚であつて、自分に仕へて呉れた人に對してその大量を示したとしましても、それは取立てて偉大な行爲とも、又稱賞すべき事柄とも申されますまい。けれども、こゝに一人の僧侶があつて、誰から見ても正に敵視して然るべきやうな相手に對して驚くべき寛量を示したとしますれば、一體私どもは何と申したら宜しう御座いませう？　眞個、西班牙王の行爲は士君子に應はしいものであり、この僧侶のそれは驚嘆に値ひするものだと云つて然るべきだと存じます。殊に一般の僧侶が女よりも吝嗇でありまして、寛容といふことを親の敵のやうに憎んでゐるだけに、いよ〳〵以てさうだと申さねばなりますまい。それに誰しも生れつき自分の受けた侮辱に對して復讐の念を燃すものでは御座いますが、皆さんも御承知の通り、僧侶といふものは、平生口に忍耐を說き、侮辱を宥すことを讃美してゐながら、その實、俗人以上に烈しい復讐の念に驅られがちなもので御座います。然るに、この僧侶は何んなに寛量で御座いましたらう？　それをお知りになりたければ、どうか次の話をお聞き取り下さいませ。

昔ギノ・デイ・タッコといふ男が御座いましたが、慘忍刻薄で掠奪を恣に致しましたために、當時惡名が天下に轟いてゐました。シエナの市を追放されましてからは、サンタ・フイオーレの伯爵の敵となつて、ラデイコフアーニの市民を唆かして羅馬教會に叛かせ、自分はその市を根城に構へて、部下の賊徒をしてその附近を旅する旅人邏を、或ひは捕へ或ひは掠めさせてゐました。

恰度その頃はボニファツイウス八世が羅馬法王の位に即いてゐましたが、國中の一番富裕な大僧正だと噂の高かつたクリーニの僧院主が或時法王廳に伺候しました。羅馬に滯在中僧院主は恐ろしく胃を痛めまして、醫師からもシエーナへ湯治に行くことを勸められました。そこに行けば、屹度全癒するだらうといふので御座いますね。法王もそれを許されましたので、院主はギノの噂などあまり氣にもしないで、美々しい服裝を着け、駄馬、乘馬、從者などの行列を仕立てて、華々しく出發しました。

ギノ・デイ・タッコは僧院主の到着を耳にしますと、直ぐさま網を擴げて、荷擔ぎの子供一人すら逃さないやうに、院主を始めとして、その供廻りや荷物の一切を街道筋の一箇所に包圍しました。

かうして置いて、ギノは部下の一人であつた極めて老獪な男を、院主の許に遣はしまして、枉げてギノの城へお立ち寄り下さいますやうにと、極めて鄭重に傳へさせました。

僧院主はそれを聞くと、大層立腹しまして、ギノとは何の係りもないから、そんな事はしてゐられない。こちらは旅を急ぐ身だ。それを邪魔立てする者があつたら、お目にかゝりたいと返答に及びました。

すると、使者はいかにも謙遜したやうな調子でそれに應へました。猊下、猊下はこゝを何處だと思召すか存じませんが、私どもに取つては、神の全能以外に、何一つ恐ろしい

ものもなければ、又世の所謂破門だの禮拜禁止だのと申すことも疾くの昔に破門された場所へお出でになつたので御座いますよ。ですから、まあ枉げてギノの願ひを叶へてお遣り遊ばす方が乍憚お身のためかと存じられます。」

こんな押し問答をしてゐるうちに、早くもそのあたりは盜賊の一團に包圍されてしまひました。僧院主は從者諸共捕はれたと知つて、藥を煮やしながらも、件の使者と一緒に供廻りを引連れてギノの城へ遣つて參りました。そこで馬から降りると、僧院主はギノの命令に依つて、たゞ一人薄暗い不愉快な小さな一室へ案内せられました。が、從者どもはそれ〴〵その地位相當に居心地のよい部屋を宛てがはれ、又馬や荷物なども少しも手を觸れないで、その儘安全な場所へ納められました。

それからギノは、それ迄院主と面識がなかつたのを幸ひ自分でその前に出て、かう申しました。「猊下、主人ギノの申しますには、猊下は何處から何處へお通りで、又何ういふ御用でお出向きになりましたか、お差支へがなければ仰せ聞けられたいとのことで御座います。」

僧院主は元來分別のある人で御座いましたので、尊大振つた風は少しも見せないで、その男に自分の行く先と目的とを打明けました。

ギノはこれを聞いて、一先づ引退りましたが、一つ湯治なしでこの院主の病氣を癒して見ようとひとり決心致しました。で、院主の部屋に絶えず火を燃して、よくそれを見守つてゐるやうに命令して置いて、その儘明くる朝まで院主の前に顏を出しませんでした。明くる朝になりますと、彼は雪白の布に二片の燻麵麭と院主の持つて來たコルニリヤの白葡萄酒を盛つた大盃を載せて、それを持つて院主の前に出て、かう申しました。「猊下、ギノは若年の頃醫術を學んだことが御座います。で、主人は、胃病にはこれから猊下のために自分の調劑する藥程利く藥は決して他にないと申してゐるので御座います。只今これへ持參致しましたのは、その最初のもので御座いますから、どうぞ召上つて十分に御養生遊ばして下さいませ。」

院主は何分にも空腹を覺えて口論する氣にもなれませんでしたので、その扱ひを不愉快には思ひましたものゝ、先づ元氣を附けるつもりで、麵麭を喰べ葡萄酒を飲みました。それからそろ〳〵尊大な口を利きかけて、さま〴〵な事柄を訊ねたり、あれこれと助言を與へたりしましたが、最後にギノに逢ひたいと、特に要求しました。

ギノは始終それを聞いてゐましたが、一部は下らないこととして聞き流しにすると共に、他の一部には鄭重な返辭をいたしました。そして、都合さへ附けば、主人も直ぐさま伺候するだらうと申しました。さうして置いて、逃げるやうに、その部屋を引退りました。それから明くる朝になつて、始めて又昨日と同量の麵麭と葡萄酒とを持つて現れました。かうして幾日かの間同じ事を續けてゐましたが、或日彼が窃かに持つて來て、わざと殘して行つた二三粒の乾豆を院主が喰べてしまつたのを見て、ギノからの言傳だと云つて、胃の具合がどうかと、改めて訊ねて見ました。

すると、院主はそれに答へました。「これで御主人の手から逃れさへすれば、私ももう何一つ申分はないでせうよ。だが、それに次いで私の切に欲しいものは他ならぬ喰べ物ですね。御主人の療法がそれ程よく利きましたよ。」

ギノはその間に僧院主所持の道具やその從者どもを使つて立派な部屋をしつらはせ、大宴會の準備をさせました。そして、城内の多くの人々の外に、院主の從者どもを悉く招待して置いて、さてその翌日になりますと、院主の前に伺候して、「猊下、猊下の御病氣も御全快のやうに見受けますから、最早病室をお出になつても差支へないかと存じます」と申しました。それからその手を取つて、かねて用意の一室に案内して、院主の從者どもと一緒にそこに殘して置いたまゝ、自分は宴會の準備の出來榮えを見分に來ました。

院主は暫時の間從者どもと樂しく語らひながら、これ迄自分の經て來た生活の模樣を一同に話して聞かせました。それに對して、從者どもは自分達が非常に行き屆いた待遇を受けたことを斷言しました。で、いよ〳〵食事に移りましたが、院主を始めとして一同の者は順を追うて素晴らしい食事と優れた酒との饗應に預りました。が、ギノは未だ院主の前に名乘つて出ませんでした。

かうして院主はなほ幾日かの間城中に滯在してゐました。或日ギノは廣間に院主の荷物を悉く揃へさせ、中庭にはその乘馬を見すぼらしい痩馬に至るまで一頭殘らず並べさせて置いてから、院主の前に出まして、相手の容體を伺つた上、果して乘馬に堪へられるかどうかを訊ねました。

僧院主はそれに答へて、もはや十分元氣も恢復したし、胃もすつかり丈夫になつた。この上はもうギノの手から逃れさへすれば、何一つ云ふ所はなからうと申しました。

そこでギノは院主を案内して、その荷物と從者一同を集めてある廣間へ參りました。そして、中庭に並んでゐる凡ての乘馬を一目に見渡すことの出來る窓際に歩み寄らせた上、かう申しました。「院主猊下、改めて申上げますが、ギノ・デイ・タッコは誰でもない、この私で御座います。もともと貴族に生れましたが、家鄉を追放され、貧に迫つた上に、多くの手強い敵を持つてゐますので、何時しか剽盜を生業として、羅馬法王の仇敵とまでなりましたやうなものの、辛じて自己の生命と地位とを守つてゐるばかりで、決

して生來の兇惡のためにかうなつたのでは御座いません。それに、猊下は尊敬すべき方のやうに見受けますので、猊下の胃病をお癒し申上げた私は、決して猊下に對して餘人に對するとの同じやうな振舞に出ようとは思はないので御座います。これが餘人でしたら、只今の猊下のやうに私の掌中に陷られた以上、必ず私の欲するまゝに掠奪しなければ措かないので御座いますがね。が、その代りには、猊下も私の窮乏をお察し下さいまして、お荷物の一部を猊下御自身でお取り分けの上、お渡し下さるものと考へて居ります。猊下のお荷物は全部お目の前に取り揃へて御座います、又お馬も御覽の通り一疋殘らず中庭に揃つて居ります。どうぞ猊下のお氣のまゝに全部なり、又その一部分なりをお取り下さいませ。で、これからはお立ちになりませうが、又御滯在になりませうが、その邊は一切御意のまゝになすつて結構で御座います。」

剽盜からかうした氣高い言葉を聞かされて、院主は少なからず面喰ひました。同時にすつかりそれに感心しまして、これ迄心に抱いてゐた憤怒や不機嫌が倏忽として消え失せたばかりか、悉く好意に一變しました。今や彼は心からギノの友達になつて、いきなり駈け寄つて相手を抱きながら、かう申しました。「神かけて誓ふがね、私は君のやうな人物の友達となるためなら、君から受けた非道——今ぢや決してさうは思つてゐないのだがね、——その非道よりも遙かに大きな非道でも、喜んでそれに堪へるだらうよ。かうした厭ふべき所業に、君を追ひ遣つた運命こそ呪はれてあれだ！」そこで院主は自分の荷物と馬との中から極く少量の必要なものだけを選び出して、殘餘は悉くギノに讓つて置いて、再び羅馬へ歸つて參りました。

法王は既に院主が捕へられたことを耳にして、大層氣の毒に思つてゐましたが、院主が歸つて來た時には、湯治の效果はどうかと訊ねました。

すると、院主は微笑を含んでそれに答へました。「法王猊下、溫泉に着く前に、ある名醫に出逢ひまして、見事病氣を癒して貰ひました。」それに續いて、彼は更に詳しい話を致しました。法王はそれを聞いて心から笑ひました。が、院主はなほも言葉を續けながら、法王に向つて、この名醫の氣高い心ばへに應はしいやうな恩惠を垂れられむことを願ひました。

法王は相手が何か他の事を望んでゐるのであらうと思ひましたので、そこ許の云はれることなら、何でも叶へて進ぜようと申しました。

そこで院主は申しました。「法王猊下、お願ひ申すことと申しますのは、私の醫者であるギノ・デイ・タッコに再び御恩寵を垂れさせられることで御座います。と申しますのは、今迄私の知つた勇敢で尊敬に値ひする人物の中でも、あのギノ・デイ・タッコこそ最も優れた一人で御座いまして、彼の犯した惡事と申しましても、その責任は彼自身にあると申しますよりも、寧ろ彼の不運にあるやうに考へられるからで御座います。ですから、若しその地位相當に尊して行かれるだけのものを彼にお惠み下さいまして、その運命に一轉向をお與へ下さいますなら、猊下も亦忽ち彼に對して私と同樣なお考へを抱かせられるやうなことは、私の信じて疑はない處で御座います。」

法王はそれを聽かれた時、元來が非常に寛大な心の持主でありましただけに、若しギノが院主の云ふ通りにそれに値ひする人物なら、喜んでさうしよう、就いては安全な護衛を附して、一度ギノを羅馬へ來させるがよからうと申されました。

ギノは、些の疑ふところなく、僧院主の希望に應じて、法王廳に伺候いたしました。法王はこの男を見て、一目に相手の立派な騎士であることを知りましたので、彼と和解した上、改めて慈惠團の騎士に任命すると共に、修道院主の地位を與へました。彼はこの地位を神聖羅馬教會及びクリーニの僧院主の友人且從僕として、一生涯守り通しました。

第三話

ミトリダーネスはナータンの物惜しみせぬ寛量を妬んで、相手を殺害しようと思ひ立つた。たま〳〵ナータンに出逢つたが、その何人なるかを知らないで、却て、相手からナータンを殺害する方法を教へられた。で、云はれた通りに、或森林でナータンに出逢つたけれども、相手のその人であることを知つて深く心に恥ぢ、その友人になつた話。

只今聞いたやうな話、つまり僧侶が寛大な行爲に出たといふやうなことは、一同にとつて全く奇蹟を聞くやうな思ひがいたしました。が、それに關する淑女達の甲論乙駁も終りましたので、王はフイロストラトーに命じて、次の話に移らせました。フイロストラトーは直ぐに語りはじめました。——

皆さん、かの西班牙王の寛量は勿論偉大であり、クリーニの僧院主のそれに至つては、殆ど前代未聞と申しても宜しい程で御座います。しかも、或男が自分の血、恐らくは自分の生命すらも狙つてゐる他の男に寛量を見せようとして自ら進んで身命を危地に陷れ、若し相手が甘んじてそ

れを容れたとすれば、實際その生命を奪れて遣つたらうと思はれるやうな話をお聞きになりましたら、これ又同じく奇蹟を見る思ひをされることで御座いませう。以下、私はそれに就いて手短かにお話し申上げようと存じます。

二三のジエノア人やその地方に住んでゐた人々の話を信ずることが出來るとしますれば、カタイオといふ地にナータンと稱ばれる貴族で、その當時にあつては比肩する者もないやうな富裕な紳士の住んでゐた事は疑はれない處で御座います。ナータンは或國道に近く地所を持つて居りましたが、その國道は西から東へ、又は東から西へ旅する者の是非とも通らなければならない街道筋に當つてゐました。處で、彼はもと寛大な物惜しみをしない性質でしたし、それに自己の行動に依つて名を成さうと考へてゐた處から、自分の使つてゐた多くの棟梁どもの手で、忽ちのうちにそこへ曾て見たこともないやうな壯麗極まる邸宅を建てまして、貴人の接待にも事缺かぬやうな、あらゆる家具をそれに備へ附けさせました。それに多くの雇人を使つてゐましたこととて、その街道を往來する人を誰に限らず極めて懇ろに款待しました。かうして永い間この美しい習慣を續けてゐましたので、宮に東方の伊太利ばかりでなく、西方の諸國にも、到る處彼の名聲は知れ渡りました。

その間に彼もだん〳〵年を取つて參りましたが、それでも一向飽かないで客の款待に力めましたので、終にその名聲は彼の鄕國から程遠からぬ地方に住んでゐたミトリダーネスといふ青年の耳にも入りました。この青年は自分もナータンに劣らぬ分限者だと信じてゐましただけに、ナータンの名聲や美德を大層妬ましく思ひまして、自分も一つより以上に氣前のいゝ所を見せて、相手の名聲を貶すか、さなくともその影を薄くしてやらうと決心しました。そこでナータンのそれにも劣らない立派な邸宅を建てまして、それこそこれ迄にない思ひ切つた款待振りを見せて、そこを往來する人々を饗應し始めました。で、彼も亦忽ちのうちに名聲を天下に轟かすやうになりました。

處が、或日のこと、この青年が一人で邸の庭に立つてゐますと、その庭の木戸の一つを押し開けて、一人の貧しげな女が這入つて來ました。そして、施物を乞うて、型の如くそれを貰ひ受けました。すると、その女は再び第二の木戸から這入つて參りまして、もう一度施物を受けました。かういふ風にしてとう〳〵十二度同じことを繰り返しました。處が、女が十三度目に遣つて參りました時、ミトリダーネスはかう申しました、「お前は大層乞食に熱心だな。」が、さうは云ひましたものゝ、施物だけは矢つ張り與れて遣りました。

老婆はこの言葉を聞いて、かう申しました。「あゝ、これを思へば、ナータン樣の氣前のよさは、何と申上げたらいいでせうね！　あの方のお邸にも、こちら樣と同じやうに、二十二の戸口が御座いますよ。わたしはそれを一つ一つ這入つて行つて施物をお願ひ申しましたが、一度だつてあの方に見咎められたことは御座いませんでした。えゝ、そんな氣振りさへ見せないで、その度に何かを頂戴しました。處が、こちらではたつた十三遍しか參りませんのに、もう見咎められた上、お叱りを頂戴しましたよ。」かう云ひながら、老婆は出て行きましたが、それ限り姿を見せませんでした。

ミトリダーネスは老婆の言葉を聞いて、ナータンの名聲について云はれたことは、その儘自分の名聲を毀損するものであるやうに思ひました。そして、燃えるやうな憤怒に驅られながら、かう叫びました。「俺はまあ何といふ不幸な人間だ？　こんな小事に於てさへ、ナータンの氣前の好さに迫つ附かれないとしたら、一體、何時になつたら大事に於て彼と肩が並べられるのだ、況して俺の思つてるやうに、相手を凌駕することは何時出來るといふのだ？　實際、彼奴を無いものにでもしない限り、俺の努力も無駄だと思ふ外ない。さうだ、彼奴が老齡のためにこの世を去らない以上、俺のこの腕で早速遣つつけてやるぞ。」

彼は荒々しい權幕で立ち上りました。そして、誰にも自分の決心を告げないで、僅かばかりの從者と共に馬に跨つたまゝ、三日目にナータンの住んでゐる地方へ到着しました。そこで先づ從者どもに自分の從者でもなければ、從つて自分とは少し一面識のないやうな振りをして、今後更に自分から何かの便りがあるまで宿でも捜して待つてゐるやうに命じて置いて、彼は夕方近くいよ〳〵相手の邸へ乘り込んで參りました。そして、たゞ一人駒を進めてゐるうちに、その壯麗な館に近く、質素な衣裳を着けたまゝ、これ又一人で散歩をしてゐたナータンに出逢ひました。ミトリダーネスは素より彼を知りませんでしたので、その男にナータンの邸はどこかと訊ねました。

ナータンは親しげな調子でそれに答へました。「お若い方その事ならこの界隈ぢや私位よく知つてゐるものは他にありませんよ。宜しければ、直ぐにも御案内申しませう。」

青年はそれは願つてもないことだが、しかし出來ることならナータンに姿を見られたり又は身の上を知られたりしたくないのだと申しました。

「その方が御都合が宜しければ」と、ナータンは答へました、「さう致しませう。」

そこでミトリダーネスは馬から降りて、ナータンと一緒に、何時の間にか親しい話しを交はしながら、その家に到着しました。すると、ナータンは一人の召使に命じてこの

青年の馬を曳いて行かせながら、急に聲を落して、自分がナータンだといふことをこの青年に知られないやうにせよと、家中の者に傳へるやうに吩咐けました。勿論、それは直ぐさま命令通りに傳へられました。で、二人が屋内に這入つた時、ナータンはミトリダーネスを大層立派な部屋に通しました。そこへはお客の接待を命ぜられた者の外には何人も出入りしないことになつてゐたのですね。で、ナータンはこの青年を極めて鄭重に款待させながら、話し相手には自分がなることにしました。處で、ミトリダーネスは暫く話してゐるうちに相手を父の如く尊敬するやうになりましたが、兎に角相手の誰であるかを訊ねて見ました。

ナータンはそれに答へました。「私はナータン樣の卑しい下男に過ぎないのですよ。子供の時から一緒に成長して、一緒に年を取りましたが、御覽の通りの下男以上に一向取り立てても呉れないのでさ。まあ、そんな譯で、人樣は大層主人をお褒めになりますが、私はあんまり褒める氣にもなれないので御座いますよ。」

この言葉を聞くと、ミトリダーネスは、これはうまい男を見附けた、この男を捕まへて相談すれば、例の怪しからぬ計畫も一層的確に遂行することが出來さうだと思ふやうになりました。そんな事とは知らないから、ナータンの方でも、丁寧に相手の名前と何ういふ用向きで當地へ遣つて來たかを訊ねた上、自分の力に適ふことなら、何なりとも助言と助力を惜しまないつもりだと云ひ出したので御座いますね。ミトリダーネスは一寸返答に躊躇しましたが、とう〳〵打明けて見ようと決心しまして、いろ〳〵と廻り冗い前置をした後、先づ固く祕密を守つて呉れるやうに、それから何分の援助を頼むと云つて置いてから、始めて自分の姓名や、當地へ來るやうになつた動機を一つ殘らず打明けました。

ナータンはこんな話やミトリダーネスの殘虐な計畫を耳にして、内心少なからず驚駭しましたものゝ、大して躊ひもしなければ、泰然として顏色一つ變へないで、それに答へました。「ミトリダーネス樣、貴方の阿父樣は立派な方でした。貴方がお話しのやうに人樣に對して寛大であらうといふ御決心をなされましたのも、想ふに阿父樣に劣るまいといふお考へから出たことで御座いませう。いや、それなればこそ、私も主人の美德に對する貴方の嫉妬を無理からぬこととと感服してゐる次第で御座います。何故と申すに、さういふ嫉妬が幾度も繰返されてゐるうちに、この慘酷な世の中もだん〳〵住み好いものにならうといふ譯ですからね。只今お話し下さいました御計畫は申すまでもなく祕密にして置かなければなりませんが、私としては、それに對して力をお藉し申すといふよりも、お言葉添へ位が精々だらうと思ひますよ。まあ、お聞き下さいまし、この邸から半哩程離れた所に小さな森が御座いますが、ナータン樣は毎朝のやうに一人でそこへお出掛けになつて、長い間散歩をなさいますよ。彼處なら譯なくあの方にお逢ひになれませうし、又お望み通りにすることも出來ようかと存じますがね。で、いよ〳〵相手をお倒しになつたら、最初入らしつた時の道でない、森の左の方に通じてゐる小路をお取りになれば、邪魔も這入らないで、無事にお國へお歸りになられますよ。尤も、その道は少しばかり嶮岨では御座いますが、それでもお國への近道でも御座いますし、又一番安全でもあるんですからね。」

ミトリダーネスは、この指圖を受けた後間もなくナータンも出て行きましたので、恰度この附近まで入り込んでゐた自分の從者どもに、明日はこれ〳〵の場所で待つてゐるやうにと、用心深く内密で知らせて置きました。

明くる朝になりますと、ナータンはミトリダーネスに與へた言葉添へを少しも違へようとはしないで、あれ以來微塵も動かない固い決心の下に、一命を捨てようとして、ただ一人例の森へ出掛けて行きました。

ミトリダーネスも起き上ると、他に武器もありませんでしたので、弓と刀とを執つて、馬に跨つたまゝ、その森へ遣つて參りました。すると、もう遠くからナータンの一人で散歩してゐる姿が見えたので御座いますね。が、いよいよ襲撃する前に、一度ナータンの顏を見て、その聲も聞いて置かうと思ひましたので、馬を急がせて近づきながら、いきなり相手の鉢卷を掴んで、かう叫びました。「この老耄れ奴、命はないから覺悟しろ！」

それに對して、ナータンはたゞかう答へました。「いや、その覺悟はして來ましたよ！」

處が、その聲といひ、その顏といひ、どうしてもそれは自分を親切に迎へて、親しく相手をしてくれた上、忠實に助言までして呉れたその人に相違なかつたのですね。忽然として胸中の忿怒が消え去ると共に、これ迄の怒りは羞恥に一變しました。ミトリダーネスは揮り上げた劍を投げ捨てて、馬から飛び下りざま、目に涙を浮べてナータンの足下に御伏しました。そして、かう申しました。「あゝ、御老人今こそ貴方の廣大無邊なお心持がよく解りました。貴方は、怨む理由もないのに貴方の命を欲しがつたこの私に、大切な生命まで下されようとして、お覺悟の上、わざ〳〵此處までお出掛けになつたものと思はれます。けれども、私の罪を私以上に心配してゐて下さつた神樣は、下劣な嫉妬のために盲目になつた心の眼を、一番肝心なこの瞬間に開けて下さいました。それなればこそ私は、自分の過失を贖ふためには、貴方が覺悟していらしたと同程度に、自分を

投げ出してかゝらねばならないことを認めるもので御座います。さあどうぞ私の罪過に相當だとお考へになるだけの復讐をして下さいませ。」

ナータンはミトリダーネスに立ち上らせ、抱き緊めて、物優しく接吻しながらかう申しました。「ミトリダーネス君　貴方の行爲はね、そりゃ貴方は惡いとでも仰しやるがいゝ、しかしそれに就いて貴方が謝罪したり、又私がそれに同意したりすべき性質のものぢやありませんよ。何故といふに貴方がこんな事をする氣になられたのも、決して憎惡の念から出たのではない、單に世間の評判をもつと好くしようと思はれたからに過ぎないのですからね。どうか私のことに決して氣に懸けないで、私程貴方を愛してゐる人間は他にないといふやうに思つて下さい。實際、私は貴方の偉大な精神に感服してゐるのですからね——世の吝嗇漢のやうにたゞお金を溜めようとしないで、集めたお金を氣前よく使はうと骨を折つてゐなさる貴方の偉大な精神にですよ。それに、名を揚げようとして、私を殺さうとお考へになつたことも恥ぢないが宜しい。又私がそれを意外に思つてゐるなぞとお考へになるにも及びませんわい。堂々たる皇帝や偉大な王侯も、多くは人を殺す術を知つてるといふだけで、而も一人の人間ではない、無數の人間を殺して、市々を燒き拂ひ、國々を灰にして、それに依つて自分の領土や名聲を擴げたものですよ。ですから、一層名を揚げるために、たゞ一人の私を殺さうとされたからと云つて、別に不思議でもなければ珍らしいことでもない、極めて平凡な事をされたに過ぎないのでさ。」

ミトリダーネスは、今更自分の卑しい計畫を辯解する氣になれませんでしたので、ナータンが代つて辯じて與れた高潔な辯護論に只々感服して聽いてゐましたが、それからいろ〳〵話しをしてゐるうちに、相手があゝした決心をした上に、自ら進んで、自分に助言までしてくれたのが、いかにも不思議なやうに思はれて、驚いてゐる旨を申しました。

すると、ナータンはそれに答へました。「ミトリダーネス君、私の助言や決心もさう驚くには當りませんわい。私としては、何誰に限らず、自分の家を訪ねて下さつた方に、極力そのお望みを叶へて上げなかつたことは、たゞの一度もないのですからね。處で、貴方は私の命を取らうとして、私の家へお出でになつた。で、お望みの程を親しく伺ひましたので、すぐそれを差上げようと決心したのですよ。さうすれば、貴方が自分の望みを滿されないで歸つて行く唯一人の人にならなくても濟むでせうからね。そこで貴方の望みが遂げられるやうにと思ひまして、私の命を取つて、しかも貴方のそれを失はないために必要と思はれるだけの

助言をして差上げた次第なんですよ。と申すのも、私としてはこれ以上好い命の捨て場はないやうに思はれたからですね。私はもうこれで八十年の間樂しい目も面白い目も見て來ました。それに、自然の經過から云つても、最早先の長いことはないと思つてゐますよ。そこで、これ迄自分の財寶を與れて來たと同じやうに、この生命も差上げてしまつた方がよいと考へたのですね。百年を人に與れるといふことも大した贈物ではありません、況して今後生き存へるかも知れないといふやうな六七年を差上げた處で、それが何で御座いませう？　ですから、お氣に召したら、どうぞ私の命を取つて下さい。今迄の處、未だ私の命を欲しいと云つて來た方にはお目に懸つたことが御座いませんし、貴方が取つて下さらなければ、何時になつたら又さういふ方にお目に懸れるやら、私にも見當が着きませんからな。さうだ、たとひ今後さういふ方に出逢つたとしましても、これから先長生きをすればする程、この命の値打が少なくなつて行くことは極り切つてゐますよ。で、まあ、この命がこれ以上値打の下らないうちに、取つて頂きたいものですね、お願ひですよ。」

ミトリダーネスは恥ぢ入つて申しました。「飛んでもないことです。貴方のやうな尊い命を奪ふ、いえ、今の先まで私の考へてゐましたやうに、たゞそれを欲しいと思つただけでも、神の冥罰が當りませう。いゝえ、貴方の命を縮めるどころではない、出來ることなら、私の命を足して差上げたい位に思ひますよ。」

ナータンは直ぐにそれを受けて申しました。「では、出來れば、貴方の命を取つて私のそれに足して下さらうといふのですな？　私がこれ迄誰に向つてもしたことのないことを貴方に向つてだけしろ、つまりこれ迄決して他人の寶を取つたことのないこの私に、貴方の寶を取れと仰しやるのですな？」

「さうです」と、ミトリダーネスは簡單に答へました。

「それでは」と、ナータンは申しました。「私の云ふことをその儘實行して下さい。貴方はお若いからこの家に留まつて、ナータンの姓を名乘つて下さるんですよ。さうすれば、私は貴方の家へ出掛けて、今後はミトリダーネスと名乘りますからね。」

「若しもこの私に」と、ミトリダーネスはそれに對して答へました、「現在貴方が遺つていらつしやるし、又これ迄も遺つていらしたと同じやうに高潔な振舞をするだけの心得が御座いましたら、只今のお言葉を躊躇するところなくお引請けしたことで御座いませう。しかし私の爲す所がいづれナータンの名聲を汚すやうなことになるのは、あまり明白に分つてゐますし、それに自分の力では決して到達する

ことの出來ないやうなものを人樣から奪ふ氣にはどうしてもなれませんので、この事ばかりはどうもお受けする譯に參りません。」

こんな風にして、ナータンとミトリダーネスとは親しい談話を交はしながら、ナータンの望みに任せて、その邸に歸つて來ました。そして、ナータンはその後數日に亙つてミトリダーネスをいと懇ろに饗應した上、なほ自分の力の及ぶ限り相手の貴い決心を鼓舞してやりました。で、ミトリダーネスも從者を連れて、いよ〳〵家鄉へ歸ることになりましたが、その時はもう氣前といふ點にかけては到底ナータンに及ばないことをしみ〴〵悟つて、その家を辭去しました。

第四話

ゼンテイーレ・ダ・カリセンデイ氏はモデナから遣つて來て、死んだものとして葬られた自分の愛人を墓から救ひ出した。愛人は息を吹き返して、男の子を產む。そこでゼンテイーレ氏は愛人とその子供とを彼女の良人であるニコルッチオ・カチアニミコに送り屆ける話。

人間としてその命をどうしてあゝ迄惜しまないでゐられるかは、一同の驚嘆するところであると共に、實際ナータンは西班牙王の寬量やクリーニの僧院主のそれを凌駕するものであるとは、一同の齊しく主張するところで御座いました。が、この點に關する色々な論議も十分に云ひ盡されましたので、王はラウレッタに向つて次の話に移るやうに合圖をいたしました。彼女は直ぐに語りはじめました。

皆樣、これ迄にお話のありましたのは、いづれも氣高い、美はしい事柄で御座いまして、これからお話しをする義務のある私どもになほ會心の題材として申上げられるやうなことが殘つてをりますやら何うやら、甚だ心細い次第で御座います。それ程これ迄のお話の中に出て來た事柄は氣高い情操に富んでをりました。かうなればもう毎も私達の話題に豐富な材料を提供して吳れる戀愛事件に立ち戻るより外に致し方が御座いませんわね。そこで私は或る戀する男の大量に就いてお話し申上げて見たいと存じます。勿論、それは私達の青春といふことが得てしてこの方面に向ひ勝ちであるといふことにも由るので御座いますがね。處で、この種の大量といふものも、これを達觀すれば、これ迄お話しになつた寬量に劣るものとは恐らく皆樣もお思ひにならないことと信じます。何しろ愛するものを手に入れるためには、財寶を投げ出し、敵意を忘れ、時には生命、いえ、それ以上に大切な名譽、體面といふやうなものも幾多の危

險に曝して顧ないものであることは、私どもの日常實見するところで御座いますからね。

さてロンバルデイ州のあの壯麗なボロニヤの市に、名門の生れで而も德性の優れたゼンテイーレ・カリセンデイといふ一人の青年騎士が住んでゐました。青年はニコルッチオ・カチアニミコの妻であるカタリーナ夫人に想ひを懸けてゐましたが、自分に對する夫人の愛が餘り思はしくないので、市長としてモデナへ招かれたのを幸ひに、殆ど絕望の體でそこへ赴任しました。

恰度その頃ニコルッチオもボロニヤに居りませんでした。夫人も姙娠中で、その市から三哩ばかり離れた或別莊に行つてゐましたが、或時烈しい發作に襲はれました。非常に猛烈な發作で、忽ち人事不省に陷つたばかりか、醫者からも死んだもの と宣告されたので御座いますね。それに、この次第を耳にした近親達も、夫人は姙娠して間もないことだから、その胎子もさして成長してはゐないだらうと申しましたので、一同涙ながらに、近所の寺院へそのまま埋葬してしまひました。

この話に間もなく或友人を通じてゼンテイーレ氏の耳にも入りました。夫人が生前自分に對してつれない態度を取つたとは云へ、彼は痛くその死を悲しんで、かう囈語を申しました。「カタリーナさん、貴方はもう死んでしまひましたね。貴方が生きていらした間は、私は貴方の一瞥をも獲ることが出來なかつた。だから、貴方がもう抱むことの出來なくなつた今に及んで、切めて死んだ貴方にでも接吻しようと思ひますよ。」

かう云つて、恰度夜分にもなつてゐましたので、彼は自分の出發を祕密にするやうに適宜の命令を下して置いて、從者一人を引具したまゝ、馬に跨つて夫人の葬られてゐる所へ一息に飛んで參りました。そこで墓の蓋を開けさせて、注意をしい〳〵降りて行きました。そして、死人の側に跪いたまゝ、その顏に自分の顏を摺り寄せて、涙ながらに幾度となく接吻しました。處が、人間の欲望といふものは決して或程度で滿足するものでは御座いませんわね。それに人間、殊に戀するものはいくらでも多きを望むもので御座いますからして、ゼンテイーレも亦、もうそろ〳〵引上げようと決心する後から、「折角かうして遣つて來たのだから、一寸位この胸に觸つて見ても好からうぢやないか。もう二度とは觸られないし、これ迄だつて一度も觸つたことはないのだからな」と獨語をせずにはゐられませんでした。

で、その欲望に驅られて、彼はそつと夫人の胸に手を遣りました、處が、暫くさうしてゐるうちに、何となく內部で心臟が微かに脈を搏つてゐるやうに思はれて來たのですね。で、あらゆる恐怖心を抑へながら、一層注意して探つ

て見ると、内なる生氣はいかにも微弱ではあるけれども、確に死んでゐないことだけは分りました。そこで從者の助けを藉りて、出來るだけ靜かに彼女を墓から運び出して、馬上に抱き上げたまゝ、密かにボロニヤの自宅へ連れて參りました。

自宅には、彼の母親が留守居をしてゐましたが、よく物の分つた立派な老刀自で、子息から一切の話を聞かされた時、いたくそれに同情しまして、早速火をどん〳〵と焚かせ、適宜の溫浴で宙に迷つてゐた夫人の命を元の體軀に呼び返してやりました。夫人は正氣に返ると、先づ深い溜息を吐いて、それから「まあ、一體私は何處にゐるのでせう？」と申しました。

すると、品のいゝ老刀自はかう申しました。「しつかりして下さいよ、貴方は危氣のない場所にいらつしやるんだからね。」

で、すつかり正氣に返つた時、夫人は改めて四邊を見廻しました。勿論、自分が何處にゐるのか分りませんでしたけれども、ゼンテイーレ氏が目の前にゐるのを見て、大層驚いて、氏の母親に、何うして自分はこんな所へ來てゐるのかと訊ねました。

そこでゼンテイーレ氏は順序を立てて一切の話しをして聞かせました。

これを聞いて、彼女は世にも悲しく思ひましたものゝ、兎に角鄭重にお禮を述べた上、更に相手が平生から自分に對して抱いてゐた愛とその騎士道とにかけて、この家にあつても、決して自分や良人の名譽を危くするやうな行爲には出て呉れないやうに、それから夜が明け次第自宅へ送り屆けて呉れるやうに、くれ〴〵も頼みました。

「奥さん」と、ゼンテイーレ氏はそれに答へました、「昔の私の欲望が何うであつたにしましても、今日迄貴方に對して抱いてゐた愛の故に、神様がかうして貴方を死から生へ呼び返すことが出來るやうに惠みを垂れたまうた以上、今後は何時如何なる場合にあつても、貴方を實の妹とこそ思へ、決して粗相な眞似は致さない積りですから、その點はどうぞ御安心下さい。しかし今夜貴方に盡すことの出來た好意は幾分の報酬に値ひするものでせうから、一つだけ私の御無心することは、どうかお慈悲にお聽き屆け下さることをお願ひ致します。」

夫人はそれに對して、自分の力に適ふことでさへあれば、それが正しいことである限り、喜んでそれに應ずる旨を心よく返答しました。

「奥さん」と、ゼンテイーレ氏は申しました、「貴方の御親類も又ボロニヤ全市の人々も貴方は死んだものと思つてゐるばかりでなく、それに違ひないと確信してゐます。從つて誰も貴方が歸つて來ようなどとは豫期してゐませんよ。就きましては、私がモデナから歸つて來るまで――それも決して永いことではありませんがね――私の母と一緒にこの家に滯在して頂く光榮には與れないものでせうかね。何故こんな事をお願ひするかと申しますと、實はこの市の名望ある方々の面前で貴方の旦那様に貴方といふ尊い贈物をしたいと、かう考へてゐるからなんですがね。」

夫人もこの騎士には恩義を感じてゐましたし、それにその願ひの筋も正しいものと思ひましたので、一日も早く生きた妻を見せて身内の者を喜ばせたいのは山々で御座いましたが、兎も角もゼンテイーレ氏の望みを叶へることに決心して、それに應ずる旨を誓ひました。處が、その言葉を口にするかしないに、忽ち彼女は產氣づいて來たのですね。そして、ゼンテイーレ氏の母親の介添へで、間もなく可愛らしい男の子を生み落しました。これはゼンテイーレ氏にとつても、又彼女自身にとつても二重の喜びでありました。彼は早速產婦に必要な一切のものを調へた上、さながら自分の妻でもあるやうに、萬事行屆いた介抱の受けられるやうに手筈をして置いて、自分はこつそりと再びモデナへ向ひました。

さて、その任期も滿ちて、彼は又ボロニヤへ歸ることになりましたので、恰度そこへ着く筈の朝にその市の有力者達を自宅へ招いて盛大な祝宴を張るやうに手筈をして置きました。勿論、その中にはニコルッチオ・カチアニミコも交つてゐたのですね。で、自宅へ着いて馬から降りますと、先づ以前にも優して美しく健やかになつた夫人に會ひ、又息災に育つて行く子供の顏を見てから、お客の前に現れて、いかにも嬉しさうに一同を食卓へ案内しました。そして、山海の珍味で款待しました。

さて食事も終りに近づいた頃、彼は立ち上つて、豫め自分の企てを夫人に打明けて、その際取るべき彼女の態度についても打合せをして置いたこととて、次のやうに語り出しました。「さて皆さん、波斯には、私の見る處では、いかにも賞讃すべき習慣があるやうに聞き及んでをりますがね。それは、友人に甚深の敬意を表しようと思ふ場合には、その友人を自宅へ招いて、自分の最も貴いもの、妻とか愛人とか娘とか、或ひはその他の何にもせよ、兎に角それを友人に見せまして、同時に、若し出來ることなら自分の心臟でも見せたいと、かう申すさうで御座います。（註に、は〳〵、東方では普通妻や娘を客の前に出さず、それを見せるから特別の歓待となるのである。）で、私は自分一個の考へとしまして、この習慣をボロニヤの市で守りたいと存じます。皆さんは私の食卓に御列席の光榮を與へて下さいました。そこで私は波斯流に自分の現在持つてゐる、又將來にも於て持ち得るでもあらう處の最も高貴なものを皆さんに

お目に懸けまして、それに依つて皆さんに敬意を表することに致します。が、いよ〳〵それに移ります前に、一つの問題を提供しまして、皆さんのお考への程を承はりたいと存じます。

「忠實で善良な雇人が重い病に罹りました。すると、その家の主人は病氣の經過も待たないで、その雇人を往來に捨てて、一向顧なかつたといたしますね。恰度そこへ見知らぬ人が通りかゝつて、同情の餘りその病人を自宅へ連れて行つて、手厚い介抱と莫大な費用とをかけて元の健康な軀にして遣りました。そこで皆さんにお聞きしたいのですがね、第二の人が例の雇人を手許に留め置いて、仕事をさせ、そして、その雇人の返還を迫られても返して遣らなかつたとしまして、元の主人がその男を非難することは正當で御座いませうか。」

市の貴族達はその點に就いていろ〳〵話し合ひました。いづれもその見解を同じうしましたので、一同はその返答を辯舌に長けたニコルッチオ・カチアニミコに委ねました。そこで、彼は先づ波斯の習慣を稱讃した後、自分も賓客一同と同意見であるが、元の主人は雇人の病氣に際して、啻にそれを顧ないばかりか、戸外にまで捨てたのだから、最早その男に對して何等の權利もない、又雇人は第二の主人の盡してくれた好意に由つて當然その所有となつたものと思はれる、從つて第二の主人は雇人を自分の手許に留め置いても、元の主人に對して何等の權利侵害も、暴行も、不正も加へたことにはならないと信ずるものであると述べました。食卓に就いてゐた人達は皆、その中には隨分立派な人もゐましたが、異口同音に、ニコルッチオの答へた處は尤もであると申しました。

騎士はこの答辯、殊にそれがニコルッチオによつて述べられた事に深く滿足して、自分も亦同意見である旨を言明した上、續いてから申しました。「では、いよ〳〵お約束に從つて、皆さんに敬意を表することにいたします。」こゝで彼は二人の召使を傍へ喚んで、その間に爽晴らしく着飾らせて置いた夫人の許へ行つて、どうか御入來の上、お客樣のお目通りをして下さるやうに申上げろと吩咐けました。

夫人は可愛らしい子供を兩腕に抱いたまゝ、二人の召使に連れられて廣間に現れましたが、豫め、騎士から云ひ含められた通りに、或立派な人の側に席を占めました。すると、騎士は改めてから申しました。「皆さん、これが私の現在何者にも優して大切に思つてゐるものであると共に、將來に於てもさうであらうと思はれるもので御座います。さて、いかゞでせう、さう思ふのが無理で御座いませうか。」

貴族達は彼女に挨拶をして、その美貌を讃美した上、騎士に向つて、かうした婦人を大切にせられるのは至極尤もだと力を籠めて申しました。それから更に一同は仔細にその夫人を眺めはじめましたが、勿論その中の或者は、もしその女を死んだものと思つてゐなかつたら、この女は事實さうである處の女と同一人だと云ひ切つたことで御座いませう。殊にニコルッチオはしげ〳〵と彼女を眺め遣りながら、その何者であるかを知りたさに遣瀬のない思ひをしてゐましたが、とう〳〵我慢が仕切れなくなつて、騎士が一寸席を外した隙間に、彼女に向つて、一體あなたはボロニヤのものか、それとも他の市のものかと訊いて見ました。夫人は自分の良人が自分に訊ねる言葉を聞いて、堪らない思ひをしましたが、やつと我慢して返辭を差し控へました。實際、彼女としては當初の約束を守るためにその沈默を續けたのですね。すると又、お客の中の或者は、その子は彼女の子であるかとか、又或者は、ゼンティーレ氏の奥さんか、それとも單に親類のものかなどと訊ねました。が、彼女はかうした一切の質問に返辭をしませんでした。

ですから、ゼンティーレ氏がそこへ顔を出すと、お客の一人がかう云つて訊ねました、「ねえ君、あすこにゐられる御婦人は、成程綺麗には相違ないが、どうやら啞者らしいね。さうなんかい。」

「皆さん」と、ゼンティーレは答へました、「あの婦人が今迄一言も口を利かなかつたのは、その貞淑の並々ならぬ證據なんですよ。」

「では」と、今一人の客が申しました、「一體何ういふ方なんだか、それを仰しやつて頂きたいものですね。」

「勿論、喜んで申上げます」と、騎士は申しました、「たゞ何んな事を私が申上げようとも、その話が終るまでは、何誰にも席を立つて頂きたくないのですが、それをお約束下さいませうか。」

客はいづれもそれを誓ひました。そして、食卓も疾うに片附けられました。そこで、ゼンティーレ氏は夫人の傍に席を占めて、次のやうに語り始めました。——

「皆さん、この夫人はいはゞ先刻私がそれに就いて皆さんに質問を提出したあの善良で忠實な下男で御座います。家族のものにも餘り大切にされないで、破れた履物か何ぞのやうに、戸外に捨てられてゐましたが、幸ひ私の手に拾ひ上げられ、私の配慮と介抱の下に死の手から救ひ出されました。そして、私の善良な意圖を嘗はせ給うた神が彼女をその恐ろしい姿から再び御覽の通りの美しい形體に立ち返らせ給うたので御座います。で、その前後の事情を簡單に申上げて、かうなつた理由を一層明かに知つて頂きたいと存じますが」と云ひながら、自分の彼女に對する愛から始めて、今日に到る迄の事情を詳細に物語つて、列席の一同を驚かせました。そして、更にかう續けました。「さういふ譯

で御座いますからして、皆さんが、殊にニコルッチオ君が先刻の意見を變更されない以上、この夫人は正當に私のものでありまして、何人も私に對して彼女の返還を迫つて然るべき理由はないので御座います。」

誰もそれには言葉を返さんやうもなく、たゞ彼が次に何を云ひ出すだらうかと固唾を呑んで待つてゐました。が、ニコルッチオを始めとして、その場に居合せた他の人達、殊に夫人は感激の餘り聲を忍んで泣き出しました。そこでゼンテイーレ氏は立つて、子供を抱き上げ、夫人の手を引いてニコルッチオに近寄りながら、かう申しました、「ニコルッチオ君、立ち給へ、私は貴方や身内の方々がお捨てになつた奥さんを今貴方にお返ししようとは思ひません。さうではないので、私は改めて私の親類であるこの夫人と、私の信じる處では貴方の胤であり、又私がその洗禮に立ち合つて、ゼンテイーレといふ名を與へたこの子供とを貴方へ差上げることにしませう。それからお願ひして置きますがね、どうか、私の家に三箇月近く居たからと云つて、決してこの女を疎んじるやうなことのないやうにして戴きたい。私は神かけて誓ひますが、いや、その神こそ奥さんに對する愛を私に吹き込んで、その愛のために奥さんを救ひ出すやうに遊ばされたのですがね、奥さんはたとひその御兩親乃至貴方の傍にゐられたとしても、私の母親と共にゐられた以上に貞淑な日を送られることは出來なかつたでせうからね。」かう云つてから夫人の方に向き直つて、申しました、「奥さん、これで、嘗て私にして下さいましたお約束を解いて、貴方をニコルッチオ君の自由にお任せしませう。」この言葉と共に、彼は夫人とその子供とをニコルッチオの腕に渡して、自分の席に戻りました。

ニコルッチオは貪るやうに妻と子を迎へ取りました。あらゆる希望を諦めてゐただけに、彼としては一入の幸福を感じたので御座いますね。彼は畢生の眞心を籠めて騎士に感謝しました。他の人達も同情の涙に掻き暮れながら、口を極めて騎士の態度を褒めそやしました。又この話を人傳に聞いた人達も、同じやうに讃美の辭を惜しみませんでした。かうして夫人は云ふべからざる喜びを以て家に迎へられたばかりでなく、暫くの間は避つた女のやうに全市民から驚異の目で眺められました、一方ゼンテイーレ氏はその後永くニコルッチオやその親戚又は夫人の一族の友人として親しい交りを續けました。

さて皆樣はこのお話をどうお考へになられませうか。笏や王冠を贈物にした王、それから自分としては別段犧牲を拂はないで、たゞ狼藉者と法王との仲を取持つた僧院主、さては敵の双に頸を差延べた老人などはその寛量といふ點に於て、この若くて熱情に富んでゐる上に、他人の不注意から見捨てられたものを幸ひに自分が拾ひ上げたので、それに對しては十分の要求權があると信じながらも、尙且立派に自分の熱情を抑へたばかりか、年來あらゆる望みをかけて、何うかして自分のものにしようと思つてゐたものを、それが手に入つた時に氣前よく返還したこのゼンテイーレ氏と比較されて然るべきものとお考へになられませうか。實際、寛量に關しては、今迄お話しになりましたどの行爲と雖も、これと肩を比べ得るものは一つとして御座いますまい。

第五話

デイアノラ夫人はアンサルド氏に向つて、正月に五月頃と同じやうな美しい庭園を見せてくれと望む。アンサルド氏は或魔術師に報酬を約して、その庭園を出現させることを頼む　彼女の夫はアンサルド氏に身を任せることを妻に許す。然るにアンサルド氏はその寛量を聞いて、彼女の約束を解除する。すると、魔術師も亦一切を受けずしてアンサルド氏の許を辭する話。

會衆はいづれもゼンテイーレ氏を九天の高きに褒め上げました。次いで王はエミリアに新しい話をつゞけるやうに命じました。彼女はいかにも待ち構へてゐたやうに勇んで語りはじめました。——

皆樣、ゼンテイーレ氏の行爲が寛量でなかつたとは、誰も正當には云ひ得ない處で御座いませう。ですが、それ以上に寛量であることは不可能であると、假りに主張する方があるとしますれば、それが可能であることをお目に懸けることはさして困難では御座いません。只今それを短いお話で申上げて見たいと存じます。

フリウリと申しまして、氣候は寒う御座いますが、美しい山嶽、數多い河川、さては清冽な噴泉などで風景の秀れた地方にウデイーネといふ市が御座います。こゝに昔ジルベットと申す富裕な名望家で、而も起居振舞が穩やかで風采の勝れた人の奥さんにデイアノラ夫人と稱ばれる貴族出の美しい人が住んでゐられました。夫人は生れつき才媛ともいふべき方であつただけに、當時その武藝と氣品とを世に謳はれてゐた名門の男爵アンサルド・フオン・グラードに想ひを懸けられました。男爵は烈しく夫人を戀してゐました。そして、その愛を獲るために、手に負ふ限りのあらゆる手段を試みて、屢々使者などで云ひ寄りましたが、その努力は何れも報いられなかつたのですね。

そのうちにこの騎士の追求が夫人には五月蠅くなつて參りました。相手の求める一切をどんなにすげなく斷つても、

どうしてもその愛や追求を思ひ留まつてくれませんので、已むを得ず夫人は、自分の見たところでは、到底實行されさうもない妙な註文を附けて、それに依つて相手を撃退しようと想ひ着きました。そこで、騎士に頼まれて時折自分の許へ來たことのある女を捕まへて、或日かう申しました。

「あんたは始終アンサルド様が何物にも代へて私を愛していらつしやるといふやうなことを誓つて、あの方からだと云つては見事な贈物を持つて來てくれましたわね。けれど、今後あんな眞似をすることは慎めて頂きたいのよ、品物を下さつたからとて、あの方を愛したり、お心に從つたりしようとは思ひませんからね。でも、あんたの云ふやうに、そんなに迄私を愛してゐて下さるといふことが本當によく納得さへ行けば、私だつて又心を取直して、あの方を愛した上に、仰しやることも聽かないとは限らないわ。それで、私のお願ひするやうな方法でその證據を見せて頂けるやうでしたら、私もあの方のお望みに從ひませうよ。」

「で、どんな事をしろと仰しやいますの？」と、女は申しました。

「私のして欲しいのはね」と、夫人は申しました。「かうなのよ、もう來月はお正月ですからね、郊外のどの庭でもいいから、一つ五月の盛りのやうな綠の草や紅の花、さては青葉をつけた樹で一杯にして貰ひたいの。で、これがお出來にならないやうでしたら、今度はあんたに限らず、誰でも決して使者などに私の許へ來ないやうにして貰ひたいのよ。といふのは、これからもなほ五月蠅くなさるやうでしたら、今迄は宅にも親兄弟にも一切秘密にしておいたのですが、その時こそ皆に話して、斷然あの方に手を引いて頂く積りですからね。」

夫人の註文を聞いて、騎士はよしそれが困難で、殆ど不可能と思はれる上に、夫人はあらゆる希望を捨てさせるためにかうした註文をしたのだとは、彼にもよく分つてゐましたけれども、兎に角何處まで遣り得るものか、それだけでも試みて見ようと決心しました。そこで各國に人を遣はして、何か良い策を自分のために講じて與れる人はないかと探させました。

すると、最後に報酬によつては、魔術でそれを實現して見せようといふ人が出て參りました。アンサルド氏は莫大な報酬を拂ふ條件の下に、この男と話しを取り極めまして、定めの時期が來るのを喜び勇んで待つてゐました。

いよ〳〵その時が來ましたが、寒さは厳しく、四邊の萬物は雪と氷とに覆はれてゐました。例の魔術師は、正月一日の前夜のうちに、魔術に依つて郊外の或牧場に、それを見た者の云ふ處では、あらゆる草木と果實とに充された、嘗てこの世に見られた最も美しい庭園を出現させました。

アンサルド氏は嬉しさうにこの庭を眺めてゐましたが、早速そのうちの最も美しい花と果物とを切り取らせて、窃かに夫人の許へ囲けさせながら、口上として、お望みの庭を御覽になつて、どんなに自分が彼女を愛してゐるかを承認して頂きたい、なほ御誓言にまで預つた約束を想ひ出して、誠意ある婦人としてそれを履行されたいと傳へさせました。

夫人はその花や果物を見るにつけて、それに人々が不思議な庭の噂をするのを耳にもしてゐましたので、今更のやうに相手に與へた約束を後悔しました。が、さうは云ふものゝ、一方では又その奇蹟が見たくて堪りませんでしたので、多くの貴婦人と打連れて不思議な庭の見物に郊外へ出掛けました。夫人はその庭を見て少なからず驚きもし感にも堪へましたが、これでいよ〳〵自分がどんな義務を負はされたかを思ふと、心の底はしよげ切つて家に歸つて參りました。しかも、その心痛は到底包み切れなかつたので御座いますね。その結果、彼女の良人も妻の顏色の變化に氣づいて、斷乎としてその譯を云へと要求しました。初めの間は夫人も極りの悪さに長い間眞實のことを申しませんでしたが、あんまり云はれるので、到頭一切の事情を打明けました。

ジルベルトはそれを聞いて、一度は大いに腹を立てたやうなものゝ、妻の所業に他意のないことだけは認めましたので、怒りを抑へて、いろ〳〵思ひ巡らした上、かう決心して申しました、「デイオノラ、さうした仲介者の言葉に耳を傾けたり、又は何ういふ條件にしろ自分の貞操について第三者と契約を結ぶなどといふことは、決して分別のある貞淑な妻の所業とは云はれないよ。一體耳から入つて心に受け容れられる言葉といふものは、多數の人が考へてゐる以上に恐ろしい力のあるものだし、又戀する者にとつては殆ど出來ないといふことはないものだからね。第一には相手の云ふことに耳を藉し、それに次いでは契約をしたといふのがお前の手落ちだ。しかしお前のしたことに他意のないことは私にも分つてゐるから、その約束の義務が果されるやうに、他の者なら恐らく何人も許さないことを私はお前に許さうと思ふ。かう決心したのも實はあの魔術が怖いからだよ。アンサルドさんを騙さうものなら、又あの魔術師を使つてどんな仕返しをされないとも限らないからね。そこで、アンサルドさんの許へ行つて、出來ることなら、お前の貞操に傷をつけないであの約束を解いて貰ふやうに頼んで見るがいゝ。しかしそれが萬一出來なかつたら、この度だけは體を任せるのも仕方がない。たゞ魂だけは許すんぢやないよ。」

良人のかうした言葉を聞いた時、夫人は泣きながら、さ

うして頂いては冥利に盡きると申しました。が、ジルベルトは夫人が何と云はうともその主張を枉げようとはしませんでした。

そこで明くる朝になりますと、夫人は曙を待つて大したお化粧もせずに、二人の下男を先に立てて、一人の小間使をお供に、アンサルド氏の家を訪れました。アンサルド氏は夫人が訪ねて來たと聞いて、少なからず驚きましたが、床から出ると、魔術師を喚んで、かう申しました。「貴方の術のお蔭でどんな寶が手に入りましたか、一つ見て頂きたいものですね。」それから夫人を待たせて置いた室へ出向いて、如何はしい欲望などは全く忘れたやうに、極めて慇懃に應接しました。それから一同を美々しい室の煖爐の傍へ案内しました。

彼は夫人に席をすゝめてから、かう申しました。「奥さん、かね〳〵貴方に對して抱いてゐた私の愛が、貴方の重荷にならないで、何かの報酬に預り得るものと致しますなら、お願ひですから、こんな時刻にかうしたお供揃ひで手前どもへお出で下さつた眞實の理由を聞かせて頂きたいものですね。」

それを聞いて、夫人は極りの惡さうに、今にも泣き出しさうになつて、かう答へました。「私がお宅へ參りましたのは、貴方に對して抱いてゐた私の愛に由るのでもなければ、豫て貴方に番へたお約束に由るのでもありません。宅の命令なので御座います。宅は自分や私の名譽よりも、貴方の並々ならぬ愛情から出た努力を考へまして、お宅へ伺ふやう私に申し渡しました。で、私も宅の命令によりまして、この度だけはお心に從ふ覺悟でをりますの。」

アンサルド氏は最初夫人が來たと聞いて驚きましたが、今度は一層驚嘆しました。そして、ジルベルトの寛量に勵かされた結果、それ迄の熱情は同情に一變しました。彼はかう申しました。「奥さん、仰しやる通りの事情だと致しますと、私の愛情にそれ程同情して下さつた方の名譽に傷をつけては、誠に相濟まぬ次第で御座います。ですから、貴方が何時間手前どもにいらつしやらうとも、要するにそれは妹としてといふことに致しませう。で、お氣の向いた時には、何時でも御自由にお引取り下さつて構ひません。しかし、今日私に對して示されたやうな貴い心ばへに對しては、且那樣に十分感謝されるが宜しいでせうね。そして、今後はどうか私を貴方の兄弟とも忠僕とも思つて頂きたう御座います。」

この言葉を聞いた時、夫人は今迄とは打つて變つた嬉しさうな容子で、かう申しました。「平生の貴方の氣高いお心持ちから推して、たとひ此方へお伺ひしても、屹度かうした結果になる外あるまいとは、私も信じてゐました。私は

一生この御恩を忘れないことで御座いませう。」そこで夫人は別れを告げて、供揃ひを引連れたまゝ、意氣揚々とジルベルトの許に歸つて參りました。そして、一伍一什を語つて聞かせました。その後ジルベルトとアンサルド氏との間には親しい誠意に充ちた友情が結ばれました。

處で、魔術師もアンサルド氏が約束の報酬を支拂はうとしますと、アンサルド氏に對するシルベルトの寛量や、夫人に對するアンサルド氏のそれを目擊したこととて、かう申しました。「ジルベルトさんが信義を、貴方が又人情を多分に示された處を拜見しただけに、私も亦その報酬に就いて氣前を見せなければ濟まないやうな氣がして來ました。貴方なら安心してお金を保管して頂けることはよく分つてゐますから、お話しの金はお手許に留めて置いて頂きたう御座います。」

騎士はそれを恥かしいことに思つて、いろ〳〵魔術師を說いてその金額を全部、少なくともその一部分を受取つて貰ふやうに努めました。が、その努力は無益に終りました。そこで彼は、それから三日目に例の庭園を掻き消して出發しようとする魔術師の前途を祝福して暇を遣ると共に、一方夫人に對する横戀慕はぷつつり斷念して、たゞ正しい敬愛の心を胸に疊みながら、一人淋しく暮しました。

さて皆樣、このお話は一體何う考へるべきもので御座いませう？　前回のお話に出て來ました半死の夫人、乃至諦めかけた希望の故に生ぬるくなつた愛情などを、アンサルド氏のこの寛量に勝るものとして然るべきでせうか。絶えず募り行く戀、一層大きな希望に燃え立ちながら、永の年月追ひ求めてゐた獲物を手にしたアンサルド氏の示したこの寛量にで御座いますね。私としては前の寛量がこの寛量と比較されるものだと考へることさへ、既に愚しいことのやうに思はれます。

第六話

勝利に輝くカール老王は或乙女に戀をしたが、そのたはけた想ひを恥ぢて、乙女とその妹とを立派に他へ緣づかせる話。

デイアノラ夫人に關しては、ジルベルトとアンサルド氏及び魔術師のうち、誰が最も寛量であるかといふ點に就いて、淑女達のうちに起つた區々の議論を完全に傳へ得るものは、何人と雖もありますまい。それを一々述べ立てたら、隨分長い時間を要することで御座いませう。兎に角、王は暫く論爭を許して置いた後、フィアメッタに目配せをして、

次の話に移つてこの論爭に終末を着けるやうに命じました。そこで、彼女は猶豫なく次のやうに語りはじめました。――

皆樣、私達のやうな閑暇に於きましては、話の狙ひ處に關して議論の生じる餘地のないやうに、十分詳細に話しをせねばならぬといふのが私の持論で御座います。一體議論などいふことは、絲を繰ることさへ覺束ないやうな私達よりも、學校の中の學生達に任せて置いたが宜しう御座いませう。只今もお話しの要點に關して皆さんが論爭されるのを見受けましたので、最初考へてゐましたお話は同じく問題になりさうな氣がしますから、それは中止することに致しまして、こゝに身分の低い人物でない、一人の勇敢な國王が、眞の騎士的態度に出ることに依つて、亳末も自分の名譽に累ひを及ぼさなかつたお話を申上げて見たいと存じます。

皆樣も定めしカール老王又は第一世と稱ばれる王樣のことは既にお聞き及びのことと存じます。王は大膽な計畫と、それにつゞくマンフレッド王に對する勝利に依つてフローレンスからギベリン黨を追ひ出して、ゲルフエン黨に復歸の機會を作つて遣りました。そんな譯で、ネリ・デリ・ウベルティといふ騎士は全家族を引連れ、莫大な金を携へて、フローレンスの市を立ち退きました。が、カール王の支配權の及ばない所まで遁れようとは思ひませんでしたので、何處か淋しい田舍に落着いて、そこで餘生を靜かに送らうといふ考へから、スタビアの海岸に沿うたカステロといふ所へ參りまして、そこの人家から少し離れた所で、その地方に特有な繻欖、胡桃、栗などの生ひ茂つてゐる林の中に地所を買ひ求めて、美しく氣持のよい住宅を建てました。そして、その傍に雅致のある庭園を造りましたが、噴水が豐富にありましたので、中央にフローレンス風の澄み切つた泉水をしつらへて、その中にさま〳〵な魚類を放ちました。かうして彼は毎日この庭園に手を入れるのに餘念もありませんでした。處が、その頃カール王も夏の暑さを避けて海岸のカステロへ遣つて參つたので御座いますね。

王はネリ氏の庭園の見事なことを聞いて、一度それを見たいものだと思つてゐました。同時に庭園の持主が何人であるかを知ると、その騎士が王から見て反對黨に屬してゐただけに、王は一層親しい態度を取るのが順當だと考へまして、明晩四人の隨行と共に微行でそちらの庭を訪れて、一緒に食事をしたいがと、豫め通じさせて置きました。

ネリ氏は大層それを喜びました。で、用意萬端を整へまして、豫め家族のものともいろ〳〵手管を取極めて置いて、それこそ力の限りを盡して、鄭重に王をその庭に迎へました。

王はネリ氏の庭園と住宅とを見廻つて、大いにそれを稱讃した後、やがて泉水の側に設けられた食卓に就きました。そして、隨行の一人であつたギドー・フオン・モンフオール伯爵を自分の一方の側に、ネリ氏を他の側に坐らせて、他の三人の隨行者はそれ〳〵ネリ氏の定めて置いた順序で席に着くやうに命じました。そこへ立派な食事が現はれましたが、酒も並々ならぬ上等なもので御座いました。それに御馳走の順序が又見事なもので、大層手際よく、萬事靜肅に些の澁滯なく運ばれました。これには王も一方ならず感心いたしました。

處で、王がかうして樂しく食事をしてゐるうちに、十五歲位かと思はれる、金絲に似た美しい金髮を豐かな捲髮にして、綏やかに垂れ下つた房髮には雁來紅の輕やかな花輪をかざした二人の少女がそこに現れました。その容貌は天使の外に比べるものもありませんでした。それ程都雅な顏立ちであつたので御座いますね。二人とも極めて淺い雪白の麻地を直接肌に着てゐるだけで、それが腰帶の上でぐつと狹くなつて、下の方はぱつと擴がりながら、足の上まで屆いてゐました。先に立つた一人は一對の魚網を肩に擔いで、それを左の手で支へ、右の手には長い棒を持つてゐました。後からつゞく今一人は左の肩に鍋を擔いで、腕には一束の薪を抱へ、手には五德を持ち、右の手には油壺と燃え盛る松明を携へてゐました。王はこの有樣を見て驚き訝りながら、何うなることかと心待ちに待つてゐました。

少女達は含羞みながらも恭しく前へ進んで參りましたが、王に一禮して、池へ降りる石段の上に立ちました。そこで一人は手に持つた鍋や他の道具を下に置いて、もう一人の少女の手にした棒を受取つて、二人で池の中へ降りて行きましたが、水は恰度胸のあたりまで屆いたのですね。一方ネリ氏の下男は手早く火を燃しながら、鍋を五德にかけて、それに油を入れ、少女達の投げる魚を待つてゐました。

池の中では、一人の少女が携へた棒で魚の隱れてゐさうな場所をつゝくと、他の少女が網をそこへ持つて行きます。かうして暫時の間に澤山の魚を獲つてお目に懸けましたが、王にとつては一段の高興であつたのですね。で、獲つた魚を下男の方へ投げてやると、下男はそれを生きたまゝ鍋に入れました。なほ少女達は云はれるまゝに、一層見事な魚を獲つて、それを王やギドーそれから父親の食卓に投げました。魚が食卓の上で跳ね廻ると、王はいよ〳〵興に乘つて、二三匹捕へては、少女達の方へそれを投げ返しました。かうして一同が面白く戲れてゐる間に、下男は渡された魚の料理を仕上げたのですね。これは贅澤な凝つた料理といふよりも、寧ろ間食として、ネリ氏が命じて置いた

通りに王の食卓に供へられました。

かうして看の料理も出來たやうだし、それに漁りも十分だと思はれましたので、少女達は池から上つて參りました。見ると、白い柔かな衣裳はびつたり身體に緊着いて、四肢が明かに透けて見える位で御座いました。二人は持つて來たものを再び悉く手にして、恥づかしさうに王の御前を通りながら、屋内に姿を隱しました。

王や伯爵をはじめとして、食卓の給仕をしてゐた者どもまで、皆少女達の姿に見恍れてゐましたが、その端麗な身體つきとしとやかで慎しみ深い態度とには、いづれも心竊かに感服しました。殊に王にはこの少女がすつかりお氣に召したので御座いますね。二人が水から上つて來た時、王はその體つきを一心に見詰めてゐました。個個、その瞬間には刺されても痛さを感じなかつたらうと思はれる位で御座いました。二人を何者とも、又どんな身分のものとも知らないで、たゞ二人のことを思ひ耽つてゐるうちに、王は二人から愛されたいといふ烈しい欲望を感じました。用心しなければ、戀に陷るだらうと、自分でも氣が附いた位なのですね。尤も、二人のうちどつちが一ばん氣に入つたかは、王自身も定め兼ねました。それ程二人は凡ての點で似通つてゐたのですね。で、暫くこんな感慨に耽つた後、王はネリ氏の方へ向き直つて、一體あの娘達は何者かと訊ねました。

「陛下」と、ネリ氏はそれに答へました、「あれは私の娘で、雙生兒で御座います。一人は佳人のジネヴラ、今一人は金髪のイソルダと申します。」

王は改めて二人を褒めそやした後、早く續づけるやうに勸めて見ました。が、ネリ氏は、目下の自分の身上では覺束ないことだからといふ口實の下に、それを斷りました。

處で、食卓に供すべきものとては、最早果物の外殘つてゐませんでした。その時、二人の少女は美しい絹の短衣を着て、いろんなその季節の果物を盛つた大きな銀の鉢を捧げながら、そこに現れて、王の食卓にそれを供へました。さうして置いて、二人は少し引退つて、次のやうな言葉で始つてゐる歌を唄ひはじめました。——

『愛の神よ、何處へわれを誘ひしか、
　　そは言葉にて語るすべなし。』

その唄ひ方の巧みで優美なことは、それに見恍れたり聽き恍れたりしてゐた王には、宛ら天使の群が天降つて、自分のために唄つて與れてゐるやうに思はれた位で御座いました。歌が終りますと、二人は恭しく王の御前に跪いて、お暇を願ひました。

少女達に歸られるのは誠に本意なく思はれましたが、それでも王は朗らかな顏で暇を遣はしました。次いで食事も

濟みましたので、王を始め隨行者一同馬に跨つて、ネリ氏の許を去りました。そして、一行は快活に喋舌りながら離宮に歸つて參りました。

歸つてからも、王は自分の戀を深く匿してゐました。が、どんな重要な政務に臨んでも、佳人ジネヴラの端麗な容姿を忘れることは出來ませんでした。ジネヴラを愛する餘りに、王は又その妹をも可愛ゆく思つてゐました。かうして最早他の事を考へる餘地のない程戀の絆に縛ばられてしまつたので御座いますね。で、いろ〳〵な口實を設けては、ネリ氏と親しく往來して、たゞジネヴラの顏が見たさに、屢々その庭園を訪れました。

が、だん〳〵その苦しみに堪へられなくなつた上、他に何うしようといふ手段もありませんでしたので、王は一人ばかりか、二人の娘をその父親から奪ひ取らうといふ氣になりまして、ギドー伯爵に自分の戀と決心とを打明けました。

處が、ギドーは心ある騎士でありましたので、王にかう申しました。「陛下、お言葉には少なからず驚き入りました。殊に私は陛下の心意氣を御幼少の折から今日に到るまで誰よりもよく心得てゐると信じてをりますだけに、私の驚きは他の何人のそれにも勝つて大いなるものがあるので御座います。得てしてさういふ戀に囚はれがちなと申しても然るべき陛下の青年時代には、一向かうした熱情をお見受けしなかつたやうに存じます。それだけに、早や老境に向はせられた今日この頃そんな烈しい戀に燃え立たせられると承はるのは、いかにも事珍しく、殆ど奇蹟のやうに思はれる次第で御座います。若しこの點に就いて陛下を非難して然るべきだと致しますれば、私の申上げたいことは次の一點で御座います。陛下は新に獲られた領土に於て氣心の知れない嶮險極まる民族のうちにあらせられ、今日なほ戎劍を手にせられつゝ、多大な御心勞の下に重要な政務を鬱はせ給ひ、心身を休ませ給ふことすらお出來遊ばさない御身でいらせられながら、さうした容易ならぬ事情の下に、そんな甘つたるい戀などに耽らせ給ふとは、私としても誠に心外千萬に存ずる次第だと、たゞかう申上げたいので御座います。

「一體、戀など申すものは志操高き王者のことでなく、無氣力な若年のすることで御座います。その上陛下の申されるには、これこそいよ〳〵怪しからぬことで御座いますが、あの氣の毒な騎士から二人の娘を奪はうと御決心遊ばされたとのこと。元來あの騎士はその家に陛下を迎へて自己の財力以上に敬意を表した上、なほ足らずとして、殆ど裸體のまゝの娘を御覽に入れましたのも、それに依つて、陛下に對する自己の信賴が如何に大なるものであるか、陛下は

王者であつて、決して虎狼に等しい方ではないことを如何によく自分が信じてゐるかを陛下の前に實證したものと存ぜられます。如何で御座いませう？　陛下はマンフレッド王の亂行こそこの領土への御遊出の機會を陛下に與へたものであることを最早お忘れ遊ばしたので御座いますか。陛下に敬意を表した者からその名譽、希望、慰藉を奪はうと遊ばれるその背信以上に、どんな背信が永遠の罰に値ひするもので御座いませう？　左樣なことを敢てなされませうなら、民草は陛下を何と申上げることで御座いませう？　陛下に於かせられては、あれはギベリン黨だからさうしたのだと仰せられゝば、それで十分辯解が立つと思召されるでせうが、然し何人にせよ、王者の懷に避難所を見附けた者がさうした扱ひを受けて、それで王者の正義が立ちませうか。おゝ、陛下よ、切に申上げたいので御座いますが、マンフレッド王を征服遊ばしたことは陛下の偉大な名譽で御座います。然し御自身を征服遊ばすことは更に偉大な名譽れで御座います。ですから、陛下よ、他を導き且罰し給ふべき御身分であるだけに、何卒先づ御自身を征服遊ばされませ。どうか心の駒を抑へて、折角かち獲られた譽をかうした汚點で汚すことのないやうに御用心を遊ばしませ。」

この言葉は王の心をいたく苦しませました。殊にそれが正しいことを承認しなければならなかつただけに、いよいよ王の心を暗くしました。で、幾度となく痛ましげな溜息を漏らした後、かう申しました。「伯爵よ、わしも今は、いかに强敵であらうとも、百戰の勇士にとつては、自分の意馬心猿を征服するに比べて、眞偽取るに足らぬものであることを悟つたよ。だが、その苦痛がどんなに烈しからうと、又それに要する努力がどんなに莫大なものであらうと、御身の言葉に勵まされて、わしは敢を滅ぼすことが出來たと同じやうに、亦自己を征服する術をも心得てゐるものだといふことを、實行に依つて、遠からぬうちにお目に懸けることにしようよ。」

自ら灼熱するやうに戀ひ焦れてゐるものを他人に讓るといふことは、王にとつても堪へ難いことでは御座いましたが、兎に角ナポリへ歸つてまだ數週間と經たないうちに、王は二人の少女を、しかもネリ氏の娘としてでなく、自分の娘として結婚させることに決心しました。かう決心しましたのも、一つは自分が惡業を犯す機會をなくすると共に、二つには騎士から受けた好意に報いるためで御座いました。王はネリ氏の承諾を得て、二人の娘に見事な支度をさせ、佳人ジネヴラをマフエオ・ダ・パリチに、金髮のイソルダをグリエルモ・デラ・マーニヤに配合させました。二人とも門地の高い騎士で、男爵で御座いました。王は二人の少女をこの騎士達に渡して置いて、云ふべからざる悲痛を胸

に抱いたまゝアプリア地方に參りましたが、絶えず激務に從事することに依つて、辛うじてその恐ろしい情熱を克服しました。そして、一旦この思ひを斷ち切つてからは、最早一生涯さうした情熱に囚へられなかつたといふことで御座います。

想ふに、二人の少女を嫁がせる位のことは、王者にとつて何でもないことだと云ふ方も御座いませう。私もそれを認めます。が、無をする王者がそれを敢てしたといふこと、而も前にその戀の葉一つ、花一つ、又實一つ味はつても見なければ、又味はつて見ようともしないで、愛する女をその儘他に嫁がせたといふことは、何時の世にも偉大であると思はないではゐられません。しかも、この寛容な王は、かうして氣高い騎士に多大の報いを施し、愛する二人の少女に榮達を齎して床しい心ばへを見せたばかりか、同時に自己を征服して、その行ひを完うしたので御座います。

第七話

アラゴン王ピータは病める女リサが彼に對して抱いてゐる愛の噂を聞いて、親しく彼女を訪し、次いで貴族の一青年に配合せ、その額に接吻して、以後彼女の騎士となる話。

フイアメッタは話を終りました。王の男らしい寛量は、ギベリン黨である一人の淑女こそ褒めようとはしませんでしたが、兎に角多大の讃辭を受けました。次いでパムピネアは王の命で語りはじめました。——

さて皆樣、分別ある人でしたらカール王に就いては、他の理由からして彼に無意を抱かない限り、皆樣と同意見でないことは御座いますまい。處で、私は、カール王の反對黨の一人が或フローレンスの女に對してした、同樣に稱讃すべき話を思ひ浮べましたので、只今それを申上げることに致しませう。

恰度佛蘭西人がシシリー島から追ひ出されました頃、パレルモにベルナルド・プチニといふフローレンス人の香料商がありました。大層なお金持ちで、細君との間に年頃の娘をたゞ一人持つてゐましたが、それが又大層な美人であつたので御座いますね。處で、アラゴン王ピータは、シシリーの島主になりますと、部下の貴族達を招いてパレルモで盛大な祝祭を催しました。そして、西班牙の北部カタロニヤ風の演武會を開きましたが、その際、例のベルナルドの娘リサは、窓から他の婦人達と一緒に、王が投槍を使ふのを見まして、妙に心を惹かれました。そして、何時迄も王の

姿に見恍れてゐるうちに、何時しか燃えるやうな戀に陷つてしまひました。

祭もいよ〳〵終りまして、リサは父の家に暮してゐましたが、間もなくこの思ひ上つた大膽な戀より外に、何一つ思ふことも考へることも出來ないやうになりました。それにつけて、最も彼女の心を痛めましたのは、自分の身分の卑しいことでありました。それを思ふと、首尾よい結果にならうといふ希望は殆ど皆無であつたので御座いますね。が、それかと云つて、その戀を思ひ止ることは何うしても出來ませんでした。同樣に又それを他人に打ち明けることも、一層大きな苦惱を將來するのが恐ろしさに、それも憚られました。王は勿論そんなこととは露知りませんでしたし、又そんなことに屈託するやうな氣振りもありませんでした。さういふ譯で、彼女の遣瀨ない悲しみは到底他人の想像を許さないものがありました。而も戀は日毎に募り、胸の悲痛はいよ〳〵烈しくなるばかりで、とう〳〵彼女もそれに堪へ切れなくなつて、病の床につきました。そして、太陽に溶ける雪のやうに、目に見えて日增しに衰へて行きました。兩親は娘の病氣を悲しんで、醫者や藥は勿論のこと、絕えず慰め勵ましつゝ、娘をいたはり介抱しました。が、肝心の娘が叶はぬ戀の悲しみに生き存らへる氣もなかつただけに、さうした心盡しも一向効果がなかつたので御座いますね。

さうは云ふものゝ、或日父親が何か氣の晴れるやうなことをして見てはと勸めました時、娘は、何か然るべき方法で、出來ることなら、死ぬ前に一度自分の戀と決心の程を王に知らせたいものだと思ひまして、父に向つて、何日かミヌチヨ・フオン・アレチヨを招んで貰ひたいと賴みました。ミヌチヨは當時最も優れた歌手兼彈琴家でありまして、ピータ王にも大層贔屓にされてゐました。ベルナルドにして見れば、娘のリサがかう云ふのも琴を彈じたり、歌を唄つて貰ひたいのに過ぎないのだらうと思ひまして、早速その旨を先方に傳へました、もと〳〵親切氣の多いミヌチヨはすぐに遣つて參りました。そして、優しい言葉でリサを慰め、幾分その心を晴れやかにして置いて、ヴイオラを取つて巧みに小曲を奏しながら、それに合せて二三の歌を唄ひました。その歌は、唄ひ手のつもりではこの乙女の胸を鎭める筈でしたのに、却つてその戀を煽り立てるよすがともなつたので御座います。

すると、乙女は詩人と二人切りで少し話したいことがあると申しました。で、他の人はいづれもその部屋を出ました。乙女はそこで相手にかう申しました。「ミヌチヨ樣、實は私の祕密を篤と聽いて頂きたいと思ひまして、わざ〳〵お招きしたやうな次第ですの。貴方でしたら、私の云はない限り他人にお漏しになることもあるまいし、又お出來になる限り、私をお助け下さるだらうと思ひましたからで御座います。で、何分とも宜しくお願ひ致します。ねえ、ミヌチヨ樣、あのピータ王が御即位のお祭に演武會を催されました日、私は王のお顏をじつと見詰めながら、王に對する愛に私の心を燃え立たせました。そして、その愛のために、御覽の通りの仕儀になりました。ですが、王者に對する愛の自分のやうなものに不相應であることは、私もよく知つてゐます。けれども、どうしてもその愛を追ひ拂ふどころか、幾分でも弱めることさへ出來兼ねて、私はもう到底その愛に堪へられなくなりましたので、比較的輕い悲しみをと思ひまして、死を選びました。今に死んで行くことで御座いませう。でも、その前にそれを王に知つても頂かないで、この儘世を去るのだと思ひますと、それだけが殘念で〳〵堪りませんの。で、他に宛も御座いませんところから、貴方にお願ひしたら私の決心を然るべく王に傳へて頂くことが出來るかと存じまして、かうしてお願ひいたす次第で御座います。どうぞお願と仰しやらないで、一生のお願ひをお聽き下さいまし。そして、傳へてさへ頂けましたら、どうぞその由をお知らせ下さいませんでせうか。それを聞いて、私は心安く死んで行きたい、この苦しみから免れたいと思つてゐますの。」かう語り終つた後は、たゞ默つて涙を流すばかりで御座いました。

ミヌチヨは乙女の高貴な志操とその嚴格な決意とに渺なからず、驚かされました。同時にその決意を大層悲しみました。が、方法次第で乙女の願ひを果して遣れさうに思ひましたので、かう申しました。「リサさん、固くお約束いたしませう。どうか、貴方を失望させるやうなことは萬々ないと思つてゐて下さい。それにしても、あんな偉大な王に心を捧げた貴方の氣高い振舞には感心しました。出來るだけの御靈力をいたしませう。貴方さへ氣を落さずに待つてゐらつしやれば、三日間のうちには、何とか首尾よい御返事をすることが出來ようかと思ひます。ところで、何分にも急ぐことですから、早速働つて仕事に取りかゝりませうよ。」

リサは更めて懇ろに賴みました。そして、氣を落さないことを誓つた上、相手を祝福して機嫌よく別れました。ミヌチヨは乙女の家を出ますと、すぐに當時有名な詩人であつたシエナのミコを訪ねて、いろ〳〵賴んだ結果、次のやうな詩を作つて貰ひました。——

愛の御神よ、かの君に、
行きて語れよ、わが惱み、
畏さに憧れも捨て、
われ今死ぬと、告げよかし。

手を組み祈るわれなれば、
神よ、行きて離れかし、
われの慕ふはかの君と、
かれのみ癒すわが病、
憧れ死ぬるわが命、
死の闇今に襲ひ来ん、
一日々々とたゞわれは
恐れはぢらふ苦しみを
逃れんことを待つばかり。
あゝ、傳へよやわが惱み。

戀に變れしその日より、
心の弱さいや增る。
心強くもかの君に、
胸の思ひを語らばや、
かの君故に狂ふなり、
死して報いん戀の仇。
わがこの惱みを耳にせば、
あゝ、われ心強くして、
この惱みこの苦しみを語りなば、
君の誇りも消えて失せなん。

心の細る苦しみを
訴へ嘆く振舞を、
愛の御神よ、好まずば、
せめて憐みを垂れ給ひ、
われの想ひを傳へつゝ、
かれの情を喚び覺ませ。
騎士を相手に槍劍
揮はせ給ふかの君を
見染めし日よりわが心、
唯一筋に靡きけり。

ミヌチョはこの歌詞に對して、それに應はしいやうな物柔かで哀傷的な曲を附けて、三日目に宮廷へ伺候しました。ピータ王は恰度食事中で御座いました。で、ミヌチョに、ヴイオラに合せて何か唱ふやうにと命ぜられました。そこでミヌチョはヴイオラを奏でながら、この歌を艶に優しく唄つてのけましたので、廣間に居並ぶ面々はそれに聽き恍れて身動きさへ致しませんでした。それ程一同は息を凝らして耳を傾けたので御座いますね。殊に王が人一倍さうであつたことは申すまでも御座いません。で、ミヌチョが唄を終りますと、王は、今迄に聞いたことのない歌だが、一

體どこから持つて來たのかと訊ねました。
「陛下」と、ミヌチョは答へました。「歌詞と譜とが出來ましてから、まだ三日とたゝない位で御座います。」
王が誰の作かと訊ねますと、ミヌチョはかう申しました。「陛下以外の方には、どうも申上げ兼ねます。」
王はそれが聞きたかつたので、食事が濟むと、ミヌチョを居間に喚び寄せました。そこでミヌチョは自分の聞いた一切の事情を順序よく語つて聞かせました。王はそれを聞いてよろこぶと共に、その娘を褒めました。そして、そんな立派な心懸けの乙女にこそ同情せずにはゐられない、お前は此處からすぐに乙女の許へ行つて、相手の落膽しないやうによく慰めた上、今日の夕方には間違ひなく彼自ら彼女を訪問する旨を傳へて貰ひたいと申しました。
ミヌチョは、こんなうれしい便りを乙女に聞かせることが出來るといふので、喜び勇んで、早速ヴイオラを抱へて王の館を去りました。そして、乙女だけに面談して、前後の經緯を話した上、ヴイオラに合せて例の歌を唄つて聞かせました。それを聞いた乙女は世にも嬉しい思ひをしまして、立ち所に恢復の兆候が現れてまゐりました。そして、家の者は誰一人そんな事とは夢にも知らないのに、彼女はひとり王に逢へる夕方を心密かに待ち焦れてゐました。
親切で思ひ遣りの深い王は、その間に、ミヌチョから聞いたことを一再ならず繰返して考へて見ました。それに、その乙女とその美貌とはかねてから好く知つてゐましたので、何にも優して彼女がいよ〳〵可哀さうに思はれて來ました。で、夕方になりますと、王は馬に跨つて、たゞ氣散じの遠乘りと見せかけながら、例の香料商人の家へ遣つて參りました。そして、その家の見事な庭園を見せて貰ひたいと申込ませて、庭前に馬を降りました。暫くして王はベルナルドに、お前の娘はどうしてゐるか、まだ緣づかないでゐるかなどと訊ねて見ました。
「陛下」と、ベルナルドは答へました。「陛下、娘はまだ嫁づいてゐません。實は、先日來重い病氣に罹りまして、只今も臥つてゐます。それが今日の午後から不思議な位快くなつては參りましたがね。」
王は忽ちこの恢復の原因を看破して、かう申しました。「あんな美人をさうむざ〳〵と世の中から奪はれては、實に本意ない話ぢや。一つお見舞に出掛けるとしようよ。」
時を移さず王は二人の從者とベルナルドだけを連れて、乙女の部屋へ參りました。乙女はいくらか身を起し氣味に王の入來を待ち焦れてゐましたが、王は部屋へ這入ると、いきなり寢臺へ歩み寄つて、乙女の手を取りながら、かう申しました。「お嬢さん、何りしたと云ふのです？　貴方はまだ〳〵お若いのだから、他人の慰め手であつてこそ然る

べきだのに、病氣なぞに負けてゐられるのか。お願ひだから、私達のために一つ元氣を出して、早く快くなつて貰ひたいものだね。」

乙女は自分が何物にも代へて愛してゐる男に手を握られて、いさゝか恥しい氣もしましたが、心の中では天國に昇つたやうな悦びを感じて、一生懸命にかう申しました。「陛下、わたくしの貧しい力を堪へ難い重荷で試さうと致しましたのが、この病の原因で御座います。でも、陛下のお情で今にも元の軀になれることで御座いませう。」

乙女の謎めいた言葉を解し得たのは王だけで御座いました。彼は愈々この乙女に感心しました。いえ、王は一再ならず心の中で彼女を一平民の娘たらしめた運命を非難致しました。で、それからも暫く乙女と四方山の話に時を移して、いろ〳〵慰め勵ました上、別れを告げました。

王のこの平民振りは世の讃美の的となると共に、香料商とその娘との並々ならぬ名譽とせられました。一方娘は又それがために大層幸福でありました、それは嘗て戀人を獲たどんな女の幸福にも劣りませんでした。かうしたうれしい希望に援けられて、彼女は數日のうちに恢復しました。そして、以前にも優して美しくなりました。

彼女が元の身體になつた頃、王は、かうした愛にはどんな報いをして然るべきかに就いて王妃と相談した上、或日多くの貴族を連れて馬上の人となつて、再び香料商を訪れました。そして、その庭園へ通つた後、香料商とその娘とを前に喚び寄せました。とかうするうちに王妃も亦大勢の貴婦人をお供にそこへ現れました。貴婦人達は娘を仲に取り圍んで、愛嬌の總花を振り蒔きました。

暫くすると、王は乙女を側へ喚んで、かう申しました。「お嬢さん、貴方が私に對して抱かれた愛には、私も大いに敬意を表してゐます。で、どうかその敬意を受けて頂きたいものだね。貴方に捧げようといふ敬意は、他でもない、貴方も年頃になられたことだから、私達が貴方のために選んだ男を良人に持つて頂きたいといふことなんだがね。勿論、私はそれに拘らず永久に貴方の騎士になる積りで、而もさうした愛に對してたゞ一度の接吻以上のものを求めようとは思はないよ。」

乙女は恥づかしさに顏を眞紅にしました。が、王の申出を快くお受けして、かう小さな聲で申しました。「陛下、私が陛下をお愛し申上げてゐるなぞといふことが世間に知れましたら、定めし皆樣は私を狂人だとお思ひになつて、身の程を忘れた、自分の地位を知らないばかりか、陛下のそれさへ分らない奴だと仰しやることと存じます。けれども、たゞひとり人間の心の底を見そなはせられる神も知ろし召すやうに、お見初め申上げたその時から、陛下は王樣でいらつしやり、私は香料商ベルナルドの娘であることは好く存じてをりました。從つて、さうした高嶺の花に思ひを懸けることが私にとつてどんなに不相應なことであるかといふことも十分辨へてをつた積りで御座います。

「が、私などよりも陛下こそ百も御承知の通り、どなたが戀するにしましても、それ相當の選擇に由るのでは御座いませんので、皆心の機勢と好みとに基づくもので御座います。この法則に私は幾度となく反抗を試みて見ました。が、力及ばずして、とう〳〵陛下をお慕ひ申すやうなことになりました。いゝえ、今もお慕ひ申してゐますし、又何時までも變らないことで御座いませう。實際、私は陛下に對する愛に縛られて、陛下の意志は私の意志だと思ひ詰めたので御座います。ですから、陛下が私のためにお選び下さつて、私に名譽と地位とを齎すやうな方が御座いましたら、私はよろこんでその方を良人として、敬愛を捧げますのは勿論、もし陛下が火の中に飛び込めと仰せられ、さうすることに依つて陛下の御好意が獲られるものと信じたら、喜んでさう致すことで御座いませう。なほ國王であらせられる陛下を騎士に持つことが私にとつてどんなに不似合ひなことであるかは、陛下御自身もよく御承知で御座いませう。從つてそれに對しては何とも御返辭いたしかねます。又私の愛の徵としてお求めになられます接吻も、王妃殿下のお許しがなうては承諾いたしかねる次第で御座います。それにしましても、王陛下や王妃殿下のかうした御恩寵に對しては、到底お禮のいたしやうも御座いませんだけに、どうか私に代つて神が兩陛下に報い給はんことを心から祈ります。」

乙女の返答は大層王妃のお氣に召しました。王妃はこの乙女を、王の云つた通り、全く思慮のある女だと思ひました。次いで王は乙女の兩親を喚び寄せました。兩親も亦王の所爲に滿足する旨を申出でましたので、王は門地こそ高けれ、貧しいペルデイコンといふ青年をそこへ喚び寄せました。勿論、青年に不服があらう筈も御座いませんでしたので、王は二つの指輪を手渡してリサと婚約させました。そこで、王と王妃とは乙女に高價な寶石類を澤山贈りました外に、なほ王はその場で兩人に景色の好いばかりか、產物にも豐かなチエフアルとカラタベロタの地を與へて、かう申しました。「これは君の花嫁からの贈物として、君に呈上しよう。更にわしが君のためにしようと思つてることは、いづれそのうち君にも分ることだらうよ。」

かう云つてから王は乙女の方へ向き直つて、かう申しました。「そこで、貴方の愛から獲られる筈の果實を頂戴することにしようね。」それと共に、王は乙女の頭を兩手に持つて、その額に接吻しました。次いでペルデイコンを始めと

して、娘のリサ同樣滿足に思つてゐました兩親は盛大な祝宴を催して、樂しい結婚式を擧げました。

世上の傳へる處に據りますと、王は乙女に對してよくその約束を守りました。と云ふのは、一生を通じて王は毎も乙女の騎士だと稱して、リサの贈つた以外の徽章をつけて演武に臨むやうなことは決してなかつたからで御座います。

かうした振舞に出てこそ、人は部下の心を收攬すると共に、他人によき行爲をなすべき機會を與へ、自らは永久に朽ちない譽れを獲るので御座います。が、大概の王者が殘酷で暴君的になつた今日では、最早かうした點に思慮を向ける人も殆どなくなりましたわね。

第八話

テイツス・キンクテイウス・フルヴスの妻であるソフロニエはジシブスの妻であると思つて、テイーツスと共に羅馬に赴き、そこで零落せるジシブスに出逢ふ。ジシブスはテイーツスに侮辱せられたものと思ひ死なうとして、殺人罪を犯したと自らを訴へる。テイーツスは漸く彼なることを知つて、それを救ふために、かの者を殺したのは自分であると名乘り出る、次いで事實罪を犯した者が現れる。その後、いづれもオッタヴイアヌスによつて晴天白日の身となり、テイーツスは妹をジシブスに妻として與へ、なほ全財產を彼と分ける話。

パムピネアの話が終つて、いづれも、殊にギベリン黨の淑女達は人一倍ピータ王を讚美してゐました時、フイロメラは王の命に依つて、次のやうに語り始めました。——

皆樣、王者は、しようとさへ思へば、どんな偉大なことも爲し得るものである、從つて王者に對しては特に寬量が要求せられるものであることを何人が拒み得るでせう？自分の爲すべきことを、爲し得る場合に、直ちに實行した人は當然のことをしたまでで、左程驚くにも當らないし、同じ事をして、而もその貧しい財力から見て、今少し小さなことを要求して然るべきやうな人を讚美すると同じやうに、最大の讚辭を以て褒め上げる必要のないものだと存じます。ですから、皆さんが王者の行爲に幾多の讚辭を惜しまれず、左程までにそれを美しいものとされるからには、私達同樣の者のさうした行爲は、もしそれが王者のそれと同じものであるか、もしくはそれを凌ぐやうな場合には、一層皆樣から喜ばれ、一層多くの讚辭を頂くべきものであることは、私の信じて疑はない處で御座います。そこで私は、二人の友達になつた市民の間に起つた、見上げた犧牲的行爲をお話の中に申上げて見たいと存じます。

オクタヴイアヌス・ツエザールがまだアウグストとは稱ばれないで、所謂三頭政治の職に就いて、羅馬帝國を治めてゐました頃に、プブリウス・キンクテイウス・フルヴスといふ市民が羅馬に住んでゐました。この人にはテイーツス・キンクテイウス・フルヴスといふ、優れた才能を持つた息子がありましたが、彼はこの子供を哲學を研究するために雅典へ遊學に出して、前から懇親にしてゐたクレムスといふ立派な市民に萬端の世話を頼みました。テイーツスはクレムスの家に引取られて、ジシブスといふその息子の仲間にされました。そこでアリステイブといふ學者の指導の下に、二人ともクレムスから勵まされつゝ哲學の研究に從ひました。

二人の青年がかうして互に交はつてゐるうちに、その性向や習慣に多くの共通點のあることが分りました。その結果、二人の間に一種の兄弟愛ともいふやうな友情を生じて、後には死の外如何なる不幸も二人を別れさせることは出來ない程になりました。どちらも、二人一緒にゐなければ、決して面白くもなければ落着いてもゐられなかつたので御座いますね。二人は一緒に研學を始めたのですが、どちらも同じやうに優れた才能を持つてゐましたので、二人とも同じ歩調で哲學の最高峰に達して甚大な名聲を博しました。

かういふ風で二人は凡そ三年間程を過しました。クレムスは大層それを喜んで、いづれ劣らず自分の子のやうに愛してゐましたが、最早老年でもあつたこととて、間もなくこの世を去りました。二人は共通の父親に對するやうな同じ悲しみを覺えました。それがために、クレムスの友人や親類達も、二人に降りかゝつたこの不幸に就いて、どちらにより深い弔意を表したものか、一寸その區別が附かなかつたと申します。處が、それから數箇月たつと、ジシブスの友人や親戚達が遣つて參りまして、テイーツスと一緒になつて、彼に結婚するやうに勸めました。そして、間もなく非常な美人で、門地も高く、且雅典生れでもあつたソフロニエといふ十五歳ばかりになる乙女に白羽の矢を立てました。

處で、いよ〳〵結婚の日も近づいた或日のこと、ジシブスはテイーツスに向つて、一緒に行つて自分の花嫁に會つてくれないかと頼みました。相手はまだ一度もその女を見たことがなかつたので御座いますね。で、二人が女の家に着いて、彼女が二人の間に席を占めました時、テイーツスは友人の花嫁の美しさを見屆けようとして、注意深く相手を見守つてゐましたが、忽ち彼女のあらゆる點に甚だしく心を牽かれて、勿論顏色にこそ出しませんでしたが、嘗て女に思ひを寄せたどんな戀人にも劣らない程烈しい熱情を

彼女に對して抱くやうになりました。

暫く彼女の許で時を過した上、二人はそこを辭して、家に歸つて參りました。テイーッスは自分の部屋に引取るや否や、直ぐさまあの美しい乙女のことを考へ始めました。が、その考へに耽れば耽る程、いよ〳〵情熱は燃えになつて行つたので御座いますね。

それに氣が附くと、彼は幾度となく溜息を吐いた上、かう獨語を始めました。「テイーッスよ、お前の一生は呪はれてあれ。お前は自分の意向、愛、希望を何處へ、又何の上に向けたのだ？　何だと？　お前はもうクレムス及びその一家から受けた親切から云つても、又お前とジシブスとの間に存在する友情から云つても、この乙女卽ちジシブスの花嫁には、妹に對する敬愛を以て接しなければならぬことを忘れたのか。一體お前はあの女を愛して何うしようといふのだ？　お前は肢惑的な憧れや甘い希望に誘惑されて、何處へ落ちて行かうといふのだ？　おゝ、不幸なる者よ、理智の眼を開け、自らを識れ！　理性に從つて、肉の欲望を制抑せよ。無分別な望みを抑へて、思ひを他に轉ぜよ。當初に於て情慾に抗し、餘裕のある間に汝自らを征服せよ。汝がこれを求めるのは許さるべきでない、又汝の名譽と兩立し得ることでもない。汝が今追はむとしてゐるものは、よしそれを手に入れる自信があるにしても、又よしそれに目を着けてゐようとも、どうしても自ら避けねはならないものだ。それが眞の友情の求める處で、又汝の爲すべき處である。處で、テイーッスよ、お前は何うしようといふのだ？　爲すべきことをしようと決心してゐるのなら、お前は爲すべからざる愛を見捨てるであらう。」

しかも、彼は矢つ張りソフロニエのことを考へ續けてゐました。そして、突然方向を轉じて、今迄云つたことを一切拋棄しながら、かう申しました。「愛の法則は他の如何なる法則にも優つて力强いものだ。それは友情の法則のみならず、神の法則をも破るものだ。これ迄も、いかに屢々父親が娘を、兄が妹を、繼母が繼子を愛したことであらう？　かうしたことは、これ迄に幾千度となくあつたことであると共に、一人の男が友人の妻を愛するといふこと以上に不自然なことなのだ。それに私はまだ若い。そして、青春は愛の法則に全然隸屬せしめられてゐるものだ。愛の求める處は、私も亦それを求めずにはゐられない。名分は老年にこそ似つかはしいものであらうが、私は愛の求める處以外のものを欲するわけには行かない。彼女の美は萬人に愛せられ、嘆稱せられる價値がある。若い私が今彼女を愛したとしても、誰がそれだからと云つて正當に私を非難することが出來るだらう？　私は彼女がジシブスのものであるが故に、彼女を愛するのではない。よし誰のものであつても、私は愛しないでゐられないからこそ愛するのだ。他の人でなくて、私の友人のジシブスが運命の恩寵を蒙つたのは、それは運命のせゐだ。で、ソフロニエが、その美貌の故に必然的にさうしないでゐられないやうに、男の愛を喚び醒まさずに措かないものとすれば、私が他の男同樣に彼女を愛してゐると聞いても、ジシブスは寧ろそれを喜んで然るべきではあるまいか。」

彼はかうした詭辯からして、自分を嘲笑しながら再びその反對の結論に立ち返りました。かと思ふと、又これから再びかれに、又かれからこれにといふやうに、絕えず彼方此方へ動搖しながら、その日とその夜だけではなく、幾日も〳〵過しまして、とう〳〵食慾も失へば、不眠にも陷つて、衰弱の果ては病床に就くやうになりました。

ジシブスは友達が幾日も物思ひに耽つた揚句今は病氣にまでなつたのを見まして、大層それを悲しんで、一刻も傍を離れないで、あらゆる手段を盡して介抱しながら、相手を慰めました。同時にその憂慮と病氣との原因を打明けて呉れるやうに、何遍となく言葉を盡して懇願したもので御座います。テイーッスはそれ迄いろんな一時遁れの返答をして胡麻化して來ましたが、ジシブスはそれを看破して、その上にも絕えず相手に懇願して止みませんでしたので、とう〳〵涙を流して溜息を漏らしながら、次のやうに申しました。——

「ジシブス君、運命の廻り合せからして、本來なら僕の德性がこゝでいよ〳〵自己を發揮すべきだのに、恥づかしくもそれが負かされるのを見てゐなくてはならないやうな破目に立ち到つたことを考へると、もしそれが神々の思召しに適ふことなら、僕は生きてゐるよりもいつそ死んだ方が優しだと思ひますよ。實際、僕はそれに對する應報、卽ち死が間もなく遣つて來ることと思つてゐるのだ。僕だつて自己の汚辱を忍びながら生き延びるよりは、死んだ方が遙かに有難いからね。處で、その汚辱といふのは、何事も祕密にすることは出來ないし、又してはならない君に對してすら顏を赧らめないでは打明けられないやうな性質のものだよ。」

それに次いで、彼は己の惱みの原因、自分の考へ、內心の爭鬪、及びその爭鬪に於ていづれが勝利を占めたか、從つて今自分がソフロニエに對する愛のために、いかに窶れ衰へてゐるかといふことを打明けた上、更にそれが自分にとつていかに許されないことであるかは、自分と雖もよく承知してゐるから、その應報として自分は既に死ぬ覺悟をしてゐる、間もなくさうなることだらうし、又さうなることを望んでゐる旨を附言しました。

ジシブスはかうした話を聞き、更にその流れる涙を見て、

自分も亦かの美しい乙女の淑やかさに、相手よりは遙かに穏かであるとは云へ、矢張り心を捕はれてゐただけに、暫しの間はたゞ感慨に耽るばかりで御座いました。が、間もなく友の命の方がソフロニエよりも大切であることに氣が附いて、一緒になつて同じやうに涙を流しながら、おろおろ聲でかう申しました。「テイーツス君、もし君が事實さうである程に慰めを必要としない身であつたら、僕は君が永い間僕にその烈しい情熱を匿して置いたことを君に不足云ひたい位だよ。處で、その情熱が君には許されないものに思はれたとしても、許されないことにしても許されることにしても、兎に角友人に匿して置くべきではなかつたね。友人といふものは、正しいことを相手と共に喜ぶと同じやうに、正しからざることを相手の心から取除くことにも盡力するものだらうぢやないか。が、そんな事は暫く措くとして、僕から見て刻下の急務だと思はれることを相談しようぢやないか。

「君が僕の婚約者たるソフロニエを熱愛してゐるといふことは、僕も別に不思議とは思はない、寧ろさうでなかつたら、却て不思議な位だよ。君がソフロニエを愛してゐるのは極めて當然な話だ。けれども、君が彼女を僕に與へた運命に對して不平を云ふのは、同じやうに極めて不當な話だよ。何うやら君は、若し彼女が僕以外の男に屬するものであつたら彼女に對する君の愛は正義と兩立するものと思つてゐるやうだね。だが、平生のやうに賢明な君であつたら、一つ云つて見たへ、運命が彼女を僕に與へないで、誰に與へたら、君は運命に感謝すべきだと云ふのだい？　彼女を運命から頂戴した他の男は、誰にしても、よし君の愛がどんなに堂々たるものであらうとも、屹度彼女を君のためよりは寧ろ自分のために愛するだらうぜ。但し僕に對してはだね、若し君が僕を君の友人だと思つてゐるのなら、何もそんな事をかれこれ心配する必要はないよ。と云ふのは、お互に友人となつてからといふもの、僕のものであると同時に君のものでないやうなものは、これ迄僕は一つとして所有した覺えがないからね。處で、若し事態が他に仕樣のない程度に進んでゐるのなら、今度の事に就いても他の財寶と同じやうに今云つたやうな方法を講じるだらうが、しかし事態はまだ君をソフロニエの唯一の所有者とすることが出來る程度にしか進んでゐないのだ。そこで僕はそれを實行するつもりだよ。何となればだね、正々堂々と實行することの出來る事柄に於て、僕が君の要求を僕の要求とすることを知らないとしたら、僕の友情は君に取つて一體何の價値があるといふことにもなるからね。そりや實個、ソフロニエは僕の婚約者で、僕も彼女を非常に愛してゐるし、又結婚の式を一日千秋の思ひで待つてもゐた。しかし、かうした事柄にかけては僕よりも遙かに見識に富んだ君か彼女のやうに珍しい女を僕以上に熱望してゐるからには、僕は諦合つて、彼女が僕のでない、君の妻として嫁いで來るやうにするよ。だからまあ、きな〳〵思はないで、ふさぎの蟲を追拂ふんだね。そして、昔の健康と元氣と快活とを喚び返して、これからはたゞ君の愛が僕の愛以上に當然享くべき價値のある應報を待つてゐるがいゝよ。」

ジシブスのかうした言葉を聞いて、テイーツスも甘い希望が再び頭を擡げるやうな喜びを感じましたものゝ、一方義務の觀念は、ジシブスの寛量が大きければ大きいだけ、それを甘受するテイーツスの不當もいよ〳〵大きくなるではないかと非難してゐるやうに思はれて、聞いてゐるうちから赤面せずにはゐられませんでした。で、彼はいよ〳〵せぐり來る涙の隙間から、やう〳〵の思ひでかう申しました。「ジシブス君、君の寛厚な友情は、僕の友情が當然爲すべきことを僕にはつきり敎へて與れましたよ。神がより應はしい者として君に與へたまうた彼女を僕のものとして君から貰ひ受けるなぞといふことは飛んでもないことだ。若し神が彼女を僕に似合はしいものだと思召したとすれば、君だつて、また何んな人だつて神が彼女を君に與へたものと思ふことは出來ない筈だ。だから、どうか、君が選ばれたこと、君の友人達の勸告及び天與の贈物を心から享けて與れたまへ、そして、僕は、さうした貴いものに値ひしない者として神が下し給ふ涙の裡に亡びさせて與れたまへ。僕がその涙に打克てば、君も喜んでくれるだらうし、もし又涙が僕に打克つたとしても、さうなれば僕の苦しみもなくなるだらうからね。」

「テイーツス君」と、ジシブスは申しました、「もし僕達の友情が君を强ひて僕の希望に從はせる權利を僕に與へ、且君を勵かしてその希望に從はせ得るものとすれば、その友情を主張しようと僕の思つてゐるこの一件に關しては、萬事決定せられたものと云つていゝ。で、もし君が僕の懇望に進んで服從してくれないとすれば、僕は、友人の幸福のためなら當然用ひてもよい無理押しに依つて、どうしてもソフロニエは君のものにする積りだよ。

「僕は戀がどんな恐ろしい力を揮ふものであるかを知つてゐる、又それが一再ならず戀する者を不幸な死に導くものであることをも知つてゐる。今君の樣子を見るに、死に溺してゐて、それから恢復するとか涙を征服するとかいふことが覺束ないばかりでなく、寧ろ進んで征服されてしまはずにはゐられないといつた風だね。さうなれば、僕は勿論直ぐさま君の後を追ふに極つてゐるよ。よし君を愛する他の理由が一つもないにしても、僕自身が生きて行くために君の命は僕にとつて貴重なものでなければならないのだ。

そこでソフロニエは君のものとしようぢやないか、彼女程君の氣に入る他の女は、君にだつてさう容易には見附からないだらうからね。僕はしかし他の女に愛を向けるのはさして難事でもないだらう、さうなればお互に幸福になつたと云はれるのだ。勿論、女といふものが友人と同じやうに滅多にないもので發見するのに困難なものだつたら、僕だつてこの點でさう氣前よくはされないだらうよ。他の妻を探し出すことは容易だが、友人はさう行かないからこそ、僕は寧ろ――彼女を失ふとは云はないよ、君に與へるのだからね、失ふのではなく、僕の他の自我、詳しく云へば、彼女の良人として最も優れたものに讓るのに過ぎないのだから、――君を失ふよりは彼女を君に讓らうと思ふんだよ。だからもし僕の懇望に幾分でも君を動かす力があるとすれば、どうかその惱みから解放されて、君及び僕を同時に振ひ立たせ、快活な希望の下に、愛人に對する君の熱愛が求めてゐる悅樂を享受する用意をして呉れたまへ。」

テイーツスはなほもソフロニエを自分の妻にすることを承諾し兼ね、從つて暫くはなほ反對を唱へてゐましたやうなものゝ、しかし一方からは戀が、他方からはジシブスの勸告が彼を動かして、とう〳〵かう云はせました。「ジシブス君、君の欲すること――さう君は懇望と共に云つてくれるがね、それを僕がすることによつて、僕は果して君の望みと自分の望みとどつちをより多く充してゐるか分り兼ねる位だ。それに君の寛量は當然起るべき僕の羞恥の感を征服する程のものである以上、僕もお言葉に甘えてさうすることに極めたよ。だが、僕も君から愛人だけでなく、命そのものまで取返して貰つたといふことに氣が附かないやうな人間のするやうに、それを甘受するものだとは思はないでくれたまへ。あゝ、出來ることなら、何時か君に當然の敬意を表する機會が來て、君が僕自身が同情する以上に僕に同情して、僕のためにして呉れたことをどんなに僕が有難がつてゐるかを實證して、君の福祉を計ることが出來たらと、たゞそれを祈るばかりだよ。」

それを聞いて、ジシブスはかう申しました、「テイーツス君、で、いよ〳〵この事を實現させようとするには、かうした方法を取る外ないやうに思はれるがね。君も知つての通り、ソフロニエは僕の親類と向うの親類との間の長い交渉の後、やつと僕の嫁に定まつたのだ。だから、今更出し抜けに、あの女を嫁にするのはいやだと、僕の方で云ひ出さうものなら、それこそ面倒なことが持ち上るばかりでなく、あの女と僕の親類どもを憤慨させるやうなことにもなるよ。いや、それで確實にあの女を君のものにする見込みがあるんなら、勿論僕はそんなこと少しも厭はないがね。しかし僕が今あの女を理由なしに斷らうものなら、恐らく身内のものはあの女を君でない他の男に呉れてやつてしまふだらうよ。そして、君は、僕の手に入れることが出來なかつたものを再び失ふといふやうな破目になるのが落ちだね。そこで僕は、一旦始めたことをこの儘續けて行つて、僕の花嫁としてあの女を自宅へ連れて來た上、結婚式を擧げる。すると君が、豫め打合せて置いたやうに、竊かに君の妻としてあの女と一緒に床へ這入るといふやうなことにするのが一番好いと思ふのだよ。さうして置いて、後日適當な時機と場合とにそれを公表するのだね。彼等が滿足すれば、それでよし、もししないとしても、出來てしまつたことは今更元へ戻すわけにも行かないから、いづれは彼等も滿足する外なからうぢやないか。」

この策にはテイーツスも悉く贊成しました。で、ジシブスは、テイーツスの健康が恢復した後、ソフロニエを自分の妻として家に迎へました。結婚式は盛大に營まれて、やがて夜になりました時、婦人達は新妻を新郎の床に殘して立ち去りました。テイーツスの部屋はジシブスのそれと隣り合せで、互に相通ずるやうになつてゐました。で、ジシブスはその部屋に取り殘されると、一々灯を消して置いてから、そつとテイーツスの許へ忍んで行つて、戀人と床を共にするやうに促しました。

テイーツスはこれを聞くと、今更恥しさに凡てのことを取り消したくなつて、行くことを拒みました　が、口先ばかりでなく、心からテイーツスの望みを叶へてやらうと決心してゐたジシブスは、長い間爭つた後、やつと相手を勸かして隣の部屋へ遣りました。テイーツスは床へ這入ると、彼女を抱いて、戲れるやうに、低聲で、自分の妻になつてくれるかと訊ねました、

相手をジシブスだと思ひ込んでゐた彼女は承諾の旨を答へました、すると、テイーツスは高價な指輪を女の指に嵌めてやりながら、かう申しました。「では、私も貴方の夫に成りませう。」かう云つて、彼は彼女と妹脊の契りを結んで、長い間愛の悅樂に耽りました。彼女は勿論、誰一人として、ジシブス以外のものが彼女と添ひ寢をしてゐようとは夢にも氣が附かなかつたので御座いますね。

ソフロニエとテイーツスとの結婚がかうして成立してゐる間に、テイーツスの父プブリウスはこの世を去りました。そこで、テイーツスに宛てた手紙がとゞいて、猶豫なく羅馬に歸つて殘務を整理するやうに云つて參りました。テイーツスはジシブスと相談の上、彼女を連れて旅に出ることに定めました。が、これは、前後の事情を彼女に打明けないでは、都合よく行くことではなかつたのですね。そこで或日二人は彼女を部屋へ喚んで、一切の事情を打明けた上、テイーツスが彼女と自分との間に起つた多くの些細な事件

に依つてそれを裏書きしました。

ソフロニエは、相手の一人々々を怒りの眼にしばし見遣つた後、ジシプスの書いた計略に乗つた自分の愚しさを喞ちながら、烈しく泣き出しました。そして、ジシプスの家ではそれに就いて一語も云はずに、直ぐさま父親の家に赴いて、ジシプスが彼女やその一族の者を欺いた結果、彼女はそれまで信じてゐたやうにジシプスの妻になつたのではなく、テイーッスの妻となつてゐる旨を兩親に訴へました。

ソフロニエの父にとつては、この一件は甚しく侮辱的のものに思はれました。で、彼は親類のものと共に、ジシプスの一族に向つて強硬な抗議を申込みました。その結果いろんな騒ぎや爭ひが持ち上りました。ジシプスは自分のとソフロニエの一族との兩方から憎まれました。誰も彼も、彼は非難だけでなく、嚴しい罰に相當するものだと申しました。それに對して、ジシプスは、自分のしたことは何處迄も正しい、ソフロニエを自分以上に立派な夫に配合せてやつたことに對しては、彼女の一族も自分に感謝すべきだと云ひ張りました。

一方テイーッスはこれを耳にして、苦々しく思ひながら、やつと我慢してゐました。それに、希臘人といふものは、何とか返答をするものが出て來るまでは、いやに大騒ぎをしたり脅迫したりするものだが、それからは謙遜になるばかりでなく、屈從的にさへなるものだといふことを知つてゐましたので、この上は相手方の饒舌に何とか答辯して遣らないではゐられないやうに思ひました。處で、彼は羅馬人の勇氣と雅典人の才智とを兼ね備へてゐましたので、巧みにジシプスとソフロニエとの一族を或殿堂に集めまして、たゞ一人ジシプスを連れて、一同の面前に現れながら、待ち構へてゐる人達にかう申しました。——

「人間によつて爲されることは、凡て不滅の神々の定めであり攝理であるとは、多くの哲人の信ずる處で御座います。從つて或哲人達は今なほ人間の爲すこと及び將來爲さんとすることは凡て必然的なものであると主張してゐます。尤も、この必然性は事實爲されたことにのみ屬するものだといふ別種の意見を持つてゐる人もないではありませんがね。處で、かうした意見を熟々考へて見ますと、最早後へ戻すことの出來ない事件を非難するといふことは、取りも直さず、永遠に亙る洞察を以て何等の誤謬なしに吾々人類及び一切の人事を支配して、且それを指導し給ふものであるといふ信頼を捧げなければならないかの神々よりも、自分達の方が一倍賢明なものであると云はうとすることに外なりません。この點から見て、皆さんは、神々の作爲を非難することが如何に馬鹿げた僭上沙汰であり、同時にそれ程迄自己の慢心に驅られるやうな人々が如何なる制縛に値

するものであるかを容易にお認めになることと存じます。處で、ソフロニエが、ジシプスに與へられたのに、私の妻になつたことに對して、皆さんは、彼女がジシプスのものでなく私のものになるといふことは、それが事實さうなつたことから見て明かである通り、永遠の昔から定まつてゐるものであることを考へないで、それに反對されたとか、いや、現に反對してゐられるとか聞き及びましたが、もしそれが本當だとしますれば、皆さんは想ふに上に述べたやうな人達に屬するのではありますまいか。

「しかし神々の祕やかな攝理や目的に關するお話は、多數の人にとつて餘りに漠然として理解し難いやうにも思はれますので、神々が吾々の人事に少しも交渉されない瞬間を假定して、吾々人間の理性に降つてお話しして見ませう。實はさういふことをお話しするとなると、私の平生の習慣に悖る二つのことを敢てしなくてはならないのですがね。その第一は私自身を少し許り褒めることで、第二は他人を非難し若しくは下目に見なければならないことです。が、いづれの場合にも事實を離れようとは思ひませんし、又目下の題材上已むを得ないことでもありますから、敢てさうすることに致しませう。

「皆さんは、それも熟慮の結果といふよりは寧ろ盲目的な憤慨に驅られて、絶えず不平を云ひ、否、大騒ぎをしながら、皆さんが自分達の決意によつてジシプスに與へた彼女を、彼が自分一個の決意によつて私の妻として與へたといふので、彼を誹謗し、彼を彈劾してゐられる。が、私はそれなればこそ、彼は稱讃せらるべきであると云ひたいのです。そして、その理由はかうです。第一に、彼はそれに依つて友人といふものの爲すべきことを遂行したからで、第二に、彼はそれに依つて皆さんがされたよりも一層理性的に行動したからであります。聖なる友情の規範が、友人のために如何なることを爲すやうに要求してゐるかを皆さんに說明することは、私の目下の目的ではありません、私としては、たゞ友情の絆は血族又は姻戚關係のそれよりも一層鞏固なものであることを皆さんに想ひ出して頂けば、それで滿足であります。一體友人は吾々の選擇に由るものであるが、血族關係は運命の與へたものであるからですね。だから、ジシプスが皆さんの好意よりも私の生命を一層重要視したとしても、私が彼の盟友たる以上、何の不思議もある譯が御座いません。

「で、第二の理由に移りますが、この點では、彼が皆さんよりも一層理性的であつたといふことを更に力說しないではゐられないのであります。と申すのは、皆さんは神々の攝理に就いて何事も御存じないばかりでなく、友情の作用に就いても更に又一層お分りになつてゐないやうに思はれ

るからで御座います。ソフロニエを青年哲學者であるジシブスに與へたのは、皆さんの賢策であり、決議であり、又相談でも御座いました。そして、彼女を同じく青年哲學者である私に與へたのはジシブスの決意でありました。皆さんの決意は彼女を一人の雅典人に、ジシブスのそれは一人の羅馬人に與へたので御座います。皆さんのは門地ある青年に、ジシブスのはより高い門地ある青年に、皆さんのは金持ちの青年に、ジシブスのはより大いなる金持ちの青年に、更に皆さんのはまだ彼女を愛してゐなかつたばかりか、殆ど相手の顏さへも知らなかつたやうな青年に、ジシブスのは彼女をあらゆる幸福以上に、然り、自らの生命以上に愛してゐた青年に與へたので御座います。

「處で、私の云ふことが眞實であり、從つて皆さんのされたことよりも一層褒むべきものであるかどうか、一つ詳細に亙つて觀察して見ませう。私がジシブス同樣青年哲學者であることは、今更詳しく申上げるまでもなく、私の風采及び研究がそれを證明してゐます。彼も私も同年配で常に同一の歩調を取つて研學にいそしんで來ました。成程、彼が雅典人であつて、私が羅馬人であることは相違御座いません。けれども、生れ故鄕の都會の名聲に就いて論議する段になれば、私は自分が自由都市の生れで、彼が貢稅の義務ある都市のものであること、私は世界の支配者である都市に生れたが、彼は私の故鄕に隸屬する都市の生れであること、更に彼が自分の都市の矜りとして擧げ得るものは學問のみに過ぎないが、私は武名、主權及び學問の三者に萬朶の花を咲かせてゐる都市のものであることなどを申上げたいと思ひます。

「そればかりでなく、私は此處でこそ皆さんの眼には一介の書生に過ぎませんが、決して羅馬民族の下層に生れたものでは御座いません。私の家や羅馬の廣場は私の祖先の古い柱傑に充ちてゐます。それから又羅馬の年代記はキンクテイウス家の者が羅馬城に向つて指揮して行つた凱旋行列に充ちてゐます。又羅馬人の名聲は年月によつて錆びるどころか、今日は昔に優して華やかに輝いてゐますぞ。所謂清貧なるものが古來羅馬市民の光榮ある遺產であることを想ふと、私は極りが惡くなつて自分の富を口にすることが出來ません。けれども、賤民の考へからして貧が蔑視せられ、富が稱讚せられるといふのなら、敢て申しますが、私は貪婪者としてでなく、幸運に惠まれた者として有り餘る財寶を持つてゐます。

「この市でジシブスを親類に持つといふことが、皆さんにとつて値打のあるものであつたことは、私にもよく分ります。が、如何なる方面から見ましても、私は羅馬に於て皆さんにとつてジシブス以下のものではありません。もし皆さんにして、私が立派な親戚であり、公事に於てのみならず、貴方方の特殊な必要に際しては羅馬に於ける有用にして熱心且有力なる後援者であるといふことをお考へ下さるならばですね。だから、もし我意を去つて、合理的に熟慮されるなら、何人が能くジシブスの決意以上に皆さんの決意を褒めることが出來ませう？　斷じてそんな事は出來ません！　かうしてソフロニエは羅馬の門地高く、先祖代々の富裕な市民であると共に、皆さんのジシブスの友人であるテイーッス・キンクテイウス・フルヴスに嫁したのであります。これを非難し、これに不滿を抱く人は、爲すべきことを爲さず、自己の爲す處の何たるかに氣附かない人で御座います。

「恐らく或人はかう申すでせう、ソフロニエはテイーッスの妻になつたことそれ自體を嘆いてゐるのではない、何うしてその妻になつたかといふこと、言ひ換ふれば、こつそりと人目を忍んで、友人、親戚もそれを知らなかつたといふことを嘆いてゐるのだと。が、これとても不思議なことでも、又今度始めて起つたことでもありません。勿論、私は父の意志に反して夫を拵へた女、愛人と共に逃亡したやうな女、以前は妾であつたのが正妻となつた女、又は姙娠、出產などで、彼等にとつて夫婦の緣がいかに必然的なものであるかを早くも世間へ知らせたやうな女などを問題にしてゐるのではない。こんな事はソフロニエの關したことではありません、彼女は正式に、熟慮を經た上、正々堂々とジシブスからテイーッスに讓られたので御座います。

「又恐らく或者はかう云ふでせう、では、それだけの權利のない者が彼女を結婚させたのだと。が、これは思慮の足りない結果生れた、愚にして且女々しい非難であります。一體、運命なるものは、事物をその定められた結果に導くために、新しい道、新しい手段を取らないものでせうか。私の要件のどれかに就いて、哲人は云はずもがな、軌直しが處置をしたとして、それが內密であらうと、公然であらうと、結果さへよければ、何の苦情を云ふ必要があるでせう？　もしその軌直しが思慮のあるものでなかつたら、今後再びさうしたことをさせないやうに注意こそいたしませうが、出來たことに對しては感謝しなければなりますまい。そこでジシブスがソフロニエを結婚させたとしても、その方法、手段又は彼自身に對する非難は餘計なことです。彼の分別に信賴することが出來ないとなら、今後皆さんの家の娘を彼が他へ緣づけることの出來ないやうにすればよいではありませんか。ですが、今度だけは皆さんも彼に感謝しなければなりませんぞ。

「なほ申上げて置きますが、私は奸計や欺瞞に依つて、ソフロニエの身に於て皆さんの血族の名譽と純潔とを汚さう

としたのではありませんよ。成程、私は彼女と竊かに結婚しました。が、しかし彼女の處女性を盜む泥棒のやうな振舞をしたのでもなければ、皆さんの姻戚になることを蔑視してゐながら、恥づべき方法に依つて敵者のやうに彼女を手に入れたのでもありません。それ處か、私は彼女の美しさと穏性とに烈しい情熱を燃やしながらも、私が彼女を羅馬に連れて行くだらうと心配して、皆さんが可愛がつていらつしやる彼女をなか〳〵私には下さるまいと見て取つたのですね。そこで私は、多分皆さんも今では御承知でもありませうが、あゝいふ秘密の手段に訴へたのですよ。そして、ジシプスに頼んで、彼が餘りしたがらなかつたことを承諾して貰つたのです。しかしその後は、いかに彼女を熱愛したとは云へ、私は愛人としてでなく、良人として彼女を抱擁しようと思つてゐましたので、これは彼女も眞實を證明してくれるでせうが、先づ私を良人とするかゝ訊ね、彼女もそれに承諾の旨を答へた上、それ相應な言葉と指輪とを與へて結婚した後、始めて彼女に近づいたのですよ。それでも彼女がまだ嫌されたと思つてゐるのでしたら、それは私が悪いのではない、私の罪であるかを聞き返さなかつた彼女自身に罪があるのですよ。

「ソフロニエが人知れずテイーツス・キンクテイウスの妻になつた事は、友人のジシプスと愛人である私とによつてなされた大きな悪事であり、大きな罪悪であり、大きな不正であります。それがために、皆さんは彼を誹謗し、脅迫し、迫迫してゐます。ですが、もし彼女が無漢、敗殘者、もしくは奴隷に與へられたとしても、それ以上何んな事を皆さんはすることが出來るでせう？　何んな鐵鎖、何んな牢獄、何んな十字架なら、皆さんは滿足するのでせう？　が、今はそのことは措いて問ひますまい。處で、こゝに私のまだ期待しなかつた時が來ました。私の父は死にました。私は羅馬へ歸らなければなりません。實はソフロニエを一緒に連れて行かうと思つてゐますので、さもなければ皆さんに隱して置いた箇の處を只今申上げたので御座います。假にも分別のある方であつたら、この點は喜んで認めて下さることと思ひます。といふのは、若し皆さんを欺かうとか、或ひは皆さんに侮辱を與へようとかいふ考へがありましたら、私は彼女を汚したまゝ見捨てて行くことも出來たのですからね。が、羅馬人の胸にそんな下劣な根性が宿つてたまるものでは御座いません。

「ソフロニエはかうして神々の同意、社會法則の力、ジシプスの見上げた思慮及び私の戀故のたくらみによつて私のものとなりました。それを皆さんは呪つていらつしやる、多分自分達の方が他の人よりも一倍賢明だと思つてゐられるからでせうね。しかし皆さんのさうされることが如何に馬鹿げたものであるかは詳しく申上げました。皆さんを友人と思つて御忠告申上げるのですがね、どうか皆さんの怒りと不滿を收め、ソフロニエを私に返して、私が皆さんの親戚となつてお別れし、身内となつて一生を暮し得るやうにして頂きたい。と云ふのは、もし皆さんがそれに反するやうな行動を取られるなら、私は屹度ジシプスを連れて、羅馬に着くや否や、意地づくでも、正當に私のものとなつた女を取返すと共に、一生皆さんの敵となつて、羅馬人の怒りが何んなものであるかを皆さんにお目に懸けようと思つてるから、その覚悟でいらつしやい。」

これだけ云つてしまふと、テイーツスは憤慨に充ちた顔つきで立ち上つて、ジシプスの手を取つたまゝ、殿堂に集つた人達など全然眼中に置いてゐないやうに、頭を振り振り、さも威嚇するやうな態度でそこから出て行きました。

後に殘つた人達は、一つにはテイーツスの云つた理由によつてその親戚と友人になつてもよいと思ひましたし、又一つには最後の言葉で威嚇されもしまして、義兄弟としてジシプスを失つた上、テイーツスを敵に廻すよりは、ジシプスがならうと云はないのなら、テイーツスを義兄弟にした方が寧ろ好からうといふことに意見が一致しました。そこで一同は急いでテイーツスを訪れて、ソフロニエが彼の妻であることに承認を與へ、今後は彼を立派な親戚、ジシプスを好き友とすることを誓ひました。で、お互に親戚、友人として心からなる挨拶を交した後、一同家に引取りました。そして、ソフロニエの一族はこの女をテイーツスに返しました。彼女は元來悧巧な質であつただけに、禍を轉じて福となし、ジシプスに對して感じてゐた愛を間もなくテイーツスに移しました。そして、彼と共に羅馬に赴いて、そこで盛大な歡迎を受けました。

ジシプスは雅典に踏みとゞまりました。が、殆ど一穀からは顧られないで、間もなく一族との民事上の爭ひの結果、落魄して雅典から追はれ、永久の追放に處せられました。かういふ狀態の下に、單に貧乏といふだけでなく、乞食にまでなつて、やう〳〵の思ひで羅馬に遣つて參りました。そして、今でもテイーツスが自分を想ひ出して與れるだらうか、一つ試して見ようと思つたので御座いますね。で、相手が未だ生きてゐて、凡ての羅馬人から大いに尊敬されてゐると聞き、なほその住居をも突き留めましたので、彼はその家の前に立つて、テイーツスが出て來るまでじつと辛抱して待つてゐました。勿論みすぼらしい風體をしてゐましたので、相手に話し掛ける氣にもなれないところから、こちらの素を相手の眼に留まるやうにして、先方から彼を認めて喚び掛けて與れるやうにと念じてゐたのですね。處

が、テイーッスはその儘行き過ぎてしまひました。ジシブスにして見れば、相手は確に自分を認めたのだが、人前を憚つたのだと思はずにはゐられなかつたのですね。で、その昔彼のためにして遣つたことを考へると、憤懣と絶望とに胸も潰れて、大急ぎでその場を立ち去りました。

早くも夜になりました。彼はまだ食事もせず、金もなければ、何處へ行くといふ宛もなく、たゞ一途に死を望みながら、彷徨ひ歩いてゐるうちに、偶然市中でも一番荒れ果てた場所へ遣つて來ました。見ると、大きな洞窟が目に着きましたので、そこで一夜を明かさうと、中に這入つて、汚い身裝をしてゐただけに、そのまゝ地上に身を横たへました。そして、長い間泣き濡れてゐましたが、とう〳〵疲込んでしまひました。

朝の光が射し初めた頃、昨夜稼ぎに出掛けた二人の泥棒が、贓品を携へて、この洞窟へ戻つて來ました。二人はいきなり喧嘩をはじめ、強い方が弱い方を殺して逃げてしまひました。ジシブスはこの一切を見たり聞いたりしてゐました。そして、自殺もし得ないで、徒らに憧れ求めてゐた死に到る道が自づと開けて來たやうに思ひました。そこで彼は立ち去りもせず、そこにぐづ〳〵してゐましたが、早くも竊盜事件を耳にした警吏達がその場へ遣つて來ていきなりジシブスを捕へたまゝ、荒々しく引立てて行きました。

訊問に際して、彼は自分があの男を殺したのだが、洞窟から逃げ去ることが出來なかつたのだと申立てました。それに依つて、執政官のマルクス・ヴァロは、當時の習慣に從つてジシブスに磔刑を申し渡しました。

處が、テイーッスは偶然その時刻に執政廳へ遣つて參りました。そして、不幸な死刑囚の顏を見たり、斷罪の理由を聞いたりしてゐるうちに、突然それかジシブスであること氣が附いて、その悲慘な運命に驚くと共に、何うして羅馬へ來てゐるのかと、それからして甚く不審に思はれました。で、斷罪されたジシブスが引立てられて行つた時、テーイッスは友を救ひたい一心から、自ら進んで執政官の前に出ました。そして、友を斷罪から救ふためには、自分を訴へて出る外に良策も想ひ附かないまゝに、大きな聲を擧げてから申しました。「マルクス・ヴァロ殿、只今斷罪されたあの男を喚び返して頂きたい、あれは無罪なのですからね。今朝死骸となつて、貴方の部下の手で發見されたといふあの男を殺したのは私です。私はそれだけでも十分神神に侮辱を加へました。この上、罪のない者を死なせて、再び神々に侮辱を加へたくはありませんからね。」

ヴァロは面喰ひながらも、執政廳の人達が全部その申立を聞いてゐたことを滿足に思ひました。それにしても、自分の職責上、法の命ずる處をする外ありませんでしたので、

再びジシブスを連れて來させた上、テイーッスの面前で、かう申しました。「何うしてお前は自分がしもしないことを、それもお前の生死に拘はることを自白するといふやうな、そんな馬鹿なことをしたのだ？　誰もそんな事をお前に強要したものはないぢやないか。お前は昨夜あの男を殺した當の犯人だと申立てたが、今この男が來てお前ぢやない、自分が殺したのだと斷言してゐるぞ。」

ジシブスは眼を上げて、それがテイーッスであることを知りました。そして、彼がこんな事をするのも、自分を助けたいためで、嘗て彼のためにした親切に對する感謝の意味に外ならないことを看て取りました。で、感動した餘りに、泣きながら彼は申しました。「ヴァロ殿、眞個私が殺しましたので、テイーッス君の同情も私を助けるためには既に時機を失してゐます。」

テイーッスはそれに答へました。「執政官殿、御覽の通り、この男は外國人で、よし殺された男の傍で捕まつたにしても、現に何の兇器も持つてゐません。たゞ悲慘な境涯が動機となつて死を望んでゐたものであることは、貴方も容易に御推量下さることが出來ようかと存じます。で、どうかこの男を放免して、罪ある私を罰して下さい。」

ヴァロは兩人の執拗な申立てに驚きましたものゝ、今やいづれも眞の犯人でないことに凡そ見當が附いたので御座いますね。そこで、何ういふ風にして兩人を放免したものかと考へてゐますと、見よ、そこにプブリウス・アムブスッスといふ、世間の鼻摘み者で、一般に盜賊だと知られてゐる男が現れました。この男が事實かの殺人罪を犯したのですね。で、二人とも自分で罪を背負はうとしてゐましただけに、二人の無罪にいたく心を動かされまして、深い同情のあまり、ヴァロの前に進んで、かう申しました。「執政官殿、私の運命は、この兩人の間の難問を解決するために、私をここへ呼び寄せました。どんな神が私の心を唆かせ、私を騙つて自分の罪を貴方の前に告白させるのか分りませんがね。兎に角この兩人のいづれも自分がしたと云つてゐることには何の係りもないものだと思つて頂きたい。私こそ事實今朝夜明けにあの男を殺した眞の犯人です。そして、盜んだ品を私が殺した男と分け合つてゐた間に、今こゝにゐるこの不幸な男が洞穴で眠つてゐるのを見掛けました。テイーッスさんに就いては、今更私がかれこれ申上げる必要も御座いますまい。その汚れない名聲はあの人がそんな事をなさる人物でないことを十分證據立ててゐます。ですから、二人を放免して、法の命じる處罰をこの私に加へて下さい。」

この一件は早くもオクタヴイアンの耳に入りました。彼

は三人を呼び寄せて、何うしてさう皆が皆犯人にならうとするのか、その理由を訊ねました。三人ともそれを申上げました。そこで、オクタヴイアンは無罪といふ理由で二人を放免し、次いでこの二人に免じて第三の者をも赦して遣りました。

テイーッスはジシブスの手を取りました。そして、先づ相手の微温的態度と邪推とを大いに非難した上、口にも云はれない喜びを滿面に漲へながら、彼を自宅へ案内しました。ソフロニエは感激の涙を流しつゝ、相手を兄弟のやうに歓待しました。テイーッスはそれから友の元氣が恢復するのを待つて、相手の性質や地位に應はしい服裝だの裝飾だのをさせた上、自分の全財寶と所有地とを半分して與へ、更にまた年の若いフルヴイアといふ妹を彼に配合せました。さうして置いて、テイーッスは申しました。「ジシブス君、今後私の市に住むとも、又は君に贈つた一切のものを持つて帰郷に歸らうとも、そこは君の氣の向いたやうにするがいゝよ。」

ジシブスは、一方では故郷を追はれた追放の刑と、他方ではテイーッスの友情に對して當然感じてゐた愛情とに心を動かされて、いよ〳〵羅馬人となる決心をしました。そして、その結果羅馬にとどまることに致しました。

かうして彼等は今や、ジシブスはフルヴイアと、テイーッスはソフロニエと、いづれも同じ家に生活を共にしまして、もしまださうした餘地があるものとしましたら、日增しに益々親しい友達になつて行きました。

かくの如く友情は神聖なものでありまして、特別の尊敬に値ひするばかりでなく、寛量や禮節の理解ある母として、感謝や人間愛の姉妹として、更に又憎惡や貪婪の敵として、永久の讃美に値ひするもので御座います。つまり友情は相手の懇願を待つまでもなく、自ら進んで、相手が自分のためにされることを望んでゐる處のものを相手のために懸命にしてやるものであるんですね。しかも、この友情の聖なる作用が今日二人の人間の間に殆ど見出されなくなつたに就いては、その責任と汚名とは自己の利益だけを念頭に置く吾々人間の哀れな貪慾に歸すべきもので御座います。これを只今の話に就いて見ても、友情以外のどんな愛情、どんな富、どんな親族關係がテイーッスの熱愛、熱涙、嘆息をジシブスの胸に有效に傳へ、彼をしてあの美しくも貴い、而も彼自らも愛して已まない花嫁をテイーッスの妻たらしめるに到つたでせう？　友情以外のどんな脅迫、どんな恐怖がジシブスの若い腕をして何人もゐない暗闇の場所、然り、彼自身の寢床の中で若い美女を抱擁することを躊躇させたでせう？　實際、友情以外のどんな外的榮譽、どんな報酬、どんな利益がジシブスをして自分の一族とソフロニエのそれを失ふことをも配慮せず、市民の陰險な誹謗をも聞き流し、たゞ友に盡すために凡ての人の嘲笑を度視させたのでありませう？　一方に於ては又、友情以外の何者がテイーッスをして、知らぬ振りをしようと思へば、隨分都合よくさう出來たであらうにも拘らず、ジシブスが自ら造つた十字架より彼を救ふために、何の躊躇するところなく死を求めるに到らしめたのでせう？　友情以外の何者がテイーッスをして、運命にその富を奪はれたジシブスに自己の莫大な富を氣前よく即座に頒け與へさせたのでせう？　最後に、冗いやうだが、友情以外の何者がテイーッスをして、相手の貧しい極度に悲慘な狀態にも拘らず、何の顧慮する處なく、ジシブスと自分の妹との緣を結ばせるに到つたので御座いませう？

世人は徒らに仲間の多きこと、兄弟の大勢なこと、子供の數あることを望み、又は金錢で僕婢の數を殖やして、しかもこれ等の者のいづれもが、その何人であるかを問はず、皆父、兄弟、もしくは主人を脅す恐るべき危險を除かうと努力するよりも、先づ自己のために取るにも足らぬ小さな危險を恐れるものであることを忘れてゐます。が、それはそれで宜しい。それに對して、私は兎やかう云ふものではありませんが、どうか、友人だけは正にその反對をするものであることを納えず肝に銘じて忘れないやうにして置いて頂きたい。

第九話

サラディンは旅商人に變裝して、トレルロ氏より好遇と饗應とを受ける。そのうちに十字軍が起つて、トレルロ氏はそれに從軍することとなつたが、妻に對して一定の期間が過ぎれば再婚を許して出發す。その後彼は捕はれて、鷹匠となつたが、それがためサラディンに知られる。サラディンは彼を認めて、本身を明した上、彼を非常に歓待する。次いで、故國では死んだものとせられてゐたトレルロ氏は、病氣となつて、醫術によつて一夜のうちにパヴイアに連れ戻され、自分の妻の結婚式の席上で彼女に認められ、共に手を携へて自宅へ歸る話。

フイロメラが話しを終つた時、テイーッスの寛量は一同から大いに褒め囃されました。王は、最後に話す權利をデイオネオのために保留して置かうと思つて、次のやうに語りはじめました。――

皆さん、フイロメラさんが友情に就いて語られたことは、

眞個その通りで御座いまして、お話の終りに、眞の友情が今日吾々人類の間に殆ど地を拂ふ有樣であることを嘆かれましたのも、亦當然だと云ふ外ありません。で、もし私達が世の缺陷を改善したり非難したりするために此處に集まつてゐるのでしたら、私は先程のお言葉の眞理を敷衍して長廣舌を揮ふのもさして困難ではありません。けれども、私達の目的は他にあることでゝ御座いますので、只今は、いさゝか長くはなりませうが、しかし何處までも氣持ちのよいお話をして、サラディン王の寛大な行爲をお傳へしたいと存じます。この話によつて、私達は、よし相手の完全な友情を獲ることが出來なくとも、少なくとも他人に奉仕することそれ自體に滿足を感ずると共に、何時といふことは分らないが、兎に角何時かはそれが報いられるものだといふことを敎へられるので御座います。

さて本題に移りまして、恰度皇帝フリードリヒ第一世の時聖地恢復のために基督敎徒によつて十字軍が起されました。當時バビロンのサルタンであり、勇敢な君主であつたサラディンは少し前からそれを聞き込んで、基督敎の王侯によつて企てられたこの軍の準備を親しく目擊して、一層よくそれに對する備へをしようと決心しました。そこで彼は埃及に於ける一切の要務を片附けた上、巡禮旅行にでも出掛けるやうな振りをして、二人の地位あり思慮のある家臣と、たゞ三人に過ぎない從者とを引連れたまゝ、商人に變裝して出發しました。

多くの基督敎國を遍歷して、ロンバルディの野に馬を驅りながら、將に山々のあなたへ路を進めようとしてゐた時、彼は供の者と一緒にミラノからパヴィアに至る途上、最早日も暮れかゝつた頃、トレルロ・デイストリア・フオン・パヴィアといふ一人の貴族が從者や犬、鷹などを連れて、テイチノ河畔にある別莊へ泊りがけで出掛けて行くのに出逢ひました。トレルロ氏は相手の一行を見て、これは身分のある人達で、外國の者だなと思ひましたので、その人達に好意を寄せたくなりました。で、サラディンがトレルロの從者の一人に、パヴィア迄の道程や、まだ閉門通過の刻限に間に合ふかどうかを訊ねました時、彼は從者に返答をさせないで、自ら進み出てかう申しました。「皆さん、その刻限に間に合ふやうに、パヴィアまでお出でになることは、ちと難かしう御座いませうよ。」

「それでは」と、サラディンは申しました、「私どもは旅の者で御座いますので、一つ何處へ行けばよい宿があるか敎へて頂きたいものですね。」

「承知いたしました」と、トレルロ氏は答へました。「恰度用向きがあつて從者の一人をパヴィア近くまで出さうと思つてゐた處ですから、皆さん方にその男をお附け申しませう。その男が皆さん方のお宿をするやうな家に御案內いたしますよ。」それから、從者の中でも最も心の利いた男の傍へ近寄つて、然るべき命を下した上、その男を旅の人々に附けて遣りました。そして、自分は出來るだけ急いで、人目にかゝらぬやうに別莊に辿り着いて、見事な食事を用意させ、食卓を庭園に設けさせました。かうして一通りの準備が出來上ると、彼は門前に出て、一行を待ち受けました。

一方かの從者は貴族の一行と四方山の話しをしながら、やゝ遠廻りに案內して、何處の誰の許へ行くのかも氣附かれないやうに、巧く主人の別莊へ連れて來ました。

トレルロ氏は一行の遣つて來るのが見えますと、徒步でそれを迎へながら、微笑を含んでかう申しました。「皆さん方、好く入らつしやいました。」

烱眼なサラディンは、相手の騎士が、尋常に招待したのでは、自分達がそれに應じないだらうと心配して、一夜をその家で過すことを自分達に斷らさせないために、計略で自分達をその邸へ案內させたのだと、直ぐさま推量いたしました。そこで彼は挨拶を返してから、かう申しました。

「いや、御主人、もし御親切な方々に對しても苦情を云ひ得るものだと致しましたら、私達は(貴方が私達の旅を幾分後らせられたことは措くとしましても)たゞ一度挨拶を交したといふ外、何一つ貴下の御好意を受ける由緣もないのに、かうした款待を受けるやうに私達を强ひて陷れられた貴下に對して、一應不平を申上げないではゐられませんよ。」

すると、頓才もあり辯舌にも長けてゐた騎士はかう答へました。「いや、私どもの手で出來るやうな好意は、貴方方の御身分や、失禮ながら御容子でほゞ想像の着く處に比べましては、誠に云ふに足りないもので御座います。しかし實際の處パヴィアの郊外では、何處へお出でになつても、御不承の出來るやうなお宿は御座いません。ですから、まあ、旅を長びかせ申したのも、その代りに御不使をより少なくしたものだと思召して、あまり御後悔なさらないやうにお願ひいたします。」

かう云つてゐるうちに、その從者どもが遣つて參りまして、王の一行が馬から降りると、その馬を厩舍へ曳いて行きました。一方トレルロ氏は三人の貴顯を用意の部屋へ案內して、そこで靴を脫がせた上、冷い酒で一行の元氣を附けながら、食事の時間になるまで、四方山の話しで一同をもてなしました。

サラディンとその臣下及び從者達はいづれも拉丁語が出來ましたので、相手の云ふことがよく分りましたし、自分達の意を傳へることも出來ました。そして、いづれもこの騎士がそれ迄に出逢つた最も氣持ちのいゝ、禮節もあり、話しも上手な人だと思ひました。一方トレルロ氏は、この

外國人達は自分が最初思つたよりも遙かに身分の高い人達であらうと考へました。それだけに、その晩夜會とか盛大な酒宴とかで一行に敬意を表することが出來ないのを大層殘念に思ひまして、明くる日は是非ともその埋め合せをしようと思ひ立ちました。そこで召使の一人に自分の意向をよく話した上、その男を餘り遠くもないバヴイアの市にゐる妻の許へ遣はしました。一體バヴイアでは決して關門を締めないことになつてゐたのですね。

それから騎士は貴顯達を庭園に案内して、鄭重に相手の身分を訊ねました。

「私達は」と、サラデインが答へました、「サイプラス島の商人で、サイプラスから遣つて參りました。商用で巴里へ行く途中なのですよ。」

「今此處にいらつしやるサイプラスの商人のやうな」と、トレルロ氏はそれに答へました、「立派な貴族がこの國にも生まれましたらと思ひますわい。」

かういつたやうな挨拶から始まつて、四方山の話しをしてゐるうちに食事の時間になりました。そこで騎士は一行を食卓に請じました。そして、一行は突然の饗應としては實に行屆いた食事の接待を受けました。で、食卓が片附けられてから少時すると、トレルロ氏は、一行がさぞ草臥れてゐるだらうと察して、夜の休息に就くために、見事な寢室へ一行を案内させまして、間もなく自分も同じやうに横になりました。

一方バヴイアへ遣られた召使はトレルロ氏の妻女に會つて、主人の用向を傳へました。すると、彼女は女らしいといふよりも、眞に王者のやうな意氣込みで、早速良人の友人や召使を澤山呼び集めた上、盛大な酒宴に必要な一切の準備をさせたり、炬火を點けて市の有力者達をその宴に招待させたり、又は道具だの、織物だの、毛皮だのを持ち込ませたりして、良人から命ぜられた一切の事を完全に取計らひました。

夜が明けて、貴顯の一行が起き上りました時、トレルロ氏は彼等と共に馬に跨つて、鷹を持つて附近の平原へ出掛けました。そして、そこで鷹を飛ばして一行の觀覽に供しました。それからサラデインが、自分達をバヴイアへ連れて行つて、好い宿へ案内してくれる人はないかと訊ねました時、トレルロ氏は「私が御案内申しませう、あちらへ出掛ける用も御座いますから」と申しました。旅人達はその言葉を信じて、それに滿足しました。そして、一同トレルロ氏と連れ立つて出發しました。

市に着いたのは、既に午前の十時頃でした。一行は宿に案内されるものと信じ切つて、トレルロ氏と共にその自宅へ到着しました。そこには市の有力者達が王の一行を迎へ

るために五十人餘りも集まつてゐましたが、早速一行の手から手綱を受取つて、鐙を抑へました。

サラデインとその一行は、これを見ると、一切の事情を推量して、かう申しました。「トレルロ殿、これは最初お願ひした處と違ひます。昨夜貴方は十分、いや、全然思ひ懸けない御好意を私どもに示して下さいました。で、どうか、今日の處は私達の旅を續けさせて頂きたいものですね。」

「皆さん」と、トレルロ氏はそれに對して言葉を返しました。「昨夕のことは、私は貴方方よりも寧ろ運命に感謝してゐます。と申すのは、恰度私どもへ一緒に入らして頂く外ないやうな時刻に、貴方方を途中に迷はせて置いたものは運命で御座いますからね。が、今朝來のことに就きましては、私を始めとして、今この周りに立つてゐます貴族達も貴方方に感謝することで御座いませう。で、彼等と一緒に御食事をなさることは、定めてお氣も進みますまいが、どうか彼等に好意を示してやるのだと思召して、お厭ひなくば、さうして遣つて下さいませ。」

サラデインとその一行とはその言葉に負けて、馬から降りました。そして、貴族達に歡び迎へられ、華麗にしつらはれた部屋へ案内せられました。そこで旅の衣を脱いで、暫く息を入れた上、一行は何から何まで美々しく飾り立てられた廣間へ出て參りました。先づ差出された水に手を洗つた後、一同食卓に就きました。そして、行屆いたそつのない順序で山海の珍味に溢れた見事な饗應を受けました。眞個それは、たとひ皇帝が行幸あらせられても、これ以上の敬意を表することは不可能だと思はれる位であつたのですね。サラデインとその一行とは高貴な身分で、立派な品を見馴れてはゐましたものゝ、この騎士の地位を考へて見ると、一介の市民で決して王者ではなかつただけに、王侯のそれにも劣らないやうな、これ等の品々を見て、心から驚嘆せずにはゐられませんでした。

やがて食事も濟んで、食卓が片附けられ、なほ暫く四方山の話しに耽つてから、バヴイアの紳士達は、暑さが烈しくなつて來ましたので、いづれも退いて晝の休息に就きました。そして、騎士は三人のお客と一緒に後に殘りました。彼はお客と一緒に或一間へ赴きまして、自分の大切にしてゐるものは何も彼も見て貰ひたかつたので、そこへ自分の優れた妻を喚び寄せました。彼女は端麗な容姿に、美々しい衣裳を着けて、天使のやうな二人の子供を兩側に引連れながら遣つて參りました。そして、お客達に向つてしとやかに一禮しました。お客達は彼女を見ると、立ち上つて、慇懃に彼女を迎へました。そして、彼女がその間に席を占めた後、二人の可愛らしい子供について、心からなるお愛想を振り蒔きました。

で、いろ〳〵雅趣に富んだ雑談が彼等の間に展開して行くうちに、トレルロ氏が一寸退席した隙を見て、夫人は親しげにお客達を見遣りながら、何處から來て、何處へ行くのかと訊ねました。すると、高貴なお客達は、恰度トレルロ氏に答へたと同じやうな返答をしました。それを聞いて、夫人は晴れやかな頷つきで申しました。「いえ、それを承はりまして、私の女らしい配慮がどんな事で皆様のお役に立つか、よく分りまして御座います。就きましては、私に對する特別の思召しからして、どうか、只今これへ持參させます些細な贈物をお戞み遊ばさないで、女は心が小さいだけに些少な贈物しか出來ないことをお考へ下さいました上、贈物の大小よりは贈る者の心持ちをお酌み取り遊ばして、それをお受け下さいまし。」

そこで、彼女は銘々に、一つは羅紗、他は毛皮の裏のついた一對の衣裳、それも市民や商人でない、高貴の方々の着られるやうなものと、絹地と麻布とで出來た三着の上衣とを持つて來させながら、かう申しました。「これをお受け下さいまし。皆様のと同じ布地で、主人のためにも一着仕立ててやりました。變つた品と申すものは、よしやそれが何んなに詰らないもので御座いませうとも、遠く奥様方から離れていらつしやることをお考へ遊ばされたり、こゝまで入らしつた道程や、これから先なさらなければならない旅路をお考へにお入れになつたり、又は商人といふものがどんなに清潔や快適といふことに慣れてゐるかを念頭にお置き遊ばされたら、屹度お役に立つかと思はれますわ。」

貴顯の一行は驚くと同時に、トレルロ氏が一行のためにあらゆる配慮を忘れないことを明かに看て取りました。そして、何處から見ても商人などに應はしくない衣裳の豐麗さを見るにつけ、もしや自分達の身の上が曝れたのではないかと恐れもしました。が、一行の一人は夫人にかう答へました。「奥様、これはどうも、さう容易に頂いて置くわけには行かないやうな、立派な品々で御座いますよ。尤も、奥様のお言葉は私どもも無下にお斷りいたし兼ねますので、是非なく頂戴はして置きますやうなものゝ、本當に困りましたねえ。」

かうして品物の授受も終つて、そのうちにトレルロ氏もその室へ戻つて參りましたので、夫人は一行の前途を祝した上、一人別れて退出しました。そして、一行の從者達にも身分相應の同じやうな品々を贈りました。

トレルロ氏は言葉を盡して、今日一日彼の許で滯在することを一行に承知して貰ひました。そこで一休みした後、着衣を濟ますと、一行はトレルロ氏と共に市内に馬を驅りました。そして、食事の時刻になりますと、また多くの身分ある人達と一緒に立派な饗應を受けました。で、適當な

時間に休息に就きましたが、明くる朝早く起きて見ると、自分達の疲れた駄馬の代りに三頭の逞しい見事な乘馬と、又從者達のためには同じく三頭の元氣な新しい馬が用意されてゐるので御座いますね。

サラディンはそれを見て、近臣の方へ向きながら、かう申しました。「誓つて云ふが、わしもこれ以上完全で、鄭重で、注意深い人にはこれ迄まだ逢つたことがないよ。もし基督教國の王侯が王者としてこの騎士のやうに振舞つてくれたら、バビロンのサルタンも、現に彼を襲撃するために戰備を修めてゐるのを私達が見屆けて來たあの多くの王侯は云はずもがな、たゞの一人の王侯をも敵と假想しないで濟むだらうにねえ。」

處で、馬の贈物は拒むべきでないことを知つてゐましたので、一行は鄭重な禮を述べてそれに跨りました。

トレルロ氏は大勢の同志と共に一行を市から遠く離れた所まで送つて來ました。サラディンはトレルロ氏をすつかり懐しむやうになつてゐましたので、彼と別れるのが今更のやうに辛く思はれましたものゝ、先を急ぐ旅路のことと、どうかこゝから引返して呉れと頼みました。同じやうに一行と別れともながつてゐたトレルロ氏も、それを聞いて、かう申しました。「皆さん、お望みとあれば、こゝでお別れすることに致しませう。しかしこれだけは申上げて置きたいと思ひます。私は皆さんがどういふ御身分のお方か一向に存じません、また皆さんの御都合を顧ないで、それを伺はうとも思ひません。しかし皆さんがどういふ方であらうとも、かうなれば私に何時までも皆さんが商人であると信じさせて置くことは御無理でせう。では、隨分御機嫌よう入らつしやいませ。」

サラディンは既にトレルロ氏の同行者達と別れてゐましたので、かう彼に申しました。「いづれ私どもの商品をお目に懸けて、貴方の信じていらつしやる處を一層確實にする機會もあることでせう。では、御機嫌よう。」

で、サラディンは一行と共に旅を續けました。そして、もし命があつて、今期待してゐる戰爭でも討死するやうなことがなかつたら、何時かは屹度トレルロ氏に受けたものに劣らない敬意を示さずには措くまいと固く決心してゐました。かうして彼は隨行の者を相手に、例の騎士やその妻、騎士のしてくれたこと、さては騎士の振舞などに關して盡きぬ話を交しながらも、言葉を極めてその一つ〳〵を褒め立てました。で、幾多の勞苦を重ねて西歐諸國を探索して廻つた後、彼は一行と共に海上に出て、そこからアレキサンドリアに歸りました。そして、それ迄に探り得た一切を基準として、防戰の準備に取りかゝりました。

一方トレルロ氏はバヴイアに歸つた後も、長い間、例の

三人は一體何者だらうと、いろ〳〵考へて見ました。が、眞相を摑むことは勿論、一歩それに近寄ることさへ出來ませんでした。次いで十字軍の時機が到來して、あらゆる方面から廣大な戰備が行はれるやうになりました時、トレルロ氏は妻の嘆息や涙を一蹴して、同じやうに自分も從軍しようと固く決心しました。そして、一切の準備を終つて、將に馬に跨がらうとした時、最愛の妻に向つてかう申しました。「では、いよ〳〵十字軍に從つて行つて來るぞ。これは外的な名譽のためでもあれば、又靈の冥福のためでもあるのだ。で、一家の處置や體面に關する配慮はお前に一任て置く。わしの出發はもう確實だが、歸國の程は、いろいろな事情が身邊に湧いて來るだらうから、確かなことは一つも云はれない。それに就いて、一つお前にお願ひがあるのだがね、わしの身にどんな事が起らうとも、わしの生命に就いて確な報告を手にしない限り、出發の日から起算して、一年一箇月と一日だけは、再婚しないでわしを待つてゐて貰ひたいのだよ。」

奥方は烈しく泣きながらそれに答へました。「トレルロ殿、貴方に出て行かれて、後に殘つた私がどうしてその悲しみに堪へて行けばいゝか、私にはもう何にも分りませぬ。ですが、その悲しみに堪へて生き存へてゐましたら、萬一貴方のお身に何事かの起るやうなことが御座いましても、私は何處までもトレルロの妻として、その追憶に生きもし死にもするものだと、それだけはどうか固く信じてゐて下さいませ。」

「成程」と、トレルロ氏は申しました。「お前のことだから、その約束は屹度守つてくれるだらうとは、わしも信じて疑はないよ。だが、お前はまだ若い、それに美人でもあれば、名譽ある家門の生れでもある。加ふるに、優れた性質をいくつも有つてゐて、それが世間一般に知れ渡つてゐるのだ。だから、わしが死んだとして見い、世間の貴族や名門の男が打捨つては置かない、屹度お前の兄弟や親族から强つてお前を貰ひにかゝることは請け合ひだ。身内の者の勸めには、よしさうしようと思つても、お前も反對が出來なくなつて、已むを得ずその云ふことを聽くやうになるに違ひない。これが、わしの期間を定めて、それ以上の要求を持ち出さない理由なんだよ。」

「只今申上げましたことに就きましては」と、奥方は申しました、「私も出來るだけの努力をいたす積りで御座います。そして、もしそれでもなほ强ひられて心にもないことを致さなければならないやうなことになりましても、少なくとも只今お命じになりましたことだけは屹度守り通す覺悟で御座います。それにしましても、どうか神樣にお願ひして、その間に貴方も私もさうした破目に陷らないで濟ま

したいもので御座いますわね。」かう云ひ終ると共に、奥方は泣きながらトレルロ氏を搔き抱きました。そして、自分の指から指輪を拔いて、それを良人に渡しながら、かう申しました。「再びお目に懸れる前に、私の死ぬやうなことが御座いましたら、それを見る毎にどうか私を想ひ出して下さいまし。」

彼は指輪を受取ると、馬に跨つて、凡ての人に別れを告げてから出發しました。で、部下の軍勢と共にゼノアに着くや、彼はすぐに機船に乘り込んで、海を航して、間もなくアコンに到着しました。そこで基督教徒の他の軍隊と一緒になりました。

すると、その地に大疫病が突發して多數の死者が出ました。處が、なほその疫病の續いてゐる間に、サラディインはうまく立ち廻つたためか、それとも運が好かつたのか、疾病を免れた基督教徒の軍勢の殘餘のものを一太刀も交へないで殆ど悉く生捕りにしてしまひました。そして、それを多くの都市に分配して投獄しました。この捕虜の中にトレルロ氏も交つてゐて、アレキサンドリアの牢獄に入れられました。

彼を知つた者はそこにはありませんでした。それに彼も自分の身の上の知れることを恐れてゐましたので、已むを得ず、その道にかけては名匠であつた鷹の訓練を仕事にしてゐました。すると、それが終にサラディインの耳にも聞えたのですね。そこで後者は彼を牢から解放して、自分の鷹匠にしました。處が、トレルロ氏はサラディインからたゞその洗禮名で呼ばれてゐましたので、前者も後者をそれと知らなければ、後者も亦前者をそれと氣が附くまでには立ち到りませんでした。かうして彼の心は徒らにパヴィアの空に彷徨ふばかりで、それ迄も一再ならず逃亡を企てましたが、毎も成功しませんでした。そこで、或時二三のゼノア人が同じ市民の或者を購ひ戻すために使者となつてサラディインの許へ遣つて參りまして、再び故國へ出發することになつたのを見て、トレルロ氏は妻に手紙で、自分はまだ生きてゐて、都合の着き次第歸國するから、その積りで待つてゐて貰ひたいと知らせて遣らうと思ひました。で、早速その旨を認めて、例の使者の一人に、それを自分の叔父であるシエール・ドロの聖ピエトロ僧院主の手に渡して呉れるやうに頼みました。

處が、或日のことサラディインがトレルロ氏と鷹のことに就いて話しをしてゐる間に、何かのことでトレルロ氏は一寸笑ひました。その際、サラディインが嘗て相手の邸に滯在してゐた時、幾度となく相手の顔に認めたやうな一種の癖を口許に浮べたのですね。それを見て、サラディインはトレルロ氏のことを想ひ出して、なほ注意深く相手を看守つて

ゐましたが、どうしてもその人に違ひないやうに思はれて來ました。そこで直ぐさま話頭を轉じて、かう申しました。「クリスト、お前は歐羅巴のどの邊の者かね。」

「陛下」と、トレルロ氏は答へました。「私はロンバルディの者で、パヴイアと申す市の生れで御座いますが、至つて貧しい身分の低いもので御座いますよ。」

これを聞くと、サラデインは、自分の推量がやゝ確實になつて來ましたので、喜んでかう心の中に申しました。「神のお蔭で、この男に、嘗てその親切が自分にとつてどんなに有難いものであつたかを實證して見せる機會がやつて來たわい。」そして、それ以上一語も云はずに、彼は自分のあらゆる衣裳を一つの部屋に陳列させた上、トレルロ氏をそこへ連れて行つて、かう申しました。「クリスト、この衣裳のうちに、嘗てお前が見たことのあるものがあるかどうか探して見い。」

トレルロ氏はあれこれと見廻しましたが、やがて彼の妻がサラデインに贈つた衣裳が目に着きました。しかしそれが同じものであらうとは信じ兼ねましたので、かう申しました。「陛下、私の見覺えのあるものは一つも御座いません。けれども、この二つは、何日か私の家に來た三人の商人と一緒に、私も着せられたことのある衣裳と大層似寄つてゐるやうで御座います。」

かうなると、サラデインはもう耐らなくなつて、感激に充ちながら相手を抱いて、かう申しました。「それでは貴方はトレルロ・デイストリア殿であらうがな。私は貴方の奥方からこの衣裳を贈られた三人の商人のうちの一人ぢや。嘗てお別れに臨んで、いづれそんな事にもならうかと申上げた通り、今や私の商品を見て貴方の信じる處を確めて貰ふ時が來たのぢや。」

トレルロ氏はこれを聞くと、無上に嬉しくなると共に、何うやら自分の身が恥づかしくなりました。こんなお客を饗應したと思へば、嬉しいには嬉しいが、それにしては、あんまり貧しい取持ちしか出來なかつたやうに思はれて、今更のやうに恥づかしい氣がしたので御座いますね。が、サラデインはかう申しました。「トレルロ殿、神が貴方を私の許へ送つて下さつた上は、私でなくて、貴方こそこの家の主人だと思つて下さい。」

で、二人がお互ひに無限の喜びを見せ合つた後、サラデインはトレルロ氏に王侯の衣裳を着けさせ、高位高官の臣下の前に連れて行つて、トレルロ氏の立派な人物であることを大いに稱揚した上、王の恩寵を忝く思ふ者どもは、いづれも王自身と同樣にトレルロ氏を尊敬するやうに命じました。その後は誰も彼もその通りに致しました。別けても嘗てサラデインの隨行者となつてトレルロ氏の家に泊つた

ことのある二人の臣下は人一倍さうでした。

トレルロ氏は今や突如として身邊に輝く光榮の華やかに、ロンバルディを想ふ心から幾分遠ざかるやうになりました。それは主として、例の手紙が叔父の手に屆いたらうと確信したためでもあつたのですね。が、基督教國の軍隊がサラデインのために捕へられた同じ日に、陣中に於てであつたか、軍隊の中に於てであつたか、トレル・フオン・デイネスといふその名も餘り聞えないプロヴアンスの騎士が死にました。處が、トレルロ・デイストリア氏はその高い門地から全軍中に知られてゐただけに、トレルロ氏が死んだといふ噂を耳にした人は、誰でもそれがトレルロ・デイストリア氏のことで、フオン・デイネスのことではないと思つたのですね。しかもそれに續いて起つた捕囚はいよいよこの眞相を明かにする邪魔になりましたので、多くの伊太利人はこの噂をその儘持つて故國に歸ると共に、その中の或者は、トレルロ氏の死んだのを見たばかりでなく、葬式にまで列席したなどと主張する程確實さうな口を利いたもので御座います。

この噂がトレルロ氏の奥方や親族の耳に達した時は、彼等の胸中は勿論、トレルロ氏を知つてゐる程の何人の胸にも云ふべからざる悲痛の情を惹き起しました。殊に奥方の心痛、悲哀、悲嘆がどんなものであつたかは、一々述べ立てるまでも御座いますまい。兎に角、數箇月の間絶えざる悲嘆の裡に暮しましたが、だん〳〵その嘆きも幾分か收まり始めた頃には、忽ちロムバルディの諸貴族から求婚せられ、兄弟や親族からも再婚を強請されるやうになりました。さうした勸告を幾度となく涙を流して拒んでは來ましたやうなものゝ、彼女もとう〳〵親族の云ふことに同意しないではゐられなくなりました。尤も、トレルロ氏に約束した期間だけは、どうしても待たせて貰ふといふ條件を附することは忘れませんでしたがね。

パヴイアでは夫人の身の上がこんな風になつて、恐らくもう一週間もすれば新しい夫を迎へる日が來ようといふのに、トレルロ氏はアレキサンドリアで嘗てゼノアの使節と共に、ゼノアに向つて出帆した橈船に乘り込んだ筈の一人の男を見掛けたのですね。そこで早速その男を傍へ喚んで、航海中のことや、何時ゼノアに着いたかなどゝいふことを訊いて見ました。すると、その男はかう申しました。「私は途中タリート島に降りてしまひましたがね、そこで聞いた處によると、あの船は難破したさうで御座いましてな。何でもシシリー島に近づいた頃、恐ろしい北風が捲き起つて、船はバルベリー地方の砂丘に吹きつけられたまゝ、唯の一人も助からなかつたと云ふことですよ。私の兄弟も二人ばかり命を落しました。」

勿論、この話は眞實で御座いましたので、トレルロ氏もそれを信じました。そして、妻に要求して置いた期間も數日のうちに經過することを想ひ出すと共に、自分の健在はパヴイアでは何人も知らないだらうと思ふと、もう自分の妻は再婚するに違ひないやうに思はれて來ました。そこで彼は何とも云はれぬ悲しみに陷つて、喰ふ氣も飲む氣もなく、病の床に就いたまゝ、いつそ死んでしまはうと決心しました。

サラデインは、何者にも優して彼を愛してゐたこととて、これを聞くと、すぐに傍へ遣つて來て、さま〳〵に慰したり願つたりした上、やつとその心痛と病氣の眞因を聞き出しましたが、そんな事なら何故早く自分に打明けてくれなかつたかと相手を詰りました。それからまあ、氣落ちしないやうにいろ〳〵慰めた上、もしさうして待つてゐてくれるなら、定めの時期までにパヴイアへ歸れるやうに、一つ自分の手で骨折つて見ようと約束して、同時にその方法まで話して聞かせました。

トレルロ氏はサラデインの言葉を信用しました。それに、さうしたことの可能で、それ迄にも屢々行はれたことだといふことを聞いてゐましたので、すつかり安心して、それに就いて出來るだけの手段を盡して貰ひたいと、相手の手に縋るやうにして頼みました。サラデインは、前からその手練を十分に認めてゐた魔術師の一人を喚んで、一夜の間に床に就いたまゝトレルロ氏をパヴイアに送り返す方法を講ずるやうに命を下しました。魔術師は委細心得ましたが、たゞ當人のためでもあるから、先づ相手を眠らせて置いて貰ひたいと申上げました。

で、それが極ると、サラデインはトレルロ氏の許へ歸つて參りました。處で、後者は、出來さへしたら、何うしてでも定めの時期までにパヴイアへ歸らう、それが出來ないといふことなら、死なうと固く決心してゐたのですね。

「トレルロ殿」と、サラデインは申しました、「貴方がそれ程迄に奥方を愛して、他の者の妻女になりはせぬかと心配してゐられるとしても、それがために私は少しでも貴方を非難しようとは思はない。といふのは、私がこれ迄逢つた女のうちでも、奥方は、その移ろひ易き花にも比すべき美貌に就いては暫く云はずとするも、禮儀作法といひ、物腰といひ、實際誰にも優して稱讃されて然るべきやうに、思はれたからですね。實際、私にとつては、惠み深い運命が貴方を此處へ連れて來た以上、二人の生命のつゞく限り、お互に君主となつて、私の有するこの帝國を支配しながら、同じやうに協力して暮して行くことが出來れば、それに越したことはないのですよ。が、それも神の心に適はぬことで、貴方はどうしてもパヴイアに於ける定めの時期に間に

合はなければ、死ぬとまで固く決心してゐられるとすれば、切めてそれをもう少し早く耳にして、貴方のお人柄に應はしいだけの榮譽、儀禮、屬從を附けて鄕里まで送つて進ぜたいのが山々なのですね。が、それも亦許されないで、貴方はたゞ一刻も早くお故國へ行き着きたいと望んでゐられる以上、已むを得ませんので、私としてはまあ出來るだけのことをして、先刻申したやうな方法で、そこ迄送り屆けることにいたしませうよ。」

「陛下」と、トレルロ氏はそれに答へました、「そのお言葉がなくとも、これ迄の御恩遇によつて、身に餘る御好意の程は十分に解つてをります。なほ只今仰せになりましたことは、よしそれが事實に示されなかつたとしても、私は一生それを忘れないばかりでなく、死んでも覺えてゐることで御座いませう。それにしましても、私も一旦さう決心したことで御座いますから、お考への程が一刻も早く實行せられますやうに、切にお願ひ申上げます。と申しますのは、私のために豫豫して呉れる最後の日も、明日に迫つてゐることで御座いますから。」

サラデインは、それが間違ひなく實行されることを斷言しました。

翌日になると、サラデインはトレルロ氏を今夜の間に送り屆けようと決心しましたので、廣間の中に、その國の習慣に從つて天鵞絨や金襴で覆はれた、美々しくも又華やかな褥の寢床をしつらはせ、その上に一種の縞縞風に眞珠その他の寶石を縫ひつけた掛蒲團を被けさせました。實際、それは後日になつて伊太利では測り知られぬ程貴重な寶物だとされた位でした。その上に、なほそのやうな寢床に應はしい枕が二つ添へて御座いました。で、これが一切整ひますと、サラデインは、最早健康を恢復したトレルロ氏にサラセン流の、誰も未だ見たものがない位華やかな、美々しい衣裳を着けさせるやうに命じた上、その國の風習に從つて、その頭に長い頭巾を卷かせました。それからその夜も更け渡つた頃、サラデインは多くの貴族を從へて、トレルロ氏の住んでゐる部屋へ赴いて、その側に腰を下ろしながら、殆ど泣かぬばかりに語りはじめました。——

「トレルロ殿、お別れの時刻もいよ〳〵近づいてまゐりました。私自身お供をすることも、お供を附けて差上げることも出來ないので、今この部屋でお別れする外ありません。で、そのために、こゝへ參つたのですよ。さて、前途を祝してお別れする前に、お互の間にある愛と友情とにかけてお願ひしますが、どうか私をお忘れなく、出來ることなら、私どもの生を終る前に、お故國の用件が片附き次第、少なくともう一度私をお訪ね下さいまして、貴方と再び相見て樂しむといふだけでなく、只今貴方が急がれるばかりに

已むを得ずしなければならぬこの粗忽の償ひをさせて頂きたい。で、さうなるまでは、どうか、御面倒でない限り、お手紙で時折りお尋ね下さいまして、何かお望みのことでも御座いましたら、遠慮なく註文して下さるやうにして頂きたい。實際、どんな人のためにするよりも、貴方のために御要求を果すといふことは、私としてそれに越す喜びはないのですからね。」

トレルロ氏は堰き來る涙を抑へ兼ね、それに遮られて、ほんの手短かに、自分としては、相手の好意を忘れるとか、相手の高い人格の印象が念頭から消え去るなぞといふことはあり得ないことであり、從つて只今仰せられたことは、もし命さへあれば、屹度果すことで御座いませうと申上げました。

そこでサラデインは優しく相手を抱き締めて、接吻をした上、涙ながらに「では、御機嫌よう」と申しました。それから彼がその部屋を出ると、他の貴族達もそれ〴〵別れを告げて、サラデインに隨いて、例の床が用意されてある廣間へ參りました。

そんな事で大分夜も更けました。それに魔術師もいよいよ魔術を施行する時だと云つて急いでゐましたので、醫者は或種の水藥を持つて出て、精氣をつける藥だと稱して、トレルロ氏の手に渡して飲ませました。すると、彼は間もなく深い眠りに落ちました。そして、眠つたまゝサラデインの命令によつて、その美々しい寢臺の上に寢かされました。サラデインはその寢臺に更に極めて高價な美しい冠を添へまして、それに、この冠はサラデインによつてトレルロ氏の妻に贈られたものであるといふ意味を明かにするやうな書いたものを附けました。次いで彼はトレルロ氏の指に、燃え盛る炬火のやうに輝き渡る、殆ど價の知られない程貴い紅玉石の指輪を差しました。それから、これ又その價を定め難いやうな寶劍をトレルロ氏の腰に着けさせた上、それに、未だ嘗て人の見たこともないやうな眞珠その他の寶石を鏤めた鉞金を添へました。最後に眠れる人の兩側に金貨を一杯に盛つた黄金の鉢を、又その身邊には眞珠の附いた髮網、腰帶、その他一々こゝで算へ上げてゐては切りもない位さま〴〵な品を並べさせました。これが濟むと、サラデインはもう一度トレルロ氏に接吻して、それから急いで仕事を始めるやうに魔術師に命を下しました。と、忽ち寢臺はトレルロ氏を乘せたまゝサラデインの眼の前で浮び上つて、そのまゝ消えてしまひました。サラデインは臣下の貴族達を相手にトレルロ氏のことを話しながら、なほ暫くそこに居殘つてゐました。

その間にトレルロ氏は早くも、その望み通り、パヴィアのシエル・ドロにある聖ピータ寺の堂内に、前に擧げたやうな寶石類を身に着けて、眠つたまゝ降ろされました。恰度その時役僧は、朝の鐘を鳴らした後、燭臺を手にして堂内へ這入つて來ましたが、たま〳〵その美しい寢臺を見附けて、魂銷たばかりか、非常に怖がつて急いで逃げ出しました。僧院主や他の僧侶達は役僧が逃げて來たのを見て、不思議に思つて、その譯を訊ねました。そこで役僧は事の次第を話しました。「本當に」と、僧院主は申しました。「お前も何時まで子供ぢやあるまいし、それに昨日今日寺へ來た譯でもないのに、何をそんなに驚いて騒ぐのだい？　一つ出掛けて行つて、あんなに戰々してゐる原因を見屆けてやるかな。」

で、更に澤山の蠟燭をとぼした後、院主は僧侶どもを伴れて堂内へ這入つて行きました。すると、例の驚くばかり華やかな寢臺とその上に寢てゐる騎士とが目に着いたのですね。が、一同怖がつて、一歩も寢臺に近づき得ないで、ぶる〳〵戰へながら、貴い寶石類を遠方から眺めてゐる間に、恰度睡眠劑の力が盡きたものと見え、トレルロ氏は突然目を覺して、深い溜息を吐きました。僧侶どもはそれを聞いた時、院主も一緒に、吃驚して逃げ出しながら、「神よ、救け給へ」と叫びました。一方トレルロ氏は眼を開いて、あたりを見廻しながら、自分が今そこまで運んで貰ひたいとサラデインに頼んだ所へ來てゐることを明かに覺りました。で、それに滿足して、やをら身を起して腰を掛けた後、周圍に積んであるものを一つ〳〵檢べて見ました。サラデインの大量はかね〴〵知つてゐたやうなもの丶、それがこちらの考へてゐた以上であるやうに思はれて、今更のやうに相手の氣前の好さを底の底まで知つたのですね。

處で、彼は僧侶達が逃げたのを見て、その譯も大概推量しましたが、そんな事には頓着しないで、そこに腰掛けたまゝ、僧院主の名を喚んで、自分は甥のトレルロだから、どうか心配しないで傍へ來てくれと、大きな聲で頼みました。院主はこれを聞くと、トレルロは二三箇月前に死んだものと思つてゐただけに、いよ〳〵恐ろしくなるばかりで御座いました。が、暫くすると、當然の理由から幾分氣も安まりましたし、それになほ續けざまに喚ばれてもゐましたので、十字を切つて、相手に近寄つて行きました。「叔父さん！」と、トレルロ氏は聲を懸けました。「何をそんなに怖がるのです？　私はまだ神のお惠みで生きてゐますよ。そして、海のあなたから此處へ歸つて參りました。」

トレルロ氏は長い髯を生やして、アラビア風の衣裳を着てゐましたが、やゝ暫くすると、院主はそれでも相手の誰であるかを認めると共に、今度はすつかり安心して、進んでその手を取りながら、「矢つ張りお前だつたのか、よく來たね、本當によく歸つて來ておくれたね」と申しました。

それから更に言葉を續けました、「私達が怖がつたのも、實はそれだけの理由があるんだよ。今日この頃この市で、お前を本當に死んだものと思つてゐない者は一人もないのだからね。そこでお前に云はねばならぬことがあるのだがね、お前の妻のマドンナ・アデリエタも身内の者の強つての頼みや追求に負けて、心は進まないながらも婚約をしてしまつたよ。それも今朝新しい夫の許へ行くことになつてゐて、結婚式やその祝宴なども一切準備が出來てゐるんだよ。」

そこでトレルロ氏はその華やかな床から離れて、院主や僧侶達に親しく挨拶をしてから、一同に向つて、必要な手段を講じるまでは、自分が歸國したとは何人にも云はないでくれと頼みました。それから貴重な寶石類を安全な箇所へ藏つて貰つた上、彼は院主にそれ迄自分の身に起つたことを話して聞かせました。院主もその幸運を喜んで甥と一緒に神に感謝を捧げました。そこでトレルロ氏は自分の妻の新しい夫が誰であるかを訊ねました。院主はそれを云つて聞かせました。すると、トレルロ氏はそれに應へて申しました。「私の歸國を人に知られる前に、實は妻がこの婚禮に際してどんな態度を取つてゐるか、それが見たいのですよ。就いては、僧侶がさう云つたやうな祝宴に列なるのは餘り例のないことでは御座いませうが、私のためと思うて、二人で出掛けられるやうに、一つ取計らつて頂きたいのですがね。」

院主は委細承知の旨を答へて、夜が明けるや、直ちに新郎の許へ人を遣つて、一人の友人を連れて今日の婚禮に列席したいがと申込ませました。相手の貴族は、それは誠に忝い、是非お入來を願ふと返答して來ました。そこで食事の時間になりますと、トレルロ氏は、それ迄着てゐた衣裳のまゝで、院主と共に新郎の邸へ出掛けました。そして、逢ふ程の者から驚きの眼で見られましたが、しかも本身を看破られるやうなことはありませんでした。院主は一同に、これはサラセン人で、サルタンから佛蘭西國王へ派遣された使節だといふやうに申して置きました。

かうしてトレルロ氏は自分の妻の食卓と向ひ合つた席に就かせられました。これ幸ひと、彼は妻の容子を見守つてゐましたが、その面上には今日の結婚を悲しんでゐる表情があり〳〵と泛んでゐるやうに思はれました。彼女も二三度夫の方を見遣りました。が、決してその人と認めたからではありませんでした。と云ふのは、長い髯、外國の服裝、及び自分の夫は死んだといふ彼女の固い確信がその邪魔をしたからですね。

トレルロ氏は、果して彼女が自分を覺えてゐるかどうか試して見るのは今だと思ひましたので、別れの際に妻から貰つた指輪を手に取つて、彼女の給仕をしてゐる小姓を呼

んで貰つて、その小姓にかう申しました。「私からと云つて、花嫁にかう傳へて下さい。私の國では、今日の私のやうに、他國の婚禮の祝宴に招かれたときには、花嫁は、その人が祝宴に列席して呉れたことを喜ぶといふ徴に、自分の杯に酒を注いでその人に贈ります。すると、他國の者は好きなだけ飲んで、その盃に蓋をします。次いで花嫁はその殘りを飲むのが習慣になつてゐますとね。」

小姓はこの言葉を花嫁に傳へました。花嫁は悧巧な禮節のある婦人で、殊にかの客人を誰とも知らないが、いづれ地位のある貴顯だと思つてゐましたので、その列席を忝く思つてゐることを知らせようと、自分の前にあつた黄金の大盃になみ〳〵と酒を注がせて、それを客人の許へ持つて行くやうに命じました。そして、それはその通りに取り行はれました。

一方トレルロ氏は彼女に貰つた指輪を口にして、酒を飲みながら、誰にも氣附かれないやうにそれを盃の中に落しました。それから、ほんの少し許り酒を殘したまゝ、再び杯の蓋をして、それを婦人に返しました。婦人は、前に聞かされた習慣通りにしようとして、盃を手に取るや、蓋を開けて、口許へ持つて行きましたが、指輪が目に入りましたので、無言のまゝ、暫くそれを眺めてゐました。そのうちに、それがどうしても別れに臨んで自分がトレルロ氏に貰つたものに相違ないことが分つたのですね。で、それを手に取つたまゝ、所謂その客人なるものをじつと見遣りました。すると、その誰であるかが分りましたので、彼女は突然氣が狂つたやうに、前の食卓を突き倒して、大きな聲で叫びました。「あ、あれです、私の良人です。本當に、これはトレルロ樣で御座います。」かう云ひながら、トレルロ氏が腰掛けてゐた食卓目がけて走せ寄つて、着てゐる衣裳や、食卓の上にあつたものなどには一向頓着しないで、その上に身を投げ出しながら、永い間待ち焦れてゐた夫を固く兩腕に抱き緊めました。そして、側から何と云はれようが、何とされようが、トレルロ氏から少し靜かにしてくれ、自分を抱いてくれる時間ならまだいくらもあるぢやないかと云はれるまでは、いつかな相手の首を離れようとはしませんでした。

そこでやつと彼女は身を起しました。トレルロ氏は、かうして結婚式も亂れてしまつた上、自分の妻も意中の騎士を取り返して再び機嫌がよくなつたからには、一同靜かにして、少時傾聽して貰ひたいと頼みました。そして、自分が出發した日からこの瞬間に到るまで、一身上に起つた一切のことを話して聞かせました。最後に、自分が死んだと云ふので、自分の妻を配偶に選んだ貴族も、かうして彼自身が自分の死んだといふ噂を否定する以上、たとひ自分が

再び彼女を取戻しても、別段それを惡くは取られなからうといつて言葉を結びました。

この一件は新郎にとつて多少堪へ難いものではありましたが、それでも彼は自ら進んで、何處迄も友誼に厚い態度で、トレルロ氏は、自分に屬するものに關しては、如何やうにも思ひ通りの處置を取られて然るべしと返答に及びました。そこで花嫁は新郎から貰つた指輪と冠とを取り去つて、その代りに盃の中から拾ひ出した指輪を嵌め、サルタンから贈られた冠を着けました。そして、二人ともその家を出て、婚禮の行列を背後に從へたまゝ、トレルロ氏の邸に移りました。こゝで二人は、前には、悲嘆に暮れてゐたが、今やトレルロ氏を奇蹟でも見るやうに驚き眺めてゐる友人、親戚、又は市民たちを長夜の宴に招待して、愉快にこの再會を祝ぎました。なほトレルロ氏は婚禮の費用を拂つた者に例の寶石の一部分を、他の一部分は僧院主その他の人々に贈りました。又サラデインには幾度となく使者を送つて幸福な歸國を知らせましたが、常にその友人、下僕を以て自ら任じて、なほ幾多の年月をその優れた夫人と共に、前にも優して人に親切に、寛量にして暮しました。

これがトレルロ氏の不幸並びにその愛する妻の憂みの終局で、又二人が平生から他人に盡した朗かな好遇と親切との報酬で御座いました。かうした親切を眞似ようとして、隨分多くの人が努力しますが、どうもその心得が好くない。といふのは、それだけの資力は十分に有つてゐながら、それを與へる前に、先づその値打ち以上にそれを買はせようとするのですね。ですから、そんな人々に何の報いがなくとも、彼等は勿論、他の何人もそれを不思議に思つてはならないので御座います。

第十話

ザルツツオの邊境伯は臣下の勸めによつて已むなく妻を娶ることにしたが、自分の意に適つたものを迎へようとして、或百姓の娘を選び、その間に二子を生む。その後、妻をして自分が二子を殺したかの如く信ぜしめ、彼女に向つて、お前が厭になつたから他の女と結婚したと宣告する。そして、それを眞らしく裝ふために、恰も新妻の如くにして、長女を歸邸させ、次いで妻を襯衣一枚にして追ひ出す。しかも、あらゆることに妻の辛抱强さを見て、前にも優して、彼女に優しくして、再び自邸に引取ると共に、成長した二兒を見せて安心させ、伯爵夫人として人々に尊敬せしむる話。

王の長い話は大分一同の氣に入つたやうで御座いました

が、それが終ると、デイオネオは微笑を含んで申しました。——

「いくら皆さんがトレルロ氏を褒めた處で、御當人は今夜こそ幽靈の石のやうになつた尻尾を和らげようと、そればかり待つてるんだから、一文だつて出しやしませんよ。」が、次いで話しをするのは自分一人だと知つてゐましたので、早速次のやうに語り始めました。——

皆さん、今日は何うしたことやら王とかサルタンとか、とかくさうした人物のお話ばかりで御座いました。で、私もその例に洩れないやうに、一つ邊境伯のお話を致したいと思ひます。但しこれは寛大な行爲のお話ではないので、よし最後には善意に變化したとは云へ、兎に角狂氣めいた亂暴を敢てしたので御座います。ですから、その主人公の眞似をなさるやうにとは、何誰にもお勸め致し兼ねる次第です。と申すのは、それが善意に變つたといふことは、一面から見て大層氣の毒なことですからね。

餘程以前のことですが、ザルツツオの代々の伯爵中に、グアルテイエリといふ青年の當主であつたことが御座いました。この人は妻もなければ子供もなく、たゞもう鳥を捕るとか狩をするとかに日を費して、妻を迎へて子供を擧げようなどいふ考へは毛頭有つてゐませんでした。偖個、この點では極めて悧巧な男であつたのですね。とは云へ、これが家來どもの氣に入らう筈が御座いません。で、彼等は屢々主人に向つて、早く結婚して世嗣を擧げると共に、自分達も永遠に君主を奉戴して行かれるやうにして貰ひたいと頼みました。時には又、誰が見ても感心するやうな、その良人には最大の滿足を齎すやうな、善い性質と名門とを兼ね備へた婦人を探し出して、お目に懸けようとまで申出たもので御座います。

が、グアルテイエリはそれに答へました。「お前達はわしが何うしてもしまいと決心してゐることを强ひてさせようと云ふのだ。わしはね、こちらの習慣にうまく合致してくれるやうな女を見附けることが如何に困難であるか、尤も、その反對の女なら有り餘る程あるが、そんな自分に合はない妻にぶつかつた男が、如何に慘目な生活をしてゐるかを考量した上、さう決心してゐるんだよ。お前達は、その父母の日常を見さへすれば、娘の人物まで見極めが着くやうに思つて、それに基づいて、屹度わしの氣に入るやうな女を見附けて來るなぞと云ふが、そりやあ馬鹿な話だよ。わしには、お前達が何うして父親の人物を知り、母親の祕密を看破しようとするのか、それからして既に分らないね。よし父母の人物が分つたとしても、娘が兩親に似てゐないことは幾許だつてあらうぢやないか。それでもお前達が强ひてわしをこの鐵鎖に繫がうといふのなら、已むを得ない、

まあ、それに從つてもいゝよ。だが、萬一まづい結果に陷つた場合、自分の愚を嘆けばそれで濟むやうに、わしは自分で相手を探すことにするよ。同時にお前達に云つておくがね、もしわしの選んだ女がお前達から主人の妻として相當の敬意を表されないやうなことがあつたら、その時こそ、自分の希望に反して結婚などするのが、わしにはどんなに苦しいことであつたかを思ひ知つて、お前達の方で面目玉を潰さなくちやならんのだぞ。」

忠良な家來どもは、主人が結婚する決心さへして呉れたら、何にも申すことはないと返答に及びました。

處で、餘程以前からグアルティエリ伯は自分の居城の近くにある村の貧しい一人の娘の擧止が氣に入つてゐました。それにその娘は美人でもあつたので、あの娘となら滿ち足りた日を送ることが出來ようと思つたのですね。で、それ以上詳しく査べて見ようともしないで、その娘と結婚することに決心しました。彼はすぐにその父親を喚んで、一個の貧しい百姓に過ぎないその男と相談の上、娘を妻に貰ひ受けることにしました。そこで近廻りの友人や家來どもを呼び集めて、かう申しました。「わしが妻を迎へることに決心したので、お前達は喜んで呉れた、又現に喜んでゐてくれることと思ふ。處で、わしがこの決心をしたのは、自分で妻が欲しかつたからといふよりは、お前達を喜ばせるためであつた。お前達もわしに約束してくれたこと、即ちわしが何んな女を選ばうとも、お前達はそれに滿足して、何處までも主人の妻として尊敬するといふことは、よもや忘れはしなからうね？　そこで、いよ／＼お前達に對してわしの約束を果すと共に、お前達にもその約束を守つて貰はなければならぬ時期が到達した。實はこの近在のものでわしの氣に入つた女を見附けたので、それを妻として、近日のうちに邸へ連れて來ようと思つてゐるのだ。で、お前達がわしの約束履行に滿足すると同じく、わしの方でもお前達の約束履行に滿足の出來るやうに、一つ結婚式を盛大にして、十分な敬意の表明の下に花嫁を迎へ取る準備がして貰ひたいものだね。」

忠良な家來どもはいづれも喜びに溢れて、委細畏承つた上、その女が何者であらうとも、主君の妻として認むると共に、飽く迄奥方としての敬意を拂ふことを辭しない積りだと返答に及びました。それから祝宴を華々しく盛大に擧行するためにあらゆる準備を致しました。グアルティエリも亦同じやうにしました。彼は善美を盡した結婚式の準備をさせると共に、多くの友人、親戚、貴族、その他近隣の者に到るまで悉く招待させました。更に花嫁と極めた乙女の背恰好と同じやうだと思はれる一人の少女の身丈に合せて、見事な衣裳を數多く作らせ、なほ腰帶、指輪、華やか

た花嫁の冠と共に、新婚の女に必要な一切の品々を準備しました。

さて結婚式の當日になりますと、グアリティエリは朝七時頃眞先に馬に跨がりました。すると、彼に敬意を表するために集つてゐた人々も後れじと馬に乘りました。そこで彼は必要な一切のものを調べた上、「諸君、花嫁を迎へ行く時が來ました」と申しました。そして、その供揃ひを後へに從へたまゝ、かの村を指して出發しました。さて一同娘の父親の家に着いた時は、恰度その娘が大急ぎで井戸から水を汲んで歸る處で御座いました。彼女も他の女達と一緒に殿樣の花嫁がお通りになるのを見に出掛けようと思つたのですね。

グアルティエリは女の姿が眼に入ると、グリセルダといふその名を呼んで、父親は何處にゐるかと訊ねました。

彼女は恥づかしさうに答へました、「殿樣、父は家にをります。」

そこでグアルティエリは馬から降りて、人々にはその儘待つてゐるやうに命じておいて、一人で貧しい茅屋に這入つて行きました。そして、ジアヌコロといふ女の父親がそこにゐるのを見て、かう申しました。「私はグリセルダと結婚するために遣つて來たが、その前にあなたの面前であれに少々聞きたいことがあるのだがね。」それから乙女に向つて、彼女を妻に迎へるからには、彼の意のまゝに日を送つて、彼が何を云ひ、何を爲ようとも、決して腹を立てないで、絶えず從順にするやうに努めてくれるかどうかといふことから始めて、その他さま／＼なことをそれからそれへと訊ねましたが、乙女は一切それを承引しました。そこでグアルティエリは女の手を取つて、戸外へ連れ出した上、お供揃ひの人々の見てゐる前で着物を脱がせ、彼女のために作らせて持つて來てあつた衣裳に手早く着換へさせました。靴を穿かせ、麻のやうに亂れた頭に冠を戴かせました。そして、凡ての人がこの仕打を訝り驚いてゐるうちに、彼はかう申しました。「諸君、これこそ私の意向に基づいて、相手が私を良人としてくれる限り、私の妻にする女なのです。」

次いで彼は、おづ／＼そこに立つたまゝ、恥づかしさうにしてゐる彼女の方へ向き直つて、「グリセルダ、お前は私を良人に持つてくれるかね」と申しました。

すると、彼女はそれに答へました。「殿樣、どうぞ御心のまゝに。」

「では」と、彼は申しました、「私もお前を妻にするぞ。」かうして彼は凡ての人の面前で彼女と婚約をいたしました。それから彼女を馬に乘せて、いろ／＼勢はりながら邸へ連れて參りました。

さてその結婚式は莊嚴に、祝宴は佛蘭西の王女が迎へられてもかうはあるまいと思はれる程盛大に催されました。その間花嫁は衣裳が變ると共に心持も身の取做しも一新したやうに見られました。前にも申した通り、彼女は姿も顏も美しう御座いました。そこへ持つて來て、今や容姿のあでやかなのと同じやうに、態度も嫻雅で、愛嬌がよく、行儀作法も上品になりましたので、最早誰一人彼女をジアヌコロの娘の女牧者であつたとは思はなくなりました。偶個、彼女は立派な貴族の生れのやうに見受けられたのですね。云ふまでもなく、彼女の前身を知つてゐる人は皆驚嘆しました。その上、良人に仕へては從順で甲斐々々しく、何一つ不足を云ふ處がないので、彼の方も自分を世界中の最も幸福な人間だと思ふ位で御座いました。それから又良人の家來どもに對しても、彼女は至つて親切に思ひ遣り深くしてやりましたので、家中の者で、彼女を自分以上に愛しないとか、喜んで彼女に敬意を表しないとかいふやうなものは、一人として御座いませんでした。

凡ての人は彼女の福祉、幸運、出世を祈りました。先には、あんな女を妻にするとはグアルティエリもあんまり分別がなさ過ぎるなぞと、寄ると觸ると蔭口を利いてゐた人達も、今では、いや、彼こそ何人にも優つて分別のある聰明な人だ。彼を措いては何人も襤褸や百姓服の下に匿された彼女の高い德性を看破ることは出來なかつたらうからねなぞと斷言するやうになりました。要するに、あまり時日も經たないうちに、彼女の德性や美風は、その領土に於けるばかりか、到る處で褒め囃され、彼女を妻に迎へた當座、その夫に對して云はれたでもあらう非難は、今や反對に讃美の言葉に變りました。

彼女はグアルティエリと結婚してから間もなく懷胎して、月滿ちると共に女の子を生み落しました。グアルティエリの喜びは一通りではありませんでした。然るに、その後間もなく眞綿で首を締めるやうな態度に出て、殆ど堪へられないやうな方法で彼女の忍耐を試練しようといふ變な考へを起したのですね。で、先づ言葉で彼女を侮辱しようとかゝつて、さも不服さうな容子で、家來どもは彼女の身分の低いといふのでかね〳〵不滿であつたが、彼女が子供を生んでからは、それが特に激しくなつたやうだ。先頃生んだ娘に對しても、彼等はひどく不滿で絕えずぶう〳〵云つてゐると申しました。

奧方はこれを聞いても顏色一つ變へないで、平生の心懸けを少しも忘れずにかう申しました。「どうぞ貴方の名譽や平和に係らないやうに、これがいゝと思召す處置を取つて下さいませ。私の身は何うなりませうとも、更々お怨み申すところは御座いませぬ。私が御家來の方々よりもどんなに身分の低いもので、貴方の御好意によつてかうしてはゐますものゝ、この名譽にどんなに値ひしないものであるかといふことは、よく〳〵心得てをりますから。」

この返答は、いくら自分や側の者から禁められても、彼女の心には些の慢心も萌してゐないことを證明するものであつたので、大層グアルティエリの氣に入りました。

かうして家來どもが奧方の生んだ娘を快く思つてゐないことを大體云つて聞かせて置いた後、間もなく彼は一人の家臣に內密で旨を含めて、奧方の許へ遣はしました。家臣はさも悲しげな容子をして、かう申しました。「奧方、私は殿の御命令をその儘實行しなければ、命を召されるので御座います。殿はかう仰せられます、この姫君を頂戴して行つて、それから……」こゝで彼は言葉尻を濁しました。

奧方はそれを聞いて、家來の顏色を見ると共に、平生の夫の口振りを想ひ合せながら、これはどうしてもこの子を殺すやうに命ぜられて來たものに違ひないと推量しました。で、直ぐさま搖籃の中から子供を取り出して、そつと接吻して祝福をした上、胸の裡の悲しみは譬へやうもありませんでしたけれども、顏の色も變へずに、幼兒を家來の腕に渡して、かう申しました。「さあ連れていらつしやい。そして、お前や私の御主君がお命じになつた通りにするがいゝ。たゞどうか、はつきりとさういふ御命令が出てゐない限り、狼や鷲の餌食にはしないやうに氣を附けて頂戴ね。」

家臣はその子を受取りました。そして、彼がグアルティエリに奧方の云つたことを傳へました時、彼は妻の沈勇に驚嘆しました。そこで彼はその家臣に子供をつけてボロニヤの親戚へ遣はすと共に、決して兩親のことを明さないで、この子を大切に育て上げて呉れるやうに頼みました。

それから暫くすると、奧方は又もや懷胎して、月滿つると共に今度は男の子を儲けました。グアルティエリにとつては兼ての願ひが叶つたわけなんですね。けれども、これまで遣つただけではまだ足りないやうに思つてゐましたので、一層大きな悲痛を與へて妻の心を傷けるために、或日彼はわざと立腹したやうな顏をして、かう申しました。「お前がこの子を生んでからといふもの、わしはどうも家來どもと折合が惡くなつて困り切つてるよ。彼奴等は後々ジアヌコロの孫に支配されるやうになるのが不服なんだ。で、わしも自分が彼奴等に追ひ出されまいと思へば、どうしてもこの前と同じやうな處置を取つた上、結局はお前にも戻つて貰つて、他の妻を迎へる外ないと考へてゐるんだよ。」

奧方はじつと我慢して聞いてゐましたが、たゞこれだけ返答に及びました。「殿樣、何事も貴方のお氣が安まつて、思召しの叶ひますやうに遊ばして下さいませ。私のことな

ぞはどうぞお心に懸けて下さいますな、何事も貴方のお氣に召しさへすれば、他に私の願ひは御座いませぬから。」

數日の後グアルティエリは、この前娘に對して取つたと同じやうに、子息を處置するために人を遣はしました。そして、妻には同じやうにその子を殺したものと思はせて置いて、竊かにボロニヤに送つて、そこで育てて貰ふやうにいたしました。今度も亦奥方は、娘の時と同じやうに、その悲しみを言葉にも素振りにも表しませんでした。これにはグアルティエリもすつかり驚嘆して、他の女には迚もこの眞似は出來なからうと心の裡に思ひ極めました。自分がそれを默つて見てゐた間、妻がどんなにその子供達を可愛がつてゐたかを知らなかつたら、彼も妻がさうした態度を取るのは子供を何とも思つてゐないからだと信じたかも知れません。ですが、彼は妻の態度を見て、深くその賢明に推服しました。

家來どもは主君が本當に子供達を殺させたものと思つて、烈しくその非行を攻擊しました。主君を殘忍だと思ふだけに、一層奥方がお氣の毒に思はれたのですね。しかも奥方は、侍女どもが殺された子供について彼女に悔みを述べようとすると、何時もそれを制して、子供の父親が好きでさうされるのなら、自分に於て別に異存はないと、きつぱり云ひ切りました。

最初の娘が生れてからもう幾年も經ちましたが、グアルティエリはいよ〳〵妻の忍耐力に最後の試練を加へて遣らうと思ひ立ちました。そこで多くの家來達に向つて、グリセルダを妻にして置くことは、もう何うしても辛抱が出來ない。今になつて、あんな女を娶つたのは、いかにも拙い、血氣に逸つた所業であつたと、つく〴〵思ひ知つた。で、自分の手に合ふ限りの手段を盡して、法王から特別の允許を受けた上、他の妻を選んで、グリセルダを離婚するやうにするからと申渡しました。彼はそのために忠良な多くの家來から嚴しく攻擊されました。が、彼はたゞどうしてもさうする外ないのだと答へるに留めました。

この知らせを耳にした時、奥方はさうなればもう仕方がない、再び父の家に歸つて、昔のやうに羊の番をしながら、全心を傾けて愛して來た人を他人が代つて所有するのを見てゐる外ないと覺悟しました。内心はどれ程悲しかつたか知れませんが、それ迄あらゆる侮辱に堪へて來たと同じやうに、今度の侮辱にも毅然として堪へて行かうと決心しました。

その後間もなくグアルティエリは贋手紙を、恰もそれが羅馬から來たもののやうにして、手に入れました。そして、家來達には、法王が特別の計らひで他の妻を娶つて、グリセルダを離婚することを允許したものだといふやうに信じ

させました。そこで彼はグリセルダを面前に喚んで、衆人環視の裡に、かう申し渡しました。「法王の允許によつて、わしは他の女を娶つてお前を去ることが出來るやうになつた。處で、わしの祖先は門地の高い貴族で、且この國の支配者であつたのに、お前の祖先はたゞの百姓に過ぎないからして、わしはもうお前をわしの妻でないことにした。就いては持つて來た持參金を携へて、直ぐさまジアヌコロの家へ引取つて貰ひたい。さうすれば、わしは自分に應はしいと見込んだ他の女を連れて來るからね。」

この言葉を聞いた時、奥方は迚も普通の女性には見られないやうな偉大な努力の下に、やつとせぐり來る涙を抑へて、かう申しました。「殿樣、私は平生から自分の卑しい生れが貴方の高い門地に應はしくないことを知つてゐました。また貴方との御緣にしましても、私は貴方や神樣のお惠みだと思ひまして、決して普通の贈物のやうに思つて自分のものにした覺えは御座いませぬ。たゞもう始終拜借してゐるものだと見做してゐました。處で、今承はれば、それを返して欲しいとのお言葉で御座います。私はもう甘んじてお返ししなくてはなりませんし、又お返しも致します。こゝに結婚の際お授け下さいました指輪が御座います。どうぞお受取り下さいまし。それから私が持參しましたものを持つて歸れとの仰せで御座いますが、そのためには貴方が會計係の手をお煩しになるにも、又私が財布一つ駄馬一匹拜借するにも及びません。貴方が私を裸でお引取り下さいましたことは、決して忘れはいたしませんから。で、もし貴方のお子樣方を宿したこの軀幹を誰から見られても差閊へがないと思召したら、私は裸で出て參ります。ですが、貴方に捧げたばかりに二度と手に入れることの出來なくなつた童貞の酬いとして、これだけはお願ひいたしますが、どうか私の持參金の上に襯衣一枚添へて持つて行くことをお許し下さいませ。」

たゞもう一途に泣きたくなつたグアルティエリは、じつとそれを我慢して、さも嚴めしげな容子で、かう申しました。「では、襯衣一枚は持つて行くがいゝ。」

周りに立つてゐた人達はいづれも、十三年間以上も殿の奥方となつてゐた女がそんな慘目な恥づかしい風體で家を出されて行くといふのは、世にもあるまじきことだと云ふので、少なくとも一着の衣裳を贈るやうに懇願いたしました。が、その願ひは無益でした。そこで、奥方は襯衣一枚で、跣足のまゝ、帽子も何にも被らずに、一同の祝福を祈つた上、その家を出て、見送る人の涙のうちに、父の家へと歸つて行きました。

ジヤヌコロはグアルティエリが自分の娘を本氣で妻に迎へたとは信じてゐませんでした、從つてかうした破目にな

るのを日毎に覺悟してゐましたので、グアルテイエリが彼女と結婚した日に娘が脱ぎ捨てて行つた着物をそのまゝ藏つておきました。で、早速その着物を娘に出して遣りました。彼女はそれを身に着けると、再び父の家で昔してゐたやうなさゝやかな家事にいそしんで、敵意ある運命の恐ろしい打擊を雄々しくも堪へ忍んでゐました。

かうした處置を取つた後、グアルテイエリは家臣一同に向つて、パナゴの伯爵の娘を花嫁にする旨を申渡した上、婚禮のために華々しい準備をすると同時に、グリセルダの許へ人を遣つて、彼女自ら邸へ出頭するやうに申しました。

で、彼女が遣つて來た時、彼はかう申しました。「實は最近選んだ花嫁を迎へ取るばかりになつてゐるのだが、到着の際には一つ、大いに敬意を表しようと思つてゐるのだ。處が、お前も知つての通り、部屋々々の裝飾を心得た女が一人もゐない。お前は誰よりもかうした家事をよく心得てゐる。そこで、お前が指圖して、この家に必要な一切のものを處理すると共に、お前がいゝと思ふ貴婦人達を招待させた上、まあ、お前がこの家の主婦になつたつもりで、その人達を接待して貰ひたいのだがね。尤も、婚禮の式さへ濟めば、お前は勝手に歸つてもよいのだよ。」

グリセルダも自分の幸福こそ斷念してゐたやうなものの、彼に對して抱いてゐた愛は諦め兼ねてゐましたので、この言葉は一つ〳〵劍のやうに彼女の胸を刺しました。それでも、彼女はかう申しました。「殿樣、承知いたしまして御座います。」かうして彼女は、一寸前に襯衣一枚で追ひ出された家へ、北伊太利産の粗末な着物を着て再び歸つて來て、部屋の掃除をしたり、鑒頓したり、窓掛を附けたり、廣間の長椅子に覆ひを被けたり、臺所を整理したり、宛然卑しい女中と同じやうに、一切の事に手を下して立ち働きました。そして、何も彼もすつかり整頓して、これで好しとなるまでは、決してその手を休めませんでした。次いでグアルテイエリの名で附近の貴婦人達を悉く招待させておいて、靜かにその日を待つてゐました。で、いよ〳〵結婚の當日となると、彼女は貧しい着物こそ着てゐましたれ、貴族らしい意氣と態度と、それに輝かしい顏つきとで、結婚式に遣つて來る多くの貴婦人達に迎接しました。

さて、グアルテイエリは自分の子供を親戚であるボロニヤのパナゴ伯爵の手許で育てゝ貰つてゐましたが、長女は恰度十二歳になつて、世にも稀れな美人、長男は六歳になつてゐました。で、人をボロニヤに遣はして、どうか娘と子息とを連れてザルツツオへ來て臭れるやうに、なほ威儀堂々たる供揃ひで押出した上、長女の何者であるかを何人にも覺られないやうにして、世間へはグアルテイエリの許へ花嫁を連れて行くのだと云ひ觸らして貰ひたいと傳へさ

せました。

親戚の貴族は邊境伯の依賴通りに取計らつて、旅程に上つた後二三日にして、乙女とその弟や供揃ひの者どもと一緒に、正午の時刻にザルツツオへ到着しました。見ると、領内は勿論、その附近の人々が集つて、グアルテイエリの新しい花嫁を待つてゐました。花嫁は貴婦人達に迎へられて、食卓の用意の出來た廣間へ案内されました。その時グリセルダは、例の粗服のまゝ嬉しさうに花嫁を迎へて、「奥樣、ようこそお出で遊ばしました」と挨拶しました。

貴婦人達はそれ迄も何度となくグアルテイエリに向つて、グリセルダをその部屋に引籠らせて置くか、さもなければ在來着慣れた衣裳を貸して、あんな服裝で見知らぬ客の前に出ないでも濟むやうにしてやつてくれと、泣いて賴んだもので御座います。が、それも聽かれなかつたのですね。で、それ等の人々が食卓に案内されますと、いよ〳〵給仕が始まりました。例の乙女は總ての人の視線を集めました。そして、誰も彼もグアルテイエリは奥方を取換へて甘いことをしたと申し交はしました。が、その中でもグリセルダは人一倍乙女とその弟とを稱讃したもので御座います。

グアルテイエリも、かうなればもう思ふ存分妻の忍耐力を試驗したと思ひましたので、(彼は彼女が運命の有爲轉變にも少しも動じないことを見て取りました、而もそれが彼女の精神的愚昧に原づくものでないことを確信してゐました。といふのは、平生から彼女の賢明であることはよく見拔いてゐたからですね。) いよ〳〵彼女を、彼の推知した處に據れば、その神色自若たる顏容の裏に深く包み匿してゐる苦しみから解放して遣る時が來たと考へました。そこで彼女を一同の見てゐる前で自分の前に喚んで、にこ〳〵笑ひながら、かう申しました。「處で、お前は今度の花嫁をどう思ふかね。」

「殿樣」と、グリセルダはそれに答へました。「誠に結構なお方と存じます。もし美人でいらつしやると同樣に、御發明でいらつしやいましたら、殿樣も今度こそ、世にも滿足した御主君として、あの方と御一緒にお暮し遊ばされることは、私の夢々疑はない處で御座います。ですが、くれぐれもお願ひ申して置きたいのは、今度の方には、どうか、嘗て貴方樣のものであつた女が受けたやうな苦しみをおさせ遊ばさないやうにして頂きたいことで御座いますよ。と申しますのも、あの方は到底それには堪へられさうもないやうに思はれるからで御座いますがね。一つには、まだお年もお若いし、又二つには、以前のものは幼少の頃から絶えず苦勞をしつけてゐたに反して、今度の方は榮耀に育てられていらつしやるからで御座います。」

グアルテイエリは、彼女が今度の女を彼の妻たるべきものだと固く信じてゐながらも、尙且その女を稱揚して已まないのを見て、彼女を自分の傍に坐らせて、かう申しました。「グリセルダ、到頭お前が永い間の忍耐の收穫を收める時が來たよ。又私を殘忍刻薄で、道理の分らない無分別者だと思つてゐた連中にも、私のしたことは單に或目的のためにした準備的行爲で、お前には妻たるの道を、又彼等にはさうした女を選んで取扱ふ術を敎へると共に、これからお前と一緒に暮す間はすつかり安心して平和に暮して行かれるために企てたものだといふことを納得して貰ふ時が來た。實は最初妻を娶らうと決心した時には、この平和が獲られるかどうかと、それが心配でならなかつた。お前をあのやうにさま〳〵な方法で試したり、苦しめたり、侮辱したりしたのも、さうした譯があつたからなんだよ。然るにお前は、その言葉なら行ひなら嘗て一度も私の願ひに反したことはなかつた。で、お前のやうな女なれば、私の日頃望んでゐた幸福も屹度獲られるだらうと固く信ずるやうになつたのだね。そこで、いろんな機會に一つ〳〵お前から奪つたものを一度にすつかりお前に返して、お前に加へた傷を最上の喜びで癒やして上げようと思ふのだ。さあ、どうか、私の花嫁だと思つてゐるこの女と、その弟とをお前と私との間に出來た子供として受取つてお呉れ。これこそ、お前が永い間世間と一緒になつて疾うに殺されたものと信じてゐたその二人なんだよ。そして、私は何處迄もお前の夫、而も私と同じやうに自分の妻を喜ぶ理由を持つてゐる男は廣い世間にも他にはないことを自慢することが出來ると信じてゐる夫なのだ。」

かう云つて、彼はグリセルダを抱き緊めながら接吻しました。そして、あまりの嬉しさに泣きしやくつてゐる彼女の手を取つて、一緒に食卓から立つて、一切の話を聞いてたゞもう驚いてゐる娘の側へ行きました。兩親は眞心を籠めて娘とその弟とを抱き緊めながら、その二人は云ふに及ばず、そこに居並ぶ人々を極度に喜ばせると共に、呆れもさせました。

貴婦人達は嬉々として食卓から立ち上つて、グリセルダと共に一つの部屋へ這入りました。そこで、彼女の將來にいよ〳〵幸あれかしと祈りつゝ、貧しい衣を脫がせ、華やかな衣裳と着換へさせた上、今度は彼女を、あゝした襤褸を纏つてゐても、少しもその氣品を落さなかつた貴婦人として廣間へ連れて戻りました。こゝで彼女は再び子供を手に入れた喜びに心行くばかり耽りました。その他の人々も心からこの出來事を喜びましたが、その喜びと祝ひとは日毎に增すばかりで、なほ數日の間續きました。その後世間では、グアルテイエリがその妻に加へた試練を殘酷で堪ふべからざるものとは見做したものゝ、なほ彼を明君だと云ふやうになりました。が、誰よりもグリセルダこそ賢明な女だと持て囃されました。

子供達を連れて來たパナゴ伯爵は二三日の後ボロニヤへ歸つて行きました。グアルテイエリはジアヌコロを勞働者の境涯から拾ひ上げて、自分の義父に應はしいだけの生計を立てさせるやうにして遣りました。そのために、彼も世間に尊敬されながら樂しい月日を送つて、グアルテイエリの邸でその一生を終りました。後グアルテイエリは娘を門地の高い青年に緣づかせ、自分はグリセルダと共に永い間幸福に暮しましたが、常に出來る限りの敬意を妻に拂ふことを忘れませんでした。

これで見ますと、王者の宮廷にも、人民を支配するよりは豚の番でもさせて置いた方が相當だと思はれるやうな王者がゐると同じやうに、貧者の茅屋にも天上から神の魂の降ることがあると申さねばなりませんね。グリセルダ以外の何人が果してグアルテイエリの課したやうな酷烈で前代未聞の試練に、涙一滴こぼさないばかりか、晴れやかな顏をして堪へ得ることでありませう。が、グアルテイエリにとつては、彼が彼女を襤褸一枚で家を追ひ出した時、たとひその女が他の男に身を委ねて、それに依つて美服を贏ち獲るやうな女であつたとしても、それは當然の報いであつたでせうよ。

デイオネオの話は終りました。淑女達は、各自その意向に從つて、一人がこの點を非難するかと思ふと、他の一人はそれに連關した點を褒めるといつたやうに、盛に論議を闘はせました。その時王は天上に眼をやりながら、陽も既に暮れ近く落ちかゝつたのを見て、自席に坐つたまゝ、かう申しました。——

「皆さん、人間の叡智は、恐らく皆さんも知つてゐられるやうに、過去を懷ふとか現在を認識するとかいふことに存するばかりでなく、過去と現在の兩者から推して未來を豫知することこそ、最も理智的な人から見て、最大の叡智と云はるべきで御座いませう。御承知の通り、私達が健康と生命とを維持するために娯樂を求めようとして、且は悲しい惡疫の始まつて以來私達の都では絕えず目の前に現れて來る陰慘、苦惱及び不安を免れようとして、フローレンスを去つてから既に明日で二週間になります。處で、私達は、私の見る處では、その目的を見事に仕果せました。と申すのは、もし私の見る處にして誤りがないとしますれば、此處で語られた多くの愉快で、時には恐らく肉慾を刺戟するやうな話があつたにも拘らず、絕えず口にした美酒美食にも拘らず、又は歌謠や舞踏にも拘らず、——一體これ等の

ものは意志薄弱の徒をして容易に怪しげな行爲に陷らしめ勝ちなものですがね、――兎に角非離せらるべき一つの擧措、一の言葉、一の行動も私達の裡には起らなかつたのですからね。それ處か、私が見聞きしたものは皆終始一貫した禮讃、終始一貫した一致、終始一貫した親愛を證據立てるものであつたと存じます。

「この一事は疑ひもなく貴方方や私の名譽であつて、私達共同の利益のために誠に喜ぶべきことで御座います。が、永い間の親密のうちには、或ひは憤懣に變るやうなことが起らないとも限りません。そんな事のないやうにしたいのと、もう一つは、餘りに私達の滯在が延びて、後になつて非難されるやうな口實を與へないために、今はもう再び出發の地點へ歸るのが好からうかと思ひます。殊に只今私が戴いてゐる王冠の名譽には、皆さんが、もう一度は與り得たことでも御座いますからね。その上、篤とお考へになれば誰にも分ることですが、私達のこの一行も、内輪の樣子がこの邊の關係筋に大分知れ渡りましたので、どうかすれば人數も增して行つて、終には餘り面白く遣つて行かれないやうな事情が生ずるかも知れません。そこで皆さんが私の提議を贊成して下さるなら、私は私達の出發まで今私の手に渡つてゐる王冠を留保して置きたいと思ひます。出發は私の考へでは明朝早々にしたいと思つてゐるのですが

ね。しかし皆さんに何か別のお考へが御座いますやうでしたら、私は明日の王位を讓るべき人を考へてゐます。」

この點に就いては、淑女や青年達の談合が大分長く續きました。が、結局王の動機を有益且適切であると認め、王の云つた通りにすることに決定しました。そこで王は執事を喚んで、明朝の手筈に就いて相談した上、一同に食事の時間までの解散を云ひ渡して立ち上りました。淑女達も他の者も同じやうに席を立つて、從前通り、各自思ひ〳〵の娯樂に耽りました。

食事の時刻になりますと、一同は又樂しさうにしてそこに集りました。食後、彼等はまた歌と音樂及び輪舞を始めました。ラウレッタが輪舞を踊つてゐると、王はフィアメッタに歌を唄ふやうに命じました。彼女はそこで次のやうに唄ひ始めました。――

戀に嫉妬のなかりせば、
われに勝りて幸ありと
思はんものもなからんに。
春うら若き戀人が
心うれしきものならば、
譽れも高き勳功や
勇氣に逸る心意氣、
智惠や口說に靡くなら、
そして、噂がまことなら、
われこそ戀の途上にて、
甘き希望を抱きつゝ
喜び常に絶えざらん。
されど他の女名乘りを上げ
われに劣らず進むなら、
われは恐怖に囚はれて、」
こちの心を害ひし、
その仇人と競ひつゝ、
勇氣もとみに摧くるよ。
かくて昔の樂しみも
つらき惱みに變りつゝ、」
溜息深き身となりぬ。
勳も高きかの君に
深き誠のあるなれば
われに嫉妬もなきものを。
かれの勳に靡くもの
わが目に絶ゆるひまもなし、」
媚びる女の淺間しや。
それに惱みて死を求め、
仇し女の君見る毎に、
われかの君に纏り着く。

あゝ、願はくば何人も
かゝる恥辱にこのわれの
心を傷め害なふな。
言葉や目つきで焰をあふり、
われの恥辱を喜ぶまでに、
人もなげなる女のあれば、
われもその手を看破らん、
爪にてわが顏害なはば、
悔ゆる月日のあると知れ。

フィアメッタが唄ひ終ると、その傍にゐたデイオネオが笑ひながらかう云ひました。「フィアメッタさん、かの君の本名を明かしたら、御婦人方は有難く思はれることでせうよ、それと知らないで、その君を横取りするやうなことのないためにですね。そんな事でもあつたら、それこそ貴方に怒られることでせうからな。」

その後から、更に二三の歌が唄はれましたが、夜半も過ぎたこととて、王の命ずるまゝに、一同、眠りに就きました。

明くる朝になると、一同は早速床を出まして、荷物は既に執事が發送して置きましたので、何かに行き屆いた王に指導されてフローレンスに歸つて參りました。三人の青年

は、曩に一緒に出發した新聖マリア寺院で、七人の淑女達に別れると、その儘又他の娯樂を追つて行きましたが、淑女達は、いよ〳〵その時刻が來ると、それ〴〵自宅へ歸つて行きました。

—了—

非賣品

世界文學全集(2)
デカメロン
第三十六回配本

昭和五年四月五日印刷
昭和五年四月十二日發行

飜譯者　森田草平
發行者　佐藤義亮

東京市牛込區矢來町
發行所　新潮社
電話牛込(代)八〇〇五番
八八八〇六番
八八八〇七番
八八〇八番
八八〇九番
振替東京　二三、四五〇番

繪木製本所(石川納)

東京市小石川區西江戸川町　富士印刷株式會社印刷

908
SE221
1(2)

終